

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第455集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成15年度)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成15年度)



写真1 北上市金附遺跡の捨て場から発見された土器（弥生時代）



写真2 北上市壇向Ⅱ遺跡焼失住居跡（平安時代）



写真3 玉山村芋田Ⅱ遺跡出土の六文字書かれた墨書き土器(平安時代)



写真4 宮古市山口館跡空中写真(中世)

序

大自然に恵まれた岩手県は、四国4県に匹敵する広大な面積を有し、埋蔵文化財の宝庫と言われております。これら先人達が遺した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、私たち一人一人に課せられた責務でもあります。

また、一方では主要幹線道路網や農業基盤整備など、社会資本を充実させることも行政上重要な施策となっております。このため埋蔵文化財の保存・保護と地域社会進展との調整や調和が今日的な課題でもあります。

こうした見地から、(財)岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課による調整と指導のもとに、道路建設や農地整備、ダム建設などによってやむを得ず、消滅していく遺跡について発掘調査を実施し、記録保存する措置をとって参りました。平成15年度は、県内17市町村におよぶ49遺跡に対して発掘調査を実施いたしました。

調査した遺跡の時代は、縄文・弥生・奈良・平安時代、中世、近世まで多期に亘っておりますが、この中で注目される遺跡として、3年目の継続調査になった普代村力持遺跡が挙げられます。縄文時代前・中期を主体とする大集落跡で、70棟の住居をはじめとしフ拉斯コ土坑、列石・集石、埋設土器、長軸18mを超える縄文時代前期の大形住居が確認され注目を集めています。

平安時代の大規模集落跡は、玉山村芋田Ⅱ遺跡、盛岡市台太郎遺跡、北上市の堀向Ⅱ遺跡・西川目遺跡、水沢市中半入遺跡等で検出されております。中でも台太郎遺跡からは、在地系土器に混じって関東系の土器や県内初見である計量器思われるコップ形須恵器を、芋田Ⅱ遺跡では集落内に文字に親しみ人がいたこと示唆する六文字書かれた墨書き土器や篠書きの刻書き土器を多く出土しております。

この発掘調査略報は、調査本報告書の発刊に先立ちまして、今年度に調査を行った遺跡の調査概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、広く多くの方々にも活用され、埋蔵文化財に対してのご理解を一層深めていただけ一助となれば幸いです。

最後になりましたが、野外の発掘調査作業を進めるにあたり、ご協力を賜りました委託者をはじめとし、地元の教育委員会及び関係各位に対しまして、衷心より感謝申し上げます。

平成16年2月

財團法人 岩手県文化振興事業団

理事長 合 田 武

目 次

序

平成15年度の調査結果について

I. 国土交通省関係

(1) 力持遺跡（普代村）	5	(5) 高木古館跡（花巻市）	19
(2) 茅山II遺跡（玉山村）	9	(6) 高木中館遺跡（花巻市）	21
(3) 熊堂B遺跡第18次調査（盛岡市）	13	(7) 大清水上遺跡（胆沢町）	23
(4) 上台II遺跡（花巻市）	15	(8) 河崎の櫛擬定地（川崎村）	25

II. 岩手県・市関係

(9) 梅の木沢遺跡（軽米町）	31	(19) 大婦石袖高野遺跡（遠野市）	61
(10) 中佐井畠遺跡（安代町）	35	(20) 西川目遺跡（北上市）	63
(11) 和野ツマナイ遺跡（田野畠村）	37	(21) 堤向II遺跡（北上市）	65
(12) 和野新磐神社遺跡（田野畠村）	39	(22) 大橋遺跡（北上市）	67
(13) 熊堂A遺跡第17次調査（盛岡市）	41	(23) 金附遺跡（北上市）	69
(14) 熊堂B遺跡第20次調査（盛岡市）	45	(24) 金附遺跡（北上市）	71
(15) 台太郎遺跡第51次調査（盛岡市）	49	(25) 中半入遺跡第4次調査（水沢市）	73
(16) 細谷地遺跡第8次調査（盛岡市）	53	(26) 里古屋遺跡（住田町）	77
(17) 南日詰遺跡（紫波町）	55	(27) 楊生新城館跡（一関市）	79
(18) 山口館跡（宮古市）	57		

III. 本報告

(28) 笠沢館跡（二戸市）	83	(39) 新平遺跡（北上市）	175
(29) 稲荷遺跡第6次調査（盛岡市）	93	(40) 杉の堂・跨呂井遺跡（水沢市）	189
(30) 熊堂B遺跡第19次調査（盛岡市）	99	(41) 蜂谷遺跡（胆沢町）	201
(31) 台太郎遺跡第50次調査（盛岡市）	105	(42) 一の台遺跡（胆沢町）	209
(32) 台太郎遺跡第52次調査（盛岡市）	111	(43) 一の台II遺跡（胆沢町）	212
(33) 野古A遺跡第19次調査（盛岡市）	123	(44) 一の台III遺跡（胆沢町）	214
(34) 野古A遺跡第20次調査（盛岡市）	131	(45) 一の台IV遺跡（胆沢町）	217
(35) 飯岡才川遺跡第5次調査（盛岡市）	141	(46) 扇敷遺跡（胆沢町）	220
(36) 飯岡才川遺跡第6次調査（盛岡市）	149	(47) 鶴供養遺跡（胆沢町）	223
(37) 細谷地遺跡第7次調査（盛岡市）	161	(48) 二の台長根遺跡（胆沢町）	225
(38) 下通遺跡（花巻市）	165	(49) 三の沢遺跡（胆沢町）	228



平成15年度調査遺跡位置図

平成15年度の調査結果について

平成15年度の発掘調査事業は、年度当初には42遺跡、173,891m²を対象としてスタートしたが、最終的には49遺跡162,106m²を調査して終了した。調査委託機関の事業計画の変更等が要因となり、調査対象遺跡数は増加したもの、調査終了面積はやや減少している。

今年度発掘調査を実施した49遺跡のなかで、特徴的な遺跡を時代ごとに紹介すると次のようになる。

旧石器時代の遺跡の調査は行われなかったが、縄文時代の遺跡の調査は普代村力持遺跡（1）、住田町里古屋遺跡（26）、北上市大橋遺跡（22）、盛岡市熊堂A遺跡（13）などで実施され、各遺跡とも多くの遺構・遺物が発見されている。3年目の継続調査となった力持遺跡は、県内有数の規模を持つ前・中期主体の集落跡で、深い堅穴住居、大形の貯蔵穴などが密集して検出されている。今年度の調査では、長軸が18mを超える大形住居が発見され、集落が開始された時期の様相が明らかになった。中・後期の集落跡である里古屋遺跡からは遺物包含層が検出され、その下層から堅穴住居、貯蔵穴などが発見された。晩期中葉の大規模な盛土遺構や遺物包含層が発見されている大橋遺跡では、隣接地の低位部分の調査が行われ、同時に掘立柱建物群が検出された。熊堂A遺跡は晩期後半の集落跡で、堅穴住居、墓坑などが発見されたほか、完形の石刀・石棒をはじめとする多量の遺物が出土している。

弥生時代の遺跡としては、北上市金附遺跡（23・24）の調査が行われ、前期の遺物包含層（捨て場）、平地式住居群、土器棺墓などが発見されている。この遺物包含層は東西約50mの範囲に広がり、最大厚が1.6mにも達する大規模なもので、900箱を超える多量の遺物が出土している。出土遺物の大半は、原料や製作途上のものを含む石器類で、石器製作を生業とする特異な集落と考えられている。

奈良・平安時代の遺跡の調査は、盛岡市台太郎遺跡（15）、玉山村芋田II遺跡（2）、北上市西川日・堰向II遺跡（20・21）、水沢市中半入遺跡（25）など数多くの遺跡で実施されている。台太郎遺跡では、奈良時代と平安時代の堅穴住居群がそれぞれ分布域を異にして検出されたほか、在地の土器に混じって関東系の土器も出土している。ロクロ据付穴を付設する大形住居跡が発見された芋田II遺跡では、平安時代の堅穴住居群に伴い、多量の墨書き土器や刻書き土器のほか、黒曜石製の円形搔器など特殊な遺物が出土している。西川日遺跡と堰向II遺跡は、隣接して位置する平安時代の大規模集落跡で、堅穴住居、掘立柱建物などの遺構や、それに伴う大甕・甌（風字甌）・綠釉陶器などの遺物が発見されている。古墳時代の大規模集落として知られる中半入遺跡では、複数・密集した堅穴住居群や水田跡など、平安時代の遺構が多数検出された。

川崎村河崎の横擬定地（8）の調査では、類例の少ない平安時代後半の遺構・遺物が発見されている。河崎の横擬定地は、前九年の役で滅亡する安倍氏の横の一つである河崎横に擬えられている遺跡で、今年度の調査で、11世紀代と考えられる大規模な堀と、それに並行する溝が検出された。

中・近世の遺跡としては、宮古市山口館跡（18）、花巻市高木古館跡（5）などで中世城館の調査を実施したほか、軽米町梅の木沢遺跡（9）で近世鉄山・紫波町南日詰遺跡（17）などで近世鐵工の調査を行った。山口館跡は多くの郭をもつ広範囲な施跡で、今年度は先端部分を調査し、外敵の侵入を防ぐ大規模な横堀や堅穴建物跡などが発見されている。江戸時代の製鐵遺跡である梅の木沢遺跡では、高殿の構造や鍛冶場・排汽場の位置などが確認され、鉄山内の当時の様相が明らかになった。

平成15年度調査遺跡の概要は以上とおりであるが、その詳細については、平成16年度以降に発刊する本報告書を参照していただければ幸いである。なお、検出遺構、出土遺物とも見込みより少なかった22遺跡については、本書をもって本報告に代えている。

（調査第一課長 佐々木 勝）

I. 国土交通省関係

(1) 力持遺跡

所 在 地 下閉伊郡普代村第16地割字天押坂
28番地5ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局
三陸国道事務所

事 業 名 普代バイパス建設事業

発 挖 調 査 期 間 平成15年4月10日～11月19日

調 査 対 象 面 積 1,400m²

発 挖 調 査 面 積 1,400m²

遺 跡 番 号・略 号 J G92-0137・TM-03

調 査 担 当 者 星 雅之・須原 拓・駒木野智寛

協 力 機 関 普代村教育委員会



遺跡位置

1:50,000 陸中野田

1. 遺跡の立地

力持遺跡は、三陸鉄道北リアス線普代駅の北約2km、力持海岸から西に約1.5km、力持川の河口付近に見られる小起伏山地が解析された小規模な谷底平野地形に立地する。標高は55～68mである。調査区の現況は畑地、林、荒れ地、宅地である。

2. 調査の概要

今年度検出した遺構は、竪穴住居跡70棟、掘立柱建物跡2棟、土坑94基、柱穴状土坑198基、列石・集石8基、埋設土器2基である。検出された遺構の時期は、近世～近代と推定される掘立柱建物跡2棟以外は縄文時代前期～中期末葉に比定される。

＜竪穴住居跡＞ 今年度検出した竪穴住居跡の主体となる時期は中期中葉で、前期前～中葉、前期末葉、中期前葉の順に多い。前期と中期に大別して記述する。

縄文時代前期の竪穴住居跡は、前～中葉が調査区西部の高い面に、末葉が調査区中央部～中央部や東側の斜面傾斜変換点付近に分布する。平面形は、長方形を中心に隅丸長方形や正方形を呈する。規模は3mほどの小形から、10mを越える大形までがみられる。炉は、確認できたもの全て地床炉である。住居跡の壁際には、壁柱穴若しくは壁溝が巡らしきが主体である。埋土に十和田中振テフラを含むものも数棟検出されている。特記事項として、長軸約18m、短軸約5mのロングハウス型の大形住居跡が確認されている。この大形住居跡は、南北方向に長軸を持ち、東から西へ居住空間を変えながら大きさは3回の建て替えが行われている。主柱穴と思われる大形の柱穴の中には、根固め石と思われる径30cm程の花崗岩が設置されているものもある。この大形住居跡の構築時期について、出土土器からは円筒下層a式より古いと推定されるが、検討を要する。重複関係を持つ遺構から推定すると、十和田中振テフラを埋土に含む土坑に載られている状況から、同テフラ降下期以前に構築された可能性が高い。

縄文時代中期の竪穴住居跡は、前葉が調査区中央部の斜面部分に、中葉は調査区東側を中心にはほぼ全域に分布する。平面形は、長方形や隅丸長方形を呈するいわゆるロングハウス型の他に、隅丸正方形、卵形、楕

円形などがある。規模は3.5～10m程が見られる。堅穴住居跡は全般に深く、1mを越える深さの住居が複数棟ある。炉の位置は、住居の構造や柱配置の違いにより相違があるものの、住居の長軸線上に位置することでは規則性が窺える。炉の種類は、石圓炉、石圓裡設土器炉、地床炉があり、ロングハウス型では炉を複数基持つ住居もある。

＜土坑＞ 94基が検出され、その内70基がフ拉斯コピットである。調査区全域に分布するが、時期により占地が異なる可能性が高い。規模は開口部径1.5m以上、底部径2～3m、深さ1.5m以上を測る大形のフ拉斯コピットが多い。底面の中央に単独で周穴を持つものと周穴から溝が壁に向かって延びるものがあり、溝の本数は1～4本まで見られる。

＜掘立柱建物跡＞ 8間2間と推定される1棟と6間2間と推定される1棟が検出された。出土遺物から近世～近代に比定される。

＜柱穴状土坑＞ 198基検出された。径15～30cmの小形が主体である。堅穴本体は破壊された堅穴住居跡に伴う柱穴と推定される。

＜列石・集石＞ 列石・集石は、大きめの礫が直線的な配列を見るものや意図的に集められているものに命名した。8基全て中期前～中葉の堅穴住居の覆土中に構築されている。廐屋墓的な性格の遺構である可能性も考えられ、検討を要する。

＜埋設土器＞ 調査区中央部やや東側の斜面傾斜変換点付近より、前期末葉2基を検出した。2基共に完形の土器で、土器を埋置するのに最低限の掘り方を持って、正立で埋設されている。周辺の状況から該期の堅穴住居跡に伴う何らかの施設であった可能性が高い。

＜出土遺物＞ 遺物は、縄文土器150箱分（大コンテナで換算）、土製品30点、石器1,800点、石製品100点、チップ・フレーク約5箱分、琥珀約127g、黒曜石数点、獸骨・貝類・魚骨などの遺存体である。

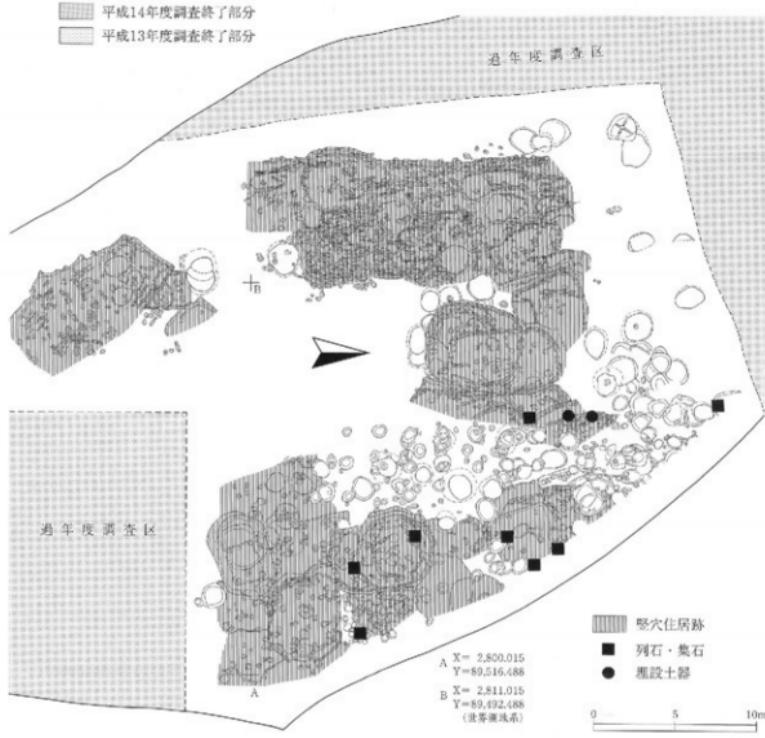
土器は大木8a式が最も多く、次いで円筒上層b～c式、円筒下層d式、円筒下層b式、大木2式？の順となる。土製品はミニチュア土器、円盤状土器などである。石器は石鎌、尖頭器、石匙、石錐、石砲、削揉器、ビエス・エスキュー、磨製石斧、半円状偏平打製石器、磨石、敲石、石皿、台石、凹石などである。石製品は块状耳飾、石刀、石棒、有孔石製品などである。琥珀は径10～20mmの原石（約0.5g）と小破片（約0.1g）で、製品での出土は確認されていない。獸骨・貝類・魚類は、遺構の土壤をサンプリングしフローーションを行い抽出した。獸骨類はイノシシ・ニホンジカなどが、貝類は巻貝・二枚貝・フジツボなどが、魚類はアイナメ・カタクチイワシ・カツオ・アオザメ・ホホジロザメなどが出土している。

3.まとめ

3カ年の調査で堅穴住居200棟以上、フ拉斯コピット200基以上が検出され、併せて遺物約740箱分が出土するなど、縄文時代前期前葉～中期末葉の大規模な集落跡であることがわかった。

今回の調査成果から特記事項と課題などについて若干記述する。①円筒式土器と大木式土器は時期によつて出土量に優劣が看取できる。②中揮テフラ降下前と考えられる土器の出土③前期大形住居跡の構造や変遷の状況が掴めた。④中期中葉における堅穴住居の形態変化。⑤縄文琥珀に製品加工以外の用途を推定する資料を得られた。⑥時期により遺構の空間占地が異なる。⑦墓域の所在が不明なこと。

今年度の調査により、力持遺跡の集落成立時期の様相がより明らかとなったことで、縄文時代前期前葉から中期末葉にかけての集落の変遷過程が辿れた。沿岸北部における大木式土器文化圏と円筒式土器文化圏の接触地域の貴重な資料を得られた。



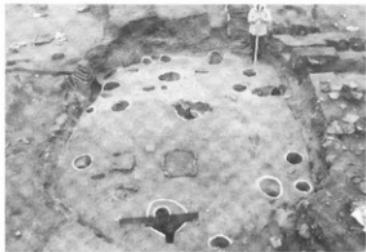
力持遺跡 遺構配置図



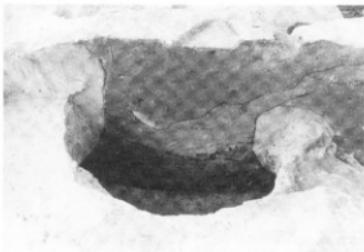
遺跡全景(真上から、右が北)



前期大形住居跡(長さ約18m、幅約5m、西から)



中期竪穴住居跡(東から)



プラスコピット(南から)

力持遺跡 検出遺構

(2) 芋田Ⅱ遺跡

所 在 地 岩手郡玉山村大字芋田字芋田
53-10はか

委 託 者 土地交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所

事 業 名 国道4号流民バイパス建設事業

発掘調査期間 平成15年4月11日～11月11日

調査対象面積 6,784m²

発掘調査面積 6,784m²

遺跡番号・略号 KE47-2199・ⅠDⅡ-03

調査担当者 濱田 宏・飯坂一重

協力機関 玉山村教育委員会



1. 遺跡の立地

芋田Ⅱ遺跡は、IGRいわて銀河鉄道線好摩駅の南東約1kmに位置し、秀峰姫神山から延びる山地の縁に立地する。遺跡の範囲は南北に200m、東西に450mを測り、南側は西流する沢で区切られている。調査区内の標高は、北側の尾根部で223m前後、南側の平坦部で205.7～206.7mほどで、平坦部と沖積地との比高はおよそ17mである。調査以前の状況は、平坦部が畑地として利用されていたほかは、ほとんどが山林である。

2. 調査の概要

本遺跡は、かつて平成9年度に広域農道整備事業に伴う発掘調査が行われ、その際に奈良・平安時代の住居跡が21棟のほか、土坑や焼土遺構が確認されている。今回の調査区域は、そのすぐ東側に隣接する地点であり、同様の遺構の存在が予想された。

調査によって検出された遺構は、縄文時代では土坑1基、土器埋設遺構1基、焼土遺構1基、平安時代では竪穴住居16棟、住居状遺構7棟、土坑19基、焼土遺構9基のほか、近世の墓塚1基、詳細な時期が不明の柱穴が41基である。

＜竪穴住居跡＞ 16棟検出されたが、それらは一辺の長さが4m以下の小形のもの7棟、4～6m前後の中形のもの6棟、7～8m以上の大形のもの3棟の大きく3つに分けられる。全体としてみると、大形住居は平坦部中央から西側に、それ以外は主に東側に位置している。カマドが設置される壁は、北から北東向きの住居と南東向きのものに二分されるが、今のところ時期差を示すものかは不明である。また、偏平な礎が多く組まれた焼造、廻出しをもつ住居や土器製作工房の可能性がある住居など、特徴のあるものも多くみられる。これら16棟の時期は、ほとんどが埋土に灰白色火山灰（十和田a降下火山灰）を含んでいることから、火山灰降下以前の9世紀後半から10世紀前半にかけてと推定される。

＜住居状遺構＞ カマドを持たない住居などの規模のものを7棟検出した。いずれも平面形は方形で、一辺の長さは3～6.5mである。土坑を有するものや床面に焼土が形成されるものもあり、これらは小鍛冶などの作業場として使われていた可能性がある。

＜土坑＞ 縄文時代に属する1基はフ拉斯コ形土坑で、西側半分は調査区域外にある。大きさは直径1.7m、深

さは1mである。他はいずれも平安時代のものと思われるが、平面形は隅丸方形、長方形、円形の3つに大別される。隅丸方形の土坑8基は1辺が1.5~2.5m前後である。長方形のものは4基確認されているが、長軸が1m前後のものや3mを超えるものがある。形状から、これらは墓壙となる可能性もある。この他、底面に焼土を有する円形の土坑や、埋土に灰白色火山灰を含むものなどもみられる。

＜焼土遺構＞ 繩文時代の1基は、尾根部の土器埋設遺構近くに確認されたが、それとの関連は不明である。平安時代と判断したものは、斜面部部で4基、平坦部で5基検出された。前者には炭化材を伴っている。

＜土器埋設遺構＞ 尾根部で1基検出した。深鉢形土器が埋設され、土器内には拳大の礫が1個入れられていた。時期は縄文時代中期末葉である。

＜柱穴＞ 41基確認したが、これらで建物は構成できない。直径は20~30cm前後のものが多く、埋土に灰白色火山灰を含むものが数個ある。

＜墓壙＞ 墓石を伴っていたと思われる墓壙が1基確認された。大きさ・形状は、90×110cmほどの隅丸長方形で、墓石には「天明四年辰年」と年号が刻まれている。人骨一体とキセル・磁器壺・棺の金具が出土した。

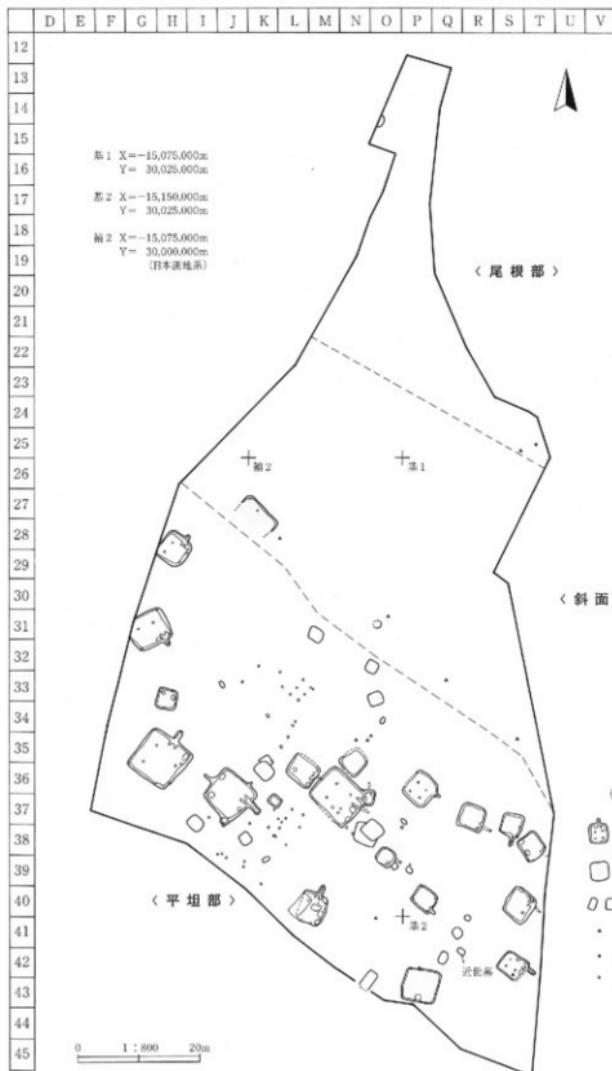
＜出土遺物＞ 出土した遺物の総量は大コンテナ25箱で、そのほとんどは平安時代の土師器・須恵器である。これらの中には、墨書きされた土器や記号（文字？）が刻まれた土器があり、その数は78点に及んでいる。また、土師器壺の底部に砂粒が付く砂底土器と呼ばれるものも数点出土している。この他の平安時代の遺物には、鉄製品（釘・刀子・鉄鎌など）や土製品（耳皿・羽口など）、炭化した木製椀・砥石などがある。また、黒曜石製の石器が4点出土しているが、確実に平安時代に属するものかは不明である。縄文時代の遺物は、土器・石器類が中コンテナ1箱程度出土した。土器の時期は後・晚期が主体で、早期・中期後半のものなどもわずかながら出土している。

3.まとめ

調査によって本遺跡は、尾根部は縄文時代中期ごろの、平坦部と斜面裾付近は平安時代前期の集落跡であったことが明らかとなった。前回の調査結果と併せると、この平安時代の集落は、40棟を超える住居跡といくつかの作業場から構成されることになり、今回確認された遺構・遺物から、集落内では小鋳治、土器製作などの生産活動が行われていたことも判明した。また、墨書き・刻書き土器、耳皿などが出土していることから、当時そのようなものを手にすることができる地域の有力者が存在した集落であったことが想定される。



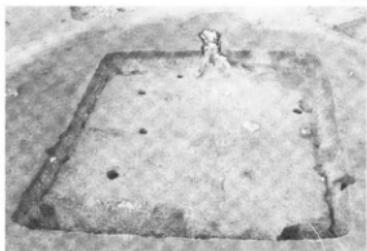
平坦部全景（北から）



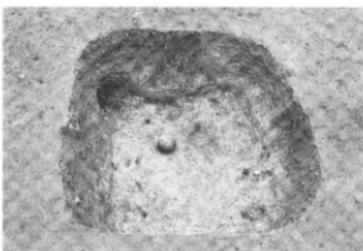
芋田Ⅱ遺跡 遺構配置図



調査区全景



大型の堅穴住居跡



方形土坑と出土遺物



カマド全景



芋田Ⅱ遺跡 検出遺構

住居内の貯藏穴

(3) 熊堂B遺跡第18次調査

所 在 地 盛岡市本宮字熊堂45-1ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
事 業 名 国道46号西バイパス建設事業
発掘調査期間 平成15年4月11日～6月30日
平成15年9月18日～10月8日
調査対象面積 6,775m²
発掘調査面積 5,452m²
遺跡番号・略号 L E 16-2118・OKO-03-18
調査担当者 福島正和・齋藤麻紀子
吉田 実・野中真盛
協 力 機 関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

熊堂B遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅より1.5km西に位置し、零石川右岸の河岸段丘上に立地している。今回の調査区は標高約122m前後で、調査前は主に宅地や畠地として利用されていた。

また、遺跡周辺には、熊堂A遺跡、稻荷遺跡、野古A遺跡、台太郎遺跡など多くの集落遺跡が存在する。

2. 調査の概要

遺構は表土、近現代耕作土層直下の黒色土上面で、縄文時代～平安時代の遺構を検出した。検出した遺構は、縄文時代晩期～弥生時代の土坑5基、古代の堅穴住居6棟、古代の土坑23基、古代の溝2条であった。

＜堅穴住居跡＞　すべて平面方形であり、カマドの取り付け方位は一定ではない。検出したすべての堅穴住居跡は、古代のもので、出土遺物から奈良時代と平安時代の二者があると考えられる。

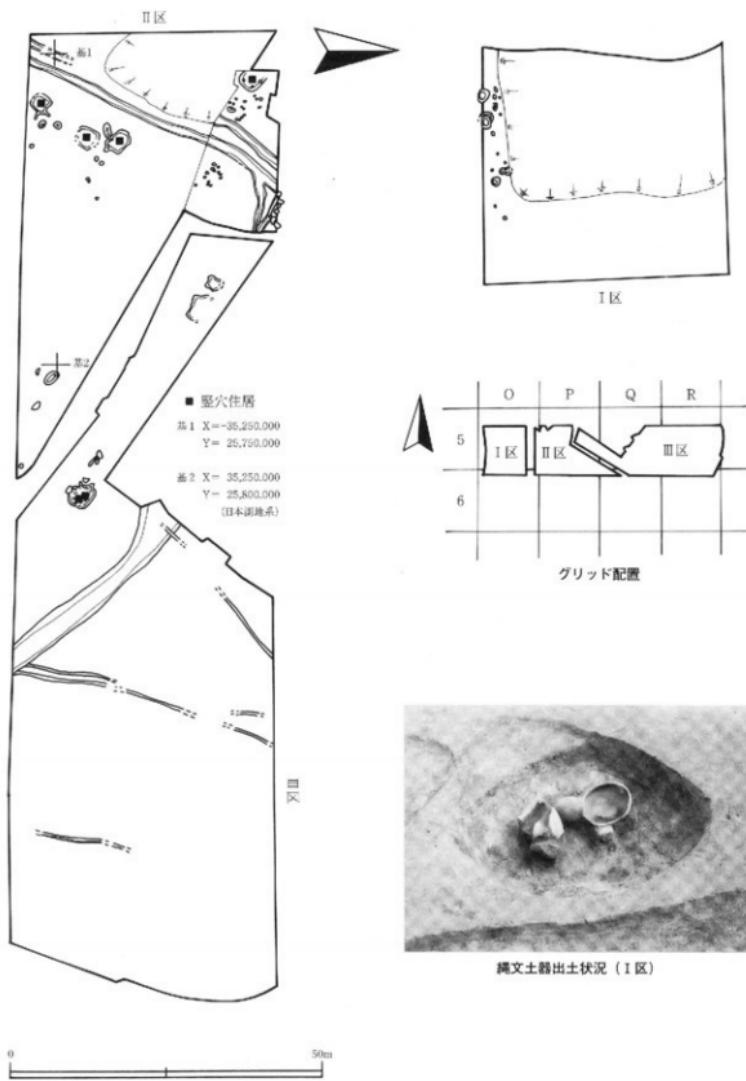
＜溝跡＞　平行に南北を指向する2条を検出した。調査区の接する第14次、第20次調査で検出している2条と一連の遺構であると考えられる。これらの溝は、出土遺物から古代のものであると判断される。

＜土坑＞　時代、性格不明のものを含め28基を検出した。そのうち、土器埋納土坑、礫がまとまって含まれる土坑は、出土遺物や埋土の様子から縄文～弥生時代の遺構であると考えられる。また、平安時代の遺物を含む隅丸長方形の土壙墓と考えられる1基を検出した。

＜出土遺物＞　縄文土器や弥生土器、墨書き土器を含む土師器、須恵器などの土器類や鉄製品が主に遺構から出土した。出土した遺物は、縄文時代晩期、弥生時代中期、奈良・平安時代のものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査により縄文時代晩期の集落遺跡である熊堂A遺跡の遺構群が南に広がり、古代の集落遺跡である熊堂B遺跡の遺構群が北へ広がることが想定された。調査区は地形変換点上に位置し、当該地が縄文時代晩期集落と古代集落が交差する地点であることが遺構および遺物から明らかになった。



熊堂B遺跡第18次調査 遺構配置図

うわだいに
(4) 上台Ⅱ遺跡

所 在 地 花巻市高木第19地割101-35ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
事 業 名 国道4号花巻東バイパス建設事業
発掘調査期間 平成15年4月8日～6月19日
発掘対象面積 2,621m²
発掘調査面積 2,171m²
遺跡番号・略号 ME26-2340・UD II-03
調査担当者 小山内透・阿部徳幸
協 力 機 関 花巻市教育委員会



1. 遺跡の立地

上台Ⅱ遺跡は、JR東日本新幹線新花巻駅の南西方向約3.5kmに位置し、西側には南に流下する北上川、東から北側には西流する猿ヶケ石川によって、南側を除く三方が開まれた範囲のほぼ中央に分布する台地、低位の河岸段丘上に立地する。遺跡の現況は畠地となっており、周囲の水田面よりも約1mほど高い標高約80mの浮島状となっている。本遺跡の西方には上台Ⅰ遺跡が位置し、未報告ながら過去、花巻市教育委員会によって、本遺跡の今回調査区から約300mほど離れた地点の発掘調査が行われており、縄文時代草創期の竪穴状遺構などが検出されている。

2. 調査の概要

今回の調査は、北側畠地部分のA地区と南側水田部分のB地区の二箇所について調査を実施したが、B地区では試掘の結果、遺構・遺物は検出されず、遺跡範囲外と判明した。従って今回検出された遺構は、すべてA地区からであり、土坑の一部を除く大半が島状の微高地に位置し、縄文時代では陥窓30基、平安時代では竪穴住居跡4棟、竪穴状遺構2棟、掘立柱建物跡1棟、柱穴約400基、この他、時期不明の土坑44基、焼土遺構7基、溝跡4条などがある。

＜陥窓＞ 陥窓は、形態から判断されたもので、長さ1.5～3.5m、幅15～50cmの溝状のもの、長さ約1.5m前後、幅約40～70cmの楕円形のもの、直径約1.5mのバケツ形の3タイプがあり、いずれも深さは1～1.5m程を測る。ほとんどが溝状及び楕円形のものであり、バケツ形は1基のみで中央に逆茂木痕を有する。

＜竪穴住居跡・竪穴状遺構＞ 竪穴住居跡は、北側の1棟については西側が調査区外にかかるため全容は不明だが、いずれも隅丸方形を呈し、南側の最大のもので一辺約7m、ほかは一辺3.5～4.5mほどを測る。カマドはすべて東壁の南よりに付設され、芯材として人頭大の石が用いられていた。煙道は削り貫き式が1棟、掘り込み式が3棟あり、北側の1棟では土師容器が土管状に設置されていた。時期的には、中央の2棟の検出面で十和田a降下火山灰と思われるものが確認されたことと出土遺物から、4棟の形態上の類似性もあって9世紀後半と考えられる。また、南側の1棟からは羽口・鉄砧石・鉄滓類が出土しており、明瞭な鍛冶炉は検出されず、鍛造跡片も認められなかったが、鍛練鍛冶を行っていたものと思われる。

堅穴状遺構は、長軸約4.5m、短軸約2.5mの歪なダルマ形を呈するものと長軸約3m、短軸約2mの歪な略楕円形の2棟が検出された。

＜掘立柱建物跡・柱穴群＞ 掘立柱建物跡1棟は、調査区概高地上の南側に位置し、南北長軸の3間×2間で、柱間は約2m程である。柱穴は、直径がおよそ15~40cmの円形及び楕円形を呈し、深さ5~50cmのものがあり、径約30cm前後、深さ約20cmほどのものが大半を占める。分布状況としては南側に多く、中央の堅穴住居跡周辺では希薄となる。時代を特定できる遺物が出土したものは少ないが、堅穴住居跡の堆土中から掘り込まれたものや、分布状況などから、平安時代のものと推測され、今後の検討により掘立柱建物跡が増加すると思われる。

＜土坑類＞ 土坑類は直径1~2mの円形と長さ約1.5m、幅約80cmの長方形のものがあり、いずれも深さは50cm以下を測る。出土遺物がほとんどないため、時期や性格などの具体的用途は不明である。

＜焼土遺構＞ 焼土遺構7基は、強弱はあるものの火熱により赤色変化した30cm~50cmほどの広がりを検出したものだが、調査区が開墾により削平されていることから、本来は掘り込みのある炉跡であったものと考えられる。

＜溝跡＞ 溝跡は、検出した4条のうち、北側と中央の2条は畑地の区画方向と一致していることから、新しいものと思われるが、南側の2条は状況から堅穴状遺構と一連のものとも考えられ、同期の可能性がある。

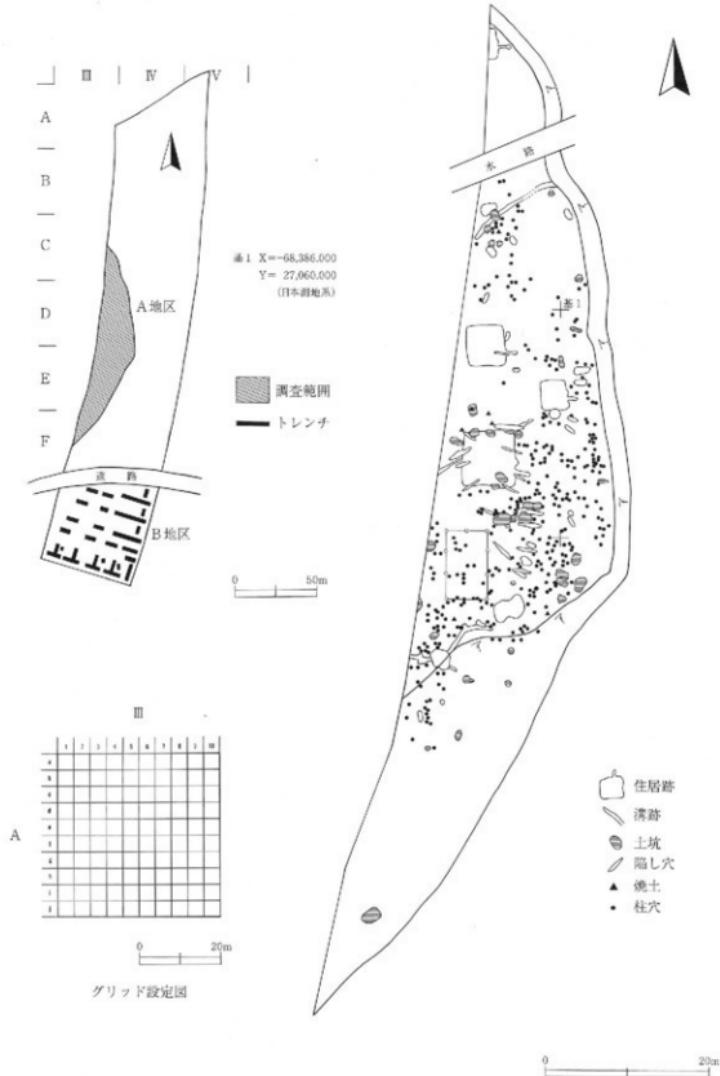
＜出土遺物＞ 今回の調査で出土した遺物には、縄文土器、石器類、古代の土器（上師器、須恵器）、鉄製品、土製品、石製品、鉄滓などがあり、総量で大コンテナ約5箱分が出土した。

縄文時代の遺物は、土器は地文のみの時期を特定できない小破片が少量と、石器も不定形の剥片石器3点、円石1点のはかはフレークが少量出土したのみである。

古代の遺物は、土器類は大コンテナ約3箱分が出土し、須恵器は甕の破片が少量と壺の破片が数点と少なく、大半は土師器の壺や壺で、ロクロ成形のものが多い。鉄製品は刀子と鉄鎌が各1点、土製品は羽口1点と土鍛約10点、石製品は鉄砧石2点、鉄滓約10点が出土し、ほとんどが堅穴住居跡からの出土である。

3.まとめ

本遺跡は、隣接する上台I遺跡が縄文時代草創期ということもあって、これまで縄文時代の遺跡として登録されていたものだが、今回の調査では、平安時代の集落であることと、縄文時代には狩猟の場として使用されていたことが明らかとなった。調査は約6,000m²と推定される遺跡の縁辺の一部を調査したに過ぎず、未調査範囲部分の調査が行われることがあればさらに解明できるものと思われる。





遺跡全景(東→)



竪穴住居跡・遺物出土状況



同カマド 完掘



竪穴住居跡・同カマド遺物出土状況

上台Ⅱ遺跡 検出遺構

(5) 高木古館跡

所 在 地 花巻市高木第20地割88-702ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
事 業 名 国道4号花巻東バイパス建設事業
発掘調査期間 平成15年6月9日～10月24日
調査対象面積 10,597m²
発掘調査面積 7,890m²
遺跡番号・略号 ME26-2089・T G K D -03
調査担当者 阿部徳幸・小山内透
協 力 機 関 花巻市教育委員会



1. 遺跡の立地

高木古館跡は、JR東日本東北新幹線新花巻駅の南西約3.7kmに位置し、西側を南流する北上川と東側を北流する猿ヶ石川に囲まれた丘陵地（標高約90m）に立地している。遺跡の現況は山林である。

2. 調査の概要

中世城館に関する遺構は、曲輪となる平坦部5箇所、テラス状平場2箇所、堀跡3条、土塁2箇所である。そのほか、縄文時代の陥穴が5基、弥生時代のものと思われる竪穴住居跡1棟、時期不明の竪穴状遺構1棟、土坑2基、炭窯跡1基が検出された。

＜曲輪＞ 調査区西側から東側にかけての尾根頂部に3箇所、そのうちの2箇所（1箇所は未調査区）には人工的な造成が見られる。他の2箇所は、北側緩斜面の中位に位置し、自然地形を利用した平坦地である。

＜テラス状平場＞ 調査区西側の斜面中位と中央部の南側の沢すじに検出され、切土や盛土の様相を呈する。

＜堀跡＞ 3条とも調査区中央の尾根頂部付近で検出され、南北方向に延びるが、いずれも空堀である。

＜土塁＞ 上部の残存状態が悪いが、盛土された簡単な叩き土塁の様相を呈している。

＜竪穴住居跡＞ 周囲の一部が削平されているため残存状態はよくない。平面形は楕円状を呈し、規模は長軸約7m、短軸約5m前後と推定され、地床炉3基が検出されている。

＜竪穴状遺構＞ 出土遺物もほとんどなく、大半が調査区域外にあるため、その全容は不明である。

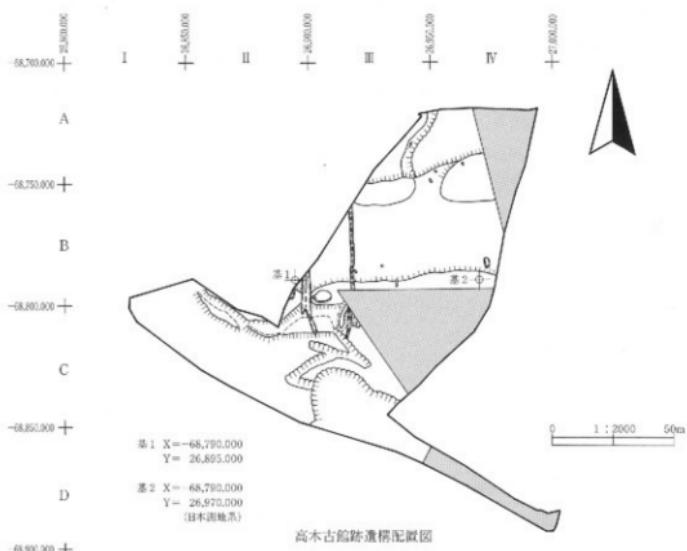
＜陥穴＞ 尾根頂部東側の平場と北側斜面の中位から5基検出され、いずれも細長い溝状である。

＜炭窯跡＞ 調査区東側で検出されたが、出土遺物もほとんどなく時期は不明である。

＜出土遺物＞ 中世のものとしては中国産の青磁片と鏡（亀甲地双鳥文鏡）、錫杖、古銭2点がある。ほかに、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、近世以降の陶器片等が出土したが、その量は少ない。

3.まとめ

今回の調査で高木古館跡は、馬の背状の瘦せ尾根を東西に堀切を用いて仕切られた曲輪が連ねた簡便な館跡であることと出土遺物から15世紀中頃に機能したであろうことがわかった。文献資料に乏しく館主や築城時期は不明であるが、今後の調査と整理の中で、その様相がさらに明らかにできると思われる。



高木古館跡遺構配置図



高木古館跡調査区全景

(6) 高木中館遺跡

所 在 地 花巻市高木第23地割ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局
 岩手河川国道事務所
 事 業 名 国道4号花巻東バイパス建設事業
 発掘調査期間 平成15年8月18日～10月31日
 調査対象面積 11,590m²
 発掘調査面積 8,342m²
 遺跡番号・略号 ME36-0218・T G N D -03
 調査担当者 丸山直美・憲岩伸吾・吉田 光・野中真盛 遺跡位置
 協 力 機 関 花巻市教育委員会



1:50,000 花巻

1. 遺跡の立地

高木中館遺跡はJR東北新幹線新花巻駅の北東約4kmの地点に位置し、北上川左岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は約72mで、西側を南流する北上川との標高は約12mである。

2. 調査の概要

検出された構造は竪穴住居跡6棟、土坑10基（平安時代）、掘立柱建物跡2棟、柱穴列1列、溝跡3条、柱穴群25基（中・近世以降）である。

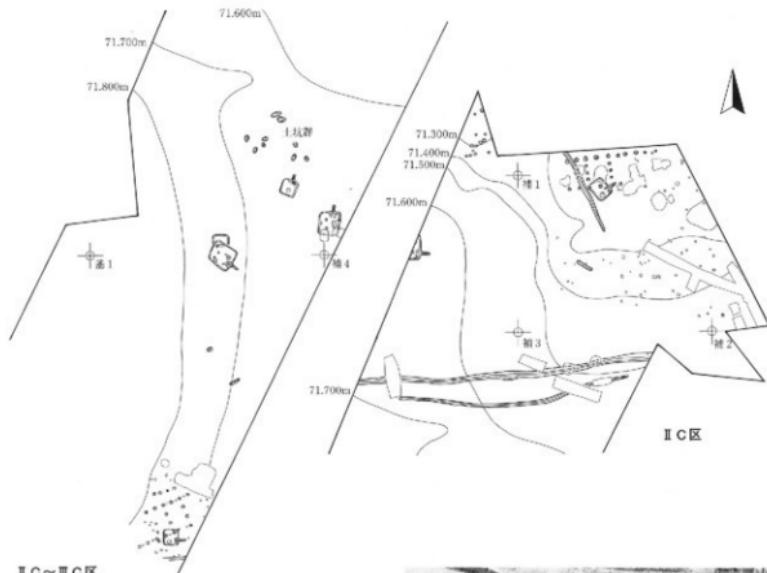
＜竪穴住居跡＞ 調査区全域より6棟を検出した。平面形は方形～長方形を呈し、規模は一辺3～5mを測る。埋土中に十和田a降下火山灰とみられるテフラが帶状に堆積するものが1棟存在する。カマドの構築方向は東壁2棟、北壁2棟、北東壁1棟、南東壁1棟と多様である。カマド形態は煙道底面が外側に向かってほぼ平坦な角度をもって延びるものが多いが、上部構造は削平によりはっきりしない。

＜掘立柱建物跡＞ 調査区北側から桁行7間×梁間4間の建物跡1棟、南西側から桁行6間×梁間3間の建物跡1棟を確認した。規模はそれぞれ桁行1.44m(47.7尺)・梁行5.83m(19.2尺)、桁行9.24m(30.5尺)・梁行5.92m(19.5尺)を測り、柱間寸法は6～7尺が多用されている。柱穴の深さは8～53cmと浅いものがあり、柱穴配列も不足するものが多いことから削平により消失した柱穴が存在すると考えられ、本来は下屋が付属していた可能性もある。出土遺物がないことから時期などの詳細については不明である。

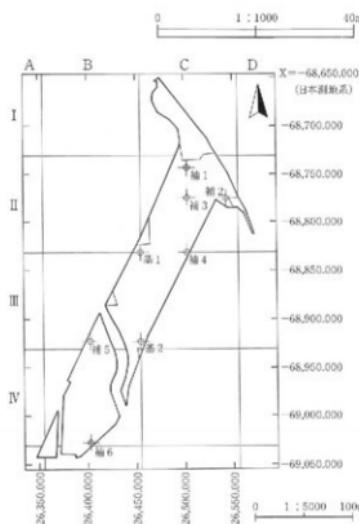
＜出土遺物＞ 大コンテナ7箱分が出土している。内訳は土師器、須恵器、磁器、石器である。特筆されるのは調査区中央部の竪穴住居跡から出土した土師器の环・甕で、製作に際してロクロを使用するものと不使用のものが混在する。ロクロ不使用のものは底部にムシロ痕を有するもので、器種には环・高台环・甕がある。

3.まとめ

今回の調査では、高木中館跡の載る段丘の第II層面が主に平安時代から近世にかけての居住域であったことが判明した。III層からは縄文時代の陥し穴状遺構が検出されており、来年度は更に下層の調査が行われることから、遺跡の様相がより明らかになるものと思われる。また、調査では中世城館に関わるような遺構・遺物は確認されなかった。



II C ~ III C 区



柱立柱建物跡(西から)



豊穴住居跡(西から)

高木中館遺跡 遺構配置図・検出遺構

(7) 大清水上遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町若柳字廻存ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
事 業 名 胆沢ダム建設
発掘調査期間 平成15年4月10日～7月31日
調査対象面積 11,200m²
発掘調査面積 11,200m²
遺跡番号・略号 N E 22-2286・O S K-03
調査担当者 佐藤淳一・水上明博
協 力 機 関 胆沢町教育委員会



1. 遺跡の立地

大清水上遺跡はJR東北本線水沢駅から西へ約20km、胆沢川によって形成された段丘面に位置する。標高は約290mで、調査前の状況は水源涵養保安林として植林された林地ならびに荒地であった。

2. 調査の概要

調査は平成12年度から行われており、今年度は、遺跡東側の1,700m²と西端部5,400m²、さらに昨年度からの継続分4,100m²を合計した11,200m²が調査対象面積となった。確認された遺構は土坑34基、陥し穴33基である。

＜土坑＞ 34基確認した。径1～2m程度、深さ50cm程度の比較的規模の小さいもので、用途や機能について推測し難いものが多い。調査区東側では、底面付近に多量の廃棄炭化材を含むものや、隣接する住居址と同時期の遺物が出土した土坑など、集落との関連性が推測される遺構を多く確認した。

＜陥し穴＞ 33基確認した。内訳は溝状をなすものが8基で、上端が楕円形で底面は長方形をなすものが19基、さらに上端・下端ともに円形をなし底面中央付近に小穴を持つものを6基確認している。底面が長方形をなすものは、底面に複数の小穴を持つタイプ、底面中央に1つの小穴を持つタイプ、底面に小穴を伴わないタイプという三種類が確認されている。また、上端が楕円形、底面が長方形で同じ平面形をなすものでも、覆土上部に十和田a降下火山灰と推測される火山灰を含むものと含まないものが確認されている。

3. まとめ

東側調査区では、集落と同時期の土坑を確認したが、遺構密度という観点からすると集落中心部に比較して非常に薄い。陥し穴の平面形は、①溝状のもの、②開口部楕円形・底部長方形で火山灰あり、③④とよく似ているが火山灰を含まない、④開口部・底部ともに円形をなす、などに分類することができる。これらについては、分類別に配置の規則性を一部確認できるものもある。構築された時期については、それを特定することのできる資料が乏しいことから不明である。出土遺物は、東側調査区からおもに縄文前期後葉～末にかけての大木5～6式土器の破片と、それと同時期と思われる石器類が出土した。西側調査区については、縄文早期～晩期まで多様であるが、絶対量が少なく、ほとんどは遺構外からの出土である。



大清水上遺跡 遺構配置図

(8) 河崎の柵擬定地

所 在 地 東磐井郡川崎村門崎字川崎92ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
事 業 名 床上浸水対策特別対策事業
発掘調査期間 平成15年4月14日～11月28日
調査対象面積 22,000m²
発掘調査面積 17,340m²
遺跡番号・略号 O E 09-1173 - K S G - 03
調査担当者 阿部 憲・亀沢盛行・林 熊
鈴木裕明・阿部孝明・羽柴直人・星 幸文・滝浩二郎
米田 寛・川又 晋・村田 淳・立花 哲・江藤 敦
協 力 機 関 川崎村教育委員会



1. 遺跡の立地

本遺跡は川崎村役場の西北約1kmに所在し、北上川左岸の自然堤防上に立地している。標高は19m～20m前後で、調査開始前は畠、宅地として利用されていた。

2. 調査の概要

遺構の検出面は大きく分けると、①10世紀前半以降、②8世紀後半～9世紀初頭、③縄文時代後期～晩期がある。①面は地表から約50cm、②面は約3m、③面は約5m以下の深さである。

＜①面の遺構＞ 掘立柱建物14棟（柱穴約460基）、竪穴住居1棟、焼土1基、土坑80基、堀1条、溝跡9条、方形周溝1基、窪み状遺構1基、畑跡8基、墓塚214基、埋没跡1基が検出された。十和田a降下火山灰との層序関係から、10世紀前半以降に属する遺構である。掘立柱建物は中世、近世に属するものである。E区S B 1は大規模な建物で、17世紀後半の民家の主屋と推測される。竪穴住居は壇土中に十和田a降下火山灰を層状に含んでおり、火山灰降下直前に廃棄されたと判断できる。焼土は周辺に土師器片が散布し、竪穴住居のカマドの残穴である可能性が高い。堀は出土遺物から11世紀代に属する可能性が高いものである。上幅は約4.5m、深さ約1.2mで自然堤防上を横断する方向に掘られている。溝の中の1条は堀と約40m離れ平行に走っており、堀と同時存在と推測される。この堀と溝は前九年の役の「河崎柵」を構成する遺構の可能性が高い。方形周溝は出土遺物から12世紀後半の遺構と推測される。窪み状遺構は不整な形状で、人為的なものか否か判断できなかった。壇土中から12世紀代の密教法具の六器が出土している。畑跡は近代～現代のものと、十和田a火山灰降下頃のものがある。墓塚は中世末から近代初頭のもので、調査区東側の墓域と、中央部の墓域の2箇所に別れている。人骨の残存状況は良好で、埋葬姿勢を復元できるものが多い。埋没跡は調査区中央にあり、11世紀、12世紀後半のかわらけ片を多量に含んでいる。土坑の殆どは近代～現代のものである。

＜②面の遺構＞ 8世紀後半～9世紀初頭の遺構である。竪穴住居9棟、窪み状遺構2基、焼土2基、畑跡2基が検出されている。竪穴住居のカマド方位は西向きが2棟、東向きが7棟である。窪み状遺構としたも

のは不整な形状のものである。埋土中から土師器、須恵器が出土している。畠跡は調査区東側で検出されている。2基が重複して交差しており、東西方向に走る方が新しい。

＜③面の遺構＞ 住居跡2棟、焼土1基が検出された。住居跡は椿円形の平面形で地焼炉を持つ。③面は縄文時代後半の遺物を包含する層の上面である。この面より下に厚さ5m以上にわたって砂層と縄文土器を包含する層が互層に存在している。縄文時代の包含層は、分布を把握するため、調査区の各地点で試掘トレーナーによる深掘をおこなった。その結果、調査区のほぼ全域に上記の深さで包含層が存在することが確認された。この状況から関係機関と協議をおこない、縄文時代の包含層の調査は、試掘トレーナーと先行して掘り下げを行なっていた部分のみをおこなうことになった。よってこの③面検出とした遺構は、存在するであろう縄文時代の遺構全体のごく一部にすぎない。

＜出土遺物＞ 多岐にわたる時代の遺物が多量に出土している。

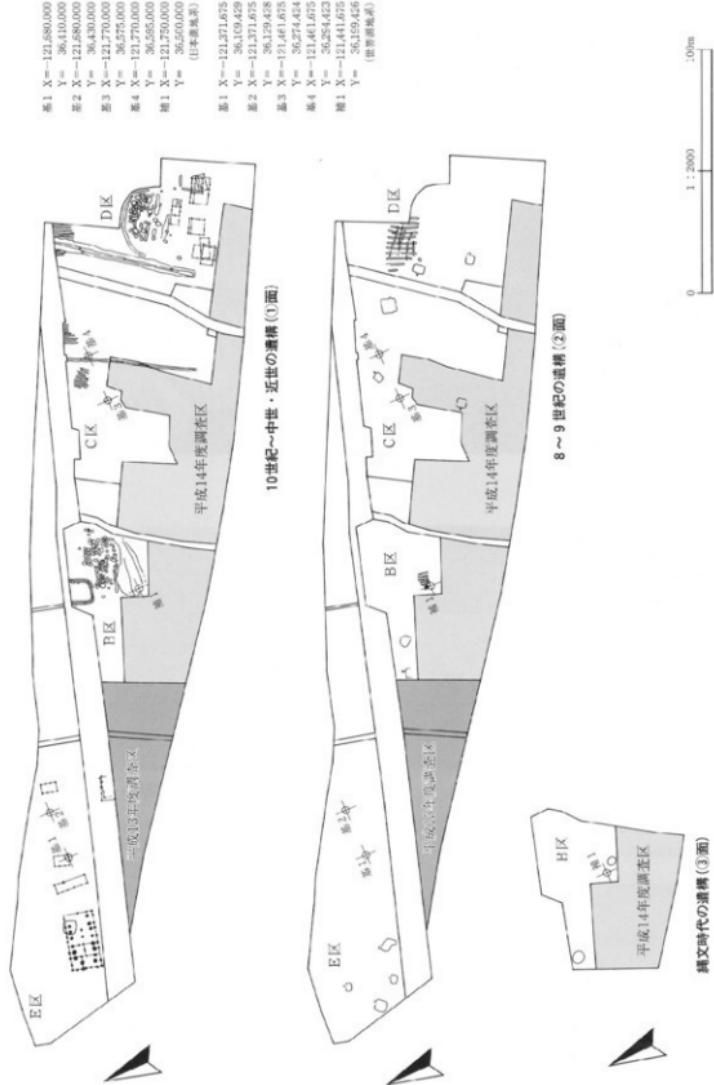
- ① 縄文時代の遺物 土器は大コンテナ25箱、石器、石製品は10箱出土した。上記のように縄文時代の包含層は一部分のみの調査であり、全体の包含量はこの数十倍と推測される。土器、石器の時期は後期前葉～晩期末葉にわたる。他に土偶、土錘、土製耳飾り、土玉が出土している。土玉は径1～2mmの微細なもので穿孔があり赤彩が施されている。また土壤水洗の結果、歯骨、魚骨が多数検出されている。歯骨はシカ、イノシシ、魚骨はアユ、サケ、フナ、イワシ、サメなどがある。
- ② 弥生～古墳時代の遺物 僅かな量であるが、弥生時代後半の土器と後北式土器が出土している。
- ③ 8世紀後半～9世紀初頭の遺物 土師器、須恵器、縄釉陶器、鉄製品、和同開珎が出土している。土師器、須恵器はロクロ使用と不使用のものが混在している。縄釉陶器の器種は小壺で無頬のものである。鉄製品は蕨手刀、鉄鎌、小札、刀子、鎌、紡錘車がある。和同開珎は異なる住居から計2枚出土した。
- ④ 10世紀代の遺物 十和田a火山灰降下前後頃の土師器、須恵器が出土している。
- ⑤ 11世紀の遺物 かわらけが出土している。器種は大型、小型、高台付き、柱状高台がある。他に中国産白磁碗、土製人形が出土しているが、これらは12世紀に属する可能性もある。
- ⑥ 12世紀の遺物 12世紀後半の手づくねかわらけが出土している。器種は大皿、小皿、内折れがある。国産陶器は常滑産片口鉢、渥美産甕、須恵器系陶器波状文四耳甕がある。中国産陶磁器は、白磁四耳甕、小甕、青白磁小壺蓋が出土している。また、密教法具の六器が出土している。
- ⑦ 中世の遺物 かわらけ、常滑産陶器甕、瓦質擂鉢、中国産白磁皿、青磁碗が出土している。他に板碑が18基土中から出土した。それ以外に地上に立っていたものが21基あり、合わせて39基が存在する。殆どは種子のみであるが、文保2年（1318年）と応永27年（1420年）の銘を持つものがある。
- ⑧ 近世の遺物 調査区各地から陶磁器が多量に出土している。近世墓からは副葬品として錢、煙管、鏡、鍔、簪、笄、小柄、土人形、小刀、刀、毛抜き、陶磁器、内耳鉄鍋が出土している。

3.まとめ

今回の調査で特筆されるのは、11世紀中頃のかわらけと、その時期に属する可能性が高い壙、溝が検出されたことである。これは「河崎の櫛擬定地」が前九年の役の「河崎柵」であることを非常に強く示唆している。また12世紀後半の遺物もまとまった量出土しており、平泉の奥州藤原氏との関係が推察される。

8世紀後半～9世紀初頭の集落は、駒沢方面の征夷の時期と重なっており、蕨手刀、鉄鎌、小札など武具の出土は社会状況を物語る重要な資料といえる。

近世墓は214基と数が多く、副葬品、人骨の残存状況も良好で、埋葬方法の解明にこの上ない良好な資料を提示することができた。



河崎の柵擬定地 遺構配置図



調査区全景



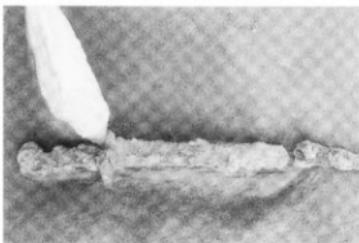
近世掘立柱民家跡



鍋被り葬墓



古代竪穴住居跡



藤手刀出土状況

河崎の柵擬定地 写真図版

II. 岩手県・市関係

(9) 梅の木沢遺跡

所 在 地 軽米町大字小経米第17地割
字玉川向平87-1ほか
委 託 者 二戸地方振興局土木部
事 業 名 荒廃砂防事業
発 挖 調 査 期 間 平成15年8月1日～10月22日
調 査 対 象 面 積 2,200m²
発 挖 調 査 面 積 2,200m²
遺 跡 番 号 ・ 略 号 J F 15-0344・U K S -03
調 査 担 当 者 村木 敬・新井田えり子



1. 遺跡の立地

梅の木沢遺跡は、軽米町役場より南東約20km、大野村と山形村との境に位置している。遺跡はウチナイ沢と東流する沢とが合流する地点の上流、標高350m前後の河岸段丘上に立地している。現況は山林・原野である。

2. 調査の概要

今年で3年目となる発掘調査は、遺構検出した段階において保存状態が良好であること等の理由から、協議により記録保存から遺構確認調査に変更された。保存することを目的とした調査であったため、調査区内の遺構配置の把握に務めた。また、遺構の性格が把握できないものに対してのみ必要最低限のトレンチを入れ、それらの詳細な記録を得ることとした。

今回の精査の結果、高殿・排溝場・性格不明造構・鍛冶場の4箇所の異なる作業により形成された範囲を確認できた。以下にそれら成果をまとめておく。

＜高殿＞ 高殿は調査区北西隅の最も標高の高い場所に存在している。その内部において製鉄炉1基、押立柱4基、焼土2基、その外縁において土壙1基、堀1条が検出され、製鉄炉を中心とした各配置を確認できた。

高殿の規模は南北約18m×東西約16m、平面形は隅丸長方形の丸打ちである。床面は焼き締められた土や黄褐色粘土で形成されている。焼き締められた土は輪座を構築する粘土との堆積関係より、3回の構築されている状況が確認された。また、黄褐色粘土の堆積からは北側に形成された排溝場を整地して拡張していることが明らかとなった。

製鉄炉は高殿のはば中央に位置し、その掘り方の規模は約7～8m、平面形は長楕円形を呈する。その中央部付近の両脇には輪座、両端には湯溜りがそれぞれ確認されている。そこから想定できる炉の規模は3～4mである。炉の地下構造は、木炭と礫で形成されている。基本的には木炭を充填する方法が取られている。この木炭充填層と輪座に使用された粘土の堆積関係から、3度の再構築が確認された。3度目の構築以降の地下構造においては、底面に焼けた粘土が貼られ、東側壁面のみ礫が配置されるようになり再度補修を行っていたことを確認できた。

押立柱は、平面形は円形ないし梢円形を呈し、深さは0.8~1.5mである。直径約0.4mの柱痕が確認されている。

＜排滓場＞ 高殿の北東から東側と性格不明遺構群の南東側にかけて2地点存在し、長軸60mの広範囲に形成されている。この排滓場に2本のトレンチを入れた結果、炉壁と鉄滓が互層となっている状況を確認した。それらのトレンチから土納袋約2,000袋・重量約45~60tの鉄滓と炉壁が出土している。両排滓場の鉄滓を分析することでその性格の違いを明らかにしていきたい。

＜性格不明遺構群＞ 本遺構群は、高殿南側の緩斜面に存在し、堅穴状造構1基、掘立柱建物1棟、焼土1基、柱穴30基検出されている。堅穴状造構と焼土は掘立柱建物内に存在している。

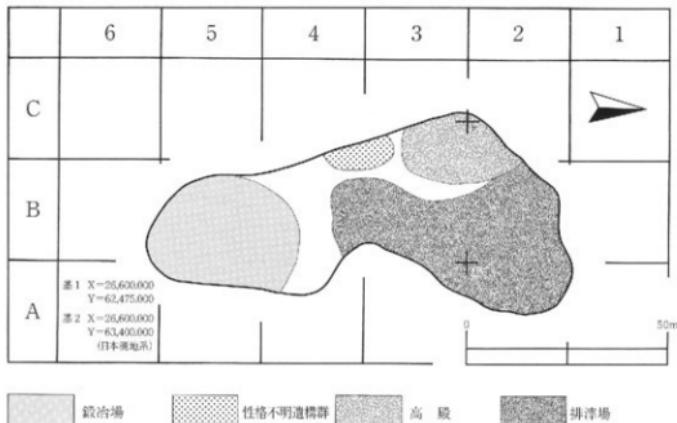
＜鍛冶場＞ 調査区南側の平坦面からそこから南へ登る緩斜面の比較的狭い範囲に、本遺構群は密集して存在している。その範囲において鍛冶炉4基、焼土1基、集石造構2基、炭窯1基、柱穴3基が検出されている。

＜出土遺物＞ 出土遺物は近世陶磁器が小コンテナ1箱出土し、肥前産、大堀相馬産、小久慈産、瀬戸・美濃産などが見られる。それらの所属時期は概ね18世紀後半から19世紀前半である。その他には錢貨、釘や鎧などの鉄製品、羽口などが点数は少ないものの出土している。

3.まとめ

平成13年度より3年間継続して調査が行われた結果、鉄山内においてそれぞれの作業工程により場所が異なって形成されていることが明らかになった。また、出土遺物の所属年代より19世紀前半に所属する鉄山である可能性が高いと思われる。今回の調査により居住域の把握ができなかったものの鉄山内において、このような遺構配置が得られた結果は大きな成果と言えよう。

今後、文献等から梅の木沢鉄山を中心とした他の当該期の鉄山との関係やその位置付けを明らかにしていきたい。



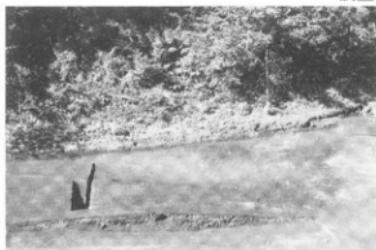
梅の木沢遺跡 遺構配置図



梅の木沢遺跡 高殿遺構配置図



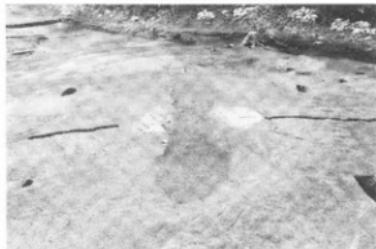
調査区全景



性格不明遺構群検出



高殿検出



製鉄炉検出



製鉄炉断面

梅の木沢遺跡 検出遺構

(10) 中佐井Ⅲ遺跡

所 在 地 岩手郡安代町字中佐井42ほか
委 託 者 盛岡地方振興局農政部農村整備室
事 業 名 中山間地域総合整備事業浅沢地区
発 挖 調 査 期 間 平成15年4月8日～6月3日
調 査 対 象 面 積 1,550m²
発 挖 調 査 面 積 1,550m²
遺 跡 番 号・略 号 J E 55-1224・N S I Ⅲ-03
調 査 担 当 者 亀大二郎・小林弘卓
協 力 機 関 安代町教育委員会



1. 遺跡の立地

本遺跡はJR花輪線荒屋新町駅より北東4km付近に位置し、安比川右岸に形成された河岸段丘上に立地している。遺跡の南東側は標高300m程度の丘陵地になっており、その奥には七時雨山、田代山、毛無森など900～1,000m級の山地が連なっている。

2. 遺跡の概要

今回の調査で確認された遺構は、堅穴住居が1棟、堅穴状遺構が1棟、土坑が12基、溝状陥し穴が1基である。
<堅穴住居> 堅穴住居を調査区中央付近で検出している。平面の形状は梢円形を呈しており、中央に竈みを伴う焼跡がある。出土した土器は円筒系のものと大木系のものがあり、遺構の時期としては縄文中期中頃と想定する。

<堅穴状遺構> 上記堅穴住居の東側で検出している。土器は出土していないが、検出面及び埋土の状態から判断して堅穴住居と同じ頃の遺構と思われる。

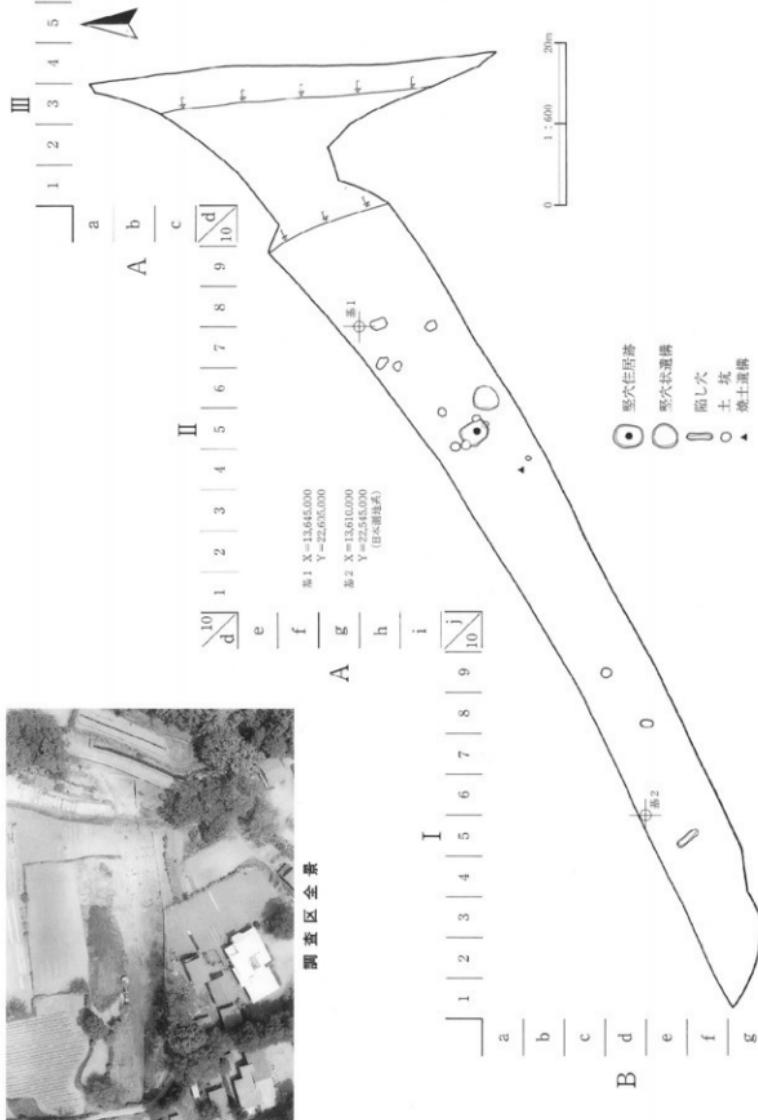
<土坑> 調査区の北東側から4基、中央付近から6基、また南西側から2基検出している。北東側の数基は底部に炭化物を含んでおり炭窯跡の可能性もあるが、長竿の耕作によって形状が壊乱を受けているためその性格を判断しがたい。中央付近の1基からは、寛永通宝がまとまって出土している。

<溝状陥し穴> 調査区の南西端で検出している。埋土の中位層には十和田a降下火山灰と思われる火山灰が含まれている。また、底面には逆茂木痕とみられる小孔を伴っている。

<出土遺物> 遺物は縄文土器が大コンテナで3箱、石器が中コンテナで1箱出土している。縄文土器の大半は中期中葉のもので、後・晩期のものも何点か含まれている。

3.まとめ

調査区の現況は北東端の斜面以外はほとんど平坦であるが、十和田a降下火山灰を検出する面まで下げた状態、さらに地山（八戸火山灰層上面）まで下げた状態から推察すると、古代以前は調査区中央より南西側に向かって落ち込んでいく谷地形だったようである。堅穴住居及び堅穴状遺構を検出した付近から南東側にかけてのなだらかな丘陵地に縄文時代中期頃及び後・晩期頃に生活が営まれており、遺物の大半はそこから地形に沿って流れ込んできたものと思われる。



(11) ものの和野ソマナイ遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村和野533番地 9他
委 託 者 宮古地方振興局農政部農村整備課
事 業 名 中山間地域総合整備事業
発 挖 調 査 期 間 平成15年4月15日～6月30日
調 査 対 象 面 積 2,379m²
発 挖 調 査 面 積 2,379m²
遺 跡 番 号・略 号 K G22-1355・WN S-03
調 査 担 当 者 阿部勝則・新妻仲也
協 力 機 閣 田野畠村教育委員会



1. 遺跡の立地

本遺跡は、田野畠村のはば中央にあり、三陸鉄道北リアス線カンパネルラ田野畠駅の南西約2.5km、田野畠村役場から南東約1km付近に位置し、東流して太平洋に注ぐ平井賀川とその支流に挟まれた海岸段丘に立地する。調査区は北西から南東に緩く傾斜し、標高は約211～233mである。現況は畑地と山林である。

2. 調査の概要

今回の調査では、縄文時代の竪穴住居跡2棟・陥し穴状遺構13基・土坑12基、近代の炭窯窓1基・掘立柱建物跡1棟を検出した。

＜竪穴住居跡＞ 調査区西側の平坦面で、縄文時代の竪穴住居跡を2棟検出した。東側にある住居跡は、規模・平面形が径5m程の円形と推定され、東壁寄りに炉跡と推定される焼上を1箇所確認した。柱穴は3基検出している。時期は、出土した土器から縄文時代中期末葉と推定される。

＜陥し穴状遺構＞ 円形2基・方形1基・溝形10基を検出した。規模は、円形のものは径1.5m、方形のものは1.7×1.4m、溝形は長さ1.5～2.8m、幅0.6～0.8m、深さ0.7～1.5mである。円形と方形の陥し穴の底部には逆茂木痕があった。時期は、覆土上位に中押火山灰が確認されたので、縄文時代前期前葉と推定される。

＜土坑＞ 平面形が円形の土坑が10基、椭円形の土坑が2基ある。規模は、径0.8～1.5mである。

＜掘立柱建物跡＞ 4本柱の掘立柱建物跡1棟を調査区西側の傾斜地で検出した。平面形は長方形、規模は2m×4mで、柱穴の規模は径0.5m前後、深さ0.5m前後である。近代の炭窯窓に関連する施設と考えられる。

＜炭窯跡＞ 調査区西側の傾斜地で1基検出した。平面形は卵形で、長軸4m、短軸2.5mである。焚き口は南側にあり、焼道口は北側にある。焚き口側は焼土が広がり、煙道側は煤に覆われていた。

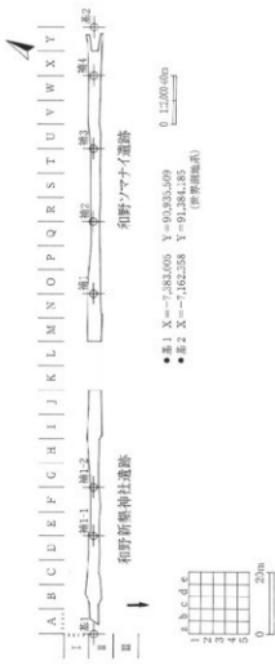
＜出土遺物＞ 縄文土器が大コンテナ1箱出土している。時期は縄文時代前期～晩期があり、中期の土器が多くを占める。石器は剥片石器や礫石器などが少量ある。垂飾などの石製品も出土している。

3.まとめ

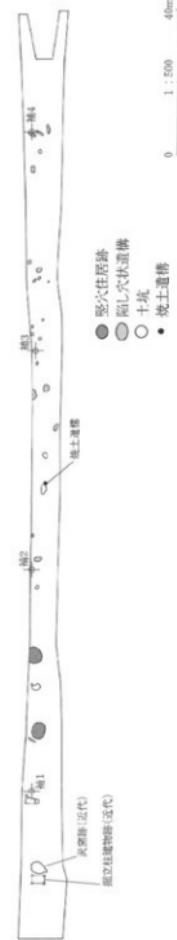
今回の調査では次のことが確認された。縄文時代前期の陥し穴状遺構が調査区東側に約30～40m間隔をもって広く分布していた。陥し穴状遺構は、本調査区の南北にある沢を結ぶ試道上につくられていたものと考えられる。また、調査区の西側の平坦面には、縄文時代中期の竪穴住居跡が検出されている。



和野ソマナイ遺跡 遺構配置図



和野ソマナイ遺跡・和野新編神社遺跡グリッド位置図



わのにいほりじんじゆ
(12) 和野新墾神社遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畠村和野589番地1他
委 託 者 宮古地方振興局農政部農村整備課
事 業 名 中山間地域総合整備事業
発掘調査期間 平成15年7月1日～8月5日
調査対象面積 1,340m²
発掘調査面積 627m²
遺跡番号・略号 K G22-1262・WNNHJ-03
調査担当者 新妻伸也・阿部勝則
協力機関 田野畠村教育委員会



1. 遺跡の立地

本遺跡は、田野畠村のはば中央にあり、三陸鉄道北リアス線カンパネルラ田野畠駅の南西約2.5km、田野畠村役場から南東約1km付近に位置し、東流して太平洋に注ぐ平井賀川とその支流に挟まれた海岸段丘に立地する。調査区は、東側は北西から南東方向に沢があり、緩い東向きの斜面になっており、西側は高台で平坦面である。標高は247～255mである。遺跡の現況は畑地・山林である。

2. 調査の概要

今回の調査では、縄文時代の陥し穴状遺構4基・土坑4基・遺物包含層1箇所を検出した。

＜陥し穴状遺構＞ 4基検出した。平面形は円形・溝形のものがある。規模は、円形の陥し穴は径1～1.5m、溝形の陥し穴は長さ2m、幅1m、深さ0.8mである。底部には逆茂木痕が確認されている。これらの陥し穴は、約30～40mの間隔で配置され、遺跡の南北にある沢を結ぶ獣道上につくられたものと推定される。時期は、出土遺物が無く、覆土に火山灰の堆積も見られないことから、詳細は不明である。占地と検出状況から形態別による時期差はないと判断される。

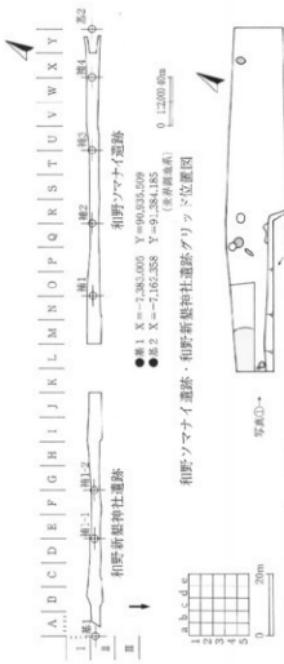
＜土坑＞ 平面形が円形の土坑3基、不整形の土坑で、深さは、最も深い土坑で1.5mである。不整形の土坑の規模は、径1m、深さ15cm程度である。縄文時代後期の土器片が出土している。

＜遺物包含層＞ 西側の斜面に面積約135m²の遺物包含層を確認した。土器を多量に包含する褐色上層は、遺構の構築時に廃棄された堆土と推定され、厚さは30cm程度で斜面の上位にのみ広がる。ほぼ完形の土器や石器が多く出土している。時期は、縄文時代後期前葉が主体である。

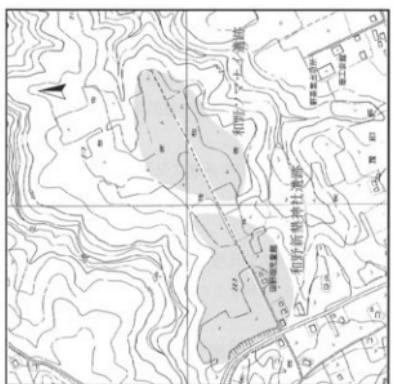
＜出土遺物＞ 縄文土器が大コンテナで4箱出土している。時期は縄文時代後期前葉のものが主体である。石器は、剥片石器・礫石器など中コンテナで1箱出土している。他に石棒などの石製品も出土している。

3.まとめ

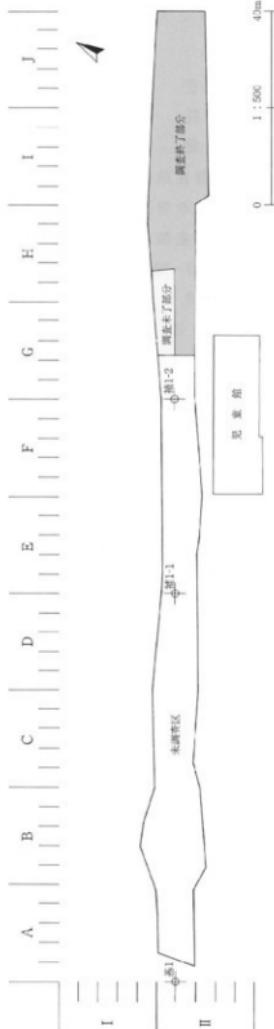
今回の調査では、縄文時代の陥し穴状遺構が検出された。また、西側の斜面では縄文時代後期前葉の土器捨て場だったと考えられる遺物包含層が確認された。同時期の居住域は、西側にある未調査区の高台となる平坦面にあるものと想定される。調査区西側の調査未了地と未調査区は次年度以降の調査となる。



写真②



和野新堀神社遺跡 遺構配置図



(13) 熊堂A遺跡第17次調査

所 在 地 盛岡市本宮字熊堂71-2ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事 業 名 盛岡広域都市計画事業
盛岡南新都市地区整理事業
発掘調査期間 平成15年4月12日～6月20日
調査対象面積 1,588m²
発掘調査面積 1,588m²
遺跡番号・略号 L E 16-2107・OKD-03-17
調査担当者 本多準一郎・小松則也
協力機関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

熊堂A遺跡はJR東北本線仙北町駅から西に約1.5kmに位置し、零石川によって形成された標高123m前後の河岸段丘に立地している。零石川との比高は5mで、遺跡の現況は宅地跡である。

2. 調査の概要

今次調査区は東西約25m、南北約64mの範囲に亘り、大きく北側と南側調査区に分かれている。南側調査区から堅穴住居跡1棟、土坑17基、石窯炉3基、焼土遺構6基が検出された。出土する遺物等から縄文晩期後半を中心とした集落跡と考えられる。

本遺跡の基本層序については、I層表土（宅地造成の盛土）、II層旧耕作土（水田）、III層黒褐色土層（無遺物層）、IV層遺構検出面・遺物包含層に大別される。IV層上面から下位に20～30cm程が遺物の包含層になっており、南北約30mの範囲に広がっている。一部グライ化している部分が見られ湿地帯だったと思われる。IV層包含層下位で遺構検出したが遺構堆土との識別が難しく検出面は包含層内だった可能性もある。

＜堅穴住居跡＞ 1棟検出している。規模は5×4.1mではば円形を基調とする堅穴住居跡である。壁の立ち上がりは緩やかで、炉はほぼ中心に石窯炉が設置され、3基の作り替えが確認できる。この内1基は、土器埋設の石窯炉である。柱穴の確認はできなかった。出土している遺物から縄文晩期後半に属すると推定される。

＜土坑＞ 調査区南西部から17基集中して検出している。平面形は円形と椭円形を基調とするものが大部分を占め、断面形は碗形、逆台形、すり鉢状の形状を呈するものがある。規模は長軸70～200cm、短軸40～150cmの範囲にある。底面から縄文土器片や土版が出土した土坑もあり、形状等から墓坑の可能性の高いものもある。文様等の特徴などから縄文晩期後半に属すると思われる。

＜石窯炉＞ 3基検出した。規模は長軸110～120cm、短軸100～110cmを測る。壁の立ち上がりや、柱穴の跡は確認できなかったが、内2基は焼土面の焼成がよく石がしっかりと配置されていたことから住居跡の可能性が高い。1基は石窯炉の形態をなしていたが、焼土面が検出されなかたため、炉以外の用途に使用されたと思われる。

＜焼土遺構＞ 9基検出した。平面形は不整を呈するものが多い。規模は長軸30~80cm、短軸20~60cmである。大部分の焼土遺構は焼成が悪く石の配置も確認されない。出土遺物は土器片が数点出土しており、文様等の特徴などから縄文晚期後半に属すると推測される。また、この内1基からは多量の炭化したケルミ片が出土している。

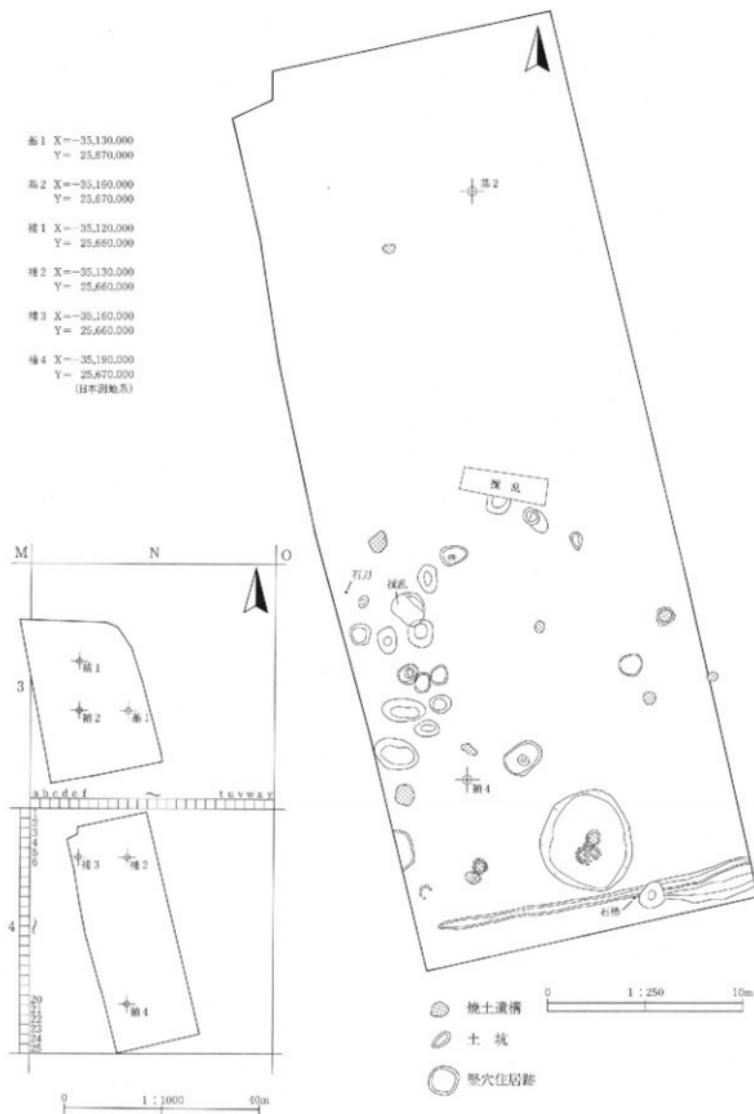
＜出土遺物＞ 土器と石器を合わせて大コンテナ36箱出土した。遺物等の出土は調査区南側の約430m²の限られた範囲に集中している。土器は縄文晚期後半太洞C 2式~A式を中心に、壺、壺、台付浅鉢、浅鉢が出土している。一括で出土するものもあるが、大部分は破片で摩滅しているものが多く遺構外の出土の割合が多い。この他土偶（破片含む）9点、土版2点、耳栓4点等の上製品も出土している。石器は石錐、石匙、石錐、笠状石器等が出土している。石製品は完形の右刃1点、完形の石棒1点、他石棒類を含む多くの石製品が出土し、フレーク類や不定形石器、石核の出土している割合が多い。

3.まとめ

本遺跡は平成8年度にも隣接する調査区東側で調査が行われ、堅穴住居跡1棟を検出している。検出された遺構数などから今次調査範囲は熊堂A遺跡の中心域にあると思われる。今回の調査で熊堂A遺跡は縄文晚期を中心とした集落跡であることが判明した。時期が近い集落跡としては盛岡市教育委員会が調査した盛岡市湯沢に立地する縄文晚期前半を中心とした湯沢遺跡（標高192~194m）があるが、盛岡南開発開拓遺跡の調査でこのような集落跡が見つかった例は少ない。周辺の遺跡は殆どが古代を中心とした集落跡であり、なぜ標高の低い位置にこのような集落が形成されたのか地形的な観点からも検討をしていく必要がある。

遺構配図みると住居跡（石圓炉）が集中する範囲と土坑等が集中する範囲が分かれており、場の使い分けがされていたことがうかがえる。遺物の出土については遺構外からの出土が多いもの土偶やミニチュア土器、石刀や石棒などの石製品が出土していることから祭祀的な事が行われていた可能性が考えられる。また、石核やフレーク類の出土割合が多いことからこの場所で石器製作を行っていたと思われる。

盛岡市内で縄文晚期の集落が検出されている例が少ない中、貴重な資料を提供したと考えられる。今後周辺の縄文晚期集落跡と比較・検討を加え、総合的に本遺跡の性格等を考えていきたい。



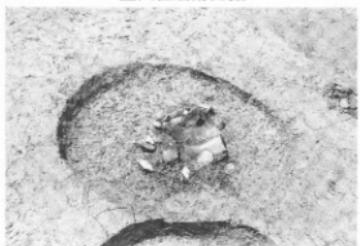
熊堂A遺跡第17次調査 遺構配置図



豎穴住居跡完掘



豎穴住居跡内石圓炉



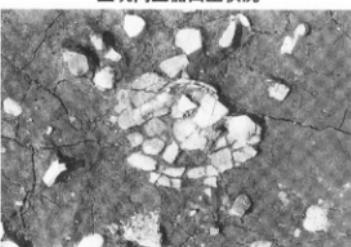
土坑内土器出土状況



土坑内土器出土状況



石圓炉完掘



土器出土状況



石棒出土状況



石刀出土状況

熊堂A遺跡第17次調査 検出遺構・遺物出土状況

くまどう
(14) 熊堂B遺跡第20次調査

所 在 地 盛岡市本宮字熊堂58-1他
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
 事 業 名 盛岡広域都市計画事業
 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発 挖 調 査 期 間 平成15年4月11日～10月17日
 調 査 対 象 面 積 10,070m²
 発 挖 調 査 面 積 10,216m²
 遺 跡 番 号 ・ 路 号 L E 16-2118・OKO-03-20
 調 査 担 当 者 阿部眞澄・早坂 淳
 協 力 機 関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

熊堂B遺跡は、JR東北本線仙北町駅の西約1.5km、零石川右岸の微高地上に位置する。本次調査区は西側（E区）が休耕田、畑地と宅地跡、北側（G区）が宅地跡で占められ、過年度におこなわれた第1・15次調査区、本年度並行しておこなわれた第18・19次調査区に隣接している。標高は123～124m前後と概ね平坦であるが、その中でも多少の高低差がみられ、北側（G区）は微行地の縁辺部にあたり、緩やかに下降しながら低湿地に至る。

2. 調査の概要

本次調査で新たに検出した主な遺構は、竪穴住居跡21棟（奈良時代2棟・平安時代19棟）、掘立柱建物跡1棟、土坑37基、竪穴状造構2基、焼土遺構1基、溝跡22条、柱穴状土坑である。調査区内の層序は、I層灰黃褐色土（現代耕作土）、II層黒褐色土、III層黒褐色土と暗褐色土（漸移層）、IV層黄褐色砂質土（地山層）、V層砂礫層と把握、III層下面からIV層上面で遺構を確認した。

調査区は10,000m²以上あり、また3箇所に分かれているため、プレハブを中心に西側をE区西とE区東、北側をG区とした。位置については、後のグリッド図に示した。

＜竪穴住居跡＞ 調査区E区東から10棟（奈良時代2棟・平安時代8棟）、E区西から11棟を検出した。E区は全体に耕作による削平を受け、遺構の残存状況は良くない。埋土は、黒褐色土～暗褐色土が主体、一部には灰白色火山灰粒が認められるものもある。平面は方形が主体であり、規模は一辺が約3mのもの9棟、約4～6mのもの10棟、床面またはカマド部分のみ残存するもの2棟であり、比較的小規模の竪穴住居跡が集落を形成している。21棟中12棟についてカマドの精査をおこなったが、作り替えがおこなわれていたのは2棟のみであった。煙道の作り方は矧り貫き式と掘り込み式の両方、方向については奈良時代の竪穴住居跡が北西であるのに対し、平安時代の竪穴住居跡に於いては、概ね東から南の傾向がみられる。

＜掘立柱建物跡＞ E区東で1棟検出した。規模は2間×2間（4×4m）の正方形で主軸方向は南北である。掘り方は径40cm前後、深さ22～33cmである。竪穴住居跡や土坑が集中するE区東にあり、古代に属すると考えられる。

＜土坑＞ E区東と西で計37基検出した。大部分は時期を特定する遺物も少なく、役割等も不明である。た

だE区東の堅穴住居跡東側に隣接する方形の土坑は、暗褐色土層を確認することが出来、墓壙とみられる。E区東の1基と西の1基からは調整が明瞭に残り剥がれたように碎けた土師器・甕破片（口縁～体部）が焼土とともに出土している。また、E区西の北西調査区境には、埋土下層から底面に焼成良好の焼土が認められる土坑もあり、その役割については検討中である。

＜堅穴状遺構＞ E区東で2基検出、平面はいずれも方形である。E区東の1基の埋土は隣接する堅穴住居跡と同様黒褐色～黒色土主体、一辺が2～3mと小規模であるが須恵器・短頸壺が横向きで出土している。もう1基は第1次調査区との境にあり一辺が4m、埋土はにぶい黄褐色～黒褐色土主体、壁の立ち上がりが明瞭であり、攪乱を含むが、埋土中から土師器片や須恵器が出土している。

＜焼土遺構＞ E区西で1基検出、平面は不整形、焼成良好の明赤褐色焼土が残る。カマドと床の一部のみ残る堅穴住居跡等があることから、住居跡のカマド部分であったと考えられる。

＜溝跡＞ 新たにG区で5条、E区東で2条、E区西で15条検出した。G区には他に第18次調査区→第20次調査区→第15次調査区と延びる約21m深さ20cm前後の底面に工具痕が残る浅い溝跡や、出土遺物は少なく時代を特定することはできないが東西に延びる長さ約75m深さ55～66cmの溝跡がある。本次調査に於いてはこの溝跡より北側で古代の遺構を確認することはできなかった。E区東の溝跡1条に関してはG区の溝跡と同様時代の特定は出来ないが、長さ約41m深さ46～58cm、遺物は少なく壁の立ち上がり等は明瞭である。E区西の溝12条は、調査区南東に広がる黒色土部分にあり、埋土に灰白色火山灰を含み、北側に広がる集落とは同時期に使用されたとみられる土師器・甕や壺などの出土遺物も多い。

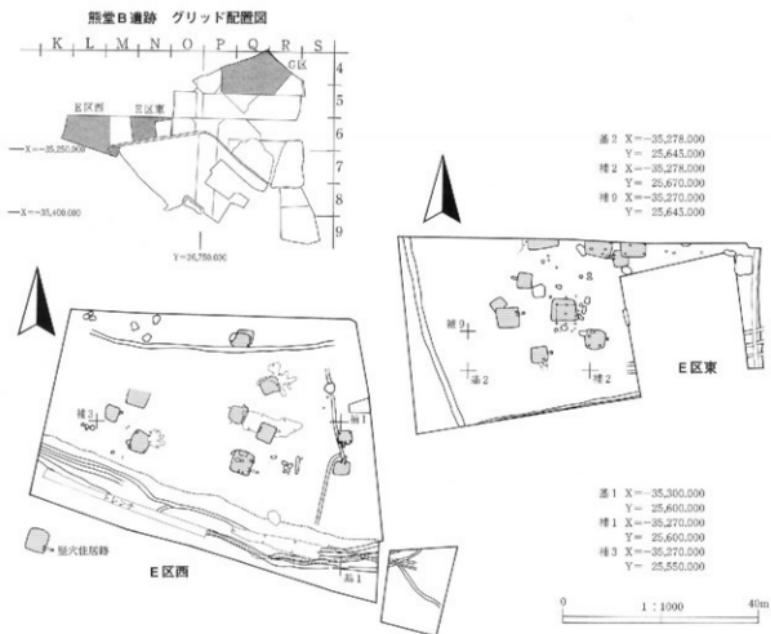
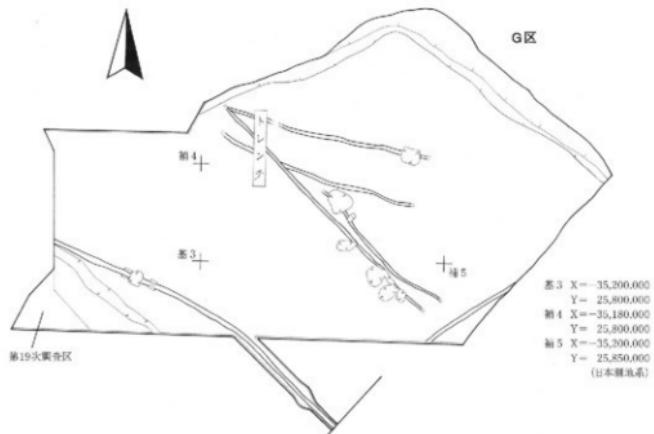
＜出土遺物＞ 遺物は大コンテナで6箱出土した。種類は、土器（土師器・須恵器）、石器（砥石・石匙）、鉄製品（刀子・紡錘車・釘・鎌・鐵鎌）が主である。土器については、G区は検出面からの出土のみであるが、E区東では堅穴住居跡を中心にロクロ使用とロクロ本使用の土師器、E区西では堅穴住居跡を中心にロクロ使用の土師器が出土している。器種は甕と壺が中心であり、高台付壺や厚めの鉢、土師器・小型壺の他、砂底土器や墨書き土器（破片）などもみられる。

3.まとめ

4月からおこなった約10,000m²の調査により、現時点で以下のことが考えられる。

- (1) E区西は調査前は水平な休耕田であったが、堅穴住居跡の残り状態からみると、古代に於いては西側が高く、また北側も自然に高くなっていたとみられる。北側からみると南東に延びた、黒色土部分（旧河道）に向かって張り出した土地であり、そこに古代の集落が形成されていた。
- (2) (1)に対して、G区は熊堂A遺跡から続く低湿地に向か、緩やかに下る段丘の縁であったとみられる。中央部分を調べた結果、水分を含んだ粘土質層が褐色土と黄褐色砂質土の下まで入り込んでいることから、現在よりも南側まで低湿地が広がっていたと予想される。

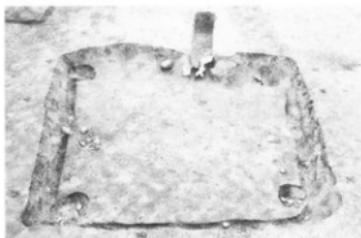
今後は、本次調査結果のまとめと過年度の調査結果を統合し、古代熊堂集落の全容をより明確にしていきたいと考える。



熊堂B遺跡第20次調査 遺構配置図



調査区全景



平安時代の竪穴住居跡完掘



遺物出土状況



E区西 溝跡完掘



作業風景

熊堂B遺跡第20次調査 検出遺構

(15) 台太郎遺跡第51次調査

所 在 地 盛岡市向中野字八日市場8-4ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事 業 名 盛岡広域都市計画事業
盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成15年4月11日～11月10日
調査対象面積 8,686m²
発掘調査面積 6,616m²
遺跡番号・略号 L E 16-2269・ODT-03-51
調査担当者 中村絵美・石崎高恵・阿部眞澄・
早坂 淳
協力機関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

台太郎遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約900mに位置する。零石川によって形成された河岸段丘上の標高120mに立地している。概ね平坦な地形であるがその中でも若干の高低差がみられる。

2. 調査の概要

今回の調査は、6つの調査区（A～F区）に分かれている。調査前の状況は、水田や畠、道路、宅地等に利用されていた。これらのうち水田・畠地以外の区域では、現況の建物の基礎、排水管、水路等の影響を受け遺構の残存状態は良くなかった。

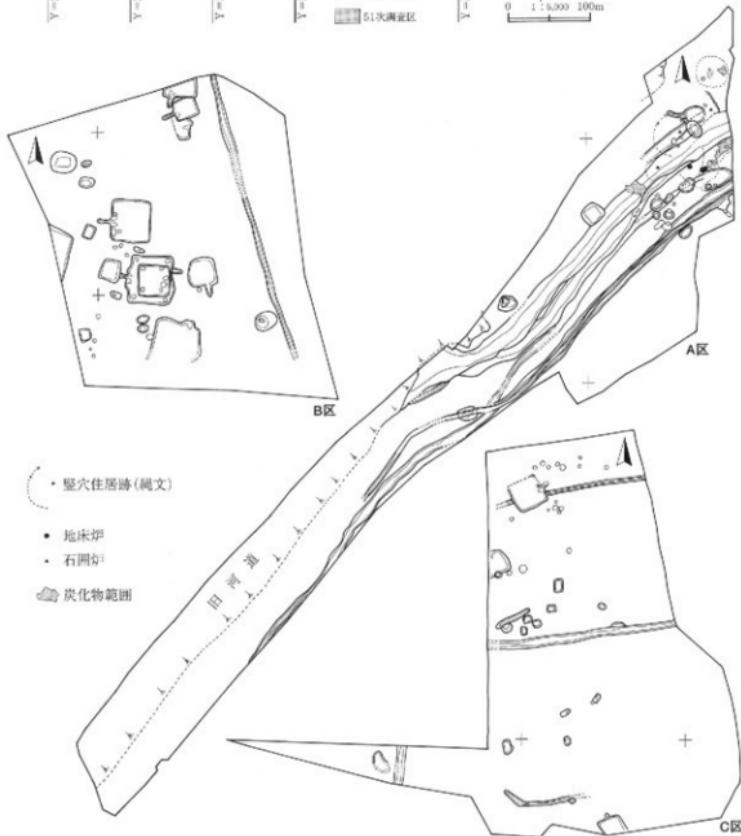
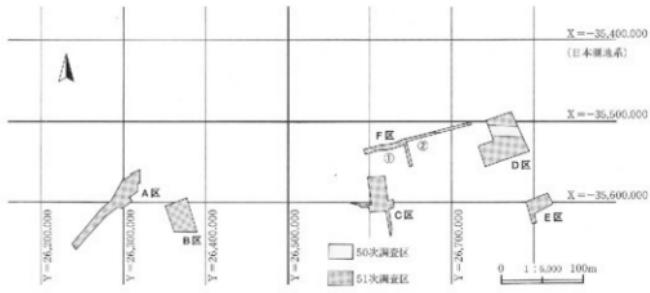
検出した遺構は、竪穴住居跡26棟（縄文時代晩期4棟、古墳末～平安時代22棟）、住居状遺構3棟、土坑65基、溝跡29条、井戸跡1基、柱穴状土坑約150基である。

＜竪穴住居跡＞ 縄文時代晩期の竪穴住居跡はA区、古代の竪穴住居跡はB～F区に分布する。このうち古墳末～奈良時代の竪穴住居跡は、C区3棟、D区5棟、E区1棟、F区3棟、計12棟検出された。形状は方形で、一辺が2mから7.5mまで様々な規模を持つ。カマドはいずれも北壁に設置され、煙道の構築方法は削り抜き式である。袖は地山を積み上げるものが大半を占めるが、削り出しも一部認められる。同壁にカマドを2基設置する住居跡が2棟あり、このうち1棟では拡張が行われている。

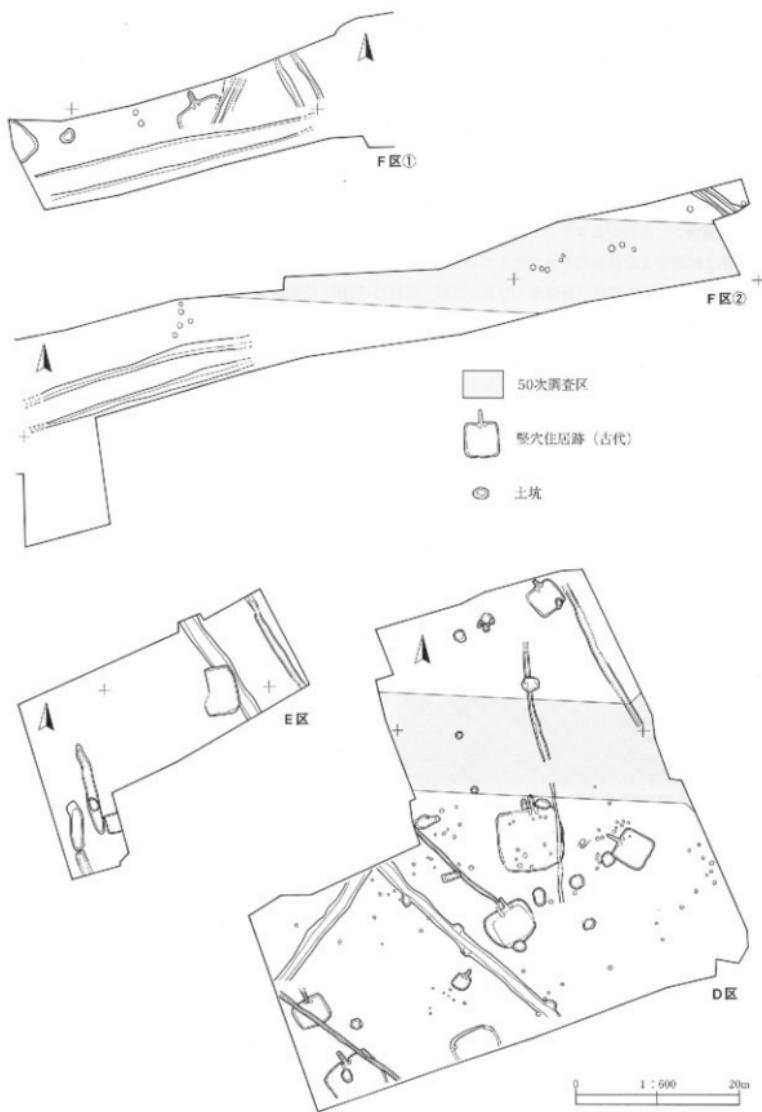
平安時代の住居跡は、B区9棟、D区1棟の計10棟検出された。形状は方形、規模は2.8～6mである。カマドは東・西・南壁と様々な方向に設置され、煙道の構築方法はやはり削り抜き式と思われる。前代の住居跡が、同壁に複数カマドを持つ立て替えまたは拡張なのに対し、煙道方位を変えたものが数棟重複する。

縄文時代晩期は、古代の住居跡がみられないA区で4棟検出された。住居跡は洪水等によって一気に埋まっているため、埋土が周囲の堆土山と非常に類似しており、平面形での規模・形状を把握することができなかった。しかし、地床炉及び石窯が各3基検出され、これを中心とした床面上に炭化材及び遺物の広がる範囲が認められた。

＜土坑＞ A～F区で検出されたが、大半は遺物もなく時期不明である。



台太郎遺跡第51次調査 遺構配置図 1



台太郎遺跡第51次調査　造構配置図2

＜溝跡・堀跡＞ 溝跡も土坑同様全区域で検出された。A区では北西部の旧河道の落ち際に沿って溝が何条も走り、調査区の北東部では、奈良と平安時代の溝が2条重複している。両者とも幅2m程度の比較的規模の大きい溝で、平安時代の方には多量の遺物が投棄されていた。

堀跡は、E区、F区に位置する。いずれも前年度までの調査区から続くもので、E区の堀跡は、22次・44次調査のものと同一遺構で方形に区画する可能性が高い。

＜井戸跡＞ B区で検出された。放射状に円を描いて石を積み上げ壁とし、底には水溜として木製の枠が設置されている。遺物が出土していないため、時期は不明である。

＜出土遺物＞ 土器が大コンテナ20箱程度出土した。大半が古墳末～平安時代もので、在地の土器に混じり関東系土師器が1点住居内から出土している。その他の出土遺物には、縄文土器・中～近世陶磁器、鉄製品（紡錘車・鉄鎌）、土製品（紡錘車・勾玉）、石器・石製品（石鎌・敲磨器類・紡錘車）、木製井戸枠、馬歯などがある。

3.まとめ

今回の調査では、遺跡の西側（B区）で平安時代の住居跡、東側（C～F区）で奈良時代の住居跡が検出された。以前の調査においても周囲に同時代の遺構が分布する傾向がみられる。また、奈良時代の住居は比較的散在し、平安時代のものは密集し重複するという状況がみられ、これまでの成果と矛盾がない。一方で、古代の住居跡が存在しない旧河道付近の低い区域（A区）では、縄文時代晩期の住居跡が立地している。各時代においての占地、土地の利用方法が異なっていた可能性が考えられる。



平安時代の豎穴住居跡



奈良時代のカマド



関東系土師器出土状況



石囲炉

台太郎遺跡第51次調査 検出遺構・出土遺物

(16) 細谷地遺跡第8次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原11-1ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事 業 名 盛岡広域都市計画事業
盛岡南新都市地区画整理事業
発掘調査面積 平成15年7月1日～11月7日
調査対象面積 3,067m²
発掘調査面積 2,638m²
遺跡番号・略号 LE26-0214・OHY-03-8
調査担当者 福島正和・斎藤麻紀子
協力機関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

細谷地遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から1.5km南に位置し、零石川右岸の河岸段丘上に立地している。今回の調査区は標高約122m前後で、調査前は主に果樹園やその他の畑地として利用されていた。遺跡周辺には、北に飯岡才川遺跡、台太郎遺跡、向中野館遺跡、西には矢盛遺跡が存在する。

2. 調査の概要

遺構は表土、近現代耕作土層下の黒色土上面で、古代の堅穴住居16棟、煙状遺構2箇所、杭跡13基、土坑17基を検出した。堅穴住居や土坑は、主に調査区中央からやや東側に密集しており、煙状遺構、杭跡は調査区西側でみられた。一部、削平や擾乱を受けているが遺構、遺物の遺存状態は概ね良好であった。

＜堅穴住居跡＞ すべて平面方形であり、煙道とカマドを1辺に持つが、その取り付け方位は一定ではない。検出したすべての堅穴住居は、十和田a降下火山灰や出土遺物などから平安時代のものであると考えられる。

＜煙状遺構＞ 平行する畝間状の溝計31条を2箇所で検出した。遺物の出土はなかったが、溝の埋土すべてに十和田a降下火山灰が多く含まれていることから堅穴住居と同じく平安時代の所産であると考えられる。

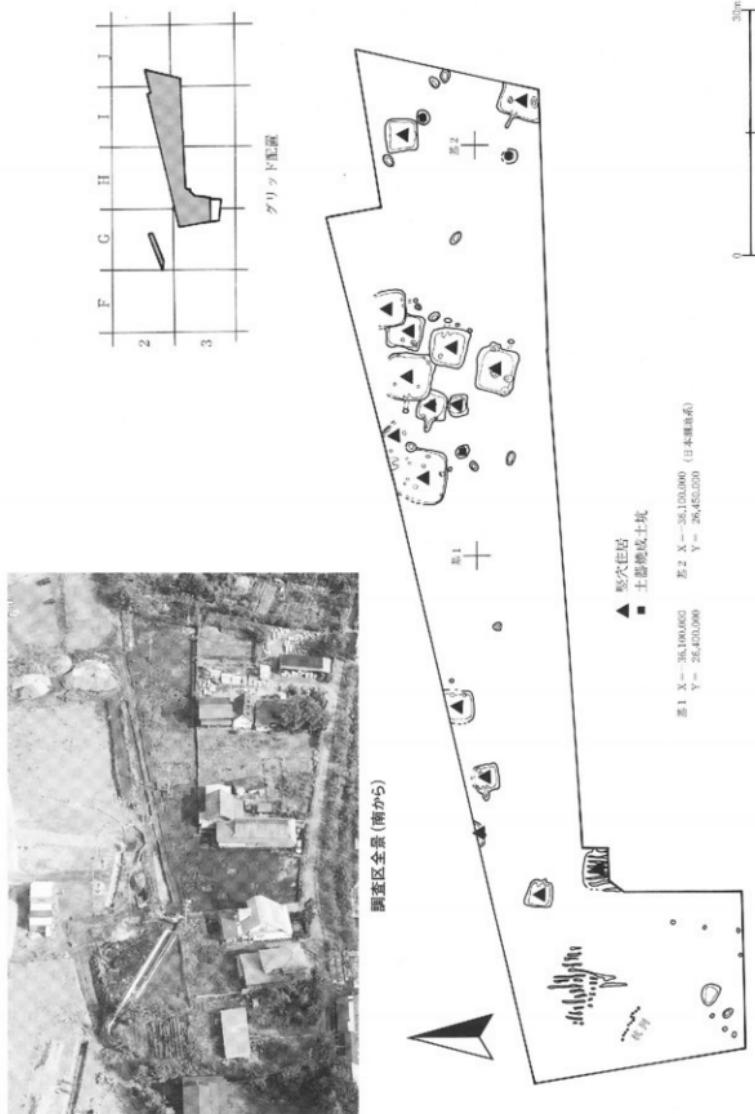
＜杭跡＞ 煙状遺構の南側に整列ではないが、13本の杭跡からなる杭列を検出した。杭跡は直径5～10cmの円形で、埋土上層に十和田a降下火山灰がみられる。煙状遺構に関連する杭列の可能性がある。

＜土坑＞ 時期、性格不明のものを含め17基を検出した。そのうち、被熱痕跡や焼土を伴う4基、細かく剥離した土師器片が多く出土した1基は、それぞれ土器の焼成に関係する遺構である可能性が考えられる。

＜出土遺物＞ 墨書き・刻書き土器を含む土師器、須恵器などの土器や鉄鎌、鉄鎌、鐵釘、刀子、鋸具など鉄製品が堅穴住居などの遺構から出土した。出土した遺物は、いずれも平安時代のものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査によって第4次、第5次調査で検出した古代の集落がさらに南へ広がることが明らかになった。この集落は、検出した遺構や出土した遺物から平安時代であると考えられる。さらに、堅穴住居のみならず煙状遺構や土器焼成土坑と思われる遺構を検出し、周辺の古代集落遺跡では不明確であった集落内の生産活動を遺構から想定することができる。当該期集落の具体像に迫る貴重な例であると考えられる。



細谷地遺跡第8次調査 遺構配置図

(17) 南日詰遺跡

所 在 地 紫波町南日詰字田中143ほか
委 託 者 盛岡地方振興局農政部農村整備室
事 業 名 経営体育成基盤整備事業南日詰地区
発 挖 調 査 期 間 平成15年9月16日～11月11日
調 査 対 象 面 積 1,491m²
発 挖 調 査 面 積 1,491m²
遺 跡 番 号・略 号 L E 77-1086・MH Z-03
調 査 担 当 者 北田 燕・坂部恵造
協 力 機 関 紫波町教育委員会



1. 遺跡の立地

南日詰遺跡は、紫波郡紫波町の南部、町役場から南に約4kmに位置し、北上川西岸の段丘裾部縁辺に立地している。標高は95m前後ではば平坦（若干東に下る）、現況は畑地・水田である。

2. 調査の概要

今回の調査で検出した主な遺構は、平安時代の竪穴住居跡1棟、近世の竪穴遺構1棟、近世の掘立柱建物跡8棟、時期不明の土坑8基、井戸跡2基、溝跡6条、ピット182基、陥穴状遺構9基である。

＜竪穴住居跡＞ 調査区南西側で1棟を検出した。一边が4m前後の隅丸方形プランと考えられるが、削平の影響により壁は無く床面のみであり、僅かに残存する周溝でプランが想定される。プラン内の東寄りに焼土粒を含む燃焼面が確認されており、カマドである可能性がある。プラン内北東隅にピットがあり、平安時代の土器が検出されていることから、この時期に比定されると考えられる。

＜竪穴遺構＞ 調査区中央東側で1棟を検出した。規模は3×4mの隅丸長方形プランで、カマドなどの付属施設は確認されなかった。掘立柱建物跡に隣接しており、近世の陶磁器を出土していることからこの時期に比定される。用途は付属小屋的な施設と想定される。

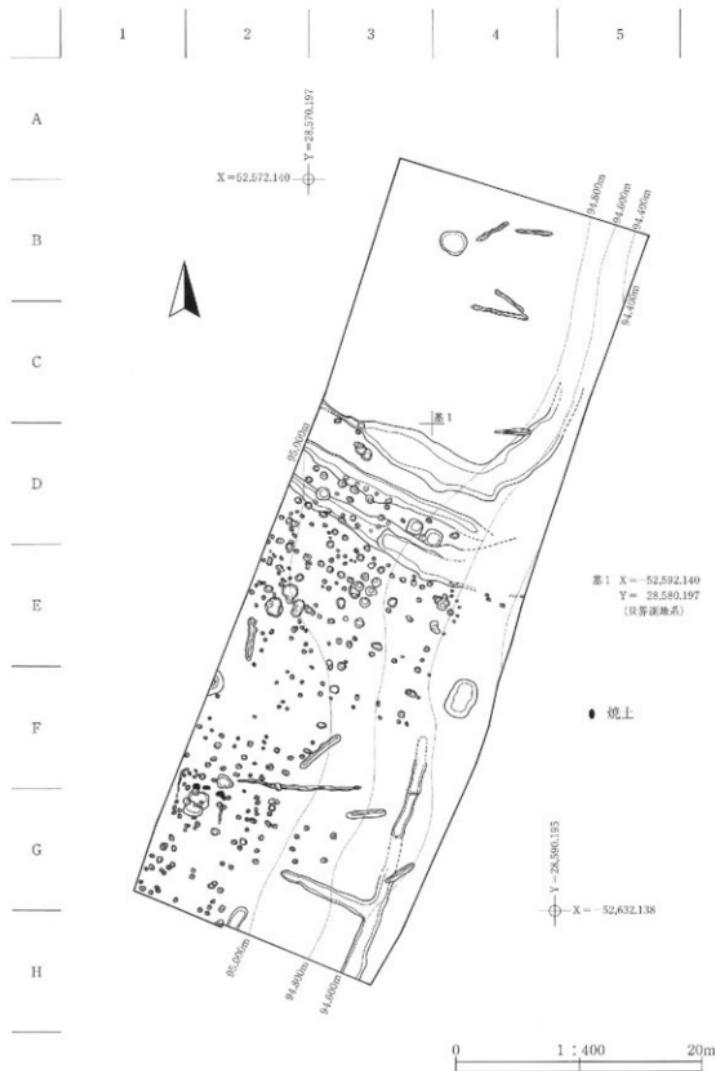
＜掘立柱建物跡＞ 調査区南半部から重複するかたちで8棟を検出した。母屋と想定される長軸10m規模の建物跡が4棟とこれに付属する小屋と想定される長軸5m規模の建物跡が4棟である。遺構プランと柱穴内からの出土遺物から近世～近代に所属すると考えられる。

このほかに調査区全域から時期不明の土坑8基、掘立柱建物跡と同時期に比定される井戸跡2基、建物跡を構成すると見られるがプラン不明のピット182基、縄文時代に想定される陥穴状遺構9基、時期不明の溝跡6条を検出している。

出土遺物の総量は、中コンテナ約1箱で、内訳は平安時代の土器・近世～近現代の陶磁器・縄文時代の石器・近世の錢貨である。このほかに建物跡の柱材を出土している。

3.まとめ

今回の調査で、南日詰遺跡が平安時代、近世～近代を主体に営まれた集落遺跡であることが判明した。調査成果を吟味し、周辺遺跡との関わりなどを考慮しながら、本遺跡の在り方について検討したい。



南日詰遺跡 遺構配置図

(18) 山口館跡 やまぐちだてあと

所 在 地 宮古市黒森町107番2ほか
委 託 者 宮古市都市整備部建設課
事 業 名 宮古市北部環状線道路改良工事
発 挖 調 査 期 間 平成14年6月3日～11月5日
調 査 対 象 面 積 6,250m²
発 挖 調 査 面 積 1,780m²
遺 跡 号 略 号 L G 23-2310・Y G D-03
調 査 担 当 者 亀大二郎・小林弘卓
協 力 機 関 宮古市教育委員会



1. 遺跡の立地

宮古市山口館跡はJR山田線宮古駅から北西約1.2kmに位置し、山口川左岸に延びる黒森山南側の丘陵上に立地している。遺跡の北東には多くの伝承を残す黒森神社、周囲には高根遺跡、赤畠遺跡、山口跡込遺跡、黒森町I遺跡などがある。なお、本遺跡は平成8・9年度には当埋蔵文化財センター、平成11年度から宮古市教育委員会によって調査が行われており、本調査区はその継続地域である。

2. 遺跡の概要

竪穴建物跡1棟、堀・溝跡8条、土坑5基、炭窯1基、犬走り6条が検出された。

＜竪穴建物跡＞ 調査区尾根上の南東側において1基検出した。平面形は確認された壁及び柱穴から長方形を呈する。残存する壁は長辺約10.9m、短辺約3.6m、柱配置は2間×8間で、桁行約16.2m、梁行約3.3mである。壁は尾根上から西側斜面にかけての肩口を掘り込んでおり、削り出しの土壘として機能していたと思われる。東側には床面より一段高く棚状の施設が構築されている。床面西側中央にはがれ跡、東壁沿いに壁溝が確認された。遺物は柱穴の埋土から無文鏡が3枚出土している。

＜堀・溝跡＞ 調査区東側において計8条が確認された。斜面上方で確認された堀跡は平面幅約2m、深さ約1.8mの大規模な横堀で、本格的な防御態勢下において造られたことが窺える。堀の上・下斜面とも急傾斜となるよう切岸として削り出されている。また、この堀は中段より下方から眺めると死角となり、仮に中段まで攻め入られた場合にも迎撃できるような堑壕的機能も考えられる。中央付近には排水のため下方に延びる溝が掘り込まれている。中段にも同様に堀が巡っている。両者は繋がっていない別々の遺構であるが、尾根の地形に沿って同様に掘り込まれていることから、意図的に設計された一連の堀と考えられる。両者とも北から南方向に従って深くなっていることから、最深部では深さ約1.9mを測る。また、北側の堀跡はL字形に曲がって下方に延びることから、堅堀的な機能も併せており、かつ排水の機能も持ち合わせているものと考えられる。幅は狭いがこれと同様の形状で並行する溝跡が確認でき、同じような機能が推測されるが、埋土は人為堆積で、堀跡に切られていることから、時期がこれより古いものと判断される。

＜土坑＞ 尾根上及び東側中段から5基検出している。このうち中段北側の4基は、開口部径70～100cmの円形を呈し、深さは30～50cmを測る。出土遺物が無いため時期等は不明だが、中段中央～南側で検出されたビニール等を含む複数の擾乱痕と埋土が似ており、時期的に新しい可能性が考えられる。

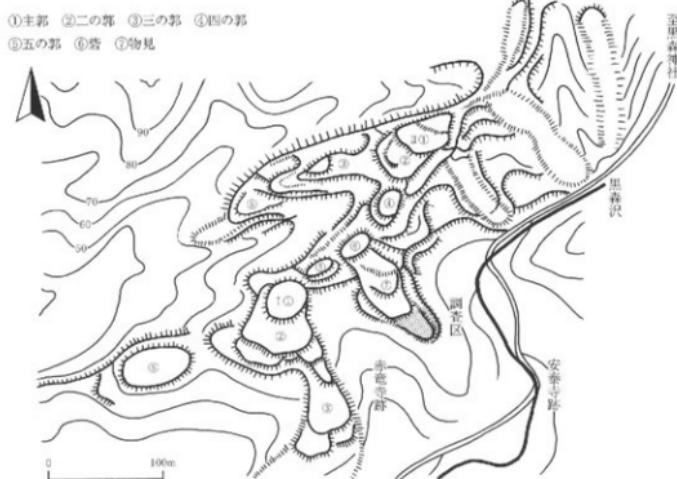
＜炭窯＞ 調査区東側中段の洞部上方で1基検出した。平面形は円形で、規模は開口部径約140cm、深さ約70cmを測る。埋土断面から上層と最下層に炭化物層が確認でき、それぞれ直下で焼土が形成されていることから、2時期行なわれた可能性が考えられる。溝跡に中央部を切られることから、これよりも古い遺構と判断される。

＜その他＞ 調査区西側より犬走りが4条確認された。いずれも斜面下方から尾根上、調査区外北側に存在する主郭部に通じる通路の役割をもっているものと思われる。また、東側においても数段の梯状の半場が築かれているが、数十年前までこれを畠地として利用しており、詳細は不明である。

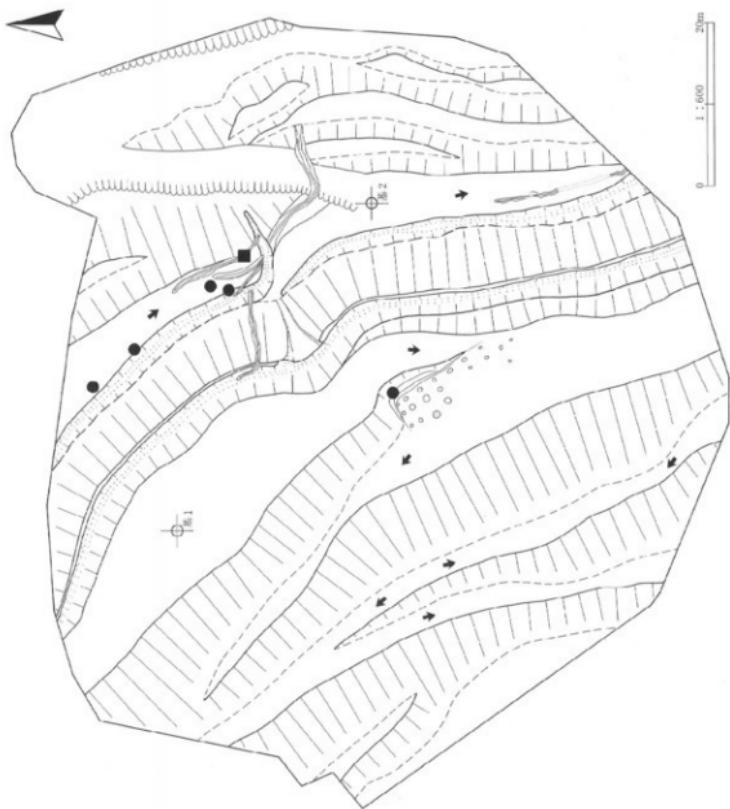
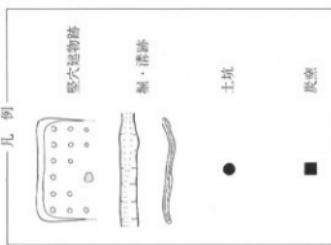
＜出土遺物＞ 遺物は総量で中コンテンナ1箱ほどである。主なものとして、中・近世期の遺物は青磁片が数点、無文鏡が4枚、寛永通宝が1枚、小刀の鈎が1点出土している。その他縄文時代の遺物として、土器が十数片、石鏃1点、石錐1点、石匙1点が出土している。

3.まとめ

山口館は下図（齊藤英樹氏作成）のように主郭と思われる部分が2箇所（I・II）あり、以前より館が2つあった可能性が指摘されていた。館の傾向として、主郭を尾根の後方に構える（II）のは14～15世紀頃、主郭を土塁で囲む中心部に設ける（I）のは16世紀中頃にみられるものであり、IIを主郭とする館からIへと移った可能性が考えられる。今回の調査で確認された堀跡等は、Iの防御ラインを想定する部分（本調査区東側）にあたり、その可能性が高まつたと思われる。また、今回確認された堀跡や塁壁面はかなり堅牢な防御構造となっており、当時の緊迫した状況が推察される。なお、竪穴建物跡等の遺構について、今年度は1棟のみの精査となつたが、尾根上及び西側斜面において十数棟の同形状の遺構を検出しており、また盛土整地層下においても数棟確認していることから、来年度の調査によって、時期・機能等詳細についてより明確になるものと思われる。



基1 X = -38,275,000
Y = 95,776,000
基2 X = -38,260,000
Y = 95,316,000
(座標値地図)



山口館跡 遺構配置図



調査区全景



西側斜面全景



豊穴建物跡完掘



堀跡断面



堀跡完掘

山口館跡 調査区全景・検出遺構

(19) 夫婦石袖高野遺跡

所 在 地 遠野市遠野町第31地割字女男石
16-1

委 託 者 遠野地方振興局上木部

事 業 名 遠野第二ダム建設事業

発掘調査期間 平成15年9月1日～11月4日

調査対象面積 1,000m²

発掘調査面積 1,000m²

遺跡番号・略号 MF55-1057・MIS-03

調査担当者 北村忠昭・水上明博

協力機関 遠野市教育委員会



1. 遺跡の立地

夫婦石袖高野遺跡は、遠野市の南部、JR釜石線遠野駅から南に約2km離れた遠野市遠野町地内に所在し、市内を流れる猿ヶ石川の支流である来内川の左岸、舌状に張り出した山地の緩斜面上に立地している。遺跡の標高は287m前後で、現況は原野と山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構は住居状造構1棟、土坑39基、焼土造構6基、炉跡2基、柱穴状土坑6基である。

＜住居状造構＞ 壴穴住居跡に似るが、炉や柱穴を作わない遺構である。調査区のはば中央、土坑群の南東端に1棟検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸約4m、短軸約3.5mである。時期は出土遺物から縄文時代中期～後期と考えられる。

＜土坑＞ 調査区全体から39基の土坑が検出された。これらのうち少なくとも20基は開口部より底部が広いフ拉斯コ状土坑である。また、残りの土坑でも断面形が浅い皿状を呈しているものも本来はフ拉斯コ状土坑であったと考えられる。規模は大きい土坑で径約2m、小さい土坑で径約0.7mである。土坑・フ拉斯コ状土坑に関係なく、覆土中もしくは底面直上に遺物の出土するものが多い。時期は出土遺物から縄文時代中期～後期と考えられる。

＜焼土造構・炉跡＞ 焼上造構6基、炉跡2基検出された。焼土造構は調査区の北側に見られ、土坑類と重複しているものが多い。時期は遺物が伴わないので不明であるが、フ拉斯コ状土坑を切っているので少なくとも縄文時代中期以降である。炉跡は調査区の東側と中央部に各1基見られ、2個ないし4個の環を配した石囲炉である。時期は出土遺物から縄文時代中期と考えられる。

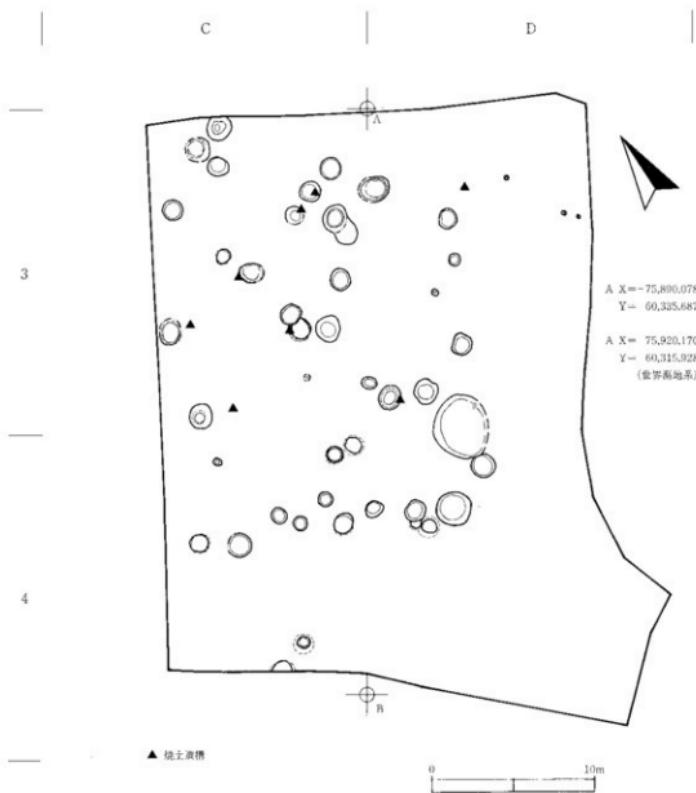
＜柱穴状土坑＞ 便宜的に長軸が0.5m未満の土坑類を柱穴状土坑とし、6基検出した。1基もしくは2基が散在しており、性格は不明である。遺物が伴わないものが多く、詳細な時期についても不明である。

＜出土遺物＞ 出土遺物は中コンテナ約20.5箱分で、縄文土器と縄文時代の石器が主体である。縄文土器は約12箱で早期中葉～後期前葉のものが出土しており、主体は後期初頭～前葉である。石器は約8箱である。石礫や石匙等のトゥール類は70点弱と少なく、ほとんどが調整痕の見られない剥片類である。土製品は土偶

や円盤状土製品等が出土している。陶磁器類は近現代のものを主体に小コンテナで約0.5箱である。この他に石製品や貝殻、炭化種実等の自然遺物、錢貨が出土している。

3. まとめ

今回の調査の結果、縄文時代後期初頭～前葉の集落跡の一部であることが確認された。ただし、今回の調査では竪穴住居跡は1棟も検出されておらず、集落跡の中心は調査区の南西側に広がる緩斜面に存在すると考えられる。



夫婦石袖高野遺跡 造構配置図

にしかわ め
(20) 西川目遺跡

所 在 地 北上市二子町字西川目135-3ほか
委 託 者 北上地方振興局農林部農村整備室
事 業 名 県営ほ場整備事業二子地区
発掘調査期間 平成15年4月9日～7月11日
調査対象面積 2,000m²
発掘調査面積 2,000m²
遺跡番号・略号 ME56-1101・N KM-03
調査担当者 西澤正晴・小針大志
協力機関 北上市立埋蔵文化財センター



1. 遺跡の立地

西川目遺跡は、JR東北本線村崎野駅より南東1.3km、北上市の北東部二子地区に位置する。この地域はおもに北上川やその支流の沖積作用によって形成されており、それらの河川による自然堤防が数多く残っている。本遺跡は、このような沖積低地上に残された自然堤防上に立地している。

2. 調査の概要

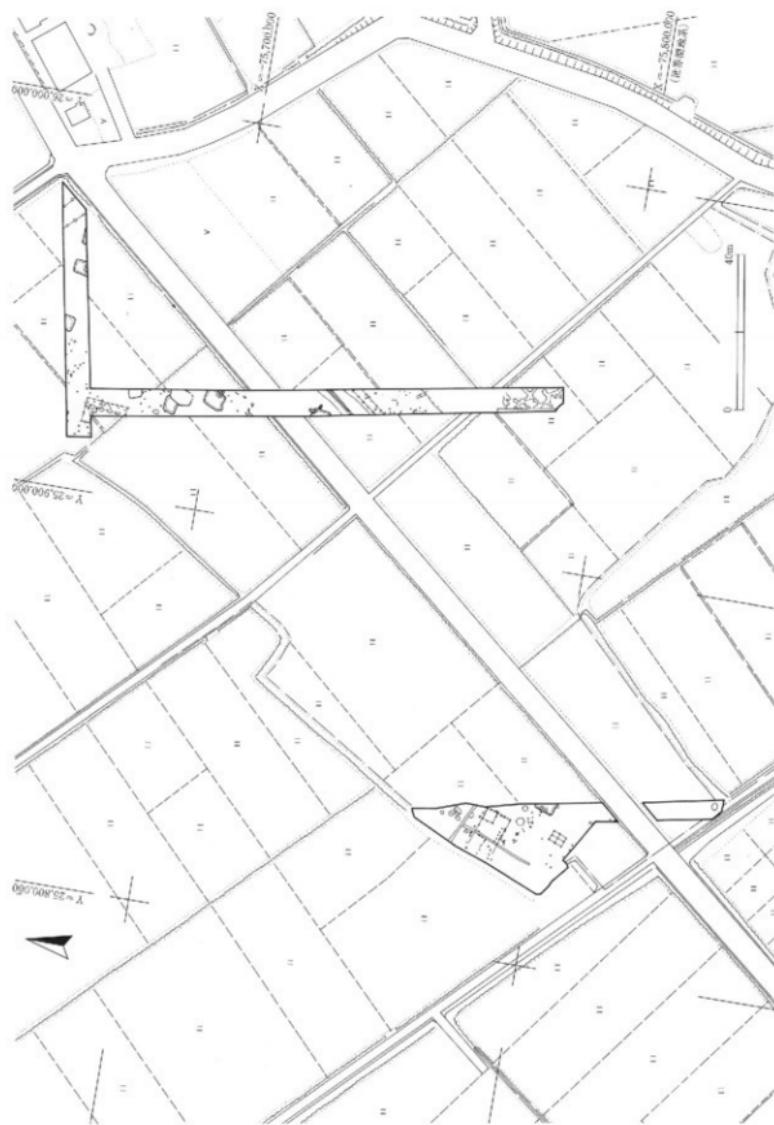
今回の発掘調査によって、以下の各遺構が検出され、多数の遺物が出土した。

＜検出遺構＞ 検出された遺構は、竪穴住居跡9棟、掘立柱建物跡6棟以上、溝跡5条、井戸跡3基、土坑8基、ビット約230基、礎跡2条、水田跡1面、墓壙10基である。このうち、竪穴住居跡は完掘したものは少ないが、すべて平安時代に属する。十和田a陣下火山所と思われる灰白色火山灰が埋土中に含まれている住居跡も存在している。掘立柱建物跡には平安時代と江戸時代に属するものがある。とくに廻付きと考えられる掘立柱建物跡の発見は重要である。調査区の関係から完掘することができなかつたが、3間×2間の身舎をもち3面に廻が付設された建物跡と考えられる。そのほか、2間×2間規模の柱式掘立柱建物跡も1棟検出されている。水田跡は、調査区の南端に位置し、竪穴住居跡が立地する場所より一段低くなっている。比較的小区画の田面が調査区内で長さ約20mの範囲に広がっている。上部の大半が削平されており、擬似畦畔Bで確認したため不明な点が多い。

＜出土遺物＞ 平安時代の土器類を中心とする土器類と、近世に属する陶磁器類が主体を占める。そのほかに、土鍤が300点近く1棟の竪穴住居跡から出土している。墓壙からはキセル、古銭といった金属製品も出土している。

3.まとめ

今回の調査によって、平安時代と江戸時代の遺構が存在することが明らかとなった。主体は前者であり、おおよそ9世紀後半～10世紀前半までの年代が考えられる。調査を行っていない部分も含めてかなり大規模な集落を形成していると予想される。調査区が狭小であったため十分な資料を蓄積できないが、旧河道を挟んで隣接する巣向II遺跡とあわせて、この地域の中心的な集落の一部であると推定されよう。



西川目遺跡 遺構配置図

(21) 堪向Ⅱ遺跡

所 在 地 北上市二子町字西川目64-2 ほか
委 託 者 北上地方振興局農林部農村整備室
事 業 名 県営は場整備事業二子地区
発 挖 調 査 期 間 平成15年7月14日～11月19日
調 査 対 象 面 積 4,447m²
発 挖 調 査 面 積 4,447m²
遺 跡 番 号・略 号 ME 56-1101・SM II -03
調 査 担 当 者 西澤正晴・小針大志
協 力 機 関 北上市立埋蔵文化財センター



1. 遺跡の立地

西川目遺跡は、JR東北本線村崎野駅より南東1.3km、北上市の北東部二子地区に位置する。この地域はおもに北上川やその支流の沖積作用によって形成されており、それらの河川による自然堤防が数多く残っている。本遺跡は、このような沖積低地上に残された自然堤防上に立地している。

2. 調査の概要

今回の発掘調査では、数多くの堅穴住居跡を中心として、掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土坑、ピットなどが検出された。なお、一部の調査区（D区）では確認調査も本調査とあわせて実施している。

＜検出遺構＞ 堅穴住居跡は調査区全体で43棟を確認し（拡張している3棟は含まず）、そのうち35棟を調査した。多くは4m四方前後の規模のもので一般的な住居跡と考えられるが、なかには規模が7m四方と予想される大形のものも存在している。掘立柱建物跡は3棟以上を確認した。そのうちの2棟は純柱式で、埋土の状況から平安時代に属するものと考えられる。それ以外のものの時期については不明確ながら近世に属すると思われる。そのほか、各調査区からは土坑48基、溝跡7条、井戸跡2基、ピット約400基が発見されている。

＜出土遺物＞ 土器類、石器、土製品、鉄製品等が出土している。土器は土師器が主体であり、ほかに須恵器、縁釉陶器がある。須恵器では大甕の完形品が2個体出土している。これらのうち特筆すべき遺物として、鉄製の鉈具、縁釉陶器等の施釉陶器、硯があげられる。

3.まとめ

今回の調査ではとくに平安時代9世紀～10世紀前半を中心とする時期の遺構が多数発見された。調査区の位置と遺構の分布状況から、集落は自然堤防上全体に広がっていることが予想される。施釉陶器や硯などの特徴的な遺物の出土から、平安時代の本集落は他集落とは異なる性格を有していると思われる。このように考えた場合、本遺跡は隣接する西川目遺跡とあわせて、この地域の拠点的な集落であることが判断できよう。



壇向Ⅱ遺跡 遺構配置図

(22) 大橋遺跡

所 在 地 北上市和賀町横川目6地割40番地1ほか
 委 託 者 北上地方振興局農林部農村整備室
 事 業 名 中山間総合整備岩間地区
 発掘調査期間 平成15年4月9日～6月30日
 調査対象面積 1,794 m²
 発掘調査面積 1,794 m²
 遺跡番号・略号 ME 52-2325・OH-03
 調査担当者 八木勝枝・新井田えり子
 協 力 機 関 北上市立埋蔵文化財センター



1. 遺跡の立地

大橋遺跡はJR北上線横川目駅から南西1km地点に位置し、和賀川左岸に立地する。遺跡の標高は119m前後で現況は水田と畑である。和賀川との比高は約12mを測る。

2. 調査の概要

遺跡の層序は表土以下II層暗褐色土（遺物包含層）、炭を少量含むIII層暗褐色土、IV層明褐色土、V層暗褐色土、VI層褐色土に区分され、VI層は補点6から南においては繊層となる。III層以下無遺物層である。遺物包含層はII層、遺構検出面はII～III層上面である。また調査区東側において、層中に十和田中嶽火山灰が部分的に堆積していた。検出遺構は、掘立柱建物跡11棟・盛土遺構1箇所（昨年度検出の北盛土遺構の北端）・配石遺構1基・土坑15基・柱穴状土坑622基・溝1条・炉跡2基・焼土1箇所である。

＜掘立柱建物跡＞ 11棟検出した。直径95cm（柱の直径は45cm）の6本柱建物1棟、直径70cm（柱の直径は35cm）の4本柱建物10棟を確認した。

＜盛土遺構＞ 昨年度調査の北盛土遺構北端は擾乱が著しく、様相を明確に確認することはできなかった。

＜配石遺構＞ 1基確認した。包含層下面で検出した。7号掘立柱建物跡に近接する。下部に掘り込みはないが、配石遺構の可能性がある。

＜土坑および柱穴状土坑＞ 土坑15基・柱穴状土坑622基確認した。大半が調査区東側に集中している。平面形は円形、梢円形を呈し、時期は出土遺物などから縄文時代後～晩期と思われる。

＜炉跡・焼土＞ 炉跡は2基確認した。北盛土遺構最下面と北盛土に近接して検出。焼土は1基確認した。包含層下面、5号配石遺構に近接する。焼土のみで炭ではなく、現地性とは考えられない。

＜出土遺物＞ 28ヶコンテナ35箱の土器と28ヶコンテナ17箱の石器類が出土している。時期は後期前葉～晩期末葉で、昨年度同様晩期中葉が主体をなす。

3.まとめ

昨年度から継続調査となる北盛土遺構は擾乱が著しく、盛土端部の構造を詳細に確認することはできなかつたが、最下面および盛土付近で炉跡を新たに2箇所確認した。南・北盛土遺構は配石遺構が集中する面に立地し、掘立柱建物跡は北盛土遺構から約30m離れた約1m低い地点に集中する。掘立柱建物跡の柱穴は盛土遺構内部で確認した柱穴状土坑とは規模と構造が異なる。



掘立柱建物跡



北盛土遺構

大橋遺跡 検出遺構

(23) 金附遺跡

所 在 地 北上市船瀬町字金附200-2ほか
委 託 者 北上地方振興局農林部農村整備室
事 業 名 県営ほ場整備事業下門岡地区
発掘調査期間 平成15年4月9日～5月30日
調査対象面積 205m²
発掘調査面積 205m²
遺跡番号・略号 ME 76-2058・KT-03
調査担当者 金子昭彦・藤原大輔
協 力 機 関 北上市立埋蔵文化財センター



1. 遺跡の立地

金附遺跡は、北上駅の南約3.5km、県道北上江刺線沿いにある。自然堤防上に立地し、遺跡の西限は北上川の氾濫原、東限は段丘崖に沿う後背湿地である。標高約53m、遺跡の現況は水田である。

2. 調査の概要

今回の調査は、昨年の続きである。ほ場整備と県道の改良が組み合わさった事業で、周囲には県道の調査区が続く。今年のは場整備関係の調査は、ポンプスタンドの取水部分のみである。

大洪水で水につかる場所にあるため、斜面では、各時代の遺物包含層が洪水堆積砂層に良好にパックされ、近世～古代包含層、古代洪水堆積層、弥生時代包含層、縄文時代晚期前後の洪水堆積層、縄文時代中期～後期遺物包含層の順に堆積している。そのため、遺構検出面は主として三面あり、一次検出面は近世～古代、二次面は弥生、最終面は縄文時代の検出面だが、後述の地形と現況が水田で平らにならされているため、調査区西端は、表土直下が地山になっており検出は1回行ったのみである。

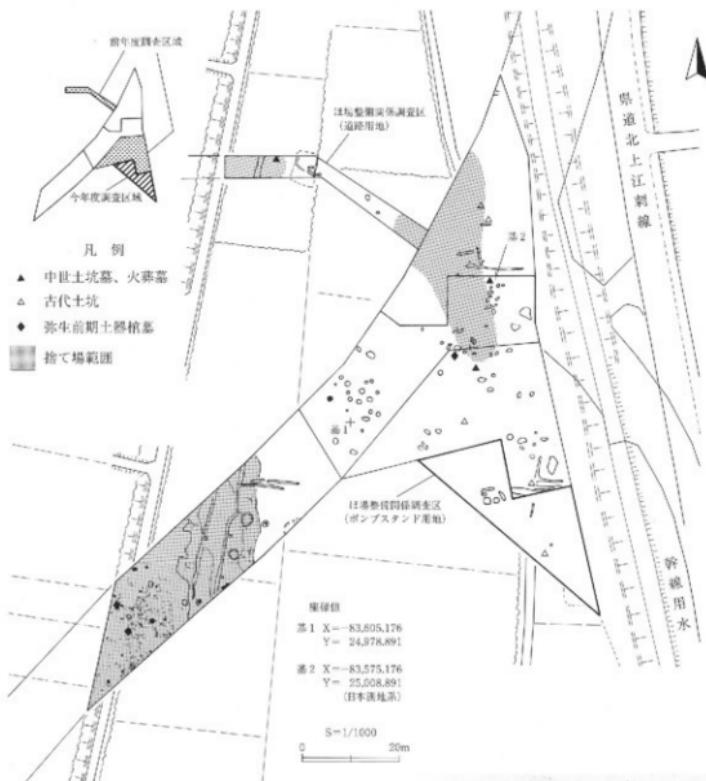
縄文時代の焼土1基、土坑1基、柱穴状土坑1基、平安時代の土坑1基、近世の溝跡2条、土坑墓2基が検出された。焼土は調査区に確認され、周囲から縄文時代中期末の土器が集中して出土し、柱穴状土坑と組んで竪穴住居跡を構成する可能性が高いが、断面、平面の何れからも竪穴を確認することはできなかった。

＜土坑＞ 平安時代の土坑は、50×40cmのやや角張った梢円形で、深さ約40cm、人為的に埋め戻されている。下層から壊れた甕が出土。砂層に掘り込んでいるので不明だが、壁や底は火を受けているようである。

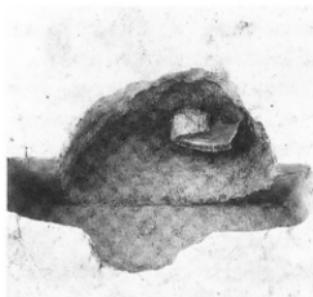
＜出土遺物＞ 縄文土器が中コンテナ(30×40×20cm)1箱出土した。ほとんどが中期末(大木10式)である。石器は、磨石等の礎石器を主体として中コンテナ1箱出土している。その他、上述の遺物がある。

3.まとめ

洪水堆積層によって各時代の遺物包含層が良好にパックされた、あまり例のない遺跡である。今回の調査で、自然堤防の東端～後背湿地の続きが確認され、地表面の調査区東西の比高差は1.6mにもなる。遺構配置図の網に挟まれた部分が大体自然堤防にあたり、東西幅約40mでは南北に続く。縄文時代以来の自然堤防である。その東側が後背湿地となり、北側では弥生時代の捨て場が確認されているのだが、今回の調査区には見られなかった。なお、昨年の調査では、平安時代の住居跡、中世の火葬墓なども検出されている。



調査範囲(北から)



平安時代の土坑

金附遺跡 遺構配置図 検出遺構

(24) かねつき 金附遺跡

所 在 地 北上市福瀬町字金附195-1ほか
委 託 者 北上地方振興局土木部
事 業 名 緊急地方道路整備事業
発掘調査期間 平成15年5月19日～10月10日
調査対象面積 2,000m²
発掘調査面積 2,000m²
遺跡番号・略号 M E 76-2058・K T -03
調査担当者 金子昭彦・藤原大輔
協 力 機 関 北上市立埋蔵文化財センター



1. 遺跡の立地

金附遺跡は、北上駅の南約3.5km、県道北上江刺線沿いにある。自然堤防上に立地し、遺跡の西限は北上川の氾濫原、東限は段丘崖に沿う後背湿地である。標高約53m、遺跡の現況は水田である。

2. 調査の概要

地形、調査範囲については、前述の農村整備室関係調査区の記載を参照いただきたい。調査は昨年の続きで、南北調査区に分かれる。北側調査区は、最終検出面での遺構検出と精査、南側調査区は、一部遺構の検出・精査は行われていたが、基本的には全ての面の調査を行った。

北側調査区は、風倒木痕等の擬似現象は多く確認されたが、遺構となったのは縄文時代の土坑1基のみである。これは、この調査区が自然堤防の東端～後背湿地に位置しているためと思われる。

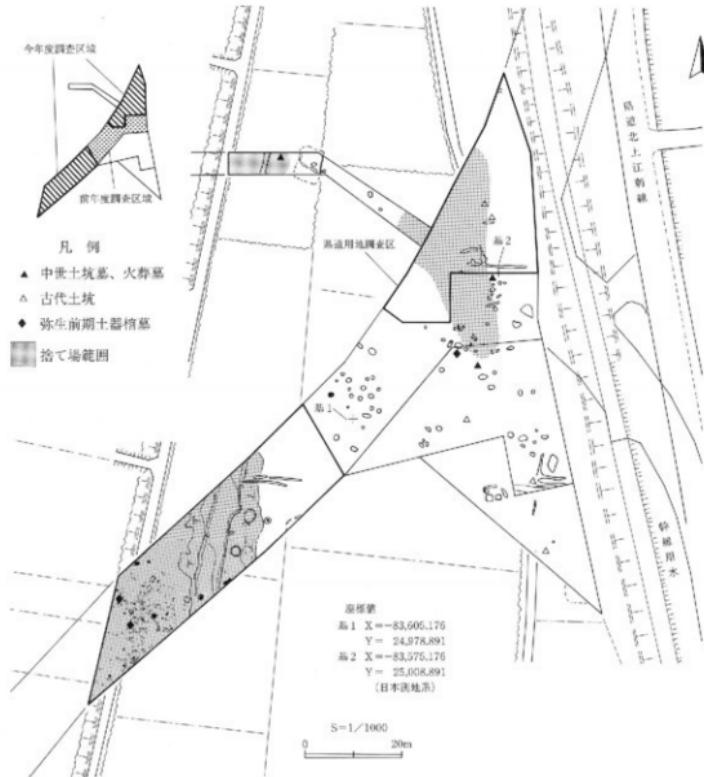
南側調査区では、昨年検出された近世の大溝に続く溝跡2条、焼土1基、近世～古代の土坑3基、柱穴状土坑8基、縄文時代晩期末～弥生時代前期の捨て場1箇所、土器棺墓1基、か跡4基、焼土27基、土坑6基、柱穴状土坑約200基、縄文時代中期末の堅穴住居跡1棟（遺構配置図東端の半円）が検出された。

＜縄文時代晩期末～弥生時代前期の集落跡＞ 縄文時代以来の大規模な自然堤防の西側に主として確認された。遺構配置図の西側の網がかかった部分である。全域に捨て場が広がるが、本来の地形は、西端の幅約12mの南北に延びる自然堤防とその東側に沿いつつの自然堤防に挟まれた後背湿地である。自然堤防上の遺物包含層を整地して居住地としており、その東側の後背湿地に主としてものを捨てていたようである。居住地に確認された炉跡や焼土、柱穴状土坑は、その検出状況などから、平地式住居の一部であった可能性が高い。

＜出土遺物＞ 土器は、30×40×30cmのコンテナで162箱出土した。大部分が捨て場からで、大洞C 2式～山王Ⅲ層式まで見られるが、A'式がほとんどを占める。縄文土器は1箱程度で、中期末、後期中葉がある。古代の土器は、數十点のみである。石器類は、磨製石斧、環状石斧の未製品も多く、素材を含めると30×40×20cmのコンテナで760箱に及ぶ。その他、50点以上の土偶、管玉、アスファルト塊などがある。

3.まとめ

捨て場から出土した土器は可能な限り層位的に取り上げたので、該期の土器型式編年は大きく寄与すると思われる。また、該期の石器製作跡としても注目されよう。



捨て場調査風景(南から)



捨て場除去後の湿地底(北から)

金附遺跡 遺構配置図 検出遺構

(25) 中半入遺跡第4次調査

所 在 地 水沢市佐倉河字十日市63番地ほか
 委 託 者 水沢地方振興局農政部農村整備室
 事 業 名 県営は場整備事業満倉地区
 発掘調査期間 平成15年4月10日～11月7日
 調査対象面積 5,675m²
 発掘調査面積 5,675m²
 遺跡番号・略号 N E 15-0264・N II N -03
 調査担当者 島原弘征・太田代一彦
 協力機関 水沢市教育委員会
 水沢市埋蔵文化財調査センター



1. 遺跡の立地

中半入遺跡はJR東北本線水沢駅から北西方向に約6km、水沢市街地の北西部、胆沢川南岸の水沢段丘低位面と胆沢川に挟まれた水沢段丘高位面西端に位置する。標高は70～73m前後を測り、現況は水田である。

2. 調査の概要

今回の調査では、平安時代の堅穴住居跡93棟・平安時代もしくはそれ以降と思われる工房跡3棟・平安時代の水田跡3箇所・畝間状遺構1箇所・時期不明の堅穴状遺構7棟・掘立柱建物跡8棟・土坑87基・炭窯5基・溝跡87条・柱穴状土坑約500基等を検出した。ただし、東側調査区(約3,000m²)の約75%にあたる2,200m²は遺構が密集して検出されたため、調査原因の用排水路のルート変更ならびに、計画水田面の標高を高く設計変更を行うことで、盛土保存することになったので、本調査から確認調査に切り替えて調査を行った。

＜堅穴住居跡＞ 今回の調査では西側調査区より38棟、東側調査区より45棟の計93棟検出した。所属時期は全て平安時代であると思われる。前回のは場整備による削平や重複が激しいことや、調査区の幅が狭いことから、住居の平面形・規模がはっきりしないものが多いが、一辺が3～7m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。カマドの設置位置は東・西・南・北壁とさまざまで、東壁に多く設置される傾向が見られる。また、住居の軸線が概ね南北と同一軸線にあるものが多数を占める。主柱穴の配置をみると、確認されたものでは4本柱で構成されるものがみられる。

＜堅穴状遺構＞ 西側調査区より10棟、東側調査区より2棟検出した。ここでは一辺3～4m前後の隅丸方形を呈しているが、カマド・炉が検出されず、遺物が全く出土しない遺構をここでは堅穴状遺構としてあつかっている。遺物が出土していないこともあり、堅穴状遺構の所属年代は今後の検討課題である。

＜工房跡＞ 西側調査区より3棟検出した。炉の周辺より僅かだが鐵滓等の遺物を出土していることから、鍛冶関連の施設であった可能性が想定される。所属時期を示す土器が出土した工房と無い工房があるため、はっきりしたことは言えないが、時期は前者は平安時代、後者は平安期の堅穴を切っていることから、少なくともそれより新しい時期の遺構であると思われる。

＜掘立柱建物跡＞ 西側調査区より3棟、東側調査区より6棟検出した。これらの掘立柱建物跡の年代は出

土遺物が少ないため所属時期は不明である。

＜水田跡＞ 西側より2箇所、東側より1箇所検出した。検出時は、十和田a降下火山灰が堆積した窪みが、不規則に複数確認された状態であった。これらの窪みに堆積していた火山灰を取り除いたところ、足跡状の窪み等が確認されたことや、窪みの検出時の状況が、前回までの調査で検出された水田跡と類似していること等から、これらの窪みの広がりが水田跡であると判断した。前述のような検出状況のため、残存状況は不良である。所属時期は十和田a降下火山灰の年代からみて10世紀前半ではないかと思われる。

＜畝間状造構＞ 東側より1箇所検出した。検出時には灰白色砂質土を含むにぶい黄褐色砂質土の広がりが見られたのみであったが、サブトレーナによる断面観察から断面形は逆台形ないし半円状を呈し、上面幅42~80cm、深さ14~24cmを測る溝が9条並んで確認されたものである。溝の間隔は20~30cm前後となる部分が多い。確認調査区内の造構のため、精査していないことから、詳細は不明であるが、状況から見てこれらの溝は畠の畾側の可能性が高いと思われる。

＜炉跡＞ 長軸2.44m、短軸0.57~1.05m、深さ約38cmの梢円形状の掘り込みの裏面や底部に、非常に堅く締まった現地性焼土の広がりが認められることから、炉跡と判断したものである。しかし、出土遺物は僅かに磨滅した土師器片が出土するのみで、鉄斧等の遺物が全く出土しないことから、鉄生産関連の炉跡とは考えにくい。また、炉跡を取り囲むかのように掘立柱建物跡が検出されており、この掘立柱建物跡は炉跡の上屋となる可能性があるので、これらの炉跡と掘立柱建物跡は、鉄生産関連以外の用途をもった工房跡？の可能性もあるが、現時点では不明である。この炉跡の所属時期は不明だが、平安期の竪穴住居跡を切って構築していることから、少なくともそれよりは新しい時期の造構であると思われる。

＜炭窯＞ 西側調査区より5基、東側調査区より1基検出した。平面形は梢円形状・円形状を呈し、規模は0.6~1.2m、深さ10~20cmを測る。所属時期は出土遺物が少ないため不明である。

＜土坑＞ 西側調査区より65基、東側調査区より22基検出した。平面形は円形・梢円形・方形など様々で、規模は約0.5~1.4mを測る。出土遺物が少ないため、時期は不明である。ただし、一部の土坑から永楽錢等の古銭が出土している。古銭が出土した土坑の堆積土は灰・焼土が混入した人為堆積を呈することから、火葬墓の可能性が高いと思われる。また、火葬墓の可能性のある土坑は炉跡と同一の検出面で確認されている。

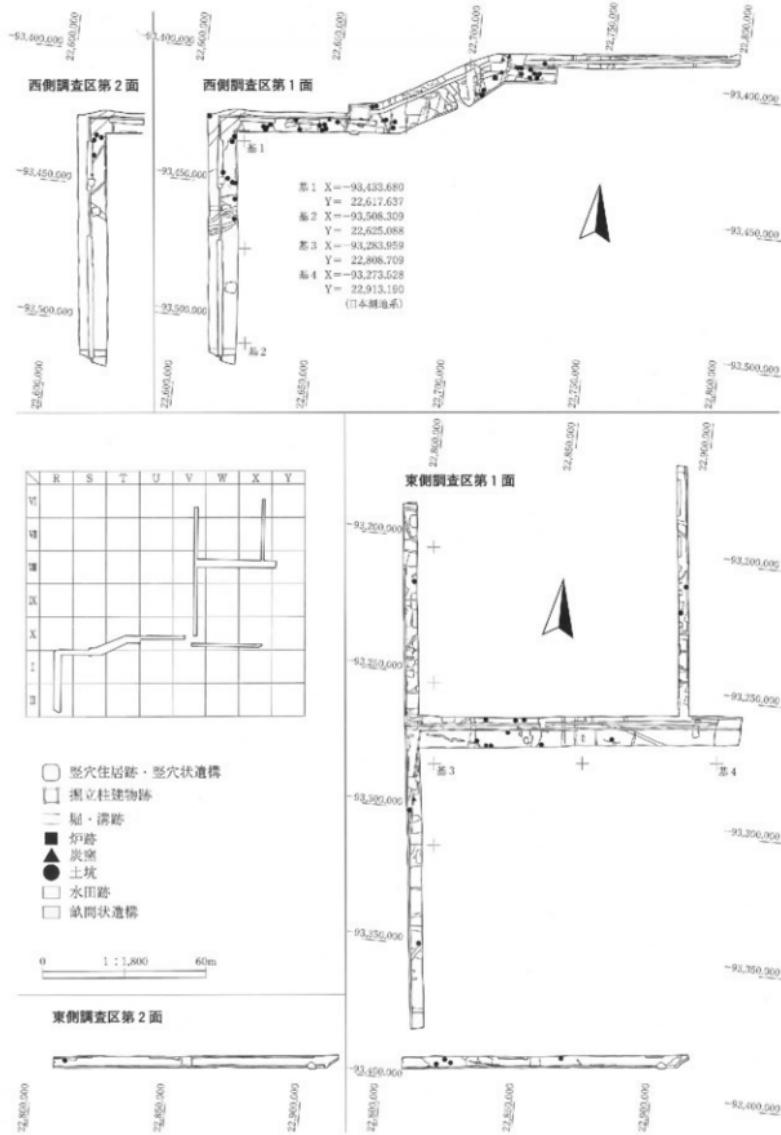
＜溝跡＞ 西側より39条、東側より48条検出した。溝の幅や長さや方向は様々で、規則性は認められない。大半が平安時代の竪穴住居跡を切っていることから、それより新しい時期のものであると思われる。

＜出土遺物＞ 今回の調査では、繩文土器、平安時代の土師器・須恵器、石器（石鏡）、石製品（砥石・磨石）、土製品（土錘・羽口）、鉄製品（鎌・刀子）、古銭、鉄斧、陶器・陶磁器等が出土した。

繩文土器は9号袋1袋分、石器類は小袋1袋分と少量で、大半が表上中より出土した。遺物の大半は平安時代の土師器・須恵器などの土器類で中コンテナで33箱、石製品が中コンテナで5箱出土した。他に少量ではあるが陶器類（縁鉢・灰鉢・常滑）数点、近世以降の陶磁器類が小コンテナ1箱、鉄製品（鎌・不明鉄製品）が小コンテナ1/2箱弱、古銭（洪武通寶・永樂通寶等）4枚、鉄滓等が9号袋1袋分出土した。

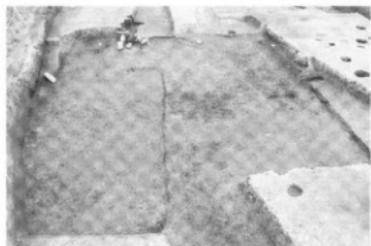
3.まとめ

今回の調査では、古墳時代の造構・遺物が確認されなかった。調査区が細長いため、遺跡・遺構の性格については把握していない点が多いが、今回の調査からも①竪穴住居は特定の場所に密集している。②その竪穴住居跡は重複が多く認められる。③平安時代の水田跡は竪穴住居跡の近くにはあるが重複していない。という傾向が見えてきている。このことは昨年度までの調査において指摘されていることではあるが、今後の整理の中で遺跡や集落内における場の使い方や変遷等を明らかにしていきたい。

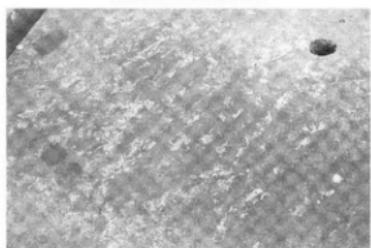




西側調査区全景



重複した竪穴住居跡



西側調査区水田跡検出状況



西側調査区水田跡完掘状況

中半入遺跡遺第4次調査 検出遺構

(26) 里古屋遺跡

所 在 地 住田町世田米字里古屋 8番地の2ほか
委 託 者 大船渡地方振興局土木部
事 業 名 国道397号地域活性化支援事業
発 掘 調 查 期 間 平成15年4月11日～9月16日
調査 対象面積 2,288m²
発掘調査面積 2,288m²
遺跡番号・略号 N F 14-2005・S G Y -03
調査担当者 北田 熟・坂部忠造
協 力 機 関 住田町教育委員会



1. 遺跡の立地

里古屋遺跡は、気仙郡住田町の北西部、町役場から西に約8kmに位置し、気仙川の支流である大股川北岸の丘陵部縁辺、南向き緩斜面上に立地している。標高は230～239m、現況は宅地・畑地・水田・原野である。

2. 調査の概要

里古屋遺跡の調査は2カ年に渡って行われる予定であり、今年度はその1年目にあたる。今年度の調査は2,288m²（試掘分288m²）を対象に行い、縄文時代前期末葉～後期前葉の堅穴住居跡16棟、堅穴住居状遺構2棟、土坑23基、焼土遺構16基、時期不明のビット247基、墓坑2基、堀跡1条、溝跡5条を確認した。

＜堅穴住居跡・堅穴住居状遺構＞ 堅穴住居跡は16棟、堅穴住居状遺構は2棟検出した。調査区西側エリアで6棟、調査区東側エリアで12棟検出しており、東側ではほぼ同一箇所に連続して「建て替え」が行われている。堅穴住居跡は検出層位、遺構平面形や出土遺物によって3期に区分される。その内訳は①縄文時代後期前葉：平面形は円形、石圍炉・地床炉などを伴うもの4棟、②縄文時代中期中後葉：平面形は円形・梢円形、石圍炉を伴うもの9棟、③縄文時代前期末葉：平面形は梢円形・長方形、地床炉を伴うもの3棟である。

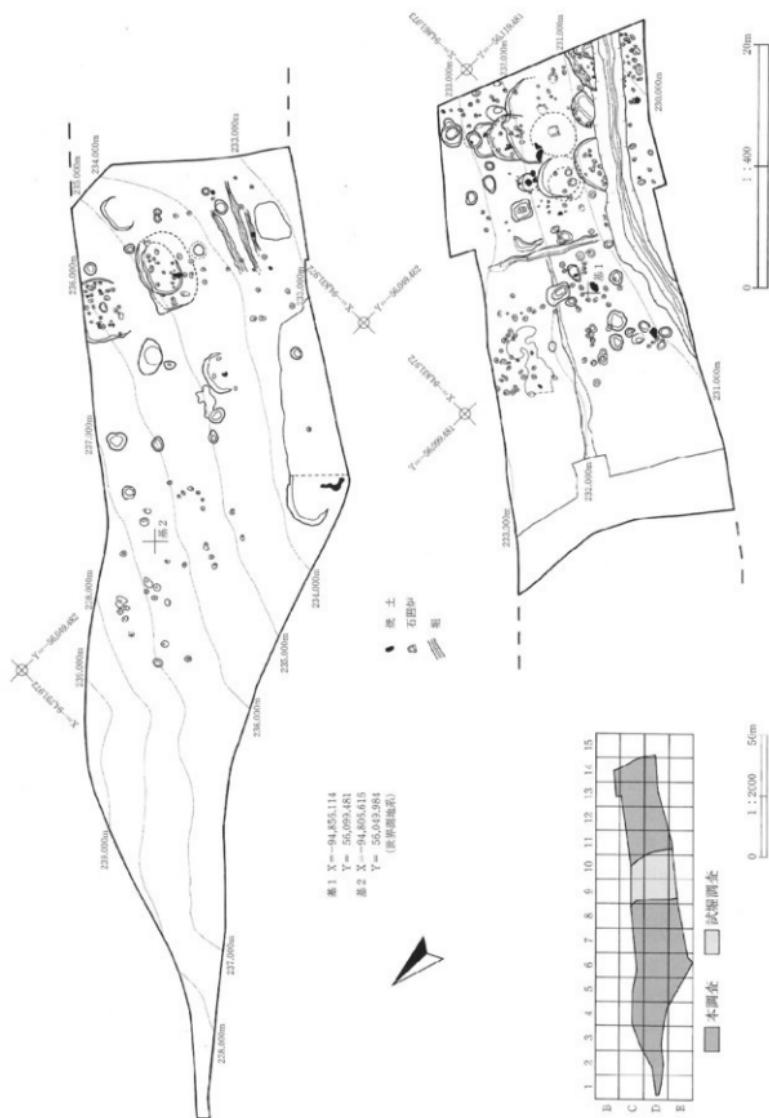
＜土坑・ビット＞ 土坑は23基検出した。時期は堅穴住居跡とほぼ同時期に想定されるが、住居跡を切る形での検出も多く見られる。平面形はいずれも円形を呈し、断面形状がフ拉斯コ形・袋形・ビーカー形になる。ほかに直径1m以下のビットを247基検出しているが、時期不明で建物跡を構成する柱穴の可能性もある。

＜堀跡・溝跡＞ 時期不明の堀跡1条、溝跡5条検出した。堀跡は幅約2m・深さ約1.7m・長さ約25m（次年度調査区及び調査区外へ延びる）で、断面形がV字状を呈する薬研堀となる。

＜出土遺物＞ 出土遺物の総量は、大コンテナで約60箱である。遺物の内訳は土器約40箱、石器約20箱、土・石製品数点、銭貨数点である。銭貨を除き、すべて縄文時代に属する。出土土器は縄文時代前期末葉～中期中葉・後期前葉に比定される。出土石器類は前述の箱数のうち、約1,000点が製品であり（剥片を除く）、出土土器と同時に所属すると見られる。土製品・石製品は、円盤状土製品や石棒類などが出土している。

3. まとめ

本年度の調査で、里古屋遺跡が縄文時代前期～後期を中心とした複合遺跡であることが判明した。調査成果を生かし、次年度調査と合わせて本遺跡の集落としての様相を明らかにしたい。



里古屋遺跡 遺構配置図

(27) 楊生新城館跡

所 在 地 一関市弥栄字沼畠地内
委 託 者 一関地方振興局土木部
事 業 名 一般国道284号道路改築事業
発掘調査期間 平成15年4月8日～5月15日
調査対象面積 1,000m²
試 挖 面 積 1,000m²
遺跡番号・略号 O E 09-2056 - Y O S J - 03
調査担当者 吉田 光・野中真盛
協 力 機 関 一関市教育委員会



1. 遺跡の立地

本館跡は北上川を挟んでJR大船渡線陸中門崎駅南方約2.1kmに位置し、一関市最東端の弥栄地区内にある。奥羽山脈の東側に広がる丘陵地形の東縁付近にあたる。南側斜面下を国道284号線が走る。周辺には楊生古城、古館、廻舎、西風館、薄衣城など中世の館跡が多くある。現況は山林である。

2. 遺跡の概要

本館跡は北上川を見下ろせる独立丘陵上につくられ、館跡の全体形から圓郭式の城跡である。調査区は南西側線辺部にあたり、調査区中央より西側部分が今年度の調査対象となった。検出された遺構は曲輪2箇所、テラス状遺構4箇所、堀跡1条、土塁1基である。

＜曲輪＞ 堀跡の斜面上側にテラス状遺構と交互に配置されている。2つの曲輪とも1～数m幅で、調査区外に延びる。山体斜面の傾斜角が約40度に対し、曲輪面は15～20度で南西側（国道側）に傾斜する。各曲輪面積は50m²、65m²である。柱穴等の施設は検出されていない。5～10cmの偏平な川原石（亜円礫）が出土し、地山とは異質であることから投石用に使われた可能性がある。

＜テラス状遺構＞ 曲輪より規模が小さく、テラス形の平場をテラス状遺構とした。規模は長さが7～17mで幅は2～4mである。曲輪と曲輪の間に配置されるものが多い。検出面は10～20度で南西側に傾斜する。

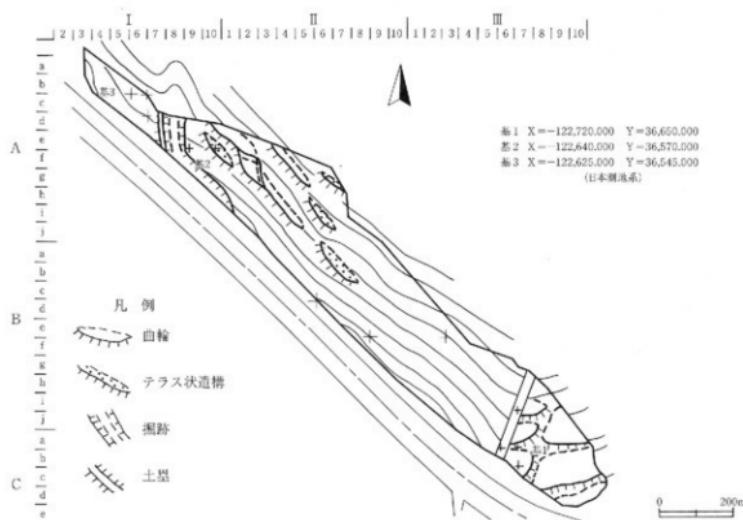
＜堀跡＞ 曲輪・テラス状遺構の西側に位置し、南北から北西～南東方向に向きを変えながら下る。実行堀幅は約6.7m、実行法高は約2.8mで、断面形はU字形を呈する。腐葉土のみの堆積で、埋土はほとんどない。

＜土塁＞ 堀跡に接し、斜面下側で検出された。全長約10mで南北方向に延び、斜面下側は国道工事時に切り取られ、直立する岩盤で道路に接している。基底幅約4m、上幅約1m、垂直壁高約1.4mである。補列等は検出されなかった。

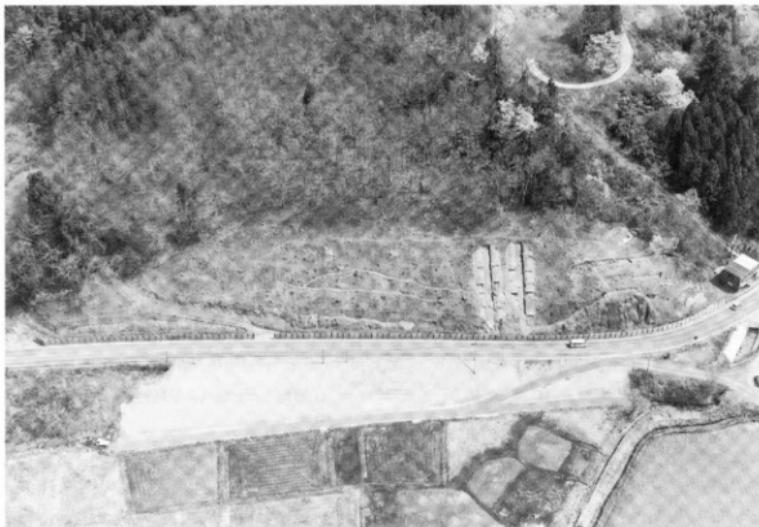
＜出土遺物＞ 出土していない。

3.まとめ

本館跡は北上川を一望できる位置にあり、交通の要衝を制するために城を構築したと推測される。検出された曲輪やテラス状遺構の遺構取りは細かく、岬を越えて西側から攻めてくる敵から城を護るつくりであると考えられる。本調査により館跡南西斜面の細部構造が明らかになり、貴重な資料が得られた。



掲生新城館跡遺構配置図



掲生新城館跡調査区全景写真

III. 本報告

かまさわたてあと
(28) 釜沢館跡

所 在 地 二戸市釜沢字上野平50番地 2地先ほか
委 託 者 二戸地方振興局農政部農村整備室
事 業 名 畑地帯総合整備事業（担い手育成型）舌崎地区
発掘調査期間 平成15年5月16日～8月8日
調査対象面積 2,800m²
発掘調査面積 2,800m²
遺跡番号・略号 I E 79-1077・K S D -03
調査担当者 野中真盛・吉田 光
協 力 機 関 二戸市教育委員会

1. 調査に至る経過

釜沢館跡は、畑地帯総合整備事業（担い手育成型）舌崎地区の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行にともない発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は、青森県との県境に位置し、一級河川馬淵川沿いに抜けた、りんご、きゅうり栽培を主体とした畑作地帯である。

地区的現状は畑地へのかんがい用水施設が未整備で、農道幅員が狭小な隘路なため、生産性、品質、物流に支障をきたしていることから、国営事業で水源、幹水路を、本事業で支線用水路、末端かんがい施設、農道等を整備し、計画的・安定的生産、品質の向上、他目的用水の活用等を図り、併せて生活環境の向上に寄与するものである。



当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地については、当該事業の実行主体である二戸地方振興局農政部農村整備室の依頼を受け、平成14年度に岩手県教育委員会事務局および二戸市教育委員会が試掘調査を実施し、その結果を踏まえ平成15年度財團法人岩手県文化振興事業団に調査を依託することとなったものである。

岩手県教育委員会は、平成15年3月6日付け教生第1630号により二戸地方振興局へ財團法人岩手県文化振興事業団と平成15年度事業としての実施を通知した。
(二戸地方振興局農政部農村整備室)

2. 遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線金田一温泉駅の北西約3.7kmに位置し、馬淵川左岸の河岸段丘上にある。対岸は青森県三戸町に隣接する岩手県の北端に立地している。馬淵川に面した箇所では、比較的急峻な段丘崖となりいくつかの旧河道を挟みながらかな起伏のある地形を呈している。

調査前の土地利用状況は、果樹栽培等の畠地で、なだらかな傾斜地と山の急峻な斜面の立ち上がり部分にあり標高は、115m～139mである。

3. 遺跡の基本層序

調査区の基本層序は次の通りである。(B区で崩落箇所があり約30mの区間がこれに当てはまらない。)

I層 5YR1.7/1 黒色 砂質シルト 浮石1～5mm25%含む

耕作土

——L=115.200m——

II層 5YR2/2 黒褐色土に2/3 黑褐色土30% 3/4暗褐色土

20%含む

III層 10YR4/4 褐色土に8/1灰白色土(砂粒) 3%含む

IV層 10YR4/4 褐色土6/4褐色土(砂粒)の混合土

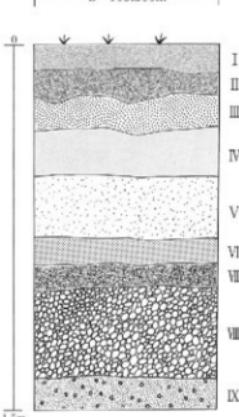
V層 10YR7/4 にぶい黄橙色と8/3浅黄橙色(浮石) 1～8mm
の混合土(中揮火山灰)

VI層 10YR1.7/1 黒色土に5/8 黄褐色土(浮石) 2～20mm 5%
含む

VII層 10YR2/3 黑褐色土と5/8黄褐色土(浮石) 2～20mm 10%
含む

VIII層 10YR5/8 黄褐色土(浮石) 2～60mm 2/3 黑褐色土(南部
部浮石)

IX層 10YR2/3 黑褐色土に5/8黄褐色土(浮石) 1～30mm 5%
含む



第1図 基本層序

4. 調査の概要と検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、土坑2基である。

＜土坑＞ 1号土坑はB区南側のD VI-h・i 23で表土下の南部浮石層で検出した。基本層序ではⅧ層であるが、山の斜面が崩落した後に形成された地形であるために2層になっている。出土遺物がないことから、時期及び性格については不明である。

2号土坑はD VI-j 23の3層上面で検出した。土坑の北側半分が文化課の試掘トレンチにかかっており開

口部の一部が削平されている。出土遺物がないことから時期及び性格については不明である。

第1表 遺構観察表

単位:cm

No.	遺構名	出土地点	平面形	開口部幅	底部径	深さ	備考
1	1号土坑	DW-h-i23	円形	142×123	79×72	31	斜面崩落後に作られている。
2	2号土坑	DW-j23	円形	101×99	88×86	86	試掘で上部が削平している。

5. 出土遺物

遺物量は、土器片と石器合わせて中コンテナ1箱である。検出場所はいずれも遺構外からの出土で、調査区外の南西上斜面から流れ込んだものと考えられる。土器の時期については縄文前期から弥生時代と考えられる。石製品は、石鏃3点、搔・削器1点、石匙1点である。

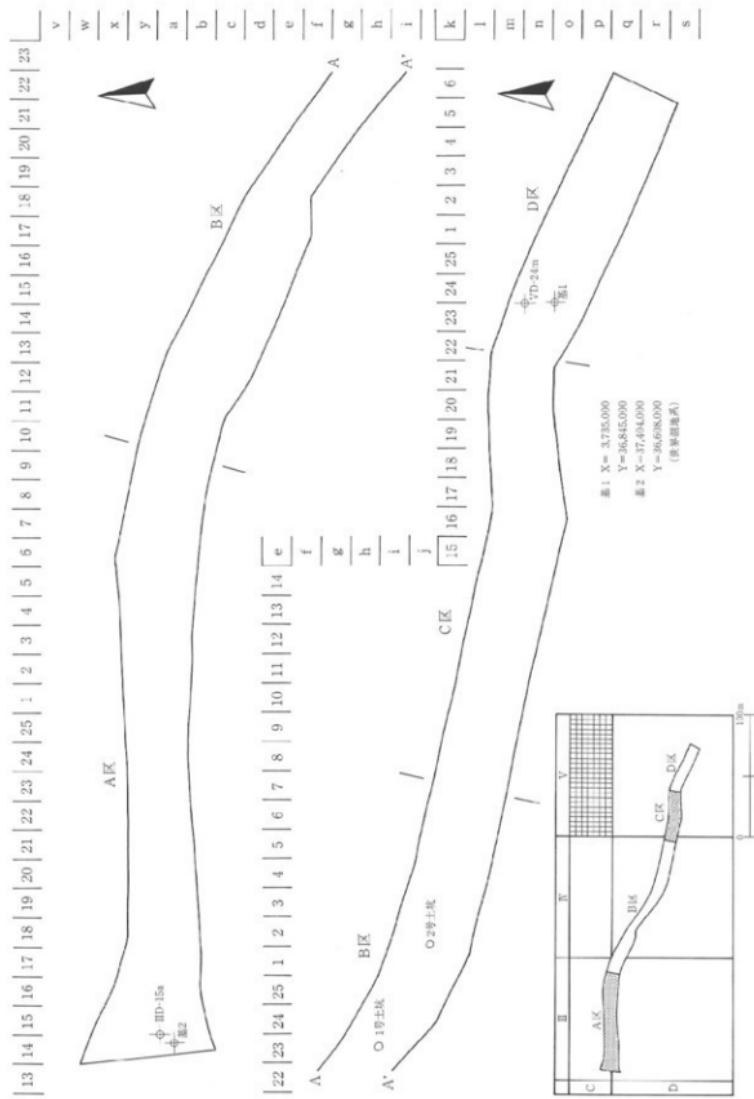
6.まとめ

検出された2基の土坑からは遺物が検出されなかったために、時期及び用途については不明であるが、1号土坑については、斜面の崩落後に作られたものであることから比較的新しい遺構であることが推測できる。出土遺物については、広い範囲から出土しているが、すべて遺構外からの出土であることから、調査区の南西上斜面から土砂とともに流れ込んできたものと考えられる。このことから調査区上の斜面及び平場状の場所に集落若しくは、生活空間が存在していたと考えられる。時期については、出土した土器から縄文時代前期から弥生時代であることが分かった。

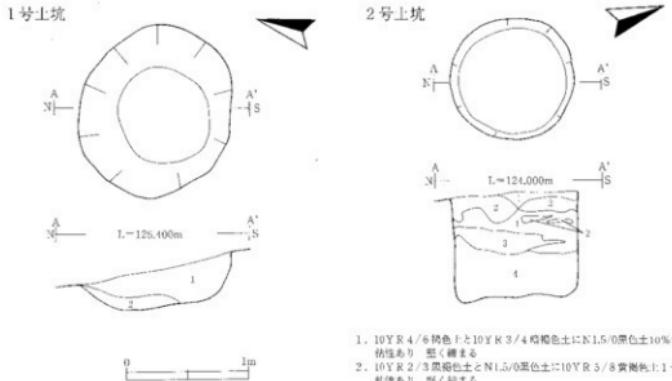
報告書抄録

ふりがな 書名	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
編著者名	野中真盛・古田光							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	。	。	。	。	。	。	。
岩手県二戸市 釜沢字上野平 50番地2地先 ほか	03213	I E 79 -1107	40度 20分 08秒	141度 16分 01秒	2003.05.16 ～ 2003.08.08	2,800m ²	畠地帯総合整備事業に伴う 緊急発掘調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
釜沢館跡	散布地	縄文時代	土坑2基 (時期不明)	縄文土器・石器 (前期～晩期)				

幸津度・経度は世界測地系



第2図 釜沢館跡 遺構配置図

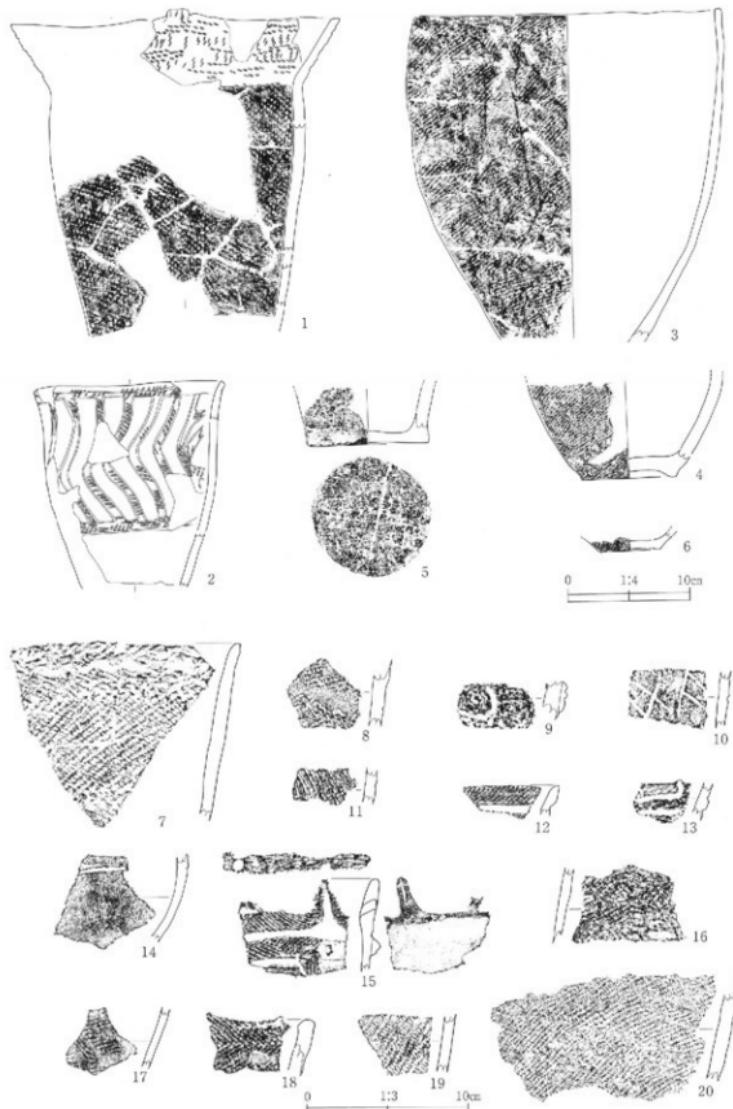


1. 10YR 2/1 黒色土 2/3 嫩褐色土 7/8 黄褐色土 2~25m
8/3 淡黄褐色土 1~25mの混合土 備よりなし
2. 10YR 3/2 黑褐色土 7/8 黄褐色土 2~25m
8/3 淡黄褐色土 1~25mの混合土 備よりなし
3. 10YR 2/3 黑褐色土 10YR 3/4 嫩褐色土 10YR 5/4 にびい黄褐色土の混合土
10YR 6/1 白色土 1~5m 1%含む 粘性あり 坚く押さる
4. 10YR 3/3 嫩褐色土 10YR 6/8 黄褐色土にN1.5/0 黑色土 5%含む
粘性あり 坚く押さる

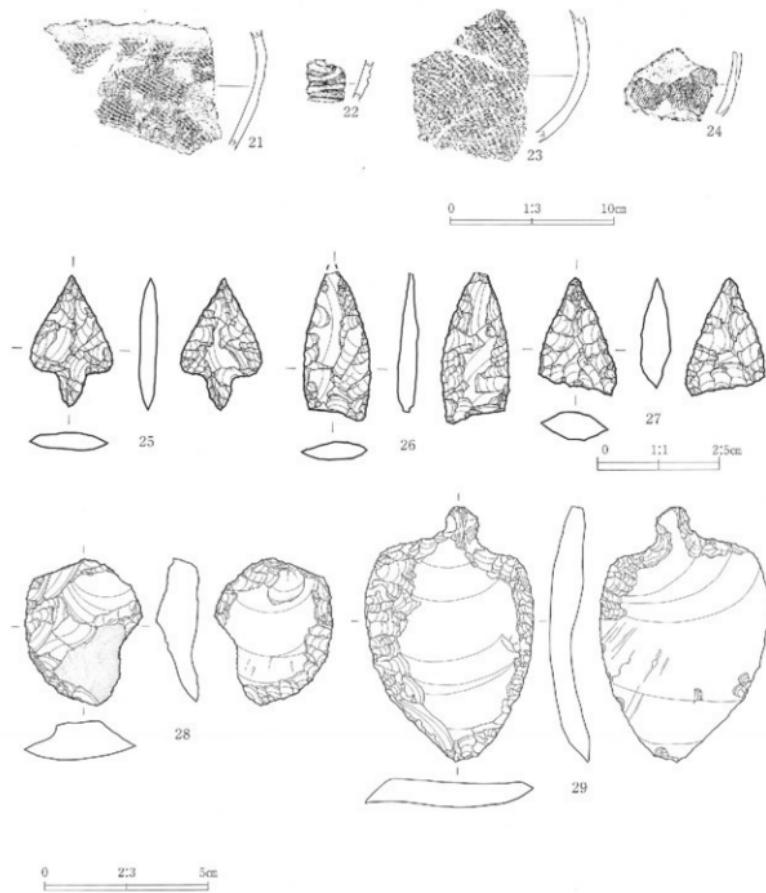
第3図 釜沢館跡 検出遺構

第2表 土器観察表

No.	出土地点	層位	器種	部位	單体	特徴	時期
1	D III-a 16	3層下位	深鉢	口縁部～側下	R.L. 滅	口縁部丸角、横位置文の間に深い板状凹文、沈線文、垂曲線文	前期、大木6
2	D III-a 17	3層下位	小型鉢	口縁部～側下	R.L. 垂曲線	沈線文、垂曲線文	後期、十櫻内
3	D III-a 24	3層下位	深鉢	口縁部～側下	L.R. 滅	側口有り、底部弧しげ	後期
4	C III-y 22	3層下位	深鉢	側下～底部	L.R. 滅	底部丸底、縁ぞり	後期
5	D V-m 17	2層	深鉢	口縁部～側下	L.R. 滅	底部平底、丸上粗縁	前期
6	c III-y 23	3層	深鉢	側下～底部	R.L.	黒芯斜行縦文	後期
7	D V-o 17	3層	深鉢	口縁部	R.L.+L.R. 滅	口縁部を黒芯、斜行縦文、納束斜状縫文	前期
8	D III-a 25	3層下位	深鉢	側部	L.R. 滅	竪筋斜文	前期
9	D III-a 13	2層	深鉢	側部	L.R.	底盤丸脚、ボタン状點入り付け	中期
10	D III-b 18	2層	深鉢	側部	R.L.	網目状斜文、單體結合条体（側切縫）	中期
11	D III-a 17	3層下位	深鉢	側部	R.L. 滅	底盤丸脚、底盤斜条体、縫連合む	後期
12	D III-a 21	3層	深鉢	口縫	L.R. 滅	沈線文、内側口斜面丁寧にくが牛	後期
13	D III-b 17	3層下位	深鉢	側部	L.R. 滅	片切口文、沈線文	後期
14	D V-n 23	3層	壺	側部	L.R. 滅	沈線文、横芯無底袋	後期
15	C III-y 21	3層下位	深鉢	口縫部	L.R. 滅	舟伏状文、沈縫口斜面斜縫文、赤粘束斜状縫文	後期
16	D V-f 9	3層	深鉢	側部	L.R.+R.L. 滅	非結構斜状縫文、縫縫合む	後期
17	D III-a 17	3層下位	深鉢	側部	L.R. 滅	沈縫3	後期
18	D III-a 17	3層下位	深鉢	口縫部	L.R. 滅	赤粘束斜状縫文、縫縫合む	後期
19	D III-a 17	3層下位	深鉢	側部～側下	R.L. 滅	縫ぞり	後期
20	C III-y 21	3層下位	深鉢	側部	L.R.	側口有り	後期
21	D III-a 21	3層	壺	側部～底部	R.L. 滅	無底	後期
22	D III-a 17	2層	小型鉢	側部		丸底沈線文、横位置文2	後期
23	D III-a 25	2層	壺	側部	L.R. 斜	側口有り	後期
24	D III-a 23	3層	壺	側部	R.	無底斜行縦文	後期



第4図 金沢館跡 出土遺物（1）



第3表 石製品観察表

No.	出土地點	層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	石質	産地	特徴
25	D V - k11	2層	石器	2.7	1.7	0.3	1.15	頁岩	吳羽山脈	有茎
26	D V - n21	2層	石器	2.9	1.4	0.4	1.7	頁岩	吳羽山脈	無茎凹基
27	D III - a22	3層	石器	2.4	1.6	0.6	1.48	頁岩	吳羽山脈	無茎凹基
28	D V - n19	2層	核・前器	4.5	3.6	1.3	16.77	頁岩	吳羽山脈	圓面渦旋
29	D III - a17	3層下	石器	7.8	5.1	0.9	40.4	頁岩	吳羽山脈	角面渦旋

第5図 金沢館跡 出土遺物（2）



調査前風景



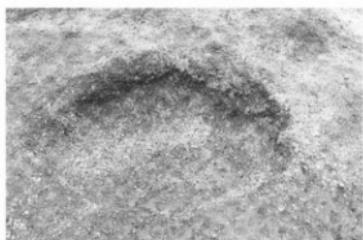
作業風景



調査A区検出状況



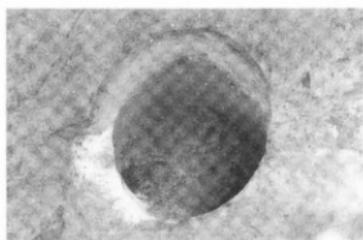
調査B区検出状況



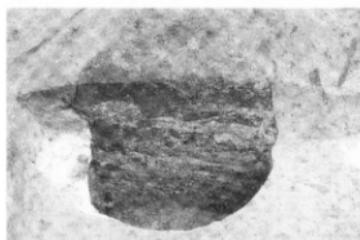
1号土坑 完掘



1号土坑 断面



2号土坑 完掘

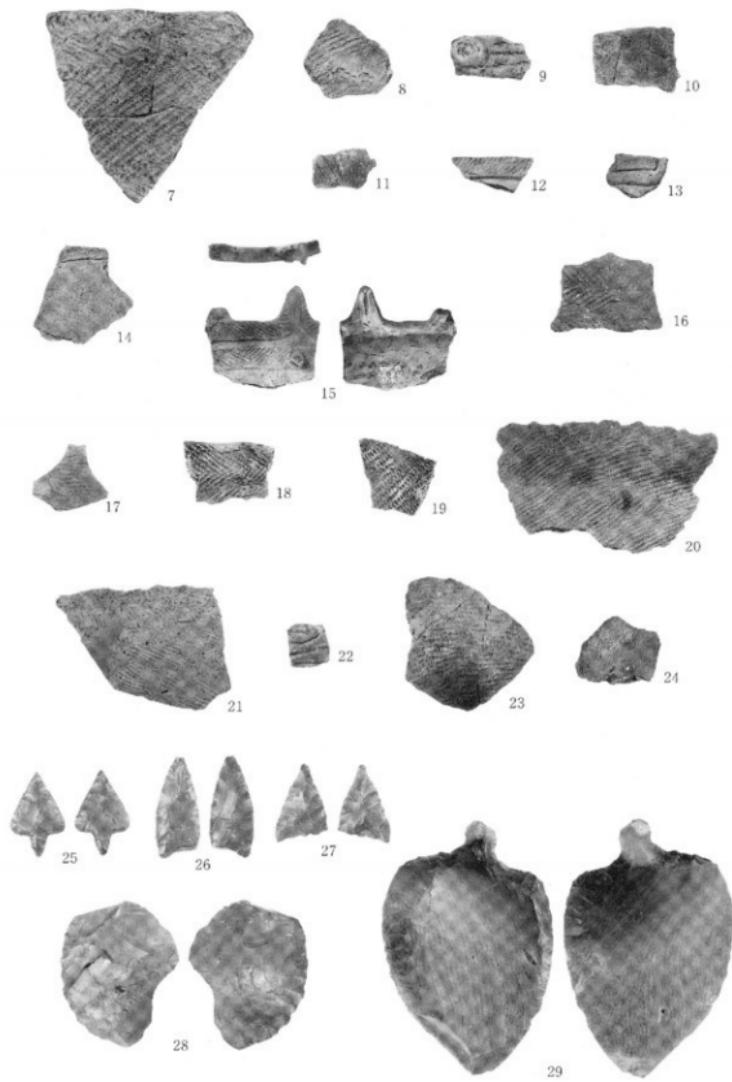


2号土坑 断面

写真図版 1 釜沢館跡 調査前・作業・調査区風景・検出遺構



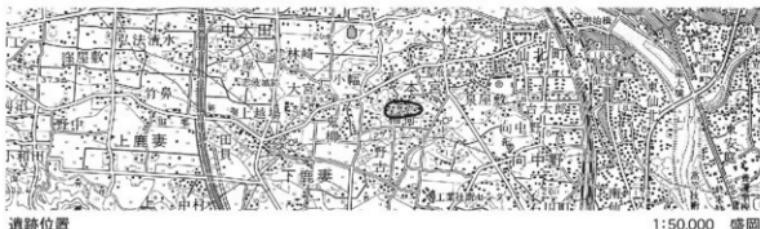
写真図版2 金沢館跡 出土遺物（1）



写真図版3 金沢館跡 出土遺物（2）

(29) いなり 稲荷遺跡第6次調査

所 在 地 盛岡市本宮字稲荷7-7ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課
事 業 名 盛岡広域都市計画事業
盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成15年5月6日～6月24日
調査対象面積 3,209m²
発掘調査面積 3,374m²
遺跡番号・略号 LE16-2131・OIN-03-6
調査担当者 小松則也・本多準一郎
協力機関 盛岡市教育委員会



1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。稲荷遺跡は、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成15年度の事業とすることで確定した。これを受け、平成15年4月1日財團法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約が成立し、発掘調査を実施するに至った。

(盛岡市都市整備部盛岡南整備課)

2. 遺跡の立地

稲荷遺跡はJR東北本線盛岡駅の南西約2kmに位置し、零石川南岸河岸段丘面の微高地上に立地している。標高は125m前後で、全体は概ね平坦な地形である。調査前の土地利用状況は宅地・畑作地・果樹園・休耕地となっている。北側は段丘面の縁にあたり、1～2mの高低差をもって熊堂B遺跡（奈良～平安時代の集落跡）と隣接する。

3. 基本土層

- I層 10Y R2/3 黒褐色シルト（現表土）植物根多少あり 粘性なし 締りかなりあり
- II層 10Y R4/4 暗褐色シルト（漸移層）粘性なし 締りかなりあり
- III層 10Y R5/8 黄褐色シルト（地山）植物根多少あり 粘性ややあり 締りあり
- IV層 10Y R5/8 黄褐色砂土（砂層）粘性なし 締りなし

4. 調査の概要

平成14年度の試掘分（500㎡）については、一部検出された遺構を広げ精査を行い、本年度分（2,874㎡）については本調査を行った。

＜堅穴住居跡＞ 試掘調査トレンチ21・2 B15p 地点より堅穴住居跡R A001を1棟のみ検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は3.30×3.20mである。埋土は黒褐色シルトが主で2層に十和田隊下a火山灰が混入する。壁は外傾して立ち上がる。壁高は北壁45cm、南壁48cm、東壁28cmで西方向に煙道を伴ったカマドを持つ。カマドの残りは良好で両袖の断面には崩落焼土、現地性焼土、漸移性焼土が明瞭に見られた。燃焼部焼土の規模は72×54cmで厚さは6cmである。左袖内側に支脚と思われる土師器の壺7を含む。煙道はくりぬき式で長さは約120cm、最大幅32cmで緩やかに下降する。突出部は削平により確認できなかったが、煙道部断面より約32cmと推定される。床は堅く締まっているが、中央に広く炭化物痕が見られた。

＜土坑＞ 2基を検出した。R D001堅穴住居跡は試掘分①区に位置する。平面形は隅丸方形で規模は78×72cmである。深さは最大52cmで、外傾し立ち上がる。埋土上位からフレークが出土している。R D017土坑はC区調査区南際に位置し平面形は楕円形である。規模は65×48cmである。深さは最大で15cmで外傾し緩やかに立ち上がる。2基ともに時期は不明である。

＜溝跡＞ 1条のみでR G004溝跡は試掘分①区に位置する。規模は長さ18.15m、幅は18~90cmである。深さは最大で13cmで東にやや下降する。溝から円盤状石製品が出土しているが、時期は不明である。

＜土器＞ R A001住居内から2の縄文後期土器片1点と土師器8個体の計9点が出土した。この内4は、ほぼ完形の球形壺で住居の東角床直上からの出土である。非クロコによる成形と口縁部の特徴から奈良時代8世紀のものと推測される。以下、5~11の甕、壺、碗も上述に同様である。他に1と3の縄文土器は、遺構外からの出土である。

＜石器＞ 13の円盤状石製品はR G004溝跡からの出土であるが、時期は不明である。12の礫石は住居跡の床面からの出土で、一部に使用痕が見られる。

＜鉄製品＞ 14と15は角釘でカマド左袖側からの出土である。16は学引金で住居跡東角からの出土である。

5.まとめ

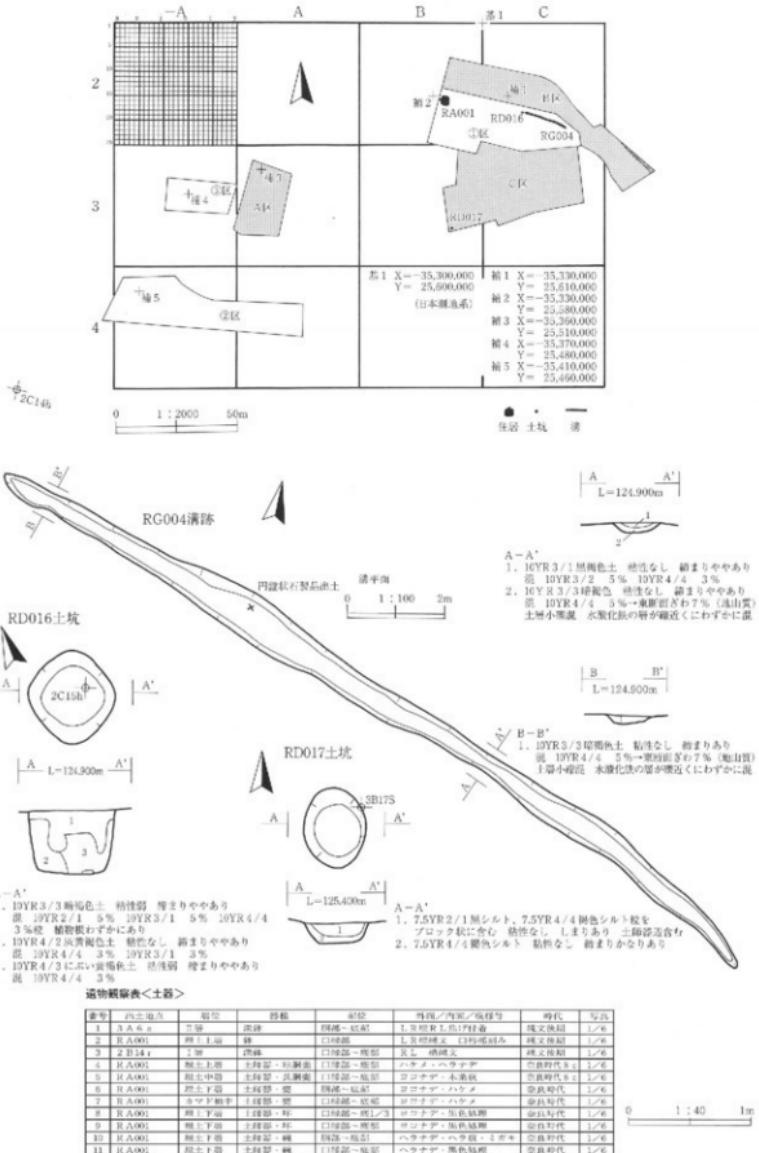
検出した遺構は、堅穴住居跡1棟と溝跡1条、土坑2基である。遺構密度は極めて疎らで、多くは空白域又は擾乱を受けている区域である。昨年度の調査では幕墻と推定される3基の土坑を検出しているが、それと関連する遺構も確認できなかった。

以上、稻荷遺跡第6次調査に係わる報告は、これをもって全てとする。

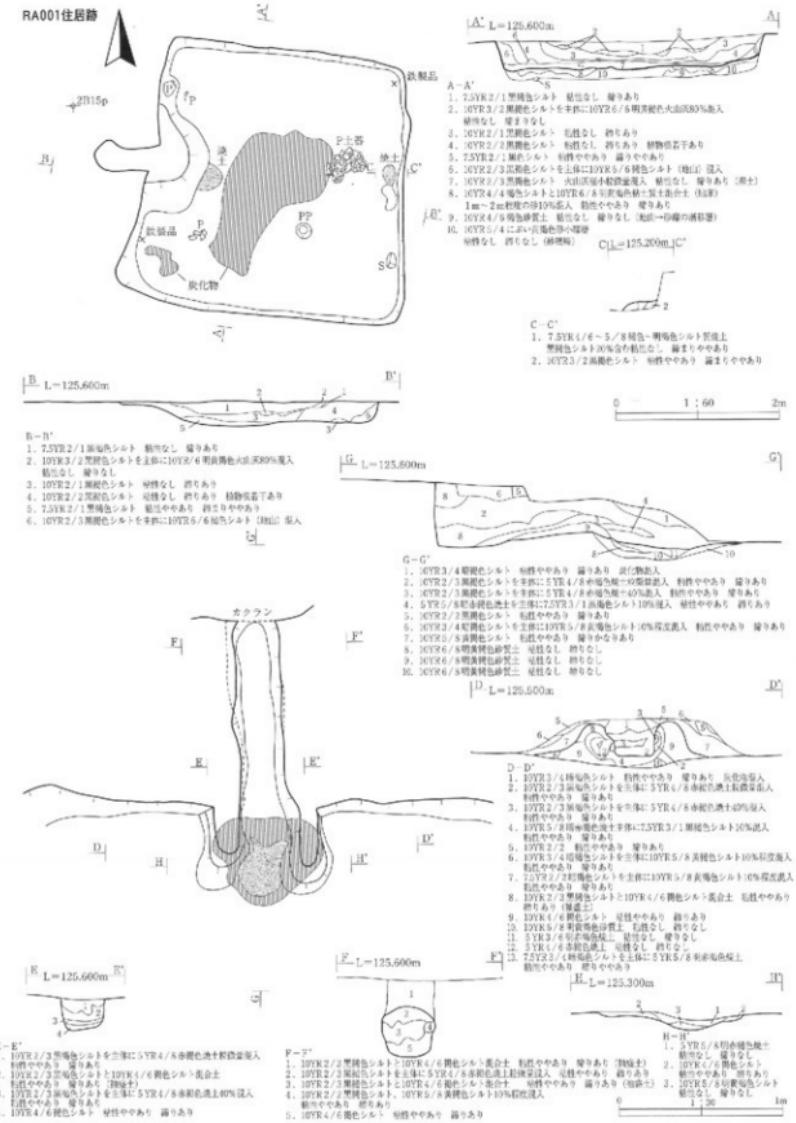
報 告 書 抄 錄

ふりがな	ふりがな	いわてけんmaiそうふんかさいはつくつちようさりきくほう			
番名	名	石丁島遺跡文化財挖掘調査報告書			
シリーズ名	名	門字伝文化遺典事務出展遺文化財調査報告書			
シリーズ番号	名	第455集			
著者名	名	小松樹里・木多惠一郎			
編集機関	名	財團法人伊丹市文化芸術事業団遺文化財センター			
所在地	地	〒630-0863 石丁島遺跡下放間11-185 丁長 L (019) 638-9001・5002			
発行年月日	地	西門2004年3月25日			
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間
所調査名	所在地	西町村	遺跡番号	...	調査原因
福井県 第6次調査委 員会	石丁島遺跡本部 半幅面7-7ほか	03201	1.E.16 -2131	30分 41分 03秒	2003.05.06~ 2003.06.24
所取調査名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	告示期限
福井県 第6次調査 委員会	散布地	奈良時代	堅穴住居跡1棟 溝跡1条 土坑2基	土師器 鉄製品	奈良時代後半の住居跡

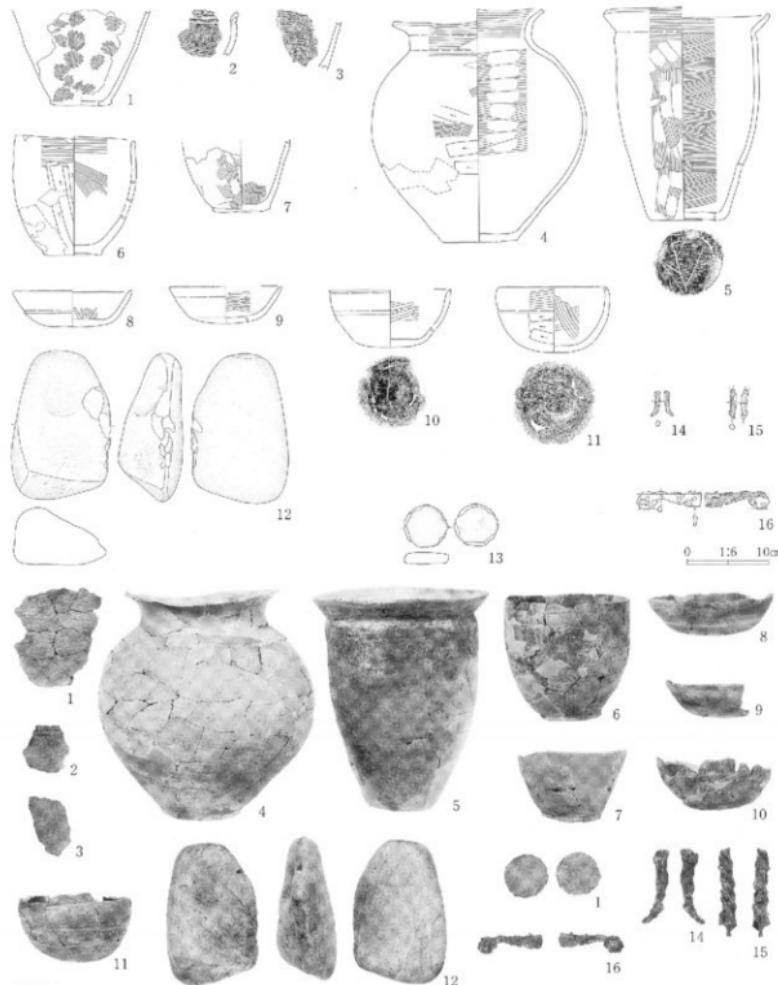
※緯度・経度は世界測地系



第1図 稲荷遺跡第6次調査 遺構配置図および検出遺構 1



第2図 稲荷遺跡第6次調査 検出構造2



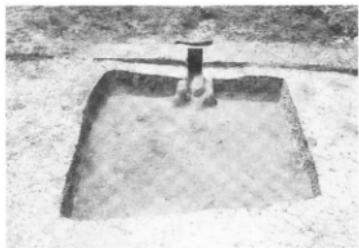
<石器>

番号	出土場所	層位	種類	石質	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	产地	等級
12	RA001	埋土下層	敲石	砂岩	18.3	9.8	7.0	1,680	奥羽山脈	1/6
13	RG04	埋土下層	内盤伏石器品	砂岩	5.2	5.5	1.5	57	奥羽山脈	1/6

<鍛製品>

番号	出土場所	層位	種類	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	等級
14	RA001	埋土下層	刃	3.1	0.7	0.6	1.5	1/3
15	RA001	埋土下層	刃	3.7	0.8	0.7	1.9	1/3
16	RA001	埋土下層	手鎬金	8.0	2.2	0.5	9.6	1/6

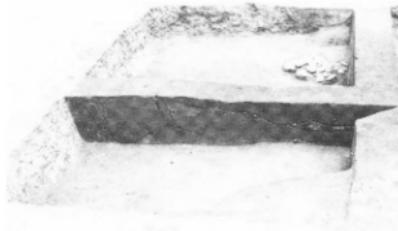
第3図・写真図版1 稲荷遺跡第6次調査 出土遺物



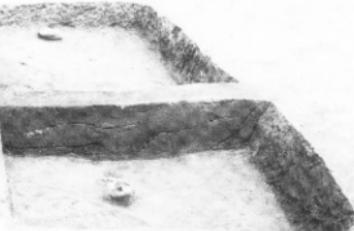
RA001豊穴住居跡完掘(東から)



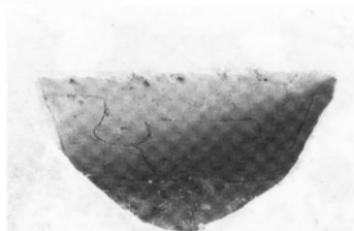
RA001豊穴住居跡カマド燃焼部断面(東から)



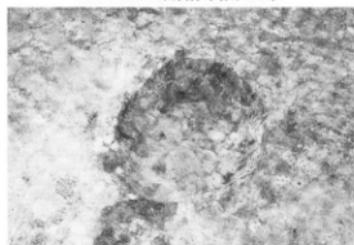
RA001豊穴住居跡南北断面(西から)



RG004溝跡平面(東から)



RD016土坑断面(南から)



RD017土坑平面(北から)

写真図版2 稲荷遺跡第6次調査 検出遺構

(30) 熊堂B遺跡第19次調査

所 在 地 盛岡市本宮字熊堂52-2
委 託 者 地域振興整備公団
岩手総合開発事務所
事 業 名 盛岡広域都市計画事業
盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成15年9月1日～9月30日
調査対象面積 97m²
発掘調査面積 97m²
遺跡番号・略号 LE16-2118・OKO-03-19
調査担当者 早坂 淳
協力機関 盛岡市教育委員会



1. 調査に至る過程

盛岡広域都市計画事業盛岡南新都市土地区画整理事業は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結合した輪状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした整理事業が継続中である。

事業対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い調査の必要範囲を確定し、財團法人岩手県文化振興事業団の受託事業として実施している。熊堂B遺跡第19次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成15年度の事業とすることが確定し、岩手県教育委員会と盛岡市及び財團法人岩手県文化振興事業団の両者に通知された。これを受けた両者は平成15年4月1日財團法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。調査期間は平成15年9月1日から9月30日であった。（地域振興整備公団岩手総合開発事務所）

2. 遺跡の立地

熊堂B遺跡は、JR東北本線仙北町駅の西約1.5km、李石川右岸の微高地上に位置する。本次調査区は宅地跡であり、南側と東側が第18次調査区、西側が第15次調査区、北側が第20次調査区に隣接する。標高は123m前後、北側の第20次調査区に向かって緩やかに傾斜している。

3. 基本層序

本次調査区の基本層序は、他調査区と同様の堆積状況を示す。

- I層：灰黄褐色土（現代耕作土一部下位に水酸化鉄層有） II層：黒褐色土
III層：黒褐色土と暗褐色土（漸移層下位遺構確認面） IV層：黄褐色砂質土（地山層一部遺構確認面）
V層：砂礫層

南側第18次調査区との境ではIII層上に自然疊層が認められ、溝跡に関してその面で検出が可能であった。

4. 調査の概要と検出遺構

本次調査区は、四方を過年度調査区と第20次調査区に囲まれる位置にあり、第19次と第20次調査を並行して行った。検出した遺構は、土坑5基と第18次調査区より続く溝跡1条である。

＜土坑＞ 5P6k～5P9m付近に位置し、Ⅲ層下面で検出した。平面は円形乃至椭円形、開口部は24～95cm、深さは10～38cmで全体に小規模の土坑である。埋土は締まり粘性とも弱い黒色土、黒褐色土と暗褐色土が主体、にぶい黄褐色土、褐色土と埋土下層に礫が混じる。遺物の出土は、RD154・156・158土坑より土師器・壺（口縁部・体部）と坏（口縁部～体部）が8点であり、これより古代に属すると考えられる。他の2基については時期特定不能である

＜溝跡＞ 5P8j付近で第18次調査区より本次調査区に至り、5P5l付近で第20次調査区へわずかに延び、その後消滅する。走行はN-35°-E、全長は約8.15m、幅は35～50cm、底面18～32cm、深さは3～9cm、北に向かうほど壁の立ち上がりは不明瞭になる。埋土は締まり粘性とも弱い暗褐色土が主体で、下位には土坑同様小礫が認められる。遺物の出土は土師器・壺（口縁部）と坏（底部）が主の9点であり、これより古代に属すると考えられる。第18次調査区同様Ⅲ層上面難層での検出が可能であったが、Ⅲ層下面で検出したため、溝跡自体の全容を把握することができなかった。

5. 出土遺物

小コンテナの3分の1、土師器片が主で全20点、うち6点について実測・掲載した。出土場所は、土坑と溝跡の埋土である。3と4はヘラナデとハケメ調整が明瞭な壺・体部破片、1と6は口縁部にロクロ調整、底部に回転糸切痕が認められる坏である。また、5は壺・口縁部であるが、割れ口に輪積面の刻目が認められる。遺物の量が少ないためその特徴と造構の属する詳しい時期を確定できず、本時調査区は古代に属する区域とのみ記す。

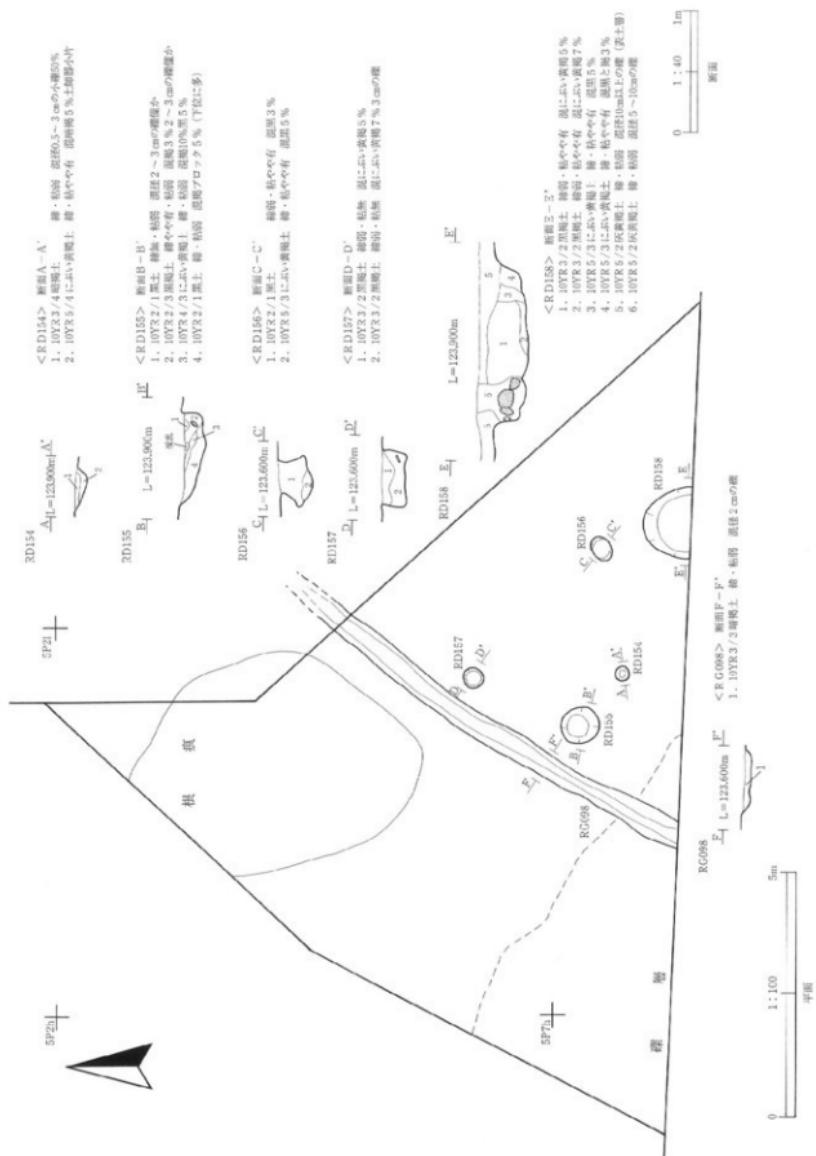
6.まとめ

本遺跡は、過年度の調査より奈良時代～平安時代を中心とした集落跡であることが明らかになっている。本次調査は、範囲も狭く調査区自体を特徴づけることはできなかった。ただ、北側に接する第20次調査区で東西に走る溝跡が検出され、その北側は低湿地に続くことから、本次調査区は熊堂B遺跡古代集落の北西の一端であるといえよう。古代に於いては、今よりも南側まで低湿地が延びていたとみられる。

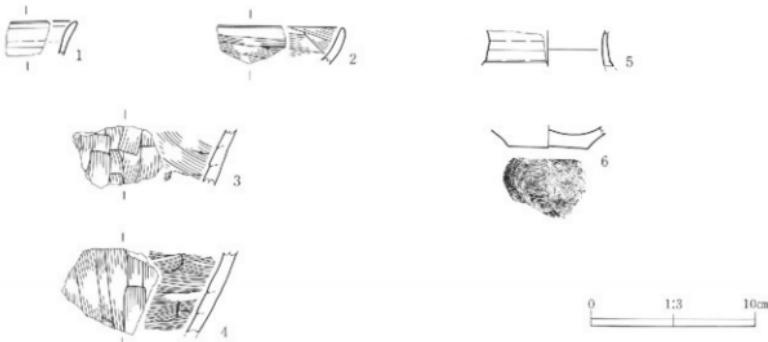
なお、熊堂B遺跡第19次調査に關わる報告はこれをもって全てとする。



第1図 熊堂B遺跡調査 グリッド配置図



第2図 熊堂B遺跡第19次調査 遺構配置図及び検出遺構



第3図 熊堂B遺跡第19次調査 出土遺物

土器器観察表

No.	出土位置	器種・部位	径量(cm)			特徴(色調・変型)
			口径	底径	器高	
1 RD154	粘土	环・口縁・体部	—	—	2.1既存	褐色、内一ロクロ 外一ロクロ
2 RD155	粘土面	器・口縁部	—	—	2.3既存	にい青色 内一ロクロ、ハラナデ? 外一ロクロ、ハラナデ
3 RD158	粘土下層	器・体部	—	—	3.55既存	にい青色 色 内一ハラナデ、ハケメ 外一ハラナデ
4 RD158	粘土下層	器・体部	—	—	5.1既存	にい青色 色 内一ハケメ 外一ハラナデ
5 RG098	粘土	器・口縁部	7.4(脚部)	—	2.9既存	褐色 内一ロクロ 外一ロクロ
6 RG098	粘土	环・底部	—	4.8	1.4既存	褐色 内一ロクロ 外一ロクロ、回転系切痕

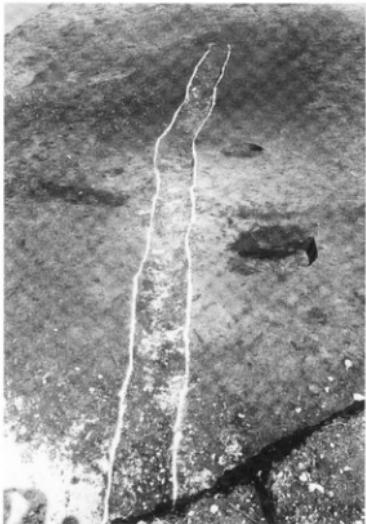
報告書抄録

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはつくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
編著者名	早坂 淳・阿部眞澄							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
熊堂B遺跡 第19次調査	岩手県盛岡市 本宮字熊堂52-2	市町村 03201	LE16 -2118	39度 21分 40秒	140度 45分 45秒	2003.09.01 ~ 2003.09.30	97m ²	盛岡広域都市計画事業 盛岡南新都市土地区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
熊堂B遺跡 第19次調査	集落跡	古代	土坑5基 溝跡1条	土師器	本調査区は、第15・18・20次調査区に隣接する。			

*緯度・経度は世界測地系



調査区全景(北から)



RG098溝跡 完掘(南から)



RG098溝跡 断面(北から)

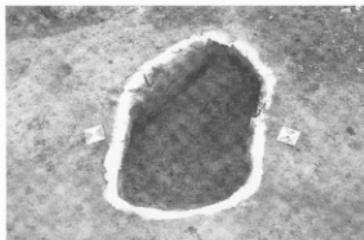


RD154土坑 完掘(北から)

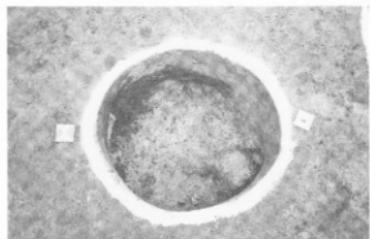
写真図版 1 熊堂B遺跡第19次調査 検出遺構



RD155土坑 完掘(北から)



RD156土坑 完掘(北から)



RD157土坑 完掘(北から)



RD158土坑 完掘(北から)



1



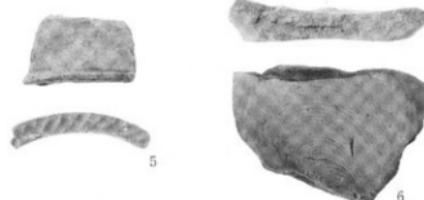
2



3



4



5



6

写真図版2 熊堂B遺跡第19次調査 検出遺構・遺物

(31) 台太郎遺跡第50次調査

所 在 地 盛岡市向中野字向中野37-5ほか
委 託 者 地域振興整備公団岩手総合開発事務所
事 業 名 盛岡広域都市計画事業
盛岡新都市土地区画整理事業

発掘調査期間 平成15年6月2日～30日・10月21日～11月10日

調査対象面積 780m²

発掘調査面積 540m²

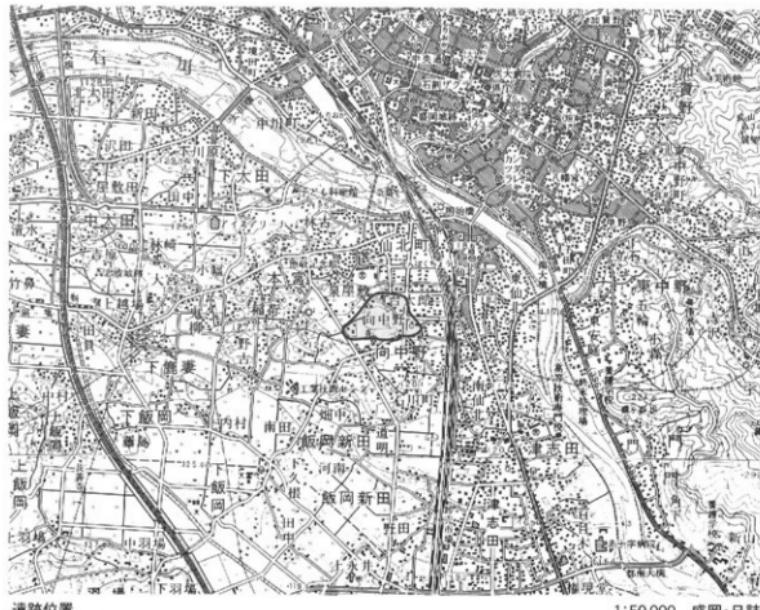
遺跡番号・略号 LE 16-2269・ODT-03-50

調査担当者 石崎高臣

協力機関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に、市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された土地区画整理事業である。



遺跡位置

この事業は、平成2年9月に、岩手県・盛岡市・旧都南村の三者が地域振興整備公団に対して事業申請を行った。これを受け、地域振興整備公団が実施計画を作成し、平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施認可が下り、平成3年度から同17年度までの15年間を事業予定期間とした、対象面積313haの土地区画整理事業が実施されることとなった。この間、事業対象地内の埋蔵文化財に関する取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行って調査必要範囲を確定し、本調査は財團法人岩手県文化振興事業団の受託事業となることとなった。

当遺跡については、岩手県教育委員会と地域振興整備公団との協議の結果、平成15年度の事業として確定したものである。これを受け、平成15年4月30日に財團法人岩手県文化振興事業団理事長と地域振興整備公団所長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。台太郎遺跡第50次調査は平成15年6月2日から開始され、途中都合により、7月1日～10月20日の中断期間を経て、同年11月10日をもって終了した。

(地域振興整備公団岩手総合開発事務所)

2. 遺跡の立地

台太郎遺跡は、JR東北本線仙北町駅の南西約900mに位置する。零石川によって形成された河岸段丘上に立地し、標高は約122mである。今次調査区は並行して調査が行われた51次調査D・F区と接する。また、以前に調査が行われた15次・35次・36次の調査区とも隣接している。調査前の状況は、道路および工場だった。

3. 遺跡の基本層序

今次調査区の基本層序は、以下の通りで、これまでの調査と同様の堆積状況を呈している。なお、今次調査ではIV層中位に10Y R3/2黒褐色シルト・10Y R4/3にぶい黄褐色シルト・10Y R3/4暗褐色シルトが挟まれている。

I層：10Y R2/2 黒褐色土 しまりやや密 粘性弱 現代の地表土

II層：10Y R4/4 暗褐色土 しまりやや密 粘性強 旧水田面の床土

III層：10Y R2/2 黒褐色シルト しまり密 粘性やや弱 下位から古代遺構検出面

IV層：10Y R4/4 暗褐色シルト しまり密 粘性弱 古代遺構検出面

V層：10Y R4/6 暗褐色砂礫 屋敷の基盤層

4. 調査の概要と検出遺構

調査区は工場の跡地であったため、建物の基礎や廃瓦廃棄用の穴が多数検出された。そのため、遺構検出面はかなり搅乱を受けていた。検出した遺構は、土坑2基・溝2条・柱穴状土坑8基だったが、搅乱を考慮に入れても遺構密度は低い。

＜土坑＞ 東調査区の北端と南端で検出した。R D1114土坑は、直径約0.7mのほぼ円形を呈する。深さは20～25cmで、底面は平坦である。遺物は出土していないが、覆土の色調から古代ではなく、中世以降のものと推測される。R D1115土坑は、直径約0.8mのほぼ円形を呈する。深さは20cmで、底面は平坦である。遺物の出土はないが、覆土は他の古代の遺構と同じような色調なので、古代のものと推測される。

＜溝跡＞ 東調査区の中央でR G487溝跡を、東端でR G488溝跡を検出した。R G487溝跡は、途中、削平のためとされているが、51次調査D区北側から続き、同南側に延びる溝である。幅は0.4～0.9m、深さは約10cmを測る。R G488溝跡も51次調査D区北側から続くものである。配水管を埋設したと推測される現代の溝によって搅乱され、南北で削平を受けており、残存状況は悪い。幅は約0.6m、深さは10cm前後を測る。時期については、ともに遺物が出土していないので、明確な時期は不明だが、R G487溝跡は51次調査D区南側で奈良時代以前の堅穴住居跡を切っており、同じく北側で平安時代と考えられる土坑に切られているので、奈良

時代後半～平安時代前半と考えられる。

＜柱穴状土坑＞ 西側調査区で8基検出した。配列に規則性は認められない。

5. 出土遺物

R487溝跡より土師器の破片が1点出土したのみである。1.5×2.5cmの極小片のため、器種は不明である。

6. まとめ

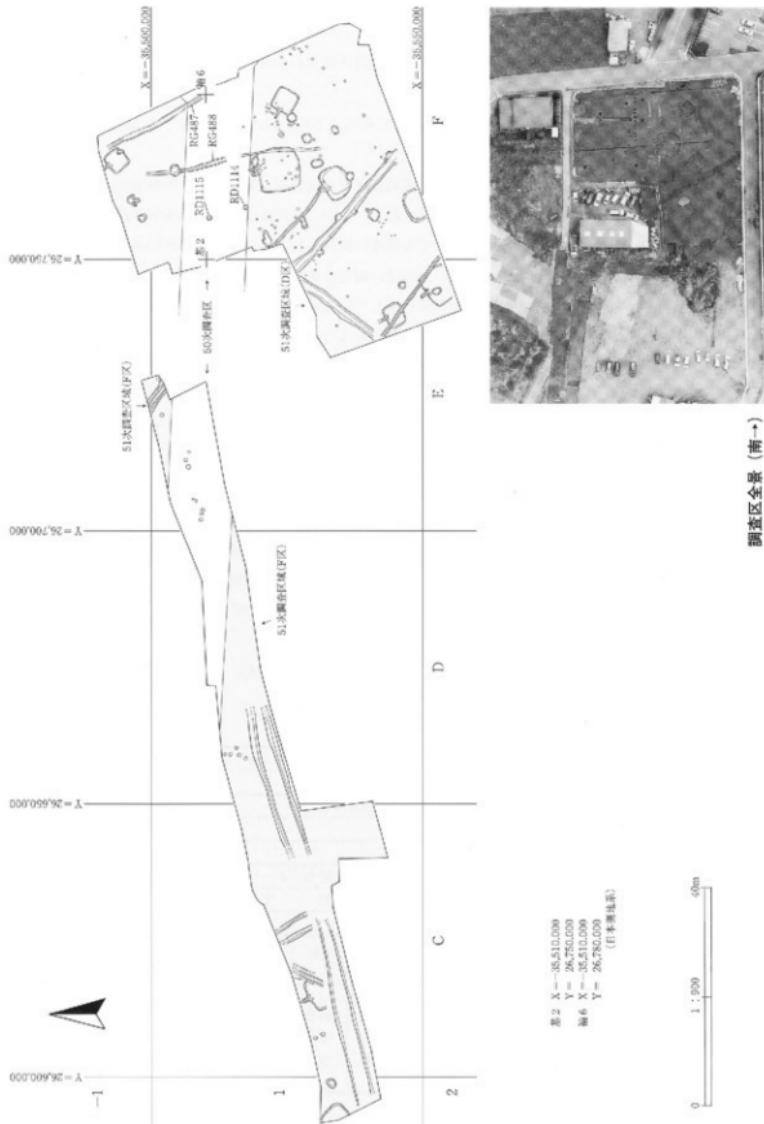
前述のように、今次調査で検出された遺構は、東調査区で土坑2基・溝跡2条、西側調査区では柱穴状土坑8基である。西調査区の南側では36次調査が行われているが、柱穴状土坑が4基検出されたにとどまる。また、北側では15次調査が行われているが、ここでも同様に検出されたのは柱穴状土坑のみだった。したがって、今次調査で遺構がほとんど検出されなかったのは、周辺の状況を鑑みれば不自然ではない。東側調査区の南北は、並行して調査が行われた51次調査D区と接しているが、そこでは豊穴住居跡が比較的多く検出されている。また、15次調査区まで目を向ければ、近距離にある-1Eグリッドでは5軒の豊穴住居跡が検出されている。このことをふまえれば、東側調査区の遺構密度はかなり低いと考えざるを得ない。なぜ、今次調査区周辺の遺構密度が低いのか、その理由を説明することは難しい。けれども、これまでの台太郎遺跡、特に奈良時代8世紀の豊穴住居跡の占地状況を見ると、数軒の豊穴住居が近接してひとつの単位を形成している様相が見て取れる。そして、その単位間には溝が数条見られる程度で遺構密度はそれほど高くない。台太郎遺跡周辺は、地形的には平坦であることから、こうした様相は地形に制約されたものではなく、住居建築時に意識的なされたものと推測できる。つまり、台太郎遺跡に展開する集落の人々は、集落内のどこでもかまわらず住むことができたわけではなく、ある程度の規制のもとに住居を建てていたのではないかろうか。このように考えて大過なければ、今次調査のように遺構密度が低く、出土遺物も僅少であっても、集落全体の景観を検討する上では欠くことのできない資料を提供する。そうした意味では今次調査は有意義なものであったといえよう。

なお、台太郎遺跡第50次調査に関する報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

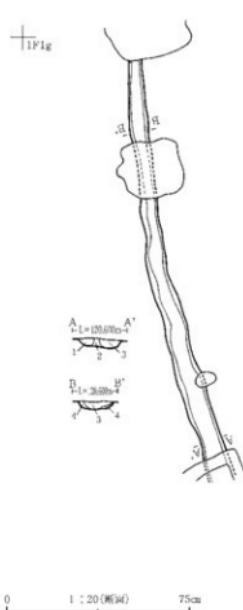
ふりがな 書名	いわてけんまいぞうぶんかざいははくつちょうさりやくほう 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団歴史文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
編著者名	石崎高臣							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積	調査原因
台太郎遺跡 第50次調査	岩手県盛岡市 向中野字向中 野37-5ほか	03201	LE16 -2296	39度 40分 56秒	141度 08分 28秒	2003.06.02 ～ 2003.11.10	540m ²	盛岡広域都市計 画事業 盛岡南 新都市土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
台太郎遺跡 第50次調査	集落跡	古代	土坑2基 溝跡2条	土師器				

※緯度・経度は世界測地系

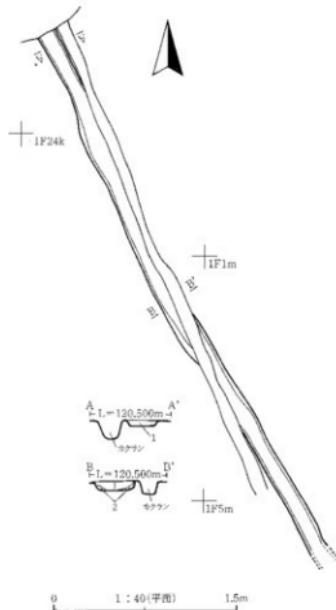


第1図 台太郎遺跡第50次調査 遺構配置図および検出遺構

RG488



RG487



RD1114



RD1115



< RD1114 >
番号 色調 しまり 粘性 備考
1. 10YR 3/4 黄褐色シルト やや密 硬 10YR 4/4 棕色シルト 5%含む
2. 10YR 3/4 黄褐色シルト やや密 硬 10YR 4/4 棕色シルト 5%含む

< RD1115 >
番号 色調 しまり 粘性 備考
1. 10YR 2/2 黑褐色シルト 密 硬 10YR 4/4 棕色シルト 5%含む

< RG488 >
番号 色調 しまり 粘性 備考
1. 10YR 2/2 黄褐色シルト やや密 硬 10YR 4/4 棕色シルト 50%含む
2. 10YR 2/2 黑褐色シルト 密 硬 10YR 4/4 棕色シルト 80%含む
3. 10YR 2/2 黄褐色シルト やや密 硬 10YR 4/4 棕色シルト 10%含む
4. 10YR 2/2 黑褐色シルト やや密 硬 10YR 4/4 棕色シルト 80%含む

< RG487 >
番号 色調 しまり 粘性 備考
1. 10YR 2/2 黄褐色シルト 密 硬 10YR 4/4 棕色シルト 80%含む
2. 10YR 2/2 黑褐色シルト 密 硬 10YR 4/4 棕色シルト 80%含む

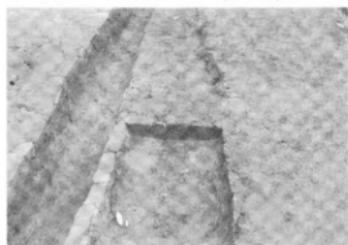
第2図 台太郎遺跡第50次調査 RD 1114・1115土坑、R G487・488溝跡



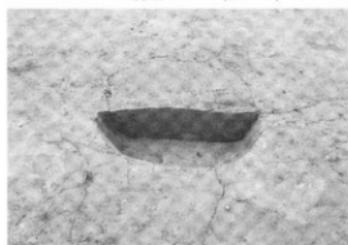
東側調査区調査前状況



RG487溝跡完掘(北から)



RG488溝跡A-A'(南から)



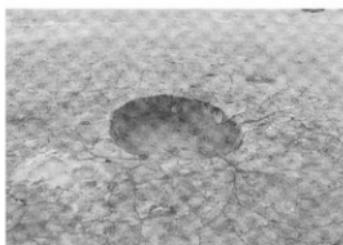
RD1115土坑断面(南から)



RG487溝跡完掘(北から)



RG488溝跡完掘(南から)



RD1115土坑完掘(南から)

写真図版 1 台太郎遺跡第50次調査 検出遺構

(32) 台太郎遺跡第52次調査

所 在 地 盛岡市向中野八日市場 7-1 ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
事 業 名 国道46号盛岡西バイパス建設事業
発掘調査期間 平成15年8月1日～9月3日
調査対象面積 595m²
発掘調査面積 595m²
遺跡番号・略号 LE 16-2269・ODT-03-52
調査担当者 水上明博
協 力 機 関 盛岡市教育委員会



1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の概成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公團にたいして事業申請を行い、これを受けて公團は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした整理事業が実施される事となった。事業対象地域に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い分布を確認している。

本遺跡については、岩手県教育委員会が平成15年度事業に急遽追加し、これを受けて財団法人岩手県文化振興事業団は平成15年7月31日付けで岩手河川国道事務所長と財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、平成15年8月1日から着手し、同年9月3日に終了した。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

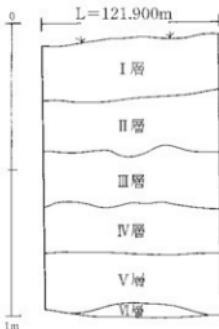
2. 遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線盛岡駅より南西約2kmに位置する。遺跡の北を流れる零石川によって形成された低位段丘上に立地している。標高は125m前後で、現況は付近で行われている工事等の廃土置き場となっている。古くは零石川が貫流したこともあり、堆積物によって地味が肥えていたため近年まで同様の環境をもつ太田・飯岡地区とならぶ田園・畑作地帯であった。

3. 遺跡の基本層序

調査区の基本層序は下記の通りであるが、近年の宅地や道路工事の廃土が厚く堆積しており、遠隔検出面の下まで深く擾乱を受けた箇所が随所に見られる。

I層	10Y R2/3	黒褐色	粘性なし	縮まりなし
		層厚20cm	(旧耕作土)	
II層	7.5Y R3/1	黒褐色	粘性弱	縮まり中
		層厚20cm	(混水酸化鉄3%)	
III層	10Y R3/4	暗褐色	粘性弱	縮まり中
		層厚18cm		
IV層	10Y R4/4	褐色	粘性なし	縮まりなし
		層厚16cm	(砂質)	
V層	7.5Y R3/1	黒褐色	粘性あり	縮まりあり
		層厚18cm		
VI層	10Y R3/2	黒褐色	粘性あり	縮まりあり
		層厚5cm		



第1図 基本層序

4. 調査の概要と検出状況

今回の調査で検出された遺構は、古代を中心とした竪穴状遺構1棟、溝が8条である。

＜竪穴状遺構＞ RE061竪穴状遺構は調査区南東に位置し、近年に入ってからの用水路工事のため半分近くが失われている。規模は3.5m×2mで平面形長方形を呈すると思われる。出土遺物は、ふいごの羽口や鉄滓、真ん中がへこんだ鉄床石（30cm×30cm×30cm）、須恵器などがあり平安時代の作業小屋と考えられる。

＜溝跡＞ 小大合わせて8条検出し、そのうちの数本は調査区の西側に延びている。

No.	調査名	長さm	上幅cm	下幅cm	深さcm	方向	直観記述	備考
1	R G479	14	40	30	8	北東～西北	（新）R G479-R G480（旧）	木製浮きと土陣出土
2	R G480	15	60	40	15	北東～南西	（新）R G479-R G480（旧）	十和田a陣下火山灰含む
3	R G481	7	60	30	20	北東～東西	（新）R G482-R G481-R G480（旧）	
4	R G482	6	40	20	20	北西～北東	（新）R G482-R G481（旧）	
5	R G483	15	95	75	45	東～西	（新）R G479-R G480-R G483-R G484（旧）	
6	R G484	21	95	70	25	北東～東西	（新）R G483-R G484-R G485（旧）	
7	R G485	6	50	25	9	北東～西北	（新）R G484-R G485（旧）	
8	R G486	3	80	70	12	東～西	（新）R G480-R G486（旧）	十和田a陣下火山灰含む

溝跡はいずれも出土遺物などから平安時代のものと考えられる。

＜出土遺物＞ 遺物は土器が小コンテナで1箱、石器2点、土製品1点が出土している。1は土師器窯の底部破片で外面はヘラナデ調整を施している。2～4は内面に黒色処理を施した、ロクロ成形の土師器杯である。いずれも口縁部体部から外傾気味に立ち上がり、底部の切り離しは回転糸切りである。5は須恵器杯で、口縁部は底部から外傾して立ち上がっている。底部の切り離しは回転糸切りである。6はふいごの羽口。7は土鍤で長さ4.2cm、径3mmの穴が穿孔されている。8は木製の浮きである。9・10は剥片石器で、9の両面に刀部加工を施している。11は土師器窯の破片、2は須恵器の破片。13は土師器高台杯の破片である。14はミニチュア土器である。15はロクロ不使用の土師器杯である。底部は丸底で浅い沈線が巡り、口縁部は内湾して立ち上がる。内面はヘラミガキ調整後に黒色処理を施している。16、17は須恵器窯の体部破片で、外側は平行叩き具痕である。18はワゴの羽口で現存長さが9.3cm径2.0cm×1.9cmを計る。19は現存1/3のコップ形を呈する須恵器である。口径は8.1cm、底径6.1cm、器高5.3cmで、口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は丸みを持っている。ロクロ成形痕が明瞭で底部の切り離しは回転ヘラ切りである。20は新窓水通宝で、

21は廃滅が著しく時期不明である。

5.まとめ

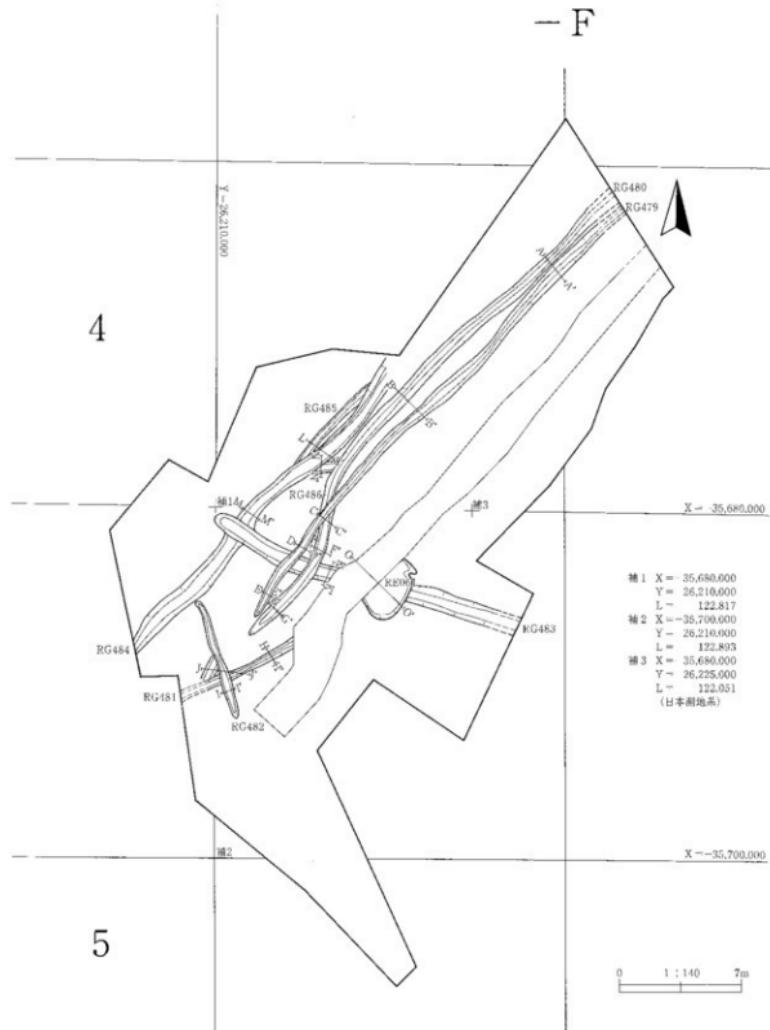
本遺跡は、奈良から平安時代を中心とした大規模な集落跡であることが明らかになっていたるが、今回の調査区は西端部にあたり範囲もせまく、検出された遺構数と遺物量も少なかったが、コップ形須恵器（計量器）は県内では初見である。東北地方では秋田市の秋田城跡、宮城県築館町の佐内屋敷跡で出土しているだけである。この須恵器が舟のように計量器として使われていたかどうかを考えるには何次にもわたる台太郎遺跡の発掘調査全体の資料等を研究しながら考えていかなければならない。今後周辺の調査が進むにつれて近隣にある志波城跡とのつながりなども明らかになってくると考えられる。

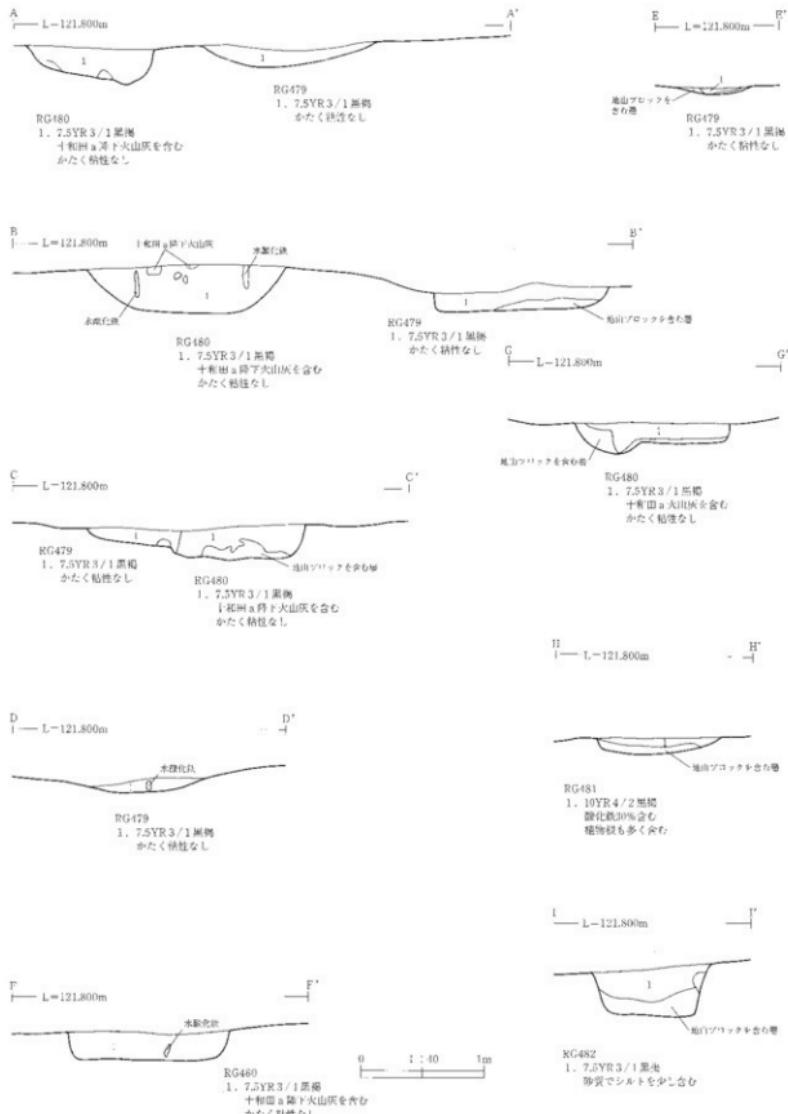
なお、台太郎遺跡第52次調査に関する報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

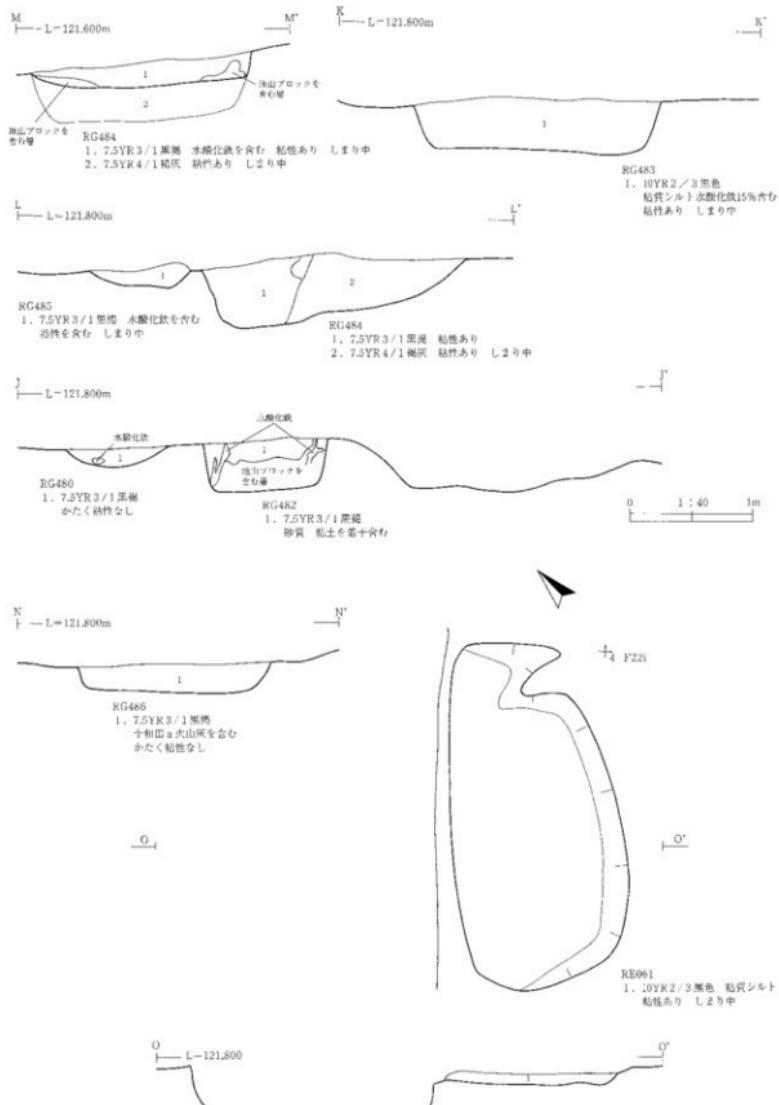
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
編著者名	水上明博							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	度	分	度	分	日付	面積	原因
台太郎遺跡 第52次調査	岩手県盛岡市 向中野八日市 場7-1ほか	03201	LE16 -2269	39度 40分 47秒	141度 08分 11秒	2003.08.01 ～ 2003.09.03	595m ²	国道46号盛岡 バイパス建設 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
台太郎遺跡 第52次調査	集落跡	平安時代	竪穴状遺構1棟 溝跡8基	土師器、須恵器、 ふいごの羽口、木 製の浮き、土鍬	コップ形須恵器1点			

北緯度・経度は世界測地系

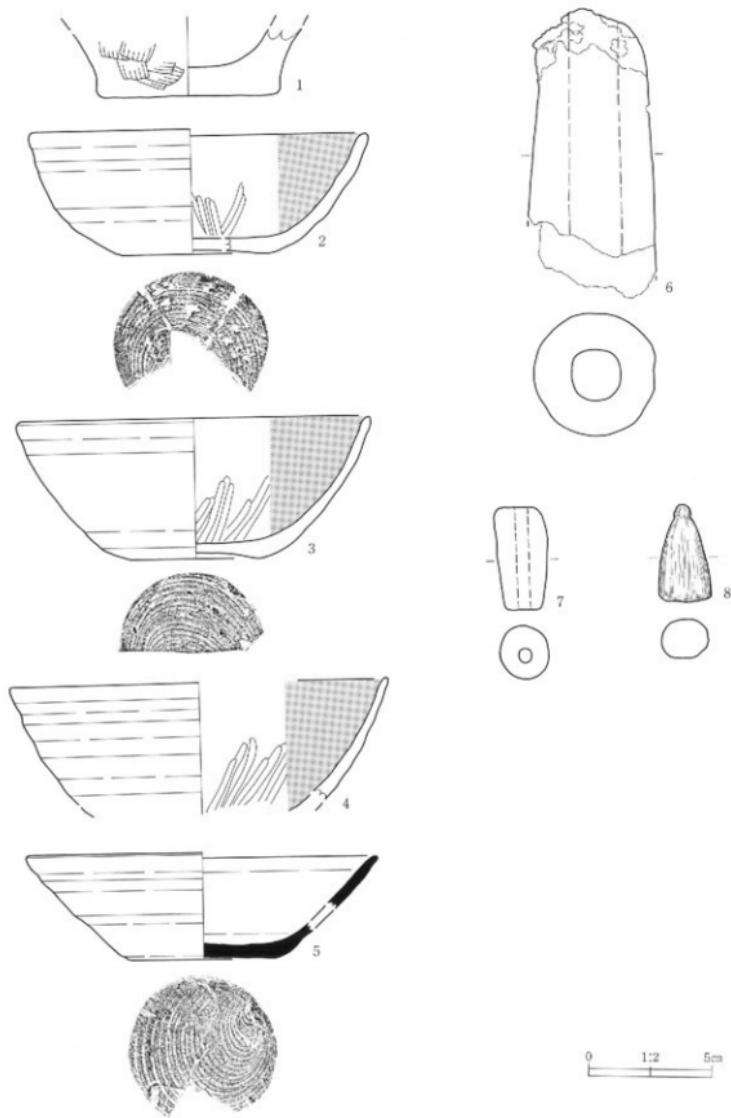




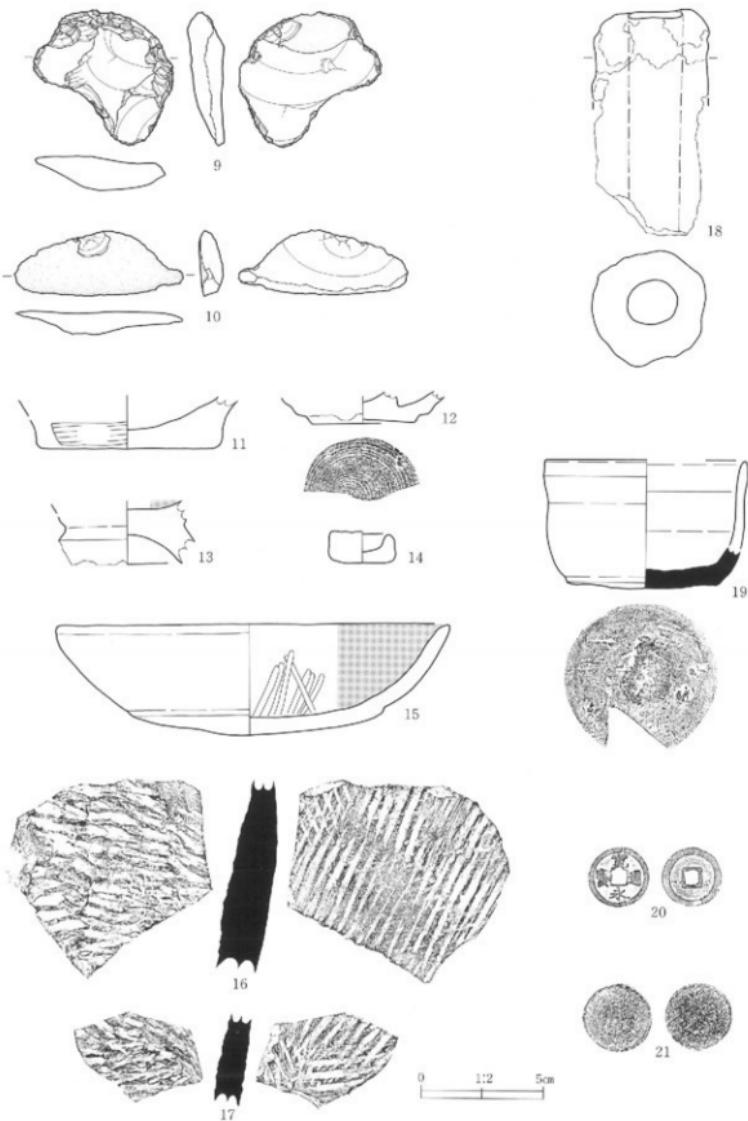
第3図 台太郎遺跡第52次調査 検出遺構



第4図 台太郎遺跡第52次調査 検出遺構



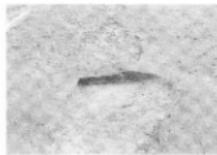
第5図 台太郎遺跡第52次調査 出土遺物



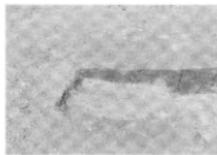
第6図 台太郎遺跡第52次調査 遺構外出土遺物



RG479溝跡断面A-A'



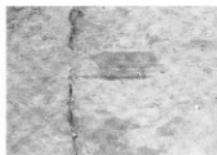
RG479溝跡断面B-B'



RG479溝跡断面C-C'



RG479溝跡断面D-D'



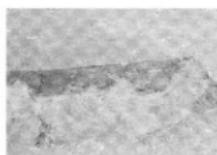
RG479溝跡断面E-E'



RG480溝跡断面A-A'



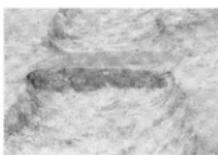
RG480溝跡断面B-B'



RG480溝跡断面C-C'



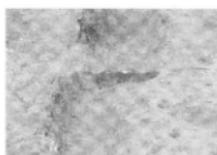
RG480溝跡断面F-F'



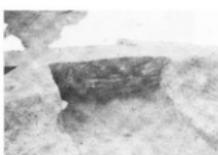
RG480溝跡断面G-G'



RG480溝跡断面J-J'



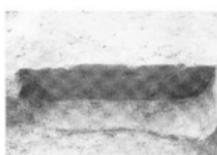
RG481溝跡断面H-H'



RG481溝跡断面J-J'



RG482溝跡断面I-I'

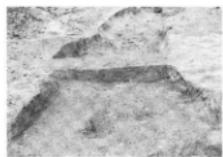


RG483溝跡断面K-K'

写真図版 1 台太郎遺跡第52次調査 検出遺構（溝跡）



RG484溝跡断面L-L'



RG484溝跡断面M-M'



RG485溝跡断面L-L'



RG486溝跡断面N-N'



RG479溝跡断面(左)
RG480溝跡断面(右)



RG482溝跡断面(平面)



RG486溝跡(平面)



調査区(西から東)



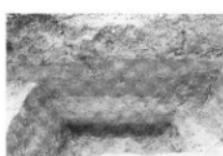
調査区(北から南)



RE061竪穴状遺構断面



RE061竪穴状遺構平面(西から)



基本土層



RG479・480・484溝跡

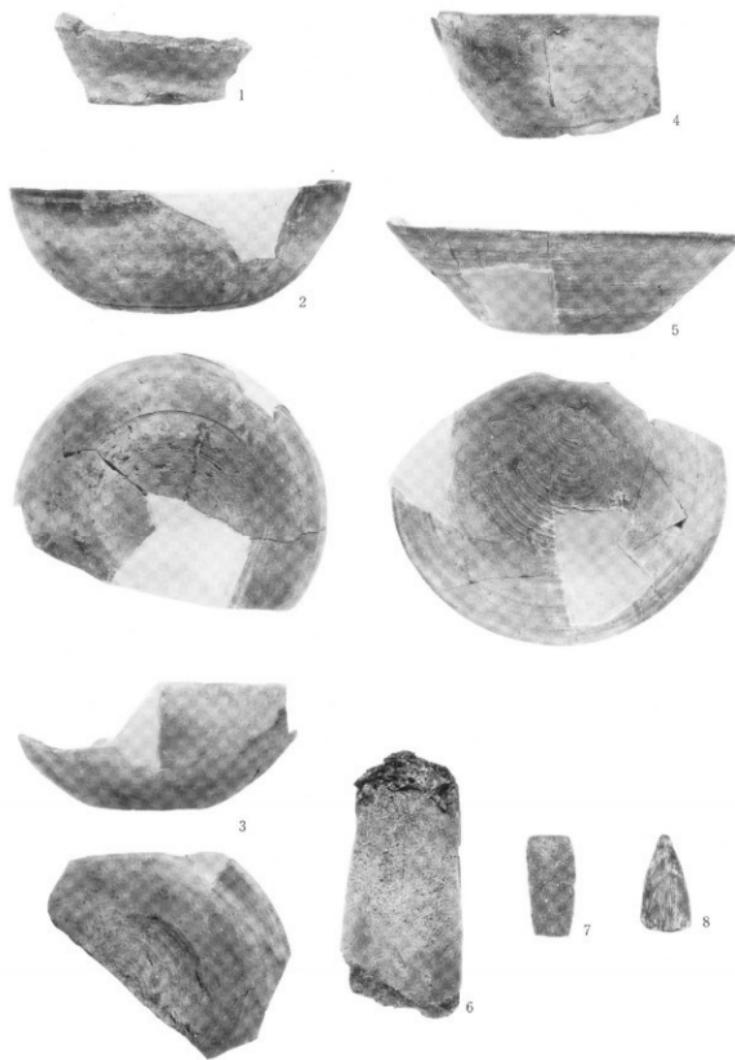


調査区(西から東)

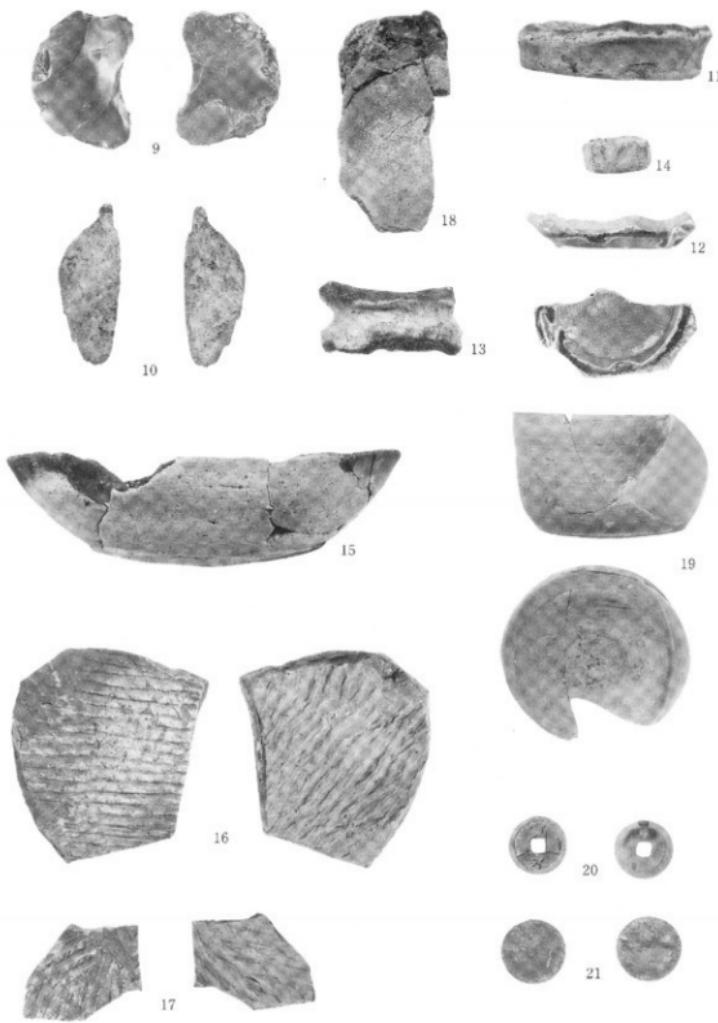


RG483溝跡

写真図版2 台太郎遺跡第52次調査 検出遺構(溝跡、竪穴状遺構、他)



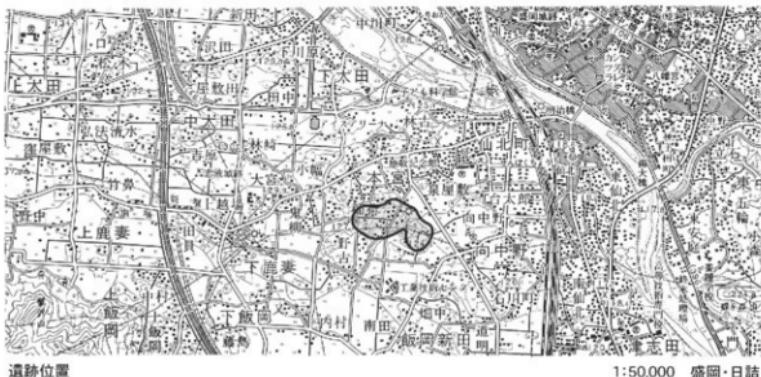
写真図版3 台太郎遺跡第52次調査 遺構内出土遺物



写真図版4 台太郎遺跡第52次調査 遺構外出土遺物

(33) のつこ
野古A遺跡第19次調査

所 在 地 盛岡市下鹿妻北32-1
 委 託 者 地域振興整備公団岩手総合開発事務所
 事 業 名 盛岡広域都市計画事業
 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成15年9月12日~10月28日
 調査対象面積 1,857m²
 発掘調査面積 1,857m²
 遺跡番号・略号 LE 16-2155・ONK-03-19
 調査担当者 小松則也・本多準一郎
 協力機関 盛岡市教育委員会



1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。この事業は、平成2年9月に岩手県・盛岡市・旧都南村の三者が地域振興整備公団に対して事業申請を行い、これを受け公団は実施計画を策定した。事業は平成3年に開始され現在に至る。

平成15年4月1日財団法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。
 (地域振興整備公団岩手総合開発事務所)

2. 遺跡の立地

野古A遺跡はJR東北本線盛岡駅の南側約2kmに位置し、零石川右岸に形成された標高124m前後の河岸段丘の一部に立地している。調査区南側、段丘崖沿いに鹿妻堰用水路が走る。北東約50mのところに古墳が多数確認されている飯岡沢田遺跡と接する。

3. 基本土層

- I 層 10Y R3/3 暗褐色シルト（表上） 粘性なし 締りあり
II 層 10Y R2/3 黒褐色色シルト（旧耕作上） 粘性なし 締りあり
III 層 10Y R2/1 黒色シルト（黒ボク層） 粘性ややあり 締りあり
IV 層 10Y R3/2 黒褐色粘土質土（漸移層） 粘性ややあり 締りあり
V 層 10Y R5/6 黄褐色粘土質土（地山層） 粘性あり 締りあり

4. 調査の概要

陥し穴造構4基と溝跡造構2条、焼土造構3基を検出した。

＜陥し穴＞ 4基共に北西・南東に向く。いずれも平面形は溝状を呈している。はじめにR D085土坑を検出、他は確認できず調査区中央を横切る黒ボク層（III層）を除去した後に、R D086・087・088土坑を検出した。R D085・086土坑は底部が奥に抉れる特徴がある。R D087・088土坑は底部が極端に狭い。規模の詳細を表で示す。

造構名	位置	平面形	開口径cm	底部径cm	深さcm	壁	備考
R D085	15O 3 v	溝状	358×55	403×33	90	外傾する	
R D086	15O 5 b	溝状	335×55	323×31	79	えぐれ外傾する	柱穴を伴う
R D087	15N 3 s	溝状	295×33	290×8	49	ほぼ直立する	
R D088	14N 23 e	溝状	330×19	313×8	60	外傾し内済する	

＜溝跡＞ R G022溝跡は調査区の南西～北東下降して延びる。規模は、長さ98m、幅70～80cm、深さは18～45cmを測る。R G022溝跡からは土師器が破片で15点出土していることから古代の溝跡と推測される。R G023溝跡はR G022溝跡と切り合い関係にありそれよりも新しい。規模は長さ16m、幅は25～48cm、深さ15～22cmを測る。時期は不明である。

＜焼土＞ R F002～004焼土は調査区のほぼ中央14O 25 iに位置する。III層黒ボク層の上面でR F002・004・003焼土の順で検出した。焼土中からは3点の土師器片が、またその周辺からは土師器片が101点ある程度集中して出土した。同時に十和田a降下火山灰も見とめられた。R F003焼土は土坑に投げ込んだような様相であった。いずれの焼土も現地性燃焼の痕跡はなく、二次的焼土であると思われる。伴う住居跡は確認できなかつた。

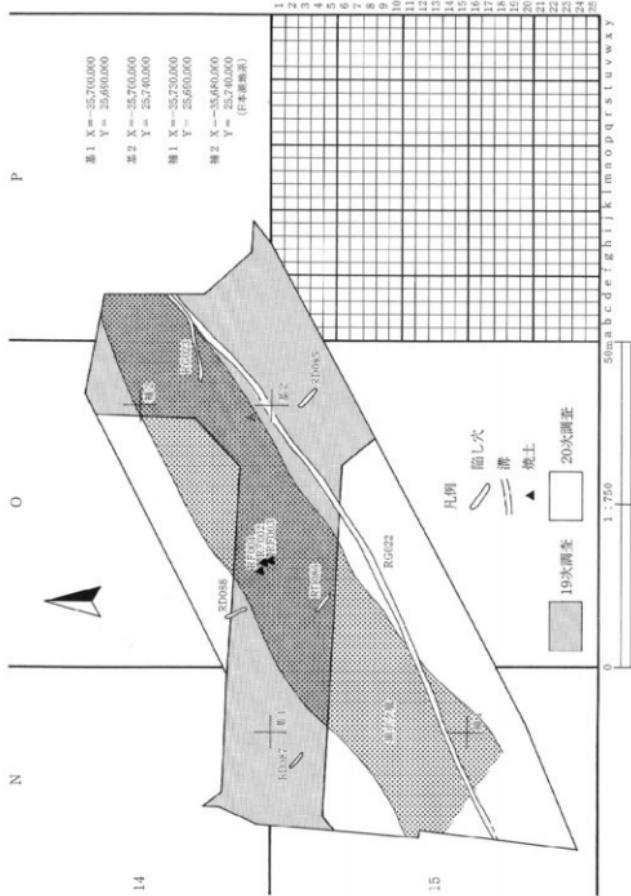
＜土器＞ 1の土師器の底部はR F002焼土からの出土で底部にヘラガキが見とめられた。2～8の土師器片はいずれもII層黒褐色シルト上面造構外からの出土である。4の底部は静止糸切り痕、5の底部は回転糸切り痕である。9の須恵器片はR G002溝跡からの出土であるが、壇上の上位であったことから流れ込んだ可能性高い。近世のものと推測される。時期は不明である。不掲載の土器小破片は386点を数える。

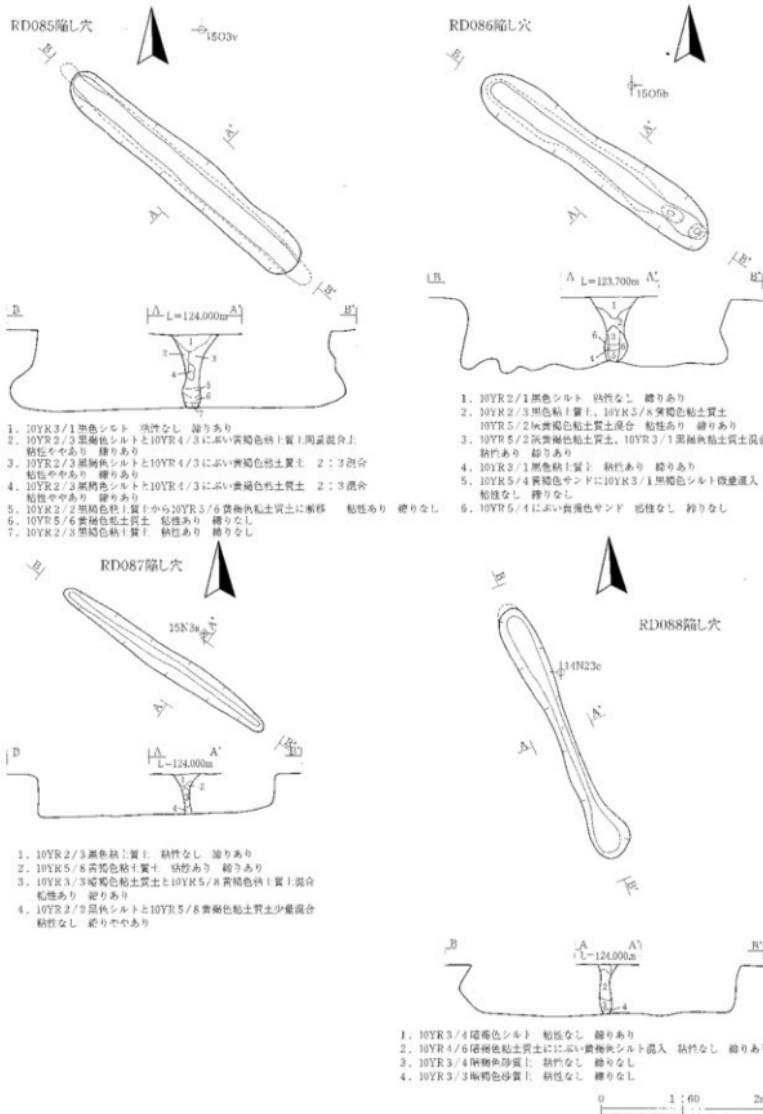
＜陶磁器＞ 10は肥前産の染付碗である。

5.まとめ

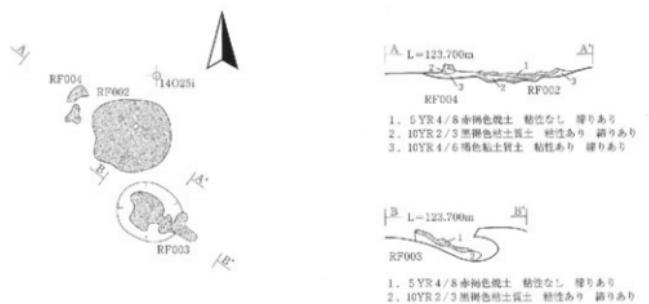
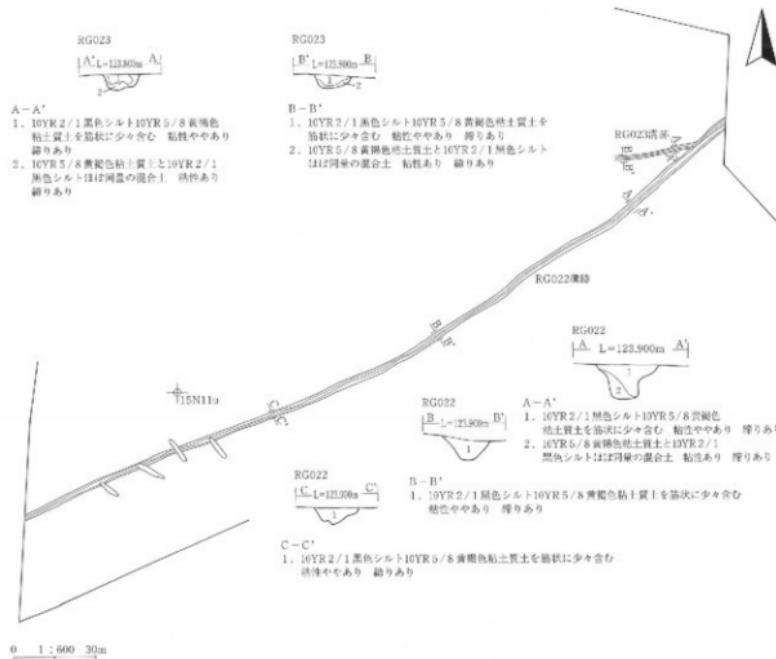
野古A第12次調査（平成13年度）においては、古墳時代末～平安時代前半まで営まれた住居跡が27棟確認されている。住居域は鹿妻塙農業用水路に沿って南西側にさらに広がる可能性があると予想されていたが、本次調査から住居跡は確認されなかった。鹿妻塙に沿って古代の溝が延びることから、当時においても用水として用いられた可能性がある。陥し穴造構の検出から、繩文時代は狩猟場であったと考えられる。今後の周辺遺跡の調査進展に伴いさらに野古A遺跡の全体像が明らかになるものと思われる。

以上、野古A遺跡第19次調査に關わる報告は、これをもって全てとする。

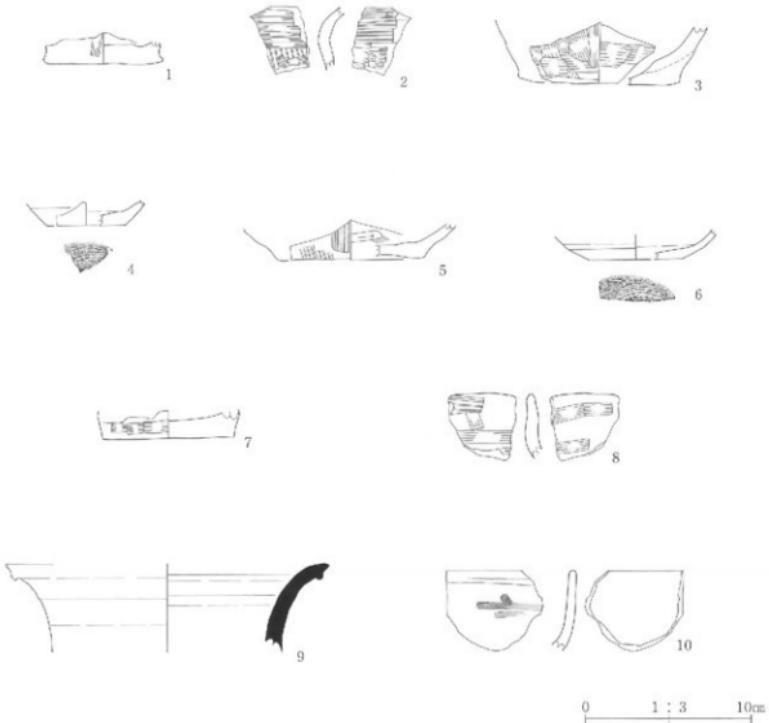




第2図 野古A遺跡第19次調査 検出構造(1)



第3図 野古A遺跡第19次調査 検出遺構（2）



遺物観察表

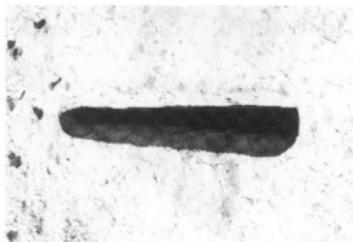
<土器>

番号	出土層位	器種	部位	外面/内面/横断等	時期
1	R F002	土師器・甕?	底部	底部にヘラガキ	平安時代
2	E型	土師器・甕	頸部	ハケメ・ヨコナダ	平安時代
3	E型	土師器・甕	胴~底部	ヨコナダ・ヨコナダ	平安時代
4	E型	土師器・甕	底部	ヨコナダ・底盤移止系切り	平安時代
5	E型	土師器・甕	胴~底部	ハケメ・ヘラケズリ	平安時代
6	E型	土師器・甕	胴・底部	ヨコナダ・底盤移動系切り	平安時代
7	E型	土師器・甕	底部	ヨコナダ	平安時代
8	E型	土師器・甕	口縁部	ヨコナダ・ヨコナダ	平安時代
9	R G022	土師器・甕	口縁部	ハケメ・ヨコナダ	不明時代

<陶器>

番号	出土層位	種別	器種	口径cm	底径cm	壁高cm	胎土	釉面他	産地	年代
10	R G022	陶器	甕	(11)			灰瓦	染付・透明釉	肥前	18c

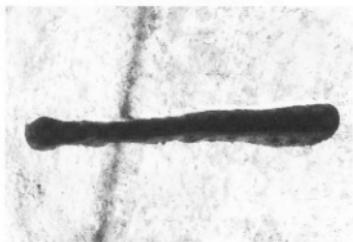
第4図 野古A遺跡第19次調査 出土遺物



RD085陥し穴完掘(南から)



RD086陥し穴完掘(南から)



RD087陥し穴完掘(南から)



RD088陥し穴完掘(南から)



RF002・003焼土断面(東から)



RF003焼土断面(東から)

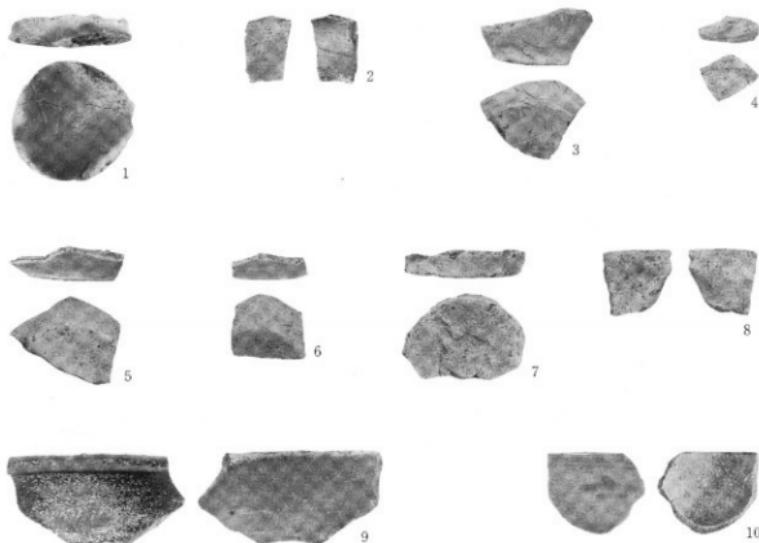


RF022・023溝跡平面(西から)



調査前風景(北西から)

写真図版 1 野古 A 遺跡19次検出遺構



写真図版2 野古A遺跡第19次調査 出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはくつちょうさりやくはう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
編著者名	小松則也・本多準一郎							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯間11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°°	°°°			
野古A遺跡 第19次調査	岩手県盛岡市 下巣妻北 32-1	03201	L E16 -2155	39度 40分 40秒	141度 07分 58秒	2003.09.12 ~ 2003.10.28	1,857m ²	盛岡広域都市 計画事業 盛岡 南新都市土地 区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
野古A遺跡 第19次調査	散布地	縄文時代 平安時代	陥し穴4基 溝跡2条	土師器片 陶磁器	平安時代の溝跡			

*緯度・経度は世界測地系

(34) 野古A遺跡第20次調査

所 在 地 盛岡市下鹿妻北33-1 ほか

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課

事 業 名 盛岡広域都市計画事業

盛岡南新都市土地区画整理事業

発掘調査期間 平成15年9月12日～10月28日

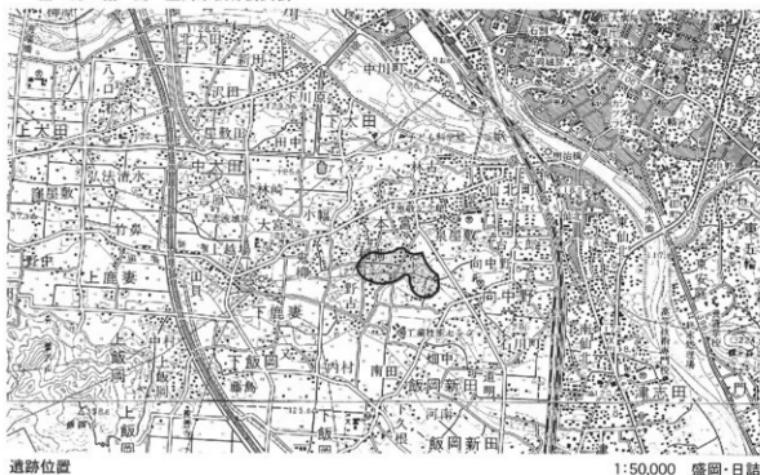
調査対象面積 1,801m²

発掘調査面積 1,801m²

遺跡番号・略号 LE 16-2155・ONK-03-20

調査担当者 小松則也・本多準一郎

協力機関 盛岡市教育委員会



道路位置

1:50,000 盛岡・日誌

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

野古A遺跡20次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成15年度の事業とすることが確定し、岩手県教育委員会と盛岡市及び財團法人岩手県文化振興事業団に通知した。これを受け、平成15年4月1日財團法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施するに至った。実際の調査期間は、平成15年9月12日に着手され同年10月24日に終了した。

(盛岡市都市整備部盛岡南整備課)

2. 遺跡の立地

野古A遺跡はJR東北本線盛岡駅の南側約2kmに位置し、平石川右岸に形成された標高124m前後の河岸段丘の一部に立地している。調査区南側、段丘崖沿いに鹿妻堰用水路が走る。北東約50mのところに占墳が多数確認されている飯岡沢田遺跡と接する。

3. 基本土層

I層	10Y R3/3	暗褐色シルト（表土）	粘性なし	締りあり
II層	10Y R2/3	黒褐色シルト（旧耕作土）	粘性なし	締りあり
III層	10Y R2/1	黒色シルト（黒ボク層）	粘性ややあり	締りあり
IV層	10Y R3/2	黒褐色粘土質土（漸移層）	粘性ややあり	締りあり
V層	10Y R5/6	黄褐色粘土質土（地山層）	粘性あり	締りあり

4. 調査の概要

陥し穴遺構10基と溝跡遺構3条を検出した。

＜陥し穴＞ 10基共に北西・南東に向く。平面形は溝状のものと楕円形のものに分かれる。溝状の陥し穴R D090・091・092・095・097・098は底部が極端に狭い特徴を持つ。初めにV層地山面からR D089陥し穴とR D090陥し穴を検出した。その後、遺構検出を進めたが確認できず、第19次調査で検出した溝跡の断面からR D091～093陥し穴を確認検出した。さらにダメ押してR D095～098陥し穴を検出した。規模の詳細を表で示す。R D096陥し穴は攪乱により半分破壊されている。

遺構名	位置	平面形	開口径cm	底部径cm	深さcm	壁	備考
R D089陥し穴	15N 7 p	楕円形	328×64	325×19	75	外傾する	
R D090陥し穴	15N 5 q	溝状	406×25	440×10	72	直立する	
R D091陥し穴	15N14 x	溝状	316×48	377×25	105	外反する	
R D092陥し穴	15N14 u	溝状	338×44	328×14	84	直立する	
R D093陥し穴	15N16 u	楕円形	386×57	378×43	88	外傾する	
R D094陥し穴	15N16 g	楕円形	292×60	280×28	75	直立する	
R D095陥し穴	15N18 u	溝状	276×55	255×12	100	外傾する	
R D096陥し穴	15N18 f	半楕円形	149×80	142×22	88	外反する	半分のみ残存
R D097陥し穴	15N21 f	楕円形	352×75	362×16	86	直立する	
R D098陥し穴	15N21 f	溝状	270×50	256×15	84	直立する	

＜溝跡＞ RG024溝跡は調査区の南西～北東方向に黒ボク層を掘り込んで延びる。規模は、長さ54m、幅40～50cm、深さは6～30cmを測り北東に下降する。RG025溝跡はRG024溝跡と切り合い関係にありそれよりも新しい。規模は長さ58m、幅は60～90cm、深さは14～22cmで北東方向にRG024溝跡と平行する。RG024溝跡とRG025溝跡からは土師器の小破片が合わせて60点出土していることから古代の溝跡と推測される。両方の溝は、調査区の西側において削ぎされ消滅している。RG026溝跡は長さ8.5mで北から調査区南際に延びる。幅は50～70cm、深さは最大で35cmである。埋土から比較的新しい溝と思われる。

＜土器＞ 4の須恵器はRG025溝跡からの出土であるが、それ以外の土器はII層黒褐色シルト層からの出土である。いずれも近隣より運び込まれたものと思われる。不掲載ではあるが、土師器の小破片は全体で386点を数える。

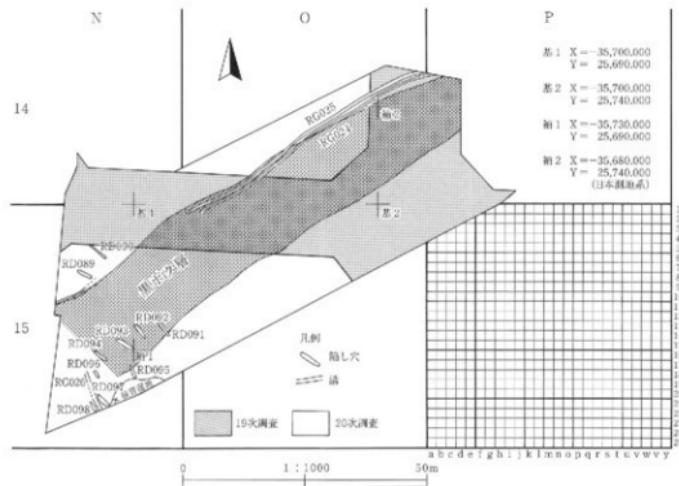
〈陶磁器〉 7は肥前産の染付碗である。8は内面が無釉であることから肥前産の瓶の底部である。9は大堀相馬産の灰釉碗の削部～底部である。10は瀬戸産の摆件である。

〈木碗〉 11の漆木碗は調査区の南端、後背湿地からの出土である。排水不良によって生じた泥炭層に流れ込んだものと思われる。漆の状態は良好で器色は極暗赤褐色である。木碗から陶器碗に移行する近世のものと思われる。

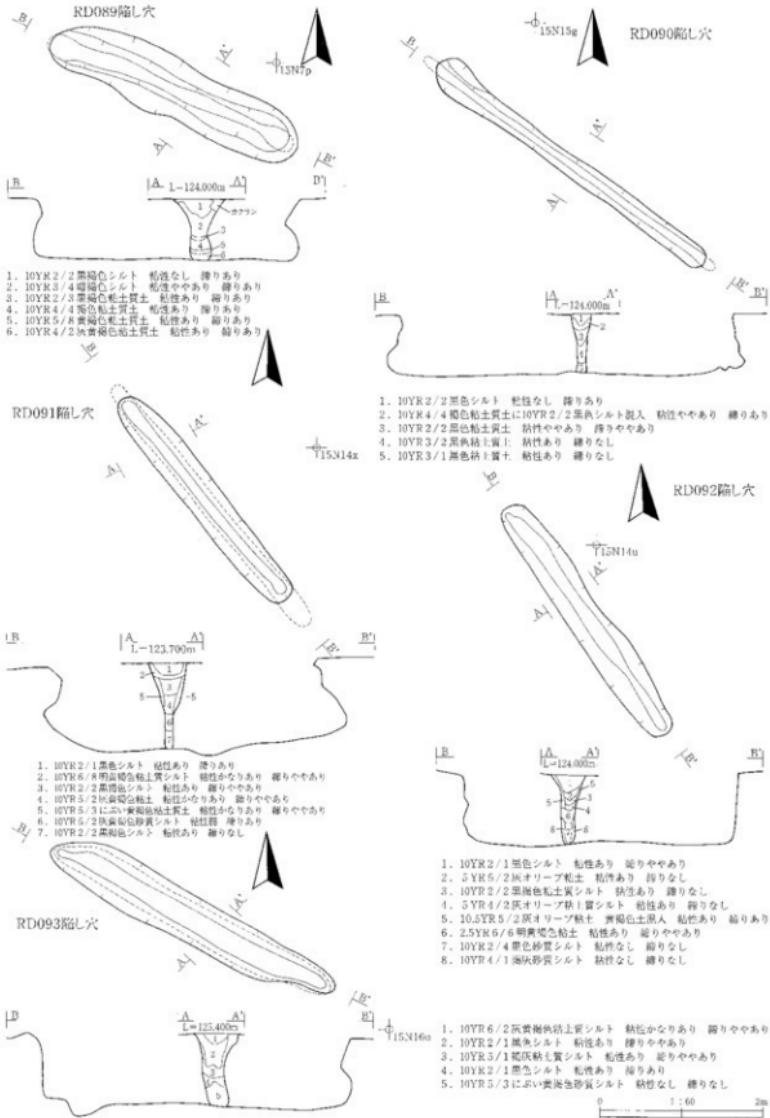
5. まとめ

野古A12次調査（平成13年度）においては、古墳時代末～平安時代前半まで営まれた住居跡が27棟確認されている。住居域は鹿妻塚農業用水路に沿って南西側にさらに広がる可能性があると予想されていたが、本次調査では住居跡は確認されなかった。また、鹿妻塚に沿って古代の溝が延びることから、用水として利用していた可能性がある。陥穴遺構の検出からは、縄文時代にあっては狩猟場であったと考えられる。今後の周辺遺跡の調査進展に伴いさらに野古A遺跡の全体像が明らかになるものと思われる。

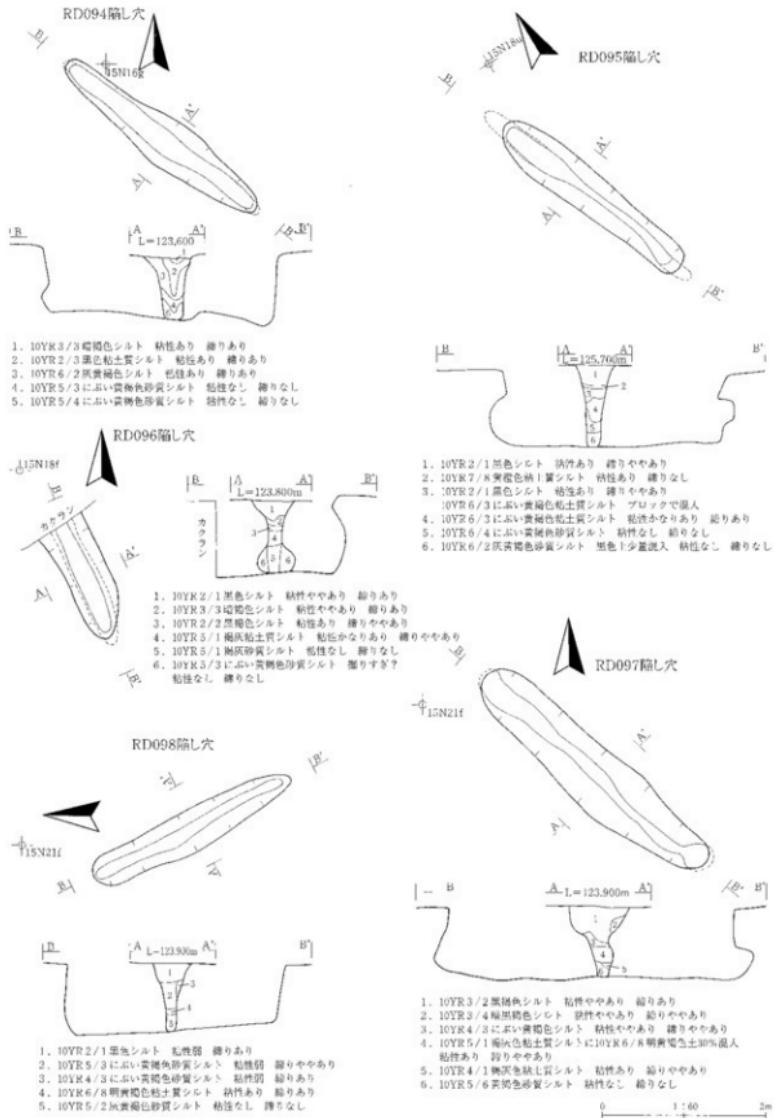
以上、野古A遺跡20次調査に係わる報告は、これをもって全てとする。



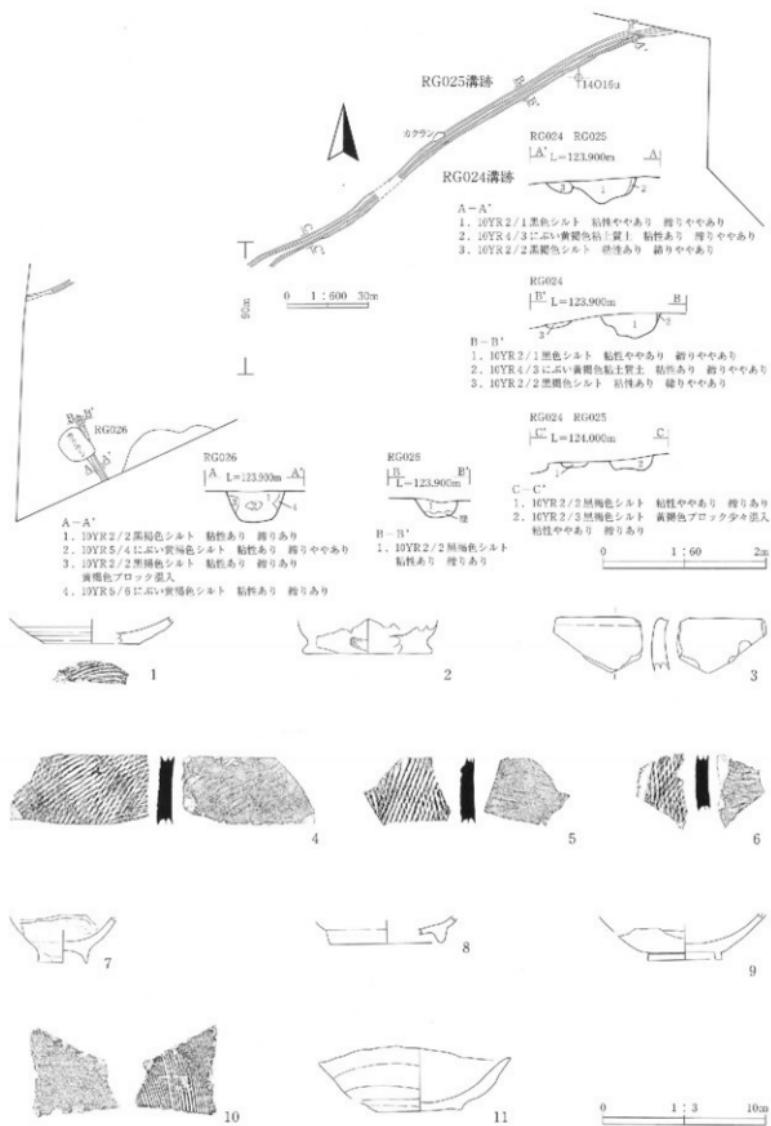
第1図 野古A遺跡第20次調査 遺構配置図



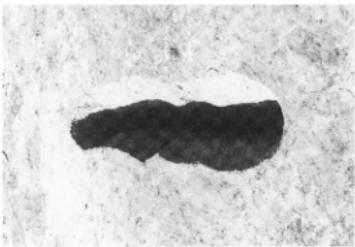
第2図 野古A遺跡第20次調査 検出遺構(1)



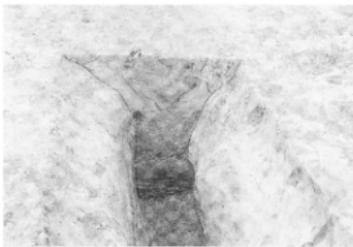
第3図 野古A遺跡第20次調査 検出遺構(2)



第4図 野古A遺跡第20次調査 検出遺構(3) 及び出土遺物



RD089陥し穴完掘(南東から)



RD089陥し穴断面(南から)



作業風景



RD090陥し穴断面(南から)



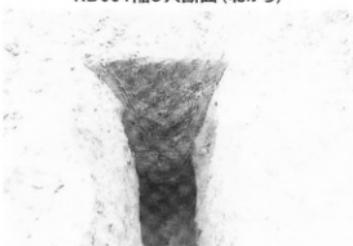
RD090陥し穴完掘(南から)



RD091陥し穴断面(北から)



RD092陥し穴完掘(南から)

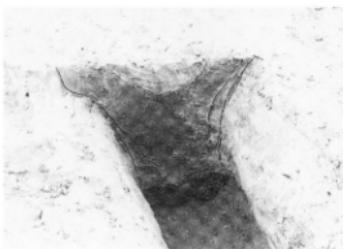


RD092陥し穴断面(南から)

写真図版 1 野古 A 遺跡第20次調査 検出遺構 (1)



RD093陥し穴完掘(南から)



RD093陥し穴断面(北から)



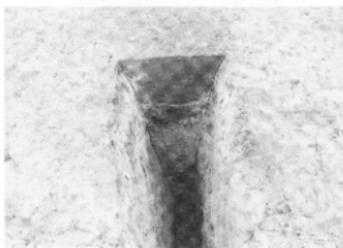
RD094陥し穴完掘(南から)



RD094陥し穴断面(北から)



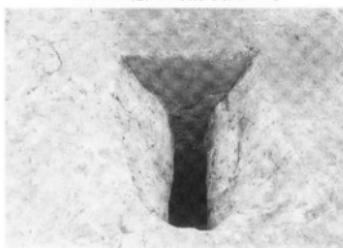
RD095陥し穴完掘(南から)



RD095陥し穴断面(南から)

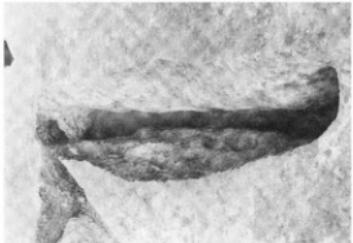


RD096陥し穴完掘(南から)

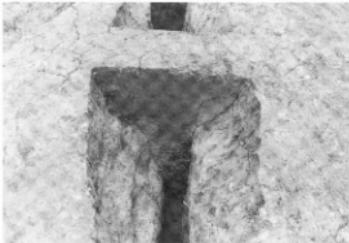


RD096陥し穴断面(南から)

写真図版2 野古A遺跡第20次調査 検出遺構（2）



RD097陥し穴完掘(南から)



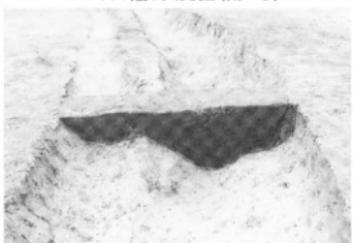
RD097陥し穴断面(南から)



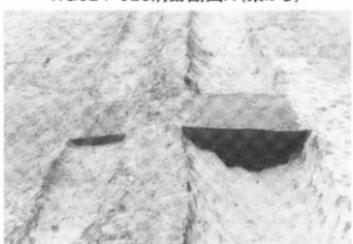
RD098陥し穴完掘(南から)



RD098陥し穴断面(南から)



RG024・025溝跡断面A(東から)

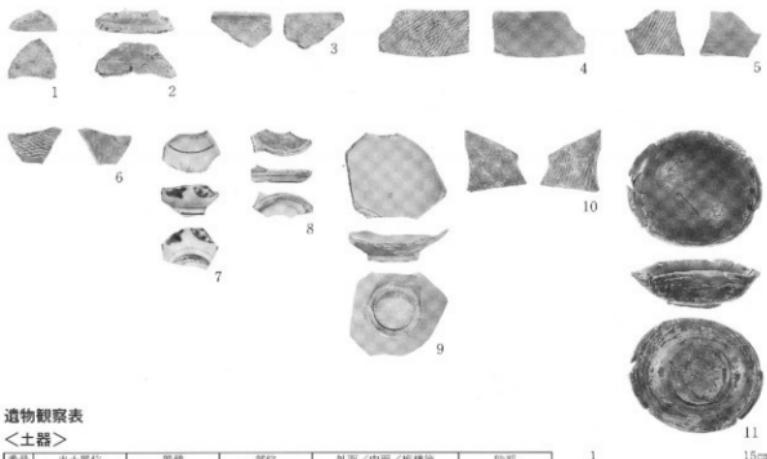


RG024・025溝跡断面B(東から)



RG026溝跡平面(南から)

写真図版3 野古A遺跡第20次調査 検出遺構 (3)



遺物観察表

<土器>

番号	出土場所	器種	断紋	外面/内面/模様等	時期
1	E型	土師器・环	底部	近縁目輪・魚切り	平安時代
2	E型	土師器・甕	底部	ヨコナデ	平安時代
3	E型	土師器・甕	口縁部	ヨコナデ	平安時代
4	式G025	陶器器・甕	腹部	タタキ目	平安時代
5	E型	陶器器・甕	腹部	タタキ目	平安時代
6	E型	陶器器・甕	腹部	タタキ目	平安時代

<陶磁器ほか>

番号	出土場所	種別	器種	口径cm	底径cm	高さcm	胎土	釉薬他	用途	年代
7	E型	陶器	甕	(3)			にぶい黄色	輪付・透明釉	肥前	18C
8	E型	陶器	甕		(7)		灰色	内面輪なし	肥前	18C
9	E型	陶器	甕		(5)		灰色	灰被	大船相馬	19C
10	E型	陶器	瓶鉢				にぶい褐色	外面部面なし	酒戸	18C
11	後背溝跡	水路	甕	12.0	5.5	3.8	暗赤色	漆	墓地	19C

写真図版4 野古A遺跡第20次調査 出土遺物

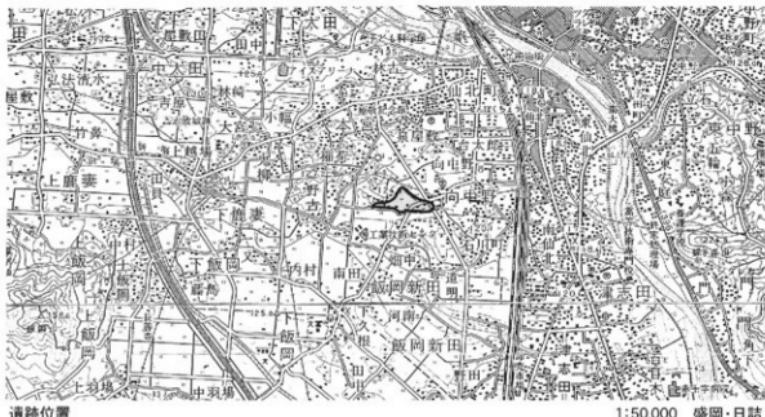
報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうきりやくほう								
吉	岩手県理文文化財発掘調査報								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団理文文化財調査報告書								
シリーズ番号	第455号								
調査者	小松則也・本多康一郎								
調査機関	財團法人岩手県文化振興事業団理文文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田11-185 TEL (019) 638-9002								
発行年月日	西暦2004年3月25日								
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯 ° °	東経 ° °	調査期間	調査面積	調査原因		
野古A遺跡 第20次調査	岩手県盛岡市下 飯田北33-1ほか	03201	L E 16 -2155	39度 40分 40秒	141度 07分 58秒	2003.09.12 ~ 2003.10.28	1,801m ²	盛岡広域都市計 画事業 既開発新 都市土地区域整 理事業	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
野古A遺跡 第20次調査	散布地	縄文時代 平安時代	階級式10番 溝溝3条	土師器 陶器器					

※緯度・経度は世界測地系

いいおかいかわ
(35) 飯岡才川遺跡第5次調査

所 在 地 盛岡市本飯岡新田2地割40-2ほか
委 託 者 地域振興整備公団岩手総合開発事務所
事 業 名 盛岡広域都市計画事業
盛岡南新都市土地区画整理事業
発掘調査期間 平成15年6月25日～9月11日
調査対象面積 1,013m²
発掘調査面積 1,258m²
遺跡番号・略号 LE 16-2291・ISW-03-5
調査担当者 小松則也・本多準一郎
協力機関 盛岡市教育委員会



1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。この事業は、平成2年9月に岩手県・盛岡市・旧都南村の三者が地域振興整備公団に対して事業申請を行い、これを受け公団は実施計画を策定した。事業は平成3年に開始され現在に至る。

飯岡才川遺跡5次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成15年度の事業とすることが確定し、財團法人岩手県文化振興事業団に通知した。これを受け、平成15年4月1日財團法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施するに至った。

(地域振興整備公団岩手総合開発事務所)

2. 遺跡の立地

飯岡才川遺跡はJR東北本線仙北町駅から南西約1.5kmに位置し、才石川によって形成された標高123m前後の河岸段丘の一部に立地している。調査前は畠及び休耕地になっていた。北東約300mに奈良・平安時代の大規模集落で知られる台太郎遺跡がある。

3. 基本土層

- I層 10Y R3/2 黒褐色シルト（現表土）上部分糞の根 粘性なし 繊りあり
- II層 10Y R2/1 棕褐色シルト（黒ボク層） 粘性なし 繊りあり
- III層 10Y R3/4 黒褐色砂質シルト（漸移層） 粘性なし 繊りあり
- IV層 10Y R5/6 黄褐色砂質シルト（地山層） 粘性なし 繊りなし

4. 調査の概要

主となるA区からは4基の陥し穴と溝1条、飛び地のB区からは55基の柱穴状ピットを検出した。

＜陥し穴＞ 4基共に北西・南東を向く。R D033・034・036陥し穴は平面形は梢円形で比較的大型である。R D035陥し穴の平面形は溝状で狭く掘り込まれている。規模等の詳細は表で示す。

遺構名	位置	平面形	開口径cm	底部径cm	深さcm	壁	備考
R D033	-1B 7 u	梢円形	372×55	370×25	50	一方は直立する	
R D034	-1B 6 y	不整梢円形	398×25	320×25	55	緩やかな立ち上がる	風倒木？
R D035	-1B 7 o	溝状	320×43	282×12	65	直立し外傾する	
R D036	-1C 7 h	梢円形	375×98	350×16	64	底面から外傾する	

＜溝跡＞ 1条のみでRG019溝跡はA区北側の西縁に位置する。規模は長さ16.20m、幅は36~60mである。深さは6~15cmでやや西に傾斜し調査区外に延びる。遺物は無く時期は不明である。

＜柱穴状ピット＞ B区から柱穴状ピット55基を検出した。縦横に並ぶものが多いが、柱痕や掘り方は認められず、ピットの深さや底面の状態から植栽痕の可能性がある。

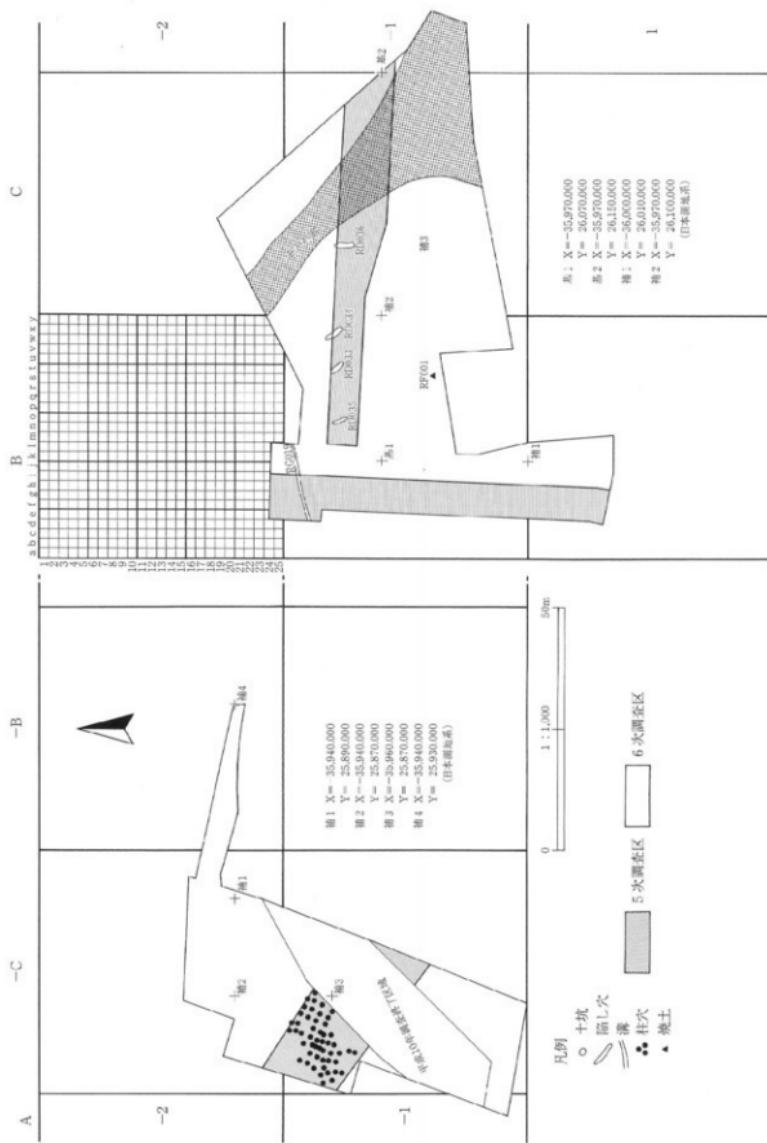
＜陶磁器＞ 表採であるが3点出土した。1は大輪粗馬鹿碗の胴部下半の破片である。2は青磁大皿の底部破片で肥前窯である。3は染付の飯茶碗で肥前窯である。

5.まとめ

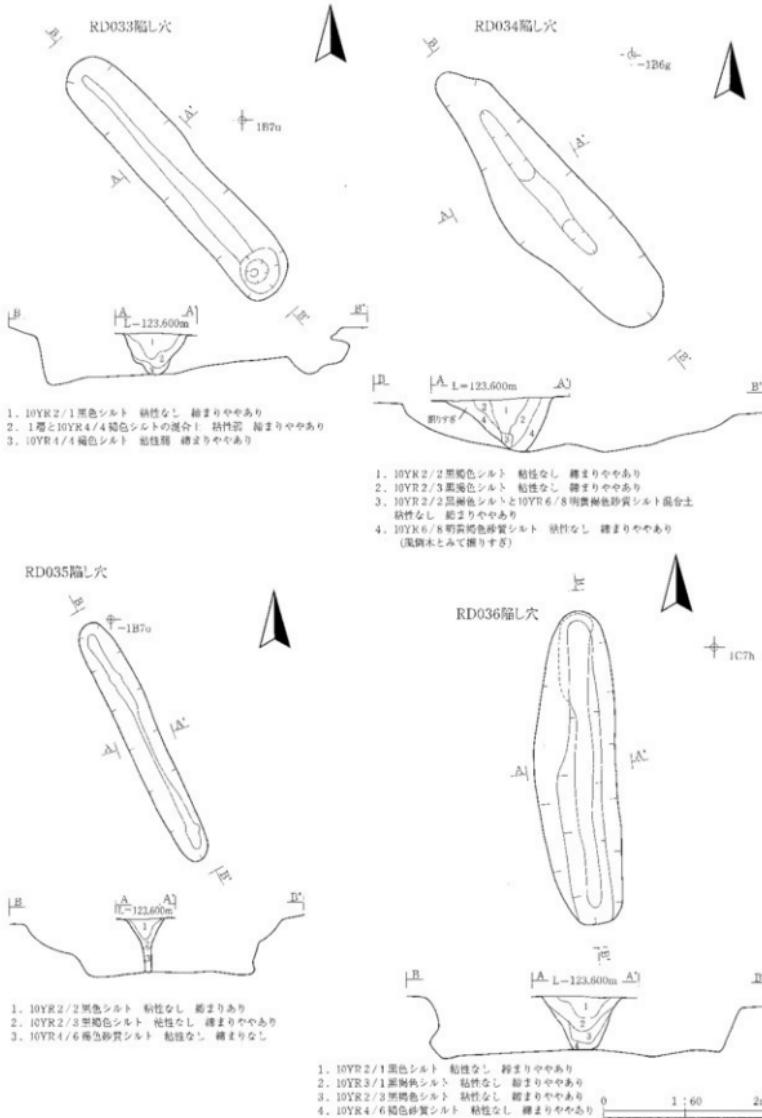
本遺跡は生活の中心地には該当しないが、陥し穴遺構の検出から縄文時代は狩猟場であったと考えられる。その後は、溝跡の検出から農地として利用されものと推測される。また、陶磁器の出土は周辺に生活域が存在したこと意味する。

本調査区には、古代から平安時代の集落跡の一部が存在すると予想されていたが、それに関連する情報は得られなかった。しかし、これについては、まだ本次調査区周辺部に存在する可能性を大きく残している。今後の周辺遺跡の調査進展に伴い飯岡才川遺跡の全体像が明らかになるものと思われる。

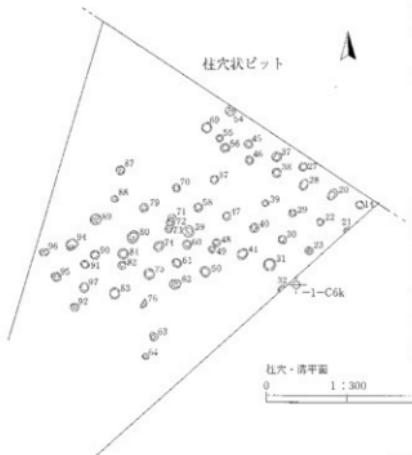
以上、飯岡才川遺跡第5次調査に係わる報告は、これをもって全てとする。



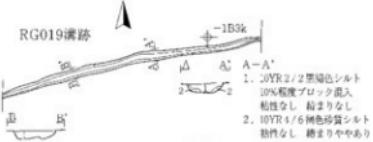
第1図 飯岡才川遺跡第5次調査 遺構配置図



第2図 飯岡才川遺跡第5次調査 検出遺構（1）



P P番号	開口部径(cm)	深さ(cm)	P P番号	開口部径(cm)	深さ(cm)
P P14	48×44	6.9	P P60	50×49	13.9
P P20	62×48	7.9	P P61	62×51	8.4
P P21	46×36	13.2	P P62	64×62	15.0
P P22	44×40	16.3	P P63	51×40	32.3
P P23	47×44	25.4	P P64	39×32	28.8
P P27	52×50	9.0	P P67	42×40	8.7
P P28	60×48	13.7	P P69	60×56	15.4
P P29	44×41	16.0	P P70	47×42	9.2
P P30	50×47	12.3	P P71	48×42	10.6
P P31	72×68	18.9	P P72	50×(40)	10.0
P P32	54×(52)	8.6	P P73	51×49	14.4
P P37	56×50	14.3	P P74	62×56	9.7
P P38	54×50	14.6	P P79	50×48	17.1
P P39	38×33	23.5	P P80	64×59	16.5
P P40	54×53	20.8	P P81	37×56	24.8
P P41	63×57	11.5	P P82	50×50	7.6
P P45	52×50	13.1	P P83	66×63	11.1
P P46	46×44	4.3	P P87	48×47	18.5
P P47	48×46	9.1	P P88	41×34	11.7
P P48	47×41	11.7	P P89	66×62	21.5
P P49	44×40	12.0	P P90	54×49	5.8
P P50	61×56	8.5	P P91	50×40	6.3
P P54	54×50	13.5	P P92	48×44	4.6
P P55	48×46	18.4	P P94	71×57	11.0
P P56	75×52	4.7	P P95	58×52	23.7
P P57	44×42	2.0	P P96	54×45	15.5
P P58	49×50	6.7	P P97	56×52	10.7
P P59	70×67	23.0			



B-B' 1. 10YR 2/2 黒褐色シルト
10%程度ブロック混入
粘性なし 粒まりなし
2. 10YR 5/6 錆色砂質シルト
熱性なし 粒まりややあり

A-A' 1. 10YR 2/2 黒褐色シルト
10%程度ブロック混入
粘性なし 粒まりなし
2. 10YR 5/6 錆色砂質シルト
熱性なし 粒まりややあり



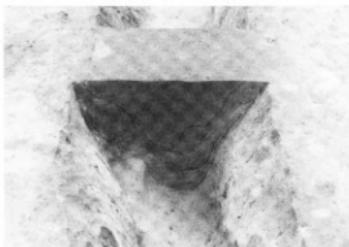
遺物観察表
<陶器>

番号	出土塔位	種別	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胎土	釉系他	产地	年代
1	表探	両唇	瓶				暗灰色	灰釉	大庭朝馬	18C
2	表探	青磁	壺				明灰色	透明釉	肥前	不明
3	表探	追沿	瓶		3.8		灰色	灰釉	肥前	19C

第3図 飯岡才川遺跡第5次調査 検出構造(2) 及び出土遺物



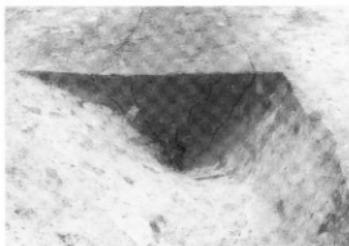
RD033陥し穴完掘（南から）



RD033陥し穴断面（北西から）



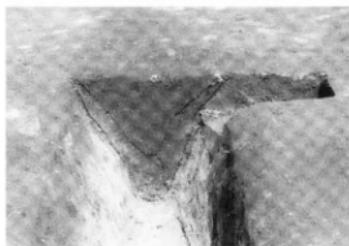
RD034陥し穴完掘（南から）



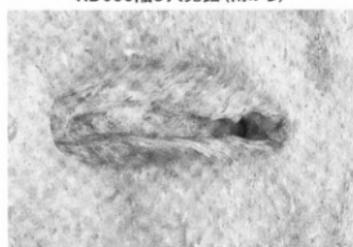
RD034陥し穴断面（南から）



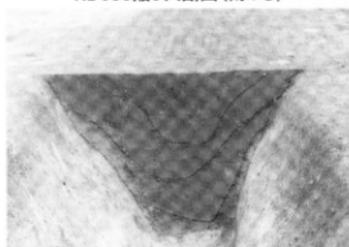
RD035陥し穴完掘（南から）



RD035陥し穴断面（南から）



RD036陥し穴完掘（南から）

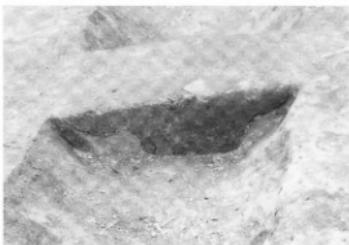


RD036陥し穴断面（南から）

写真図版 1 飯岡才川遺跡第5次調査 検出遺構（1）



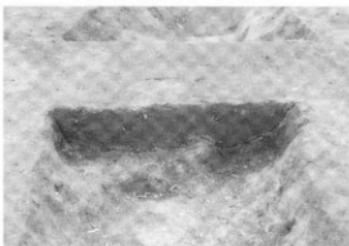
RG019溝跡完掘（東から）



RG019溝跡断面（東から）



B区柱穴状ピット（南から）



RG019溝跡断面（東から）



A区調査終了風景

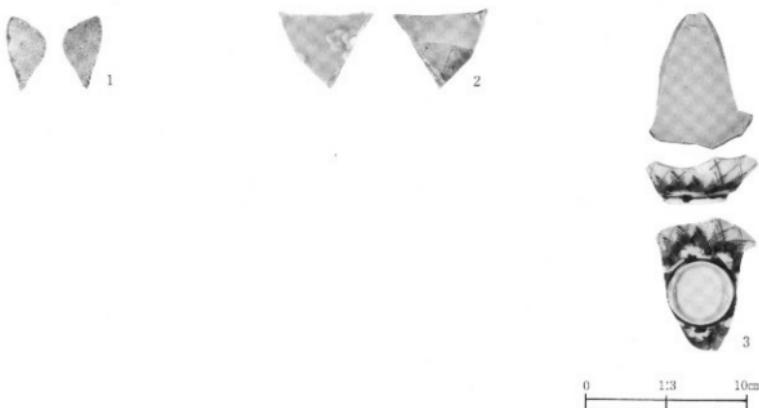


B区調査終了写真（南から）



作業風景

写真図版2 飯岡才川遺跡第5次調査 検出遺構（2）



写真図版3 飯岡才川遺跡第5次調査 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはっくつちょうさりやくほう						
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第455集						
編著者名	小松則也・本多準一郎						
収集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日	西暦2004年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
飯岡才川遺跡 第5次調査	岩手県盛岡市 飯岡新田2地 割40-2	03201	L E16 -2291 39度 40分 44秒	141度 08分 00秒	2003.06.25 ~ 2003.09.11	1,258m ²	盛岡広域都市 計画事業 盛岡 南新都市土地 区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
飯岡才川遺跡 第5次調査	集落跡	縄文時代 ~ (平安時代)	陥し穴4基 溝跡1条 柱穴状ピット55基	陶器	梢円形・溝状の落とし穴遺構		

*緯度・経度は世界測地系

(36) 飯岡才川遺跡第6次調査

所 在 地 盛岡市本飯岡新田2地割40-2ほか

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課

事 業 名 盛岡広域都市計画事業

盛岡南新都市土地区画整理事業

発掘調査機関 平成15年8月1日～9月11日

調査対象面積 3,201m²

発掘調査面積 4,339m²

遺跡番号・略号 LE 16-2291・ISW-03-6

調査担当者 小松則也・本多準一郎

協力機関 盛岡市教育委員会



1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するため策定された土地区画整理事業である。飯岡才川遺跡は、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成15年度の事業とすることで確定した。これを受け、同年4月1日財團法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を成立し、発掘調査を実施するに至った。

(盛岡市都市整備部盛岡南整備課)

2. 遺跡の立地

飯岡才川遺跡はJR東北本線仙北町駅から南西約1.5kmに位置し、季石川によって形成された標高123m前後の河岸段丘の一部に立地している。調査前は畠及び休耕地になっていた。北東約300mに奈良・平安時代の大規模集落で知られる台太郎遺跡がある。

3. 基本土層

I層 10Y R3/2 黒褐色シルト（現表土）上部分箇の根 粘性なし 織りあり

II層 10Y R2/1 暗褐色シルト（黒ボク層）粘性なし 織りあり

III層 10Y R3/4 黒褐色砂質シルト（漸移層）粘性なし 織りあり

IV層 10Y R5/6 黄褐色砂質シルト（地山層）粘性なし 織りなし

4. 調査の概要

＜土坑＞ R D038～041土坑の上坑は黒ボク層上面での検出で、埋土の状態から近世の遺構と考えられる。

R D037・038・039土坑からは角釘が出土している。またR D039土坑からは陶器片も出土した。R D042土坑はR G020溝跡に切られる土坑で、北東側の壁際からは1個体分の馬歯と四肢骨の一組が出土した。R D051土坑は焼土を伴う。

＜陥し穴＞ 形状は2つのタイプに分けられる。一つは平面形が梢円に近く底部が割に広いものと、もう一つは溝状で狭く掘りこまれているものである。R D043・044・045・046・049陥し穴は梢円形のタイプであり、R D044・045・047・050陥し穴は溝状のタイプである。R D044～047陥し穴は黒ボク層の上から確認できず、黒ボクを除去した後に検出したものである。陥し穴の形状が異なることから、両者には時期差があるものと考えられる。

＜溝跡＞ R G022溝跡の規模は長さ42m、幅は50～100cmである。深さは18～40cmでやや西に下降する。黒色土2層から上・和田a降下火山灰を検出した。よって、時期は平安時代である。R G020溝跡は第2次調査時に検出された溝の延長部分である。規模は長さ23.3m、幅は40～80cmを測る。深さは23～22cmで西に下降する。B区のR G021溝跡も第2次調査時に検出した溝の延長分である。規模は長さ71m、幅180～240m、深さは80～110cmを測る。南北方向からほぼ直角に向きを変えて東西に延びる。他にR G023溝跡とR G024溝跡を検出した。

＜柱穴状ピット＞ B区から柱穴状ピットを52基検出した。縦横に並ぶものが多く恣意的ピットではあるが不整列なものもあった。柱痕や掘り方は認められなかった。

＜焼土＞ R G024溝遺構の傍から焼土を1基検出した。堆積状況から二次的焼土と思われる。

＜土器＞ 繩文時代晩期大洞C 2～A式の土器片1点と土師器片3点は遺構外からの出土である。

＜陶磁器＞ 12点の内、5はR D039土坑から、6はpp36柱穴状ピットからの出土で、他10点は遺構外耕作土中からの出土である。産地でみると在地3点、肥前5点、大堀相馬2点、瀬戸美濃1点、不明1点である。

＜石器＞ 凹石1点を表挿した。形状から近現代に使用したものと思われる。

＜鉄製品＞ R D037～039土坑から3点の角釘が出土した。近世のものと思われる。

5.まとめ

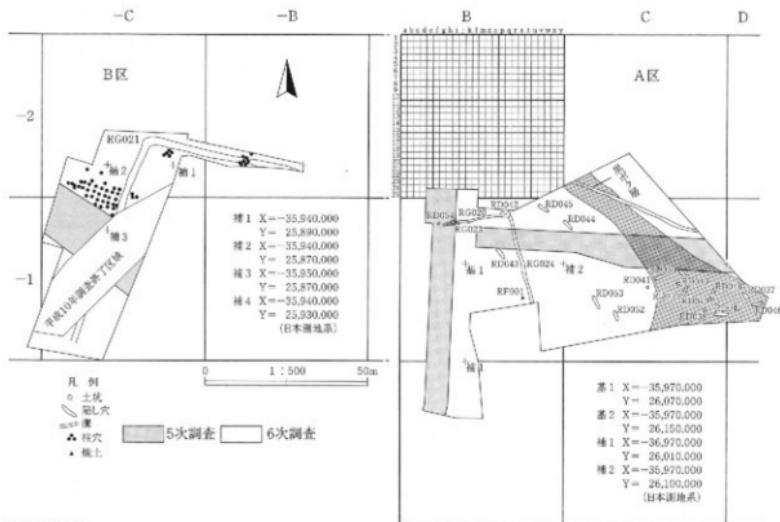
本遺跡は生活の中心地には該当しないが、陥し穴遺構の検出から繩文時代は狩猟場であったと考えられる。その後は、溝跡の検出から農地として利用されたものと推測される。また、陶磁器の出土は周辺に生活域が存在したこと意味する。さらに、柱穴状ピット群は、現代においては何らかの作物が栽培されていたことを示すものである。本遺跡には、古代から平安時代の集落跡の一部が存在すると予想されていたが、それに関連する情報は得られなかった。

以上、飯岡才川遺跡第6次調査に係わる報告は、これをもって全てとする。

報 告 書 抄 錄

ふりがな 表記	ふりがな 表記	いわてけいせいだいぶかかひはくつちゅうきりくほう
表記	表記	弓子町文化財発掘調査結果書
シラーグループ名	弓子町文化財発掘調査結果書	
シリーズ番号	番号	第155号
発掘場所	名	小松町一・本多庄一郎
発掘場所	地名	福岡県飯塚市小松町一丁目、本多庄一郎
発掘場所	郵便番号	816-0841
発掘場所	電話番号	093-981-1851
発行年月日	西暦	2004年3月25日
ふりがな 所在地名	ふりがな 所在地	コード 所在地番号
飯岡才川遺跡 第6次調査	飯岡才川遺跡 新田2地割40-2	03201 LE16 -Z91
		北緯 東経
		39度 40分 44秒
		141度 48分 00秒
		調査期間
		2003.08.01～ 2003.09.11
		調査面積
		4,339 m ²
所轄課名	所轄課名	轄管庁
飯岡才川遺跡 第6次調査	歴史博物館	福岡県立歴史博物館 福岡県立歴史博物館 千種別事務室
所轄課名	所轄課名	主な時代
飯岡才川遺跡 第6次調査	歴史博物館	縄文時代
		土坑・陥し穴1基 柱穴5基 柱穴状ピット2基
		(平安時代)
所轄課名	所轄課名	主な遺構
飯岡才川遺跡 第6次調査	歴史博物館	土坑・柱穴 柱穴5基 柱穴状ピット2基
		(平安時代)

※緯度・経度は世界測地系



遺物觀察表

〈十器〉

番号	出土位置	器種	部位	外面／内面／板根等	時期
1	I層	縄文・体	胸上部	波形沃沈頭	縄文時代前期
2	II層	土師器・皿	L型瓶	ヨコナヂ／ヨコナヂ	平安時代
3	I層	土師器・甌	側部	ヨコナヂ／ヨコナヂ	平安時代
4	II層	土師器・甌	底部		平安時代

〈陶磁器〉

番号	出土位置	種別	器種	口径cm	底径cm	高さcm	船底	船頭部	舵	年代
5	R D009	陶器	甕				暗褐色	鉢形		19c
6	P P36	陶器	土瓶				灰白色	透明釉	大眾相馬	19c
7	I 漢	陶器	甕				灰白色	輪付／透明釉	肥前	18c
8	I 漢	陶器	甕		(4.1)		にぶい灰色	黒縁	肥前夷安	18c
9	I 漢	陶器	甕				黄褐色	透明釉	肥前	18c
10	I 漢	陶器	甕	(12.0)	(8.0)	(4.2)	灰白色	輪付／透明釉	肥前	19c
11	I 漢	陶器	鉢		(6.0)		灰黑色	直腹	直腹	19c
12	I 漢	陶器	甕		(6.0)		灰白色	輪付／透明白	在船	19c
13	I 漢	陶器	甕	(12.0)	(4.2)	(5.0)	灰白色	墨紙彫り	小明	19c
14	I 漢	陶器	鉢		(4.2)		灰白色	輪付／透明釉	肥前	18c
15	I 漢	陶器	甕	(24.0)			灰白色	輪付／透明釉	肥前	18c
16	I 漢	陶器	甕				灰白色	扁肚型	大眾相馬	18c

石器

番号	出土地点	層位	種類	石質	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	変始
17	-1B24y	1層	凹石	安山岩	11.5	10.8	6.0	900	鳥羽山採

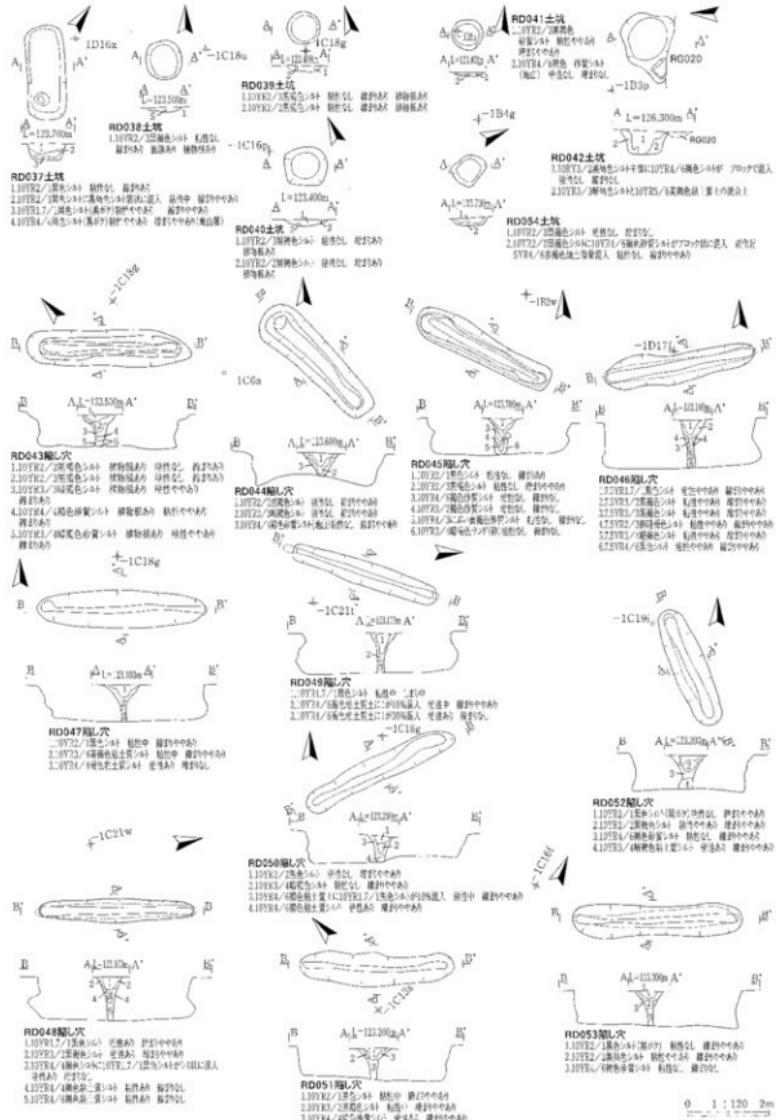
〈鉄製品〉

番号	出土地点	層位	性質	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	写真
18	R D037	離土中層	釘	4.2	0.4	0.3	1.5	1/1
19	R D038	離土中層	釘	4.5	0.4	0.4	2.2	1/1
20	R D039	離土中層	釘	4.2	0.5	0.3	1.6	1/1

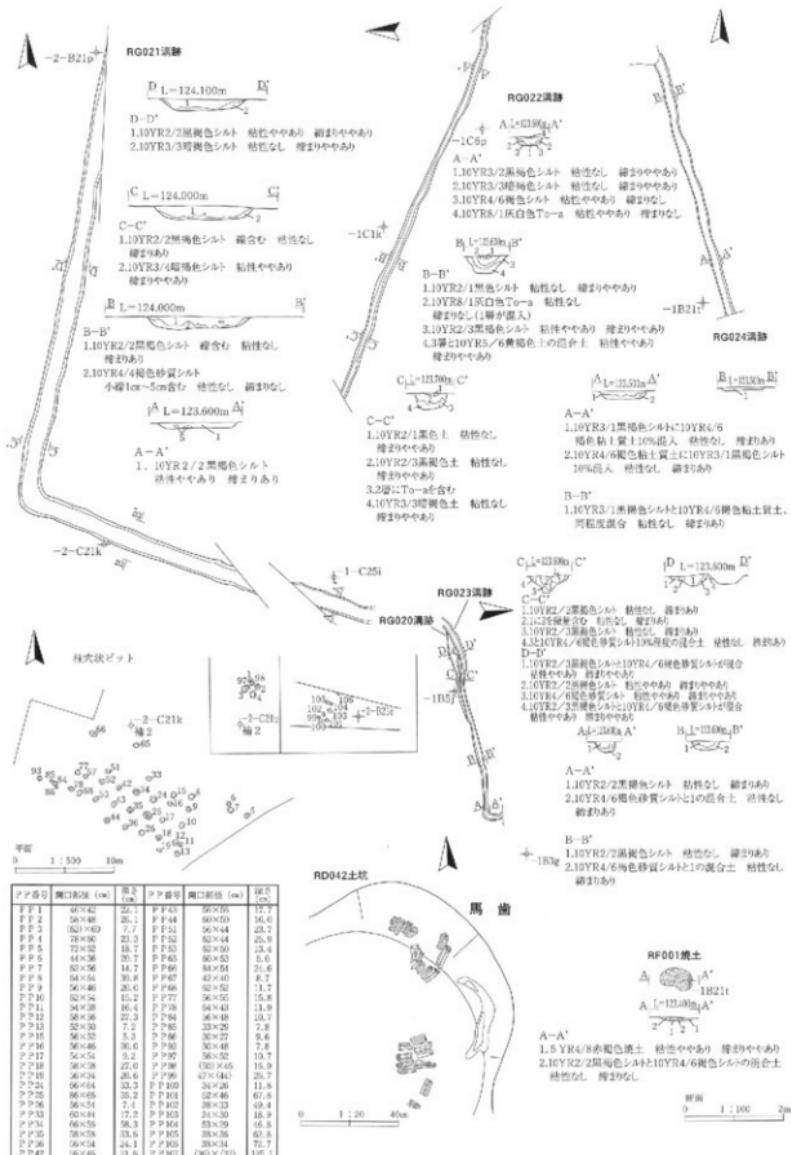
＜動物遺存体＞

序号	出土地点	层位	堆积	左上甄	左下甄	右上甄	左下甄	四联瓮	写真
21	R-D042	下层	马窑	19本	27本	19本	15本	数点	1/4.5

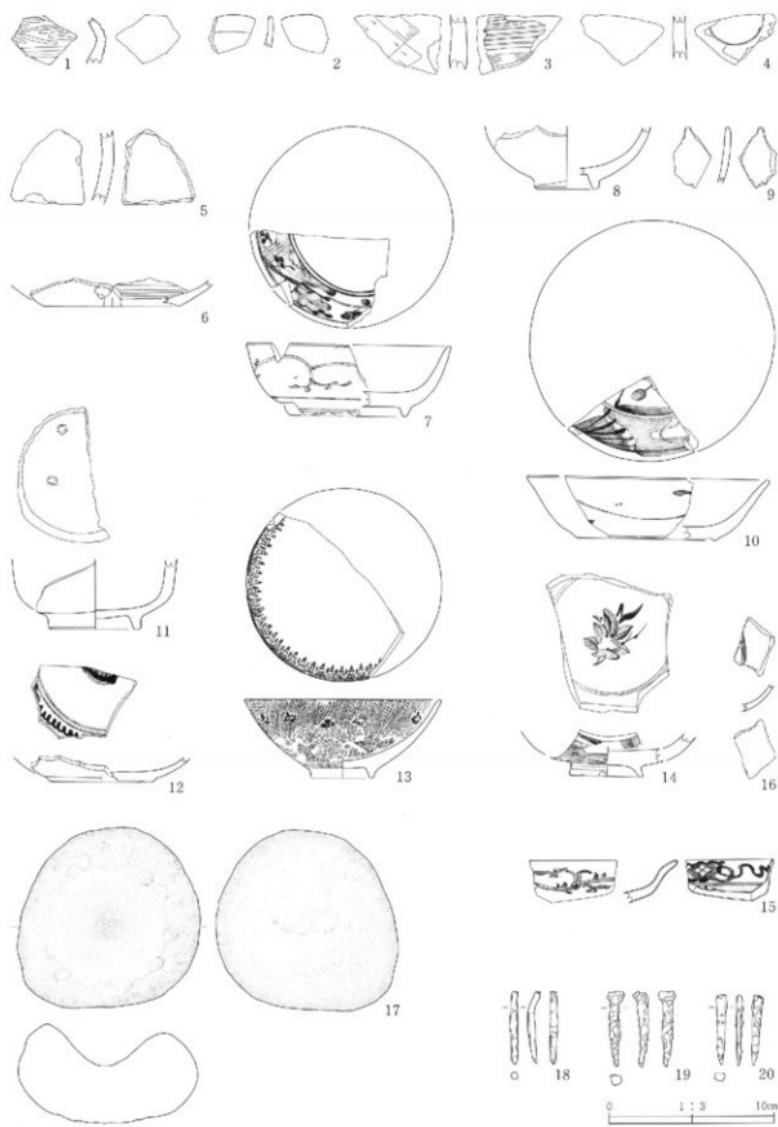
第1図 飯岡才川遺跡第6次調査 遺構配置図



第2図 飯岡川遺跡第6次調査 検出遺構(1)



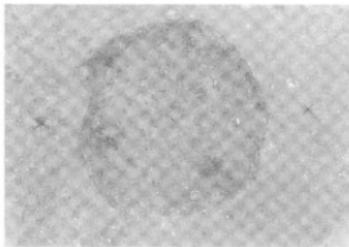
第3回 飯岡才川遺跡第6次調査 検出遺構(2)



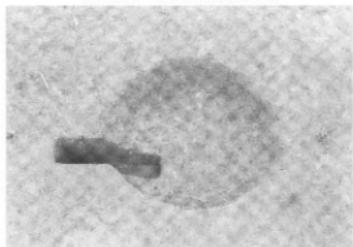
第4図 飯岡才川遺跡第6次調査 出土遺物



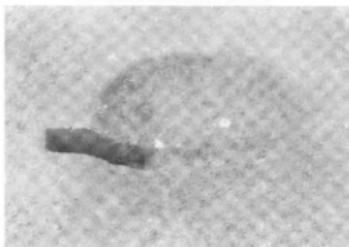
RD037土坑完掘(東から)



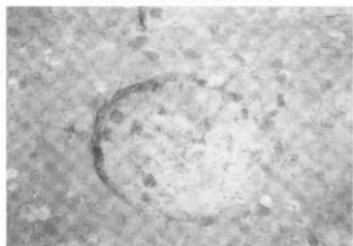
RD038土坑完掘(南から)



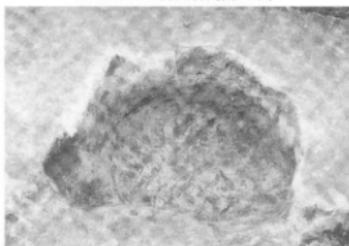
RD039土坑完掘(南から)



RD040土坑完掘(南から)



RD041土坑完掘(南から)



RD042土坑完掘(南から)



RD042土坑馬齒出土状況(南から)

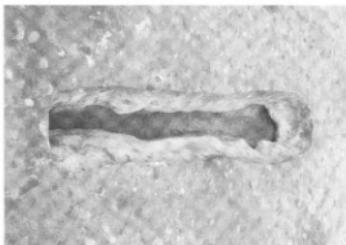


RD043陥し穴完掘(南から)

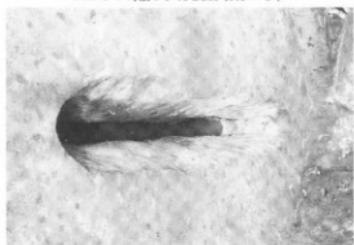
写真図版 1 飯岡才川遺跡第6次調査 検出遺構(1)



RD044陥し穴完掘(南から)



RD045陥し穴完掘(南から)



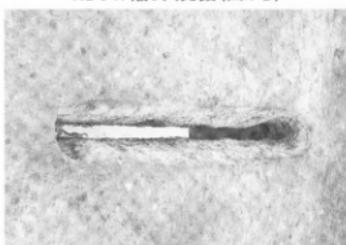
RD046陥し穴完掘(西から)



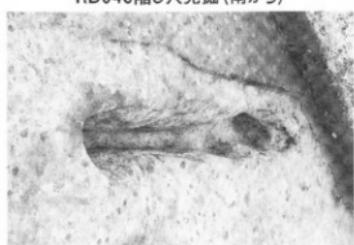
RD047陥し穴完掘(西から)



RD048陥し穴完掘(南から)



RD049陥し穴完掘(南から)

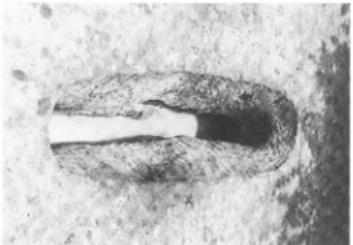


RD050陥し穴完掘(南から)

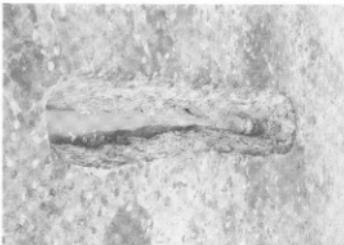


RD051陥し穴完掘(北西から)

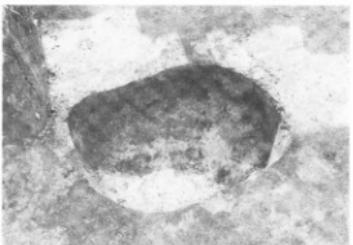
写真図版2 飯岡才川遺跡第6次調査 検出遺構(2)



RD052陥し穴完掘(北から)



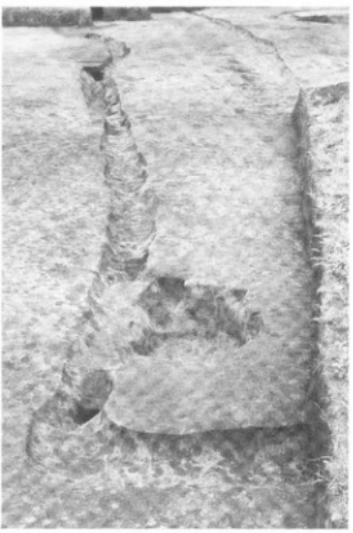
RD053陥し穴完掘(北南から)



RD054土坑完掘(東から)



RF001焼土検出(南西から)



RG020溝跡完掘(東から)



RG021溝跡完掘(南から)

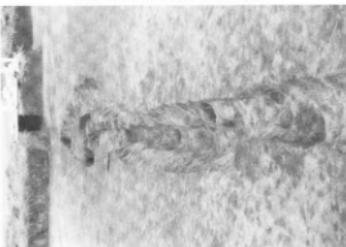
写真図版3 飯岡才川遺跡第6次調査 検出遺構(3)



RG022溝跡完掘(西から)



RG022溝跡断面(東から)



RG023溝跡完掘(東から)



RG024溝跡完掘(北から)



B区柱穴状ピット(南から)



A区調査終了(西から)

写真図版 4 飯岡才川遺跡第6次調査 検出遺構(4)



写真図版 5 飯岡才川遺跡第 6 次調査 出土遺物

飯岡才川遺跡出土動物遺存体について

熊谷 賢

(陸前高田市立博物館)

<まとめ>

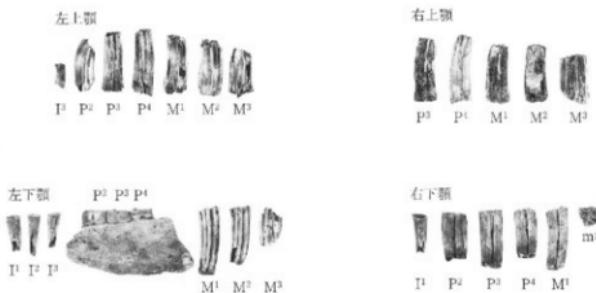
今回の飯岡才川遺跡出土のウマは、保存状態は良好とは言えないが、比較的状態の良歯を用いて、参考までに年令推定を試みた。その結果、年齢的には2才半～4才半程度の幼い個体であることが、体高は中型馬と仮定すると大型の個体である可能性が高いとの推定結果が得られた。しかし、時期が不明であること、体高推定に四肢骨を用いることができなかったことから、参考としての推定に留めたい。したがって、土坑からの出土ではあるが、その性格などについては不明である。

第1表 ウマ歯計測表 (検出された歯種のみ示した)

単位:mm

歯種	左			右		
	歯冠長	歯冠幅	全歯高	全歯高	歯冠長	全歯高
上 顎	I ³⁺ (16.0)	—	—	(16.2)	—	—
	P ² (19.9)	(19.0)	(65.5)	—	×	—
	P ³ (26.8)	(22.6)	(73.4)	27.5	23.7	(76.1)
	P ⁴ (26.2)	21.3	(80.3)	26.0	21.7	(79.6)
	M ¹ (28.7)	(23.9)	(67.8)	29.9	24.7	(65.5)
	m ¹ —	×	—	—	(23.5)	—
頸 顎	M ² (27.2)	22.0	(67.8)	27.8	23.1	(70.8)
	m ² —	×	—	25.8	24.5	—
	M ³ (30.3)	(21.1)	(55.7)	37.7	22.7	(56.1)
下 顎	I ³⁺ (17.5)	9.3	(47.4)	18.6	9.1	(46.8)
	I ⁴⁺ (17.0)	8.2	(53.1)	—	×	—
	I ⁵⁺ (18.0)	8.2	(45.3)	—	×	—
	P ¹ (28.4)	12.4	歯槽痕9.	31.4	13.3	(56.9)
	P ² (27.8)	15.8	歯槽埋立	29.1	12.8	(71.3)
	P ³ (26.7)	14.1	歯槽埋立	26.8	14.1	(63.5)
	M ¹ (27.4)	14.7	(78.5)	26.9	12.1	(76.6)
	M ² (27.2)	11.2	(72.5)	—	×	—
	M ³ (29.2)	(11.4)	(51.5)	—	—	—

遺物番号21



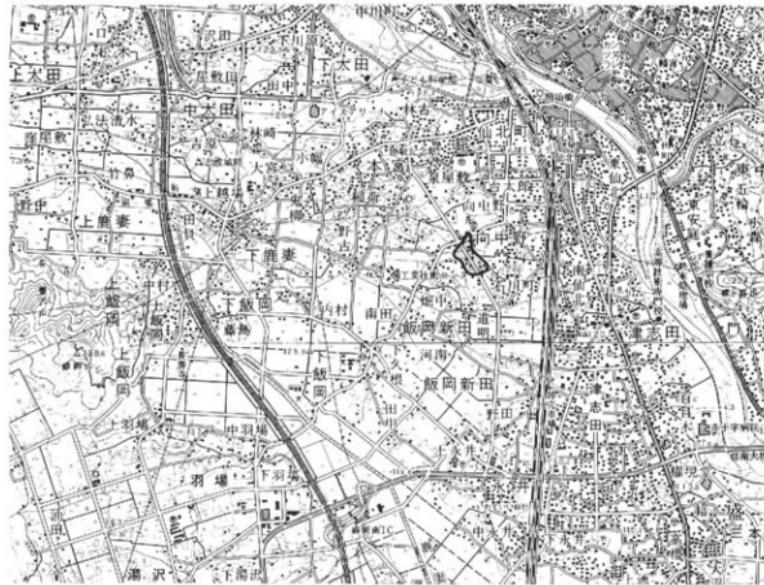
写真図版6 飯岡才川遺跡第6次調査 出土動物遺存体・馬歯

(37) 細谷地遺跡第7次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原11-2ほか
 委 託 者 地域振興整備公団
 岩手総合開発事務所
 事 業 名 盛岡広域都市計画事業
 盛岡南新都市土地区画整理事業
 発掘調査期間 平成15年10月1日～10月31日
 調査対象面積 260m²
 発掘調査面積 125m²
 遺跡番号・略号 L E 26-0214・O H Y -03-7
 調査担当者 齋藤麻紀子
 協力機関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた輪郭状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした整理事業が継続中である。



遺跡位置

1:50,000 盛岡・日説

事業対象地域に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い本調査の必要範囲を確定し、本調査は（財）岩手県文化振興事業団の委託事業として実施している。

細谷地遺跡については、岩手県教育委員会が地域振興整備公団と協議の結果、平成15年度の事業とすることが確定し、岩手県教育委員会と盛岡市および（財）岩手県文化振興事業団の両者に通知された。これを受けた両者は平成15年4月1日財団法人岩手県文化振興事業団理事長と地域振興整備公団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（地域振興整備公団岩手総合開発事務所）

2. 遺跡の立地

細谷地遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から約1.5km南西に位置し、宇石川右岸の河岸段丘上に立地している。零石川から約2km南、北上川から2km西に位置するこの遺跡は、それら大河川の氾濫原、IH河道に伴う低地より少し高い微高地に当たっている。今回の調査区は標高約122m前後で、南に向かってやや高くなる地形である。調査前は主にリンゴなどの果樹園として利用されていた。この第7次調査の調査区は、第8次調査の調査区南に隣接する。

また、遺跡周辺には、北に飯岡才川遺跡、台太郎遺跡、向中野館遺跡、西には矢森遺跡など古代を中心とする集落遺跡が多く存在する。

3. 基本層序

- 1層 10Y R2/2 黒褐色シルト層 <表土・現代の耕作土、擾乱>
- 2層 10Y R3/1 黒褐色シルト層 <部分的に見られる地山>
- 3層 10Y R3/4 暗褐色シルト層 <地山漸移層>
- 4層 10Y R4/6 揺色シルト層 <地山シルト層>
- 5層 10Y R4/4 揆色砂礫層 <地山疊層>

4. 調査の概要

2～4層はほとんど遺存しておらず、5層である砂礫層上面で遺構検出作業をおこなった。第8次調査に統く遺構面であるため、古代の遺構が検出されると想定されたが、現代の擾乱坑を1基検出したのみで、ほかに遺構はみられなかった。この擾乱坑からは、現代のスレート片や瓦片が多く出土した。

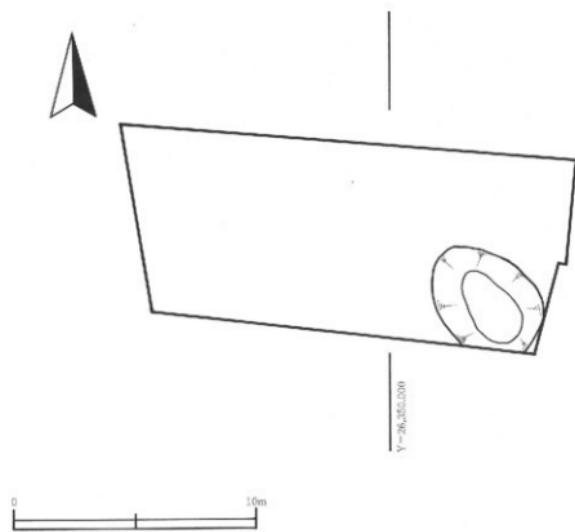
5. 出土遺物

土師器の微細な破片が5点出土した。いずれも擾乱、1層などからのもので原位置を保つものではないと考えられる。また、出土した破片はいずれも微細な破片であるため同化可能なものではない。そのため古代に属すると思われるが、さらに詳細な時期を特定し得るものではなかった。

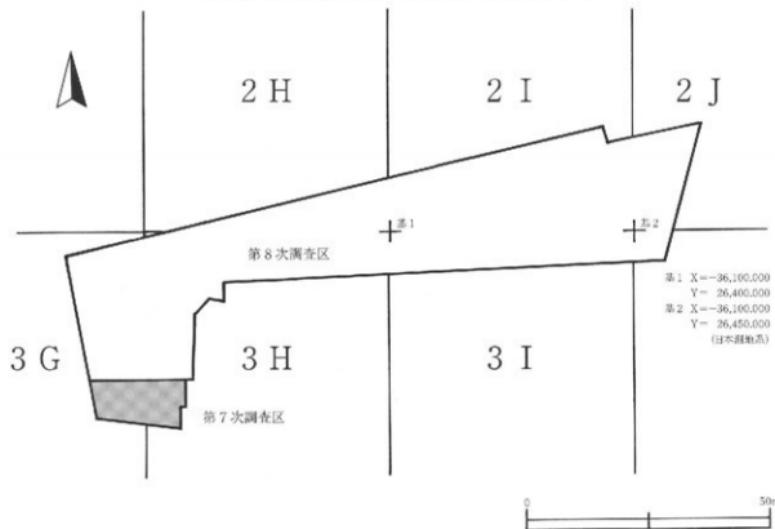
6.まとめ

今回の調査区は、隣接する細谷地遺跡第8次調査区より地形的にやや高く、遺構検出面が段丘を構成すると考えられる礫層上面であった。現代の擾乱坑を1基確認できたのみである。また、出土遺物は微細な土師器片のみであった。今回の調査で遺構、遺物から細谷地遺跡を概観すると、南に向かうにつれて地形的に高くなり、それに伴い遺構の密度が希薄になる傾向にあるようである。同時に高い部分は、現代の削平も顕著になる。8次調査区とは立地も含め古代の土地利用法が異なっていたのかもしれない。

なお、細谷地遺跡第7次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。



第1図 細谷地遺跡第7次調査 遺構配置図



第2図 細谷地遺跡第7次調査 グリッド配置図



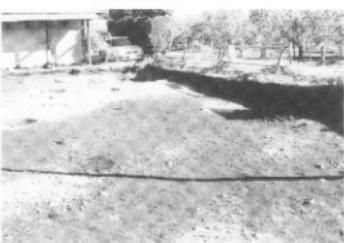
調査区全景



調査前現況(北から)



調査区西壁断面(北東から)



調査区全景(西から)

写真図版 1 細谷地遺跡第7次調査

報告書抄録

ふりがな	いわけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
編著者名	齋藤麻紀子							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001-9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
細谷地遺跡 第7次調査	岩手県盛岡市 向中野字野原 11-2	市町村	遺跡番号					
		03201	L E26 -0124	39度 40分 37秒	141度 08分 17秒	2003.10.01 ~ 2003.10.31	125m ²	盛岡城都市計画 事業 埼岡南新都 市下地区適整理事 業に伴う緊急発掘 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な構造		主な遺物		特記事項	
細谷地遺跡 第7次調査	集落跡	古代			土師器			

※緯度・経度は世界測地系

(38) 下通遺跡

所 在 地 花巻市高木第23地割156ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
事 業 名 国道4号花巻東バイパス建設事業
発掘調査期間 平成15年9月3日～10月31日
調査対象面積 477m²
発掘調査面積 477m²
遺跡番号・略号 ME36-0225・STD-03
調査担当者 吉田充・野中真盛
協 力 機 関 花巻市教育委員会



1. 調査に至る経過

「下通遺跡」は、花巻東バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。一般国道4号は、東京都中央区を起点として青森県青森市に至る延長約858kmのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

花巻東バイパスは、花巻市山の神と同市西宮町の間約8.3km（インター取付500m含む）の区間に計画されている。水沢市内の国道4号の交通混雑解消と交通安全の確保、沿道環境の改善を図ると共に、地域経済の発展の根幹となる道路として、昭和60年度に事業着手し、昭和62年度に用地着手、平成4年度に工事着手し終点側から約3.6kmについて暫定2車線の供用を行っている。この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和62年度に分布調査を実施し、「高木中館遺跡」「高木古館跡」も確認されている。2遺跡については平成14年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所（現岩手河川国道事務所）に対し、事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。これにより、岩手県教育委員会は平成15年度事業について平成15年1月14日付け「教生第1457号」により、財団法人岩手県文化振興事業団に、平成15年3月6日付け「教生第1630号」により、岩手工事事務所長へ通知した。これを受けた財団法人岩手県文化振興事業団は平成15年9月2日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、9月3日から「下通遺跡」の発掘調査に着手した。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

2. 遺跡の立地

下通遺跡はJR東北新幹線新花巻駅の東方約4kmの地点に位置し、北上川左岸に形成された沖積平野の微高地に立地する。遺跡の標高約68m、西側を南流する北上川との比高は約8mを測る。現況は水田である。

3. 遺跡の基本層序

表土除去の結果、開田時の造成で微高地上面が削平され、その後も遺構確認面まで水田耕作による擾乱を受けていることが判明した。遺構の残存状況はきわめて不良である。調査区には以下のような土層が堆積する。

I層 10Y R3/3 暗褐色シルト 粘性中・しまり強
(表土)

II層 10Y R3/4 暗褐色粘土質シルト 粘性やや強・しまり強 遺構検出面（残存不良）

III層 10Y R4/6 褐色粘土質シルト 粘性やや強・しまり強

4. 調査の概要と検出遺構

確認された遺構は平安時代の堅穴住居状遺構1棟、時期不明の柱穴状小ピット62基である。

<S X01堅穴住居状遺構>

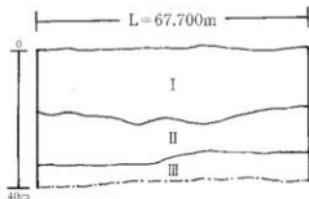
調査区南側、VB 2 b ~ c グリッドに位置する。II層相当面でおよそ径4 mほどの範囲で遺物の集中区が確認され、焼土、ピットが検出された。耕作による擾乱層を除去した段階で確認されたもので、状況から上部を削平された堅穴住居跡の可能性が高いと判断される。焼土の範囲は25×42 cmで、暗赤褐色焼土が約4 cmにわたって形成されている。P 1 墓土から土師器の壊片が出土しているほか、周辺から土師器壊・高台壊・甕片が少量出土する。遺物は上位擾乱層から検出面にかけて出土しているもので明確な共伴遺物とはいえないが、これ以外の地点では遺物の出土が殆ど見られないことから判断して、本来は遺構に伴っていたものである可能性が高い。

<PP 1~PP 62柱穴群>

調査区全域、表土除去後のII層上面で62基を確認した。規模は径12~109 cm、深さ5~45 cmを測る。これらは規模・形状によるばらつきがあるが、多くは小規模で浅く、径50 cm以上の柱穴はこのうちの16基と少ない。埋土は単層で構成されるものが殆どで、混入物などからA~Dの4つに大別が可能である〔註記一覧参照〕。PP15~16、20、28、31、33、36、47、51、53~56、62は、埋土上位~底部にかけて礫が設置されるものである。このうち底部に礫が設置され、断面観察からも柱当りを想定できるのはPP20、31、62の3基である。これらは根固め石を持つことから建物跡を構成する柱穴の可能性が高い。建物を正確に構成するような配列は確認できなかったが、PP33~36、43、46、54~57は柱穴が一定の間隔で連続することから、掘立柱建物跡の一部あるいは柱穴を構成していた可能性がある。このほか現地が削平されている状況などを考慮すると、痕跡を止めない柱穴も中には存在するものと推測される。遺構に伴う出土遺物を欠くため、時期など詳細については不明である。

柱穴状ピット註記一覧

A	10Y R4/4 褐色粘土質シルトと10Y R3/3 暗褐色粘土質シルトの混合土 しまり強・粘性やや強 該当するPP: 1, 3~8, 24, 26, 27, 29~31, 36, 39, 41~47, 49~61
B	10Y R4/4 褐色粘土質シルトと10Y R3/3 暗褐色粘土質シルトの混合土 炭化物粒1% しまり強・粘性やや強 該当するPP: 2, 7~13, 15
C	10Y R3/4 暗褐色シルトと10Y R3/2 黒褐色粘土質シルト、5Y R3/4 暗褐色シルトの混合土 しまり強・粘性やや強 該当するPP: 14, 17, 25
D	10Y R4/4 暗褐色粘土質シルトと10Y R3/3 暗褐色粘土質シルト、5Y R3/4 暗褐色シルトの混合土 しまり強・粘性やや強 該当するPP: 16, 21~23, 37, 38



第1図 基本層序

5. 出土遺物

小コンテナ1箱分の遺物が出土している。残存率10%以下の細片が最も多い。1～5はS X01竪穴状遺構から出土している。1は土師器壺で、P1埋土から出土した。外面ロクロナデ、内面ミガキ+黒色処理される。2～5は埋土から出土した。2は土師器壺で、内外面共にロクロナデ調整される。底部切り離し技法は回転糸切である。3は土師器高台壺で、内外面共にロクロナデ調整される。底部切り離し技法は回転糸切で、その後高台が付けられる。4は土師器長胴壺で、内外面共にヨコナデ→ナデ調整される。5は須恵器の大甕で、外面平行タタキ、内面ナデ調整される。6～7は、IVB19cグリッドII層から出土した。6は土師器高台壺で外面ロクロナデ、内面ミガキ+黒色処理される。底部は回転糸切され、ヘラ描き「×」を持つ。7は土師器壺としたもので、口縁部が大きく外反するような器形を呈する。外面ヨコナデ→弱いケズリ、内面ミガキ+黒色処理される。8～13は調査区の東側と接する沖積面から段丘崖にかけて出土したものであるが、下通分に含めて報告する。8～9は須恵器壺である。10は須恵器大甕で、外面平行タタキ、内面平行アテグ痕がのこる。11は須恵器の甕で、体部下端に回転ケズリ調整を持つ。

6.まとめ

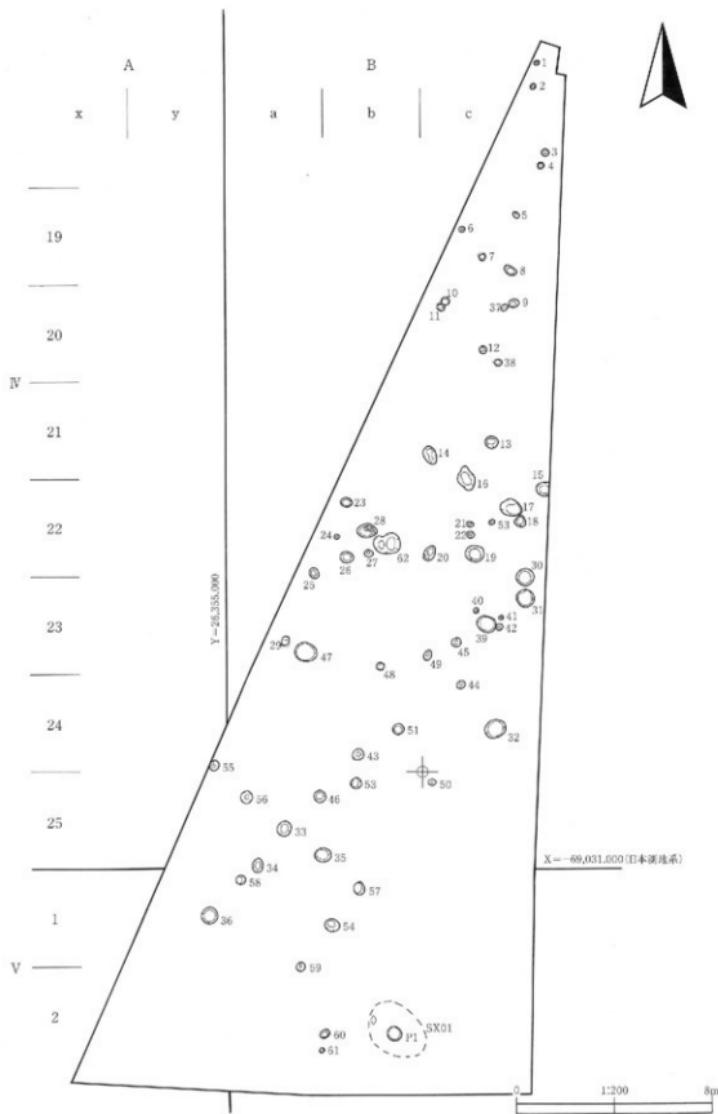
下通遺跡は北上川の沖積平野に形成された微高地に立地する。遺跡の周辺は現在、水田区画整理により一様に平坦であるが、調査区域は微かに微高地の様相を留める。このため遺構の存在が予想されたが、表土除去の結果、造成・耕作による削平を大きく受けていることが判明した。遺構の残存状況はさわめて不良で、竪穴住居状遺構1棟と、柱穴状の小ピット62基を確認したのみである。遺構外の遺物は東側沖積面の試掘時に表土・搅乱中から出土する場合が多く、調査区域内では少量であった。これらは木米沢状である地形を現状に埋め立てる際、上位の微高地面から押されて混入した遺物片と考えられる。下通遺跡から4mほど上位の段丘縁辺に高木中館遺跡が確認されていることから、本遺跡もこれら北上川左岸の沖積平野～段丘縁辺に営まれた平安時代の集落群を構成するムラの一部と考えられる。遺構の広がりは更に西側に延びることが予想されるが、前述の理由から残存状態は不良であろう。

なお、下通遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査暗報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第456集							
編著者名	丸山直美・野中真盛							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯町11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
下通遺跡	岩手県花巻市 高木第23地割 156	市町村 03205	ME36 -0225	39度 22分 50秒	141度 08分 11秒	2003.09.02 ～ 2003.10.31	477m ²	「国道4号花巻 東バイパス建設 事業」に伴う緊 急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
下通遺跡	散布地	平安	竪穴住居状遺構1棟 柱穴状壺162基	土師器・須恵器				

*緯度・経度は世界測地系



第2図 下通遺跡 遺構配置図

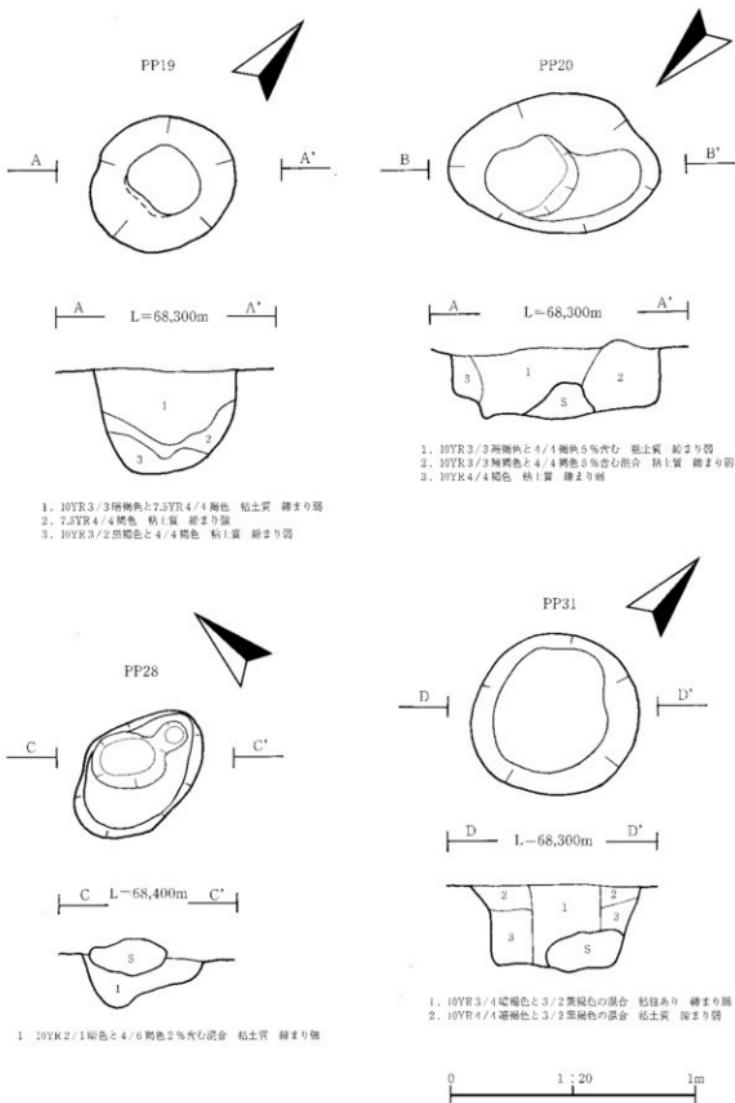
SX01堅穴住居跡状遺構



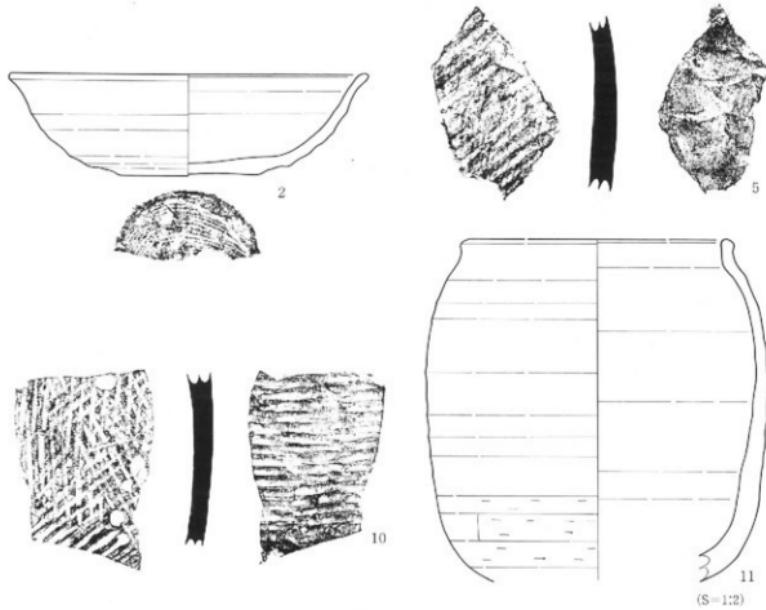
柱穴観察表

No	開口部	深さ	No	開口部	深さ	No	開口部	深さ
1	20×18	24	23	41×39	30	45	40×38	25
2	20×17	13	24	17×16	14	46	46×37	36
3	15×14	29	25	30×28	21	47	90×82	35
4	21×20	22	26	53×74	16	48	25×24	19
5	18×14	12	27	15×13	16	49	43×37	36
6	17×16	16	28	85×54	—	50	17×16	14
7	35×26	26	29	32×29	19	51	48×45	14
8	50×33	30	30	64×64	41	52	39×38	22
9	36×34	15	31	68×66	35	53	41×41	12
10	27×24	11	32	75×74	37	54	60×50	17
11	26×21	9	33	45×43	16	55	49×35	32
12	23×22	10	34	48×41	20	56	40×38	45
13	44×40	14	35	49×44	19	57	45×42	29
14	72×50	31	36	18×16	14	58	37×33	14
15	42×50	18	37	20×16	10	59	48×45	14
16	86×56	14	38	24×22	25	60	37×24	4
17	86×56	24	39	68×60	18	61	18×16	14
18	42×42	19	40	39×38	22	62	109×90	37
19	64×61	99	41	19×13	13	p 1	66×57	7
20	89×61	45	42	22×21	13			
21	24×23	14	43	13×12	5			
22	23×22	19	44	17×15	25			

第3図 下通遺跡 検出遺構（1）



第4図 下通遺跡 検出遺構（2）



出土遺物観察表

<土師器・須恵器・その他>

No.	出土地点	種類	器種	残存率	特徴	備考
1	S X01 P 1	土師器	杯	10%以下	外：ロクロナデ 内：ミガキ+黒色処理	
2	S X01 地上	土師器	杯	20%	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：回転イトキリ	
3	S X01 地上	土師器	高台杯	20%	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：回転イトキリ	
4	S X01 地上	土師器	盃	10%以下	外：ヨコナデナナデ 内：ヨコナデナナデ	
5	S X01 地上	須恵器	大盤	10%以下	外：平行タタキ 内：ナデ	
6	N R19 c Ⅱ層	土師器	高台杯	20%	外：ロクロナデ 内：ミガキ+黒色処理 底：回転イト	底面へク書「×」
7	N R19 c Ⅱ層	土師器	盃？	10%以下	外：ヨコナデナナデナリ 内：ミガキ+黒色処理	口縁大きめ外反
8	東側冲縄面 混乱	須恵器	環	10%以下	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：回転イトキリ	
9	東側冲縄面 混乱	須恵器	環	10%以下	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ 底：回転イトキリ	
10	東側冲縄面 混乱	須恵器	大盤	10%以下	外：平行タタキ 内：平行アテダ	
11	政丘里トレンチ I	須恵器	盃	15%	外：ロクロナデ+ロクロ回転ケズリ 内：ロクロナデ	
12	政丘里トレンチ I	須恵器	浅鉢？	10%以下	口縁部2枚の平行状線	器面擦耗
13	京橋沖遺跡 混乱	青磁	皿	30%		18C後半代

<石器>

No.	出土地点	種類	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)	石質	産地	特徴	単位:cm
14	P P39	燧石	5.9	4.4	108.84	ディサイト	奥羽山脈	奥羽山脈	

第5図 下通遺跡 出土遺物



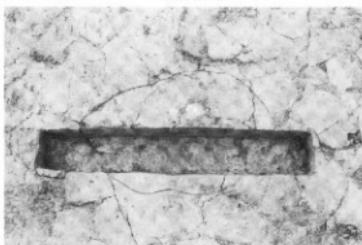
遺跡遠景(北東から)



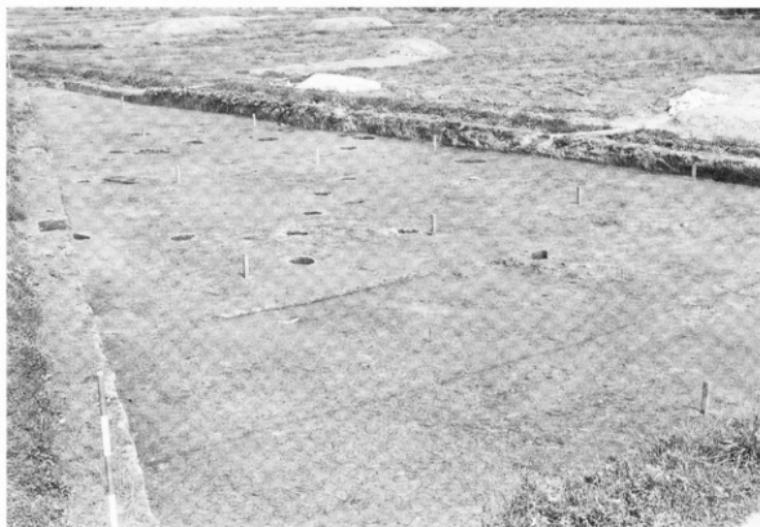
土層断面



SX01竪穴住居状遺構全景(南から)

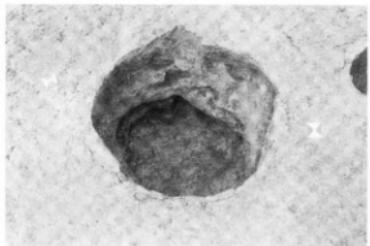


SX01竪穴住居状遺構焼土断面(西から)

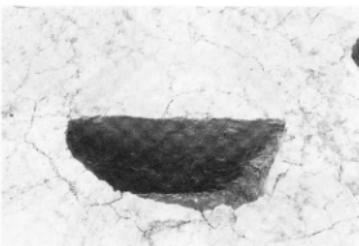


調査区全景(南から)

写真図版 1 下通遺跡 検出遺構 (1)



PP19 完掘



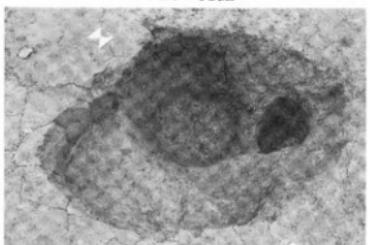
PP19 断面



PP20 完掘



PP20 断面



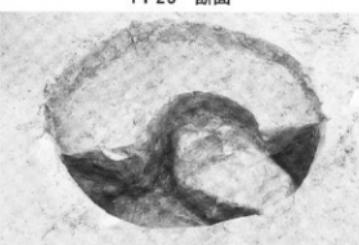
PP28 完掘



PP28 断面



PP31 完掘



PP31 断面

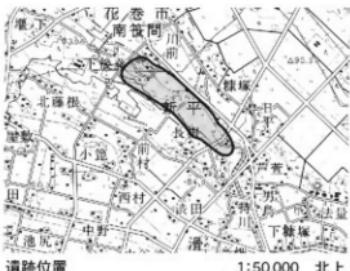
写真図版2 下通遺跡 検出遺構（2）



写真図版2 下通遺跡 出土遺物

(39) 新平遺跡

所 在 地 北上市新平2地割
委 託 者 北上地方振興局農林部農村整備室
事 業 名 は場整備事業江釣子第一地区
発掘調査期間 平成15年8月1日～10月30日
調査対象面積 2,828m²
発掘調査面積 2,828m²
遺跡番号・略号 ME 55-0081・N P -03
調査担当者 丸山浩治・新妻伸也
協 力 機 関 北上市教育委員会



1. 調査に至る経過

経営体育成基盤整備事業・江釣子第一地区は、北上市街から北西に位置する水田地帯において、区画整理、排水対策等の農業生産基盤の整備とあわせ親水公園等の生活環境基盤の整備を行い、高生産性農業の展開と、農業環境の保全を図るために行われている事業である。事業は平成11年度～12年度に事業調査および計画策定が行われ、平成13年度から事業実施している。

これらに係る埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、北上地方振興局北上農村整備事務所（現同振興局農林部農村整備室）と岩手県教育委員会事務局文化課（現同事務局生涯学習文化課）との間で協議がなされた。協議過程は、北上農村整備事務所長より岩手県教育委員会文化課長あて、農業農村整備事業調査計画における埋蔵文化財の分布調査について（平成11年12月8日付北農整備第419号）により依頼があり、岩手県教育委員会事務局文化課が平成12年5月29日～30日に分布調査を実施した。その結果、当該事業区域内に数箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認された。平成15年5月6日～13日にかけ試掘調査を実施した結果、新平遺跡、新平丘陵遺跡において発掘調査が必要である旨の回答があり、協議の結果、発掘調査について財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とした。

（北上地方振興局農林部農村整備室）

2. 遺跡の立地調査の概要

新平遺跡は北上市の北部、JR東北本線北上駅の北西約6.6km付近に位置し、新平丘陵縁辺の北向き緩斜面上に立地している。標高は88～91mで、現況は水田である。本遺跡は昭和32～33年の調査により古代駅馬擬定地と推定され、一部が昭和37年に県指定史跡の指定を受けた。以後2回の発掘調査が行われており、当センターでも昭和59年度に広域農道整備事業に伴う調査を行っている。今回の調査範囲はこれらの調査区の北側、斜面下部にあたる。

3. 基本層序

調査区の基本層序は以下のとおりである。削平が激しく、大半の箇所はⅠ層下が直ぐⅣ層となる。

I a層 10Y R2/1 黒色 シルト 粘性中・しまり弱 水田耕作土。

I b層 10Y R1.7/1 黒色～10Y R3/3暗褐色 シルト 粘性中・しまり中 主体は10Y R2/2黒褐色シルト。水田造成時の盛土で、最下位から遺物が大量に出土している。

II層 7.5YR2/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中 北側一部に
残存。遺物少量出土。遺構検出面。

L=89.500m

III層 7.5YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり強 減
移層。北側一部に残存。

IV層 10YR4/3 にほい黄褐色 粘土 粘性強・しまり強 大半の
遺構検出面。

4. 検出遺構

今回の調査で、平安時代以降の掘立柱建物跡1棟、土坑7基、柱穴状土坑56基、溝跡4条が検出された。

＜掘立柱建物跡＞ VII F 9 h～VII F 10 g グリッドで検出された。桁行816cm、梁間700cmで、柱間寸法は桁行で約12尺3寸（約408cm）が使用されている。検出柱穴数は5本、柱穴の直径は30～40cmである。時期は不明であるが、柱穴埋土の様相から近世以降の可能性が考えられる。

＜土坑＞ II A 1 c グリッドで1基、VE 7 b グリッドで1基、VI E グリッド付近で5基検出された。直径はいずれも1m前後、平面形は円形基調で、検出面からの深さは20～120cmを測る。2号土坑は埋土中からロクロ使用の上師器・須恵器が出土しており、また埋土がはっきりしていることから平安時代以降（近世？）のものと考えられる。他は判然としないが、1号・3号・6号土坑は2号土坑と埋土の様相が近似する。

＜柱穴状土坑＞ VE 5 a～VII F 2 i グリッドで55基、II A 1 d グリッドで1基検出された。直径は18～70cmとさまざまであるが、VI E グリッド付近のもの（深さ40cm前後・深さ25cm前後）はVII F グリッド付近のもの（径・深さとも15cm前後）に比して大形である。時期は不明であるが、周辺出土遺物から平安時代よりは新しいものと推定される。

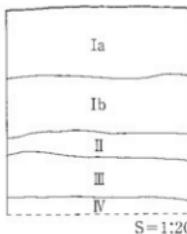
＜溝跡＞ 3号溝跡は、明治20年頃作岡の用水路図との整合により、明治時代以前に構築された奥寺下取の支線に係る溝と判明した。規模は、東側が上端幅約2.3m・深さ53～73cm、西側が同2～4m・7～16cmで、西側が大きく削平されている。また、4号溝跡はこれに平行しており、その残存規模は上端幅約1.2m・深さ2～21cmでやはり大きく削平されている。西端部からは上師器・須恵器を持った罐群が検出された。溝自体の構築時期は不明であるが、3号溝跡と大差ないものと推定される。2条は共に東流していたものである。

II A グリッドの1号・2号溝跡は残存状態が極めて悪く、時期も不明である。

＜出土遺物＞ 中コンテナ約18箱分出土した。種別毎の出土量は、縄文土器45,984.83g、土偶1点、石器767点（91,339.38g）、陶片20,857.66g、石製品11点（3,936.91g）、土師器・須恵器7,427.82g、陶磁器片4点（うち鏡1点）である。これらの大半はII層、特にI層最下位から出土したものである。

縄文土器・土製品 前期から中期に比定される。破損が激しい。1～4は口縁部片で、1は結節回転文が施される大木2式？、2・3は大木6式、4は大木8a式である。5・6は胴部片で、5は大木5a式、6は大木5～6式である。7は板状土偶の胴部で、大木6～7 a式と推定される。

石器・石製品 石器の内訳は、石錐44点、尖頭器13点、石錐26点、石匙31点、石箆39点、スクレイパー133点、r・uフレイク80点、楔形石器13点、三棱状石器1点、石核84点、打製石斧5点、石錐1点、磨製石斧11点、罐器類8点、半円状偏平打製石器1点、石錐150点、特殊磨石41点、円石47点、磨石14点、敲石8点、台石2点、素材15点である。石製品の内訳は、块状耳飾1点、有孔石製品2点、石剣2点、石棒6点である。時期は、8の石錐（有茎）、11・12の尖頭器から、土器より広範に亘るものと推定される。



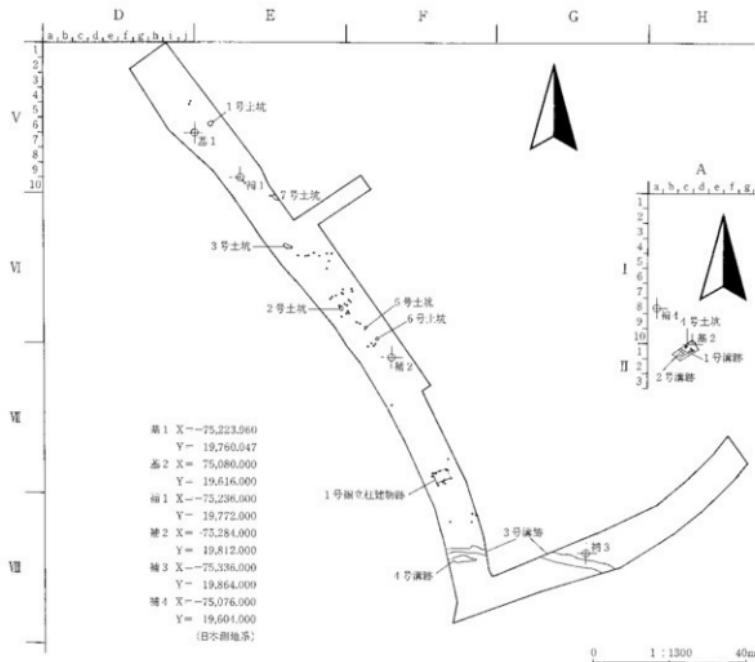
第1図 基本層序

土師器・須恵器・陶磁器 土師器・須恵器も破損が激しく、小破片のみである。確認できたものは全てロクロ使用で、平安期のものと推定される。特筆すべきは陶磁器類で、小破片ながらも多時期のものが出土した。37は鏡で、古代と推定されるが詳細時期は不明である。38は灰釉陶器の長頭瓶？で9世紀後半頃（黒窓90号式）、39は12世紀の白磁四耳壺Ⅲ系、40は13世紀末～14世紀前半の龍泉窯系青磁碗1類である。41は不明であるが、東海系（奈良？）の壺頭部分と推定される。

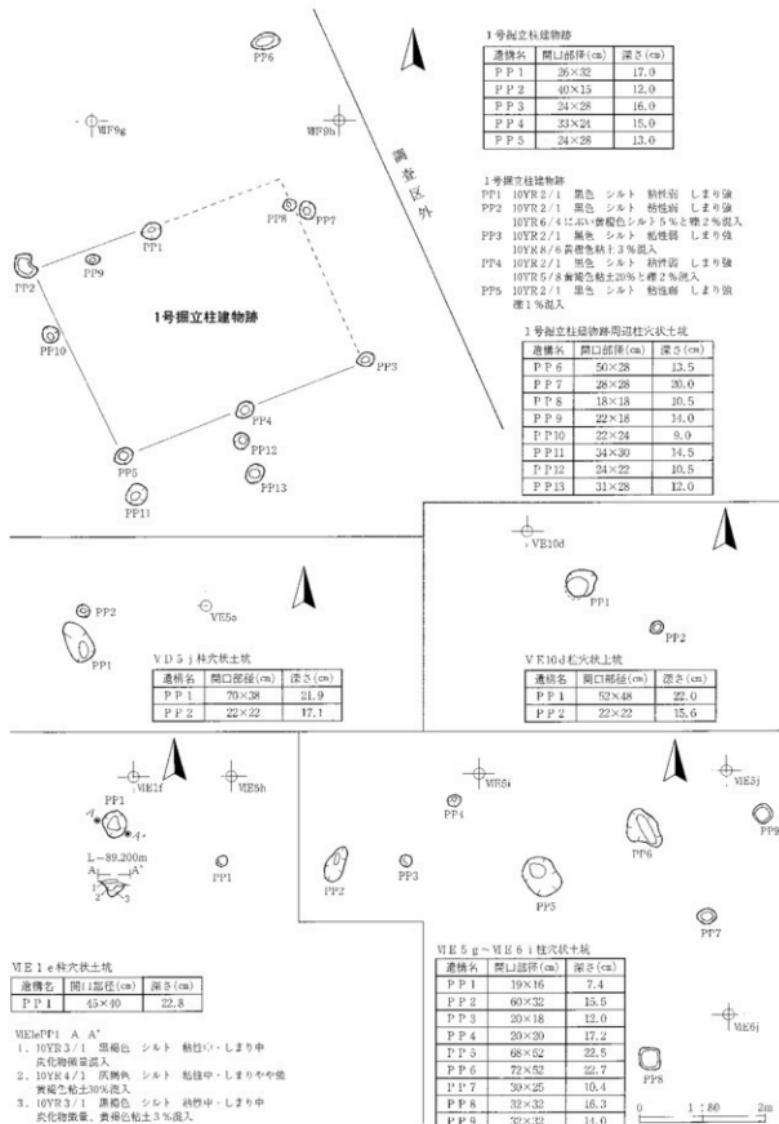
5.まとめ

今回調査した範囲の大半は場整備等により大規模な地形変更を受けており、このため検出遺構も原形を留めるものは皆無であった。遺物も2層以下から出土したものはごく僅かである。ただし、遺物総量は決して少ない訳ではなく、本来は大規模な遺跡であったことが窺われる。遺物種別や時期も、旧石器を思わせるような尖頭器から14世紀頃の青磁までと、多岐にわたる。また、硯の出土により駄家の存在した可能性もさらに高くなったといえる。これらの遺物群は当地が各時代を通じて選地されていたことの証であり、いかに当地を重要視していたかを示している。もともと、遺跡と認知されているのは丘陵上部であり、ここに当該遺物に関わる遺構も存在するものと思われる。

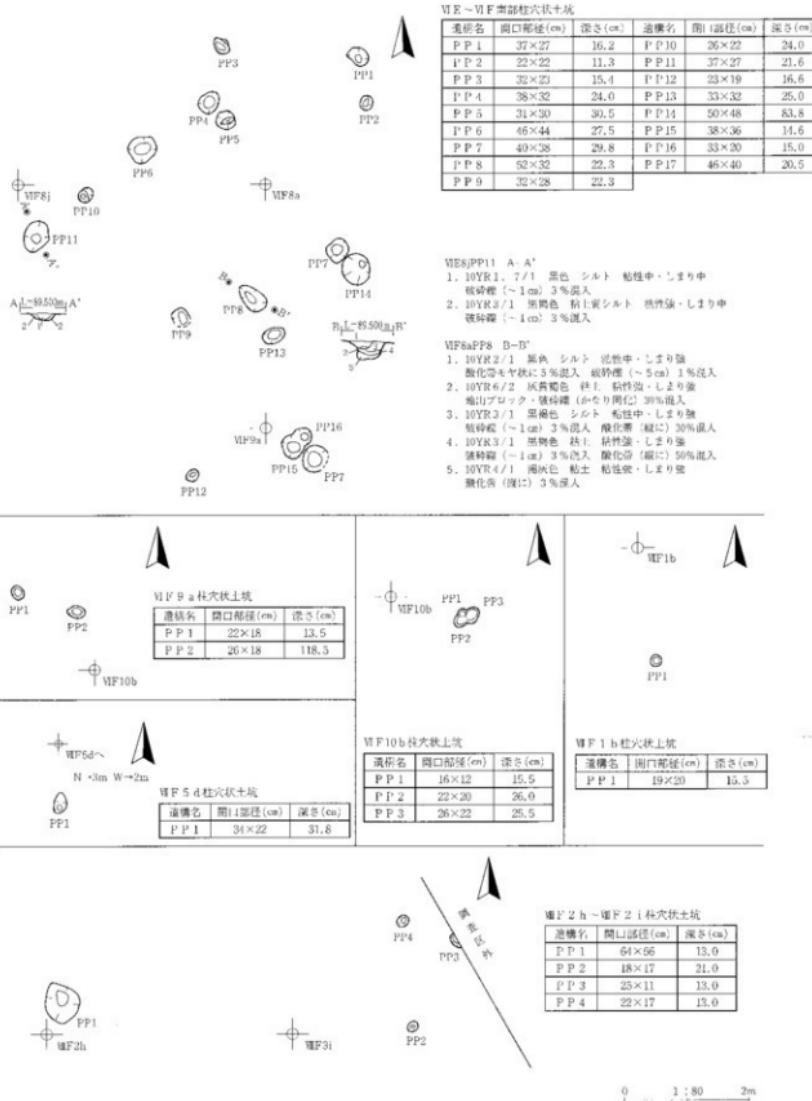
なお、新平遺跡に関する報告はこれをもって全てとする。



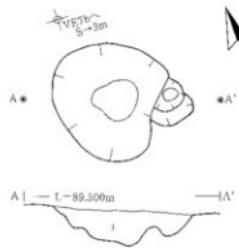
第2図 新平遺跡遺構配置図



第3図 新平遺跡 1号掘立柱建物跡・柱穴状土坑（1）

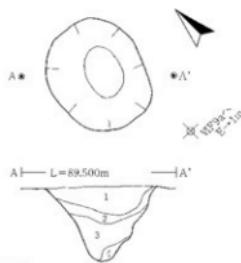


第4図 新平遺跡柱穴状土坑（2）



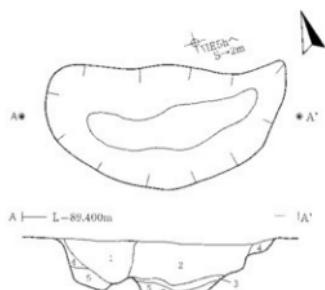
1号土坑

1. 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中
被鉛錠 (~1cm) 2%、炭化物1%混入。



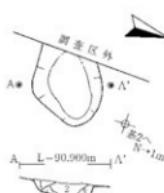
2号土坑

1. 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中
被鉛錠 (~2cm) 3%，土器破片1%混入。
2. 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中
酸化帯(底に) 10%混入。
3. 2.5Y2/1 黒色 粘土 粘性中・しまり中
4. 2.5Y2/1 黒色と2.5Y3/3 底より一層赤土の混入
(N層以下) 5:5 粘性強・しまり中



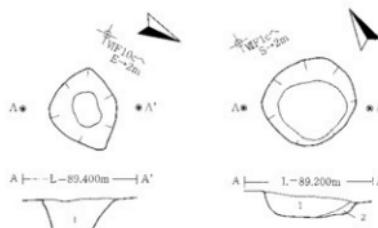
3号土坑

1. 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中
被鉛錠 (~5cm) 1%混入。
2. 10YR1.8/5/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中
上部鉛錠2%混入。
3. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中
酸化帯40%混入。
4. 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中
酸化帯(モザイク状) 1%混入。
5. 10YR1.8/5/1 三色 シルトと10YR5/2 中
被鉛錠 (底に) 5%混入。



4号土坑

1. 7.5YR2/1 黒色 シルト 粘性中・しまり弱
15YR6/8と明黄色粘土(下部)10%混入。
2. 10YR3/1 黄褐色 シルト 粘性中・しまり弱
3. 10YR3/2 黄褐色 シルト 粘性中・しまり弱
20YR6/8と明黄色粘土(下部)5%混入。



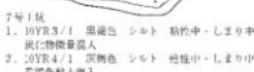
5号土坑

1. 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性中・
しまり中 被鉛錠 (~1cm) 2%、
灰1%混入。



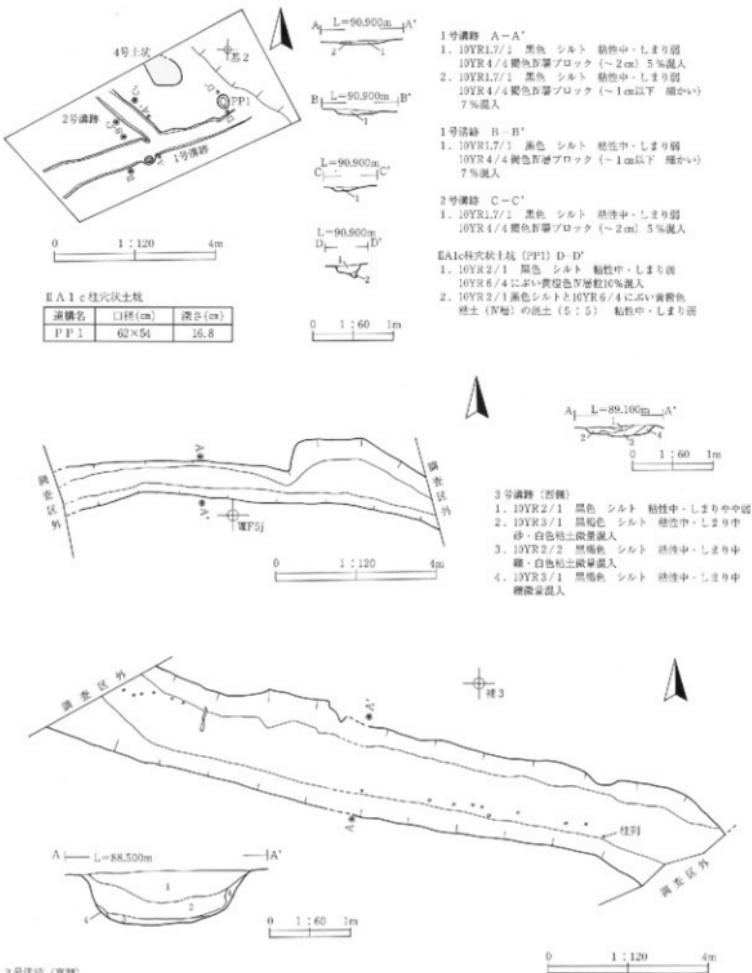
6号土坑

1. 10YR4/1 黑褐色 シルト 粘性中や強
・しまり強 塗・黒褐色土1%混入。
2. 10YR4/2 黑褐色 シルト 粘性中
・しまり強 塗・難混入。

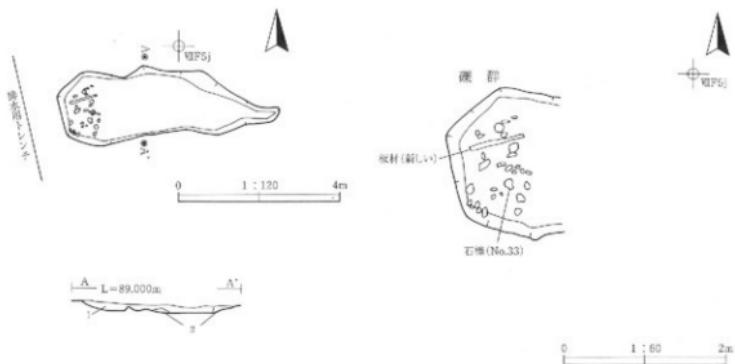


0 1:50 1m

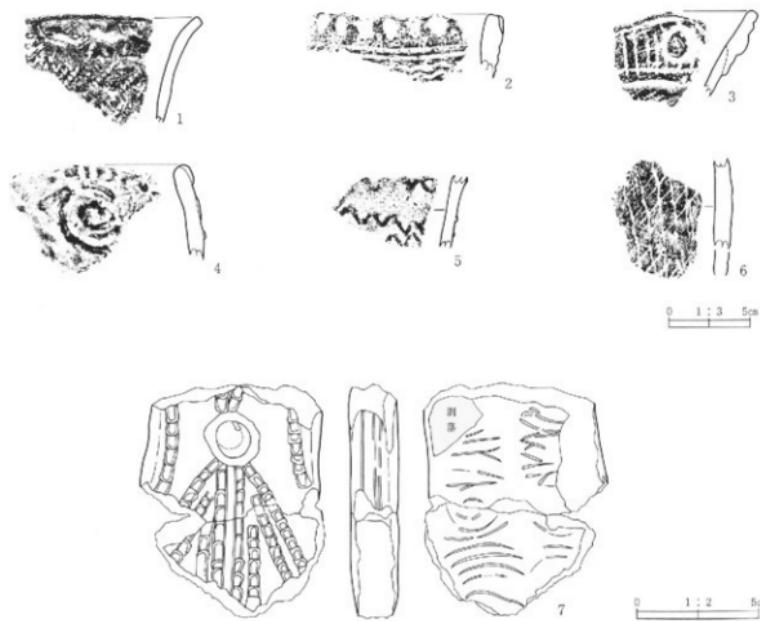
第5図 新平遺跡 1～7号土坑



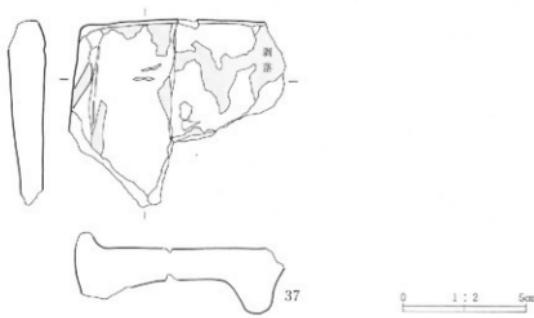
第6図 新平遺跡 1～3号溝跡



第7図 新平遺跡4号溝跡



第8図 新平遺跡出土遺物（1）



第9図 新平遺跡出土遺物（2）

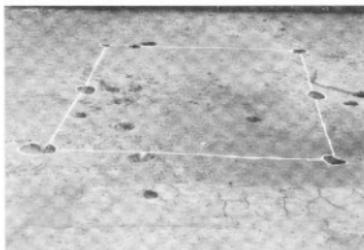
報告書抄録

ふりがな	いわでけんmaiぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう						
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第455集						
編著者名	丸山清治・新妻伸也						
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日	西暦2004年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
新平遺跡	岩手県北上市 新平第2地割	03206 ME55 -0081	39度 19分 30秒	141度 03分 32秒	2003.08.01 ～ 2003.10.30	2,828m ²	ほ場整備事業 に伴う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
新平遺跡	散布地 集落跡	縄文時代 古代以降	掘立柱建物跡1棟 柱穴状土坑56基 土坑7基 溝跡4条	縄文土器、土製品、石器、石製品、土師器、須恵器、陶磁器	縄文前期～中期の土器 石鏃の出土比率高い 風字硯、灰釉陶器(黒釜90号式)、 白磁蓋(Ⅲ系)、龍泉窯系青磁碗 (I類)		

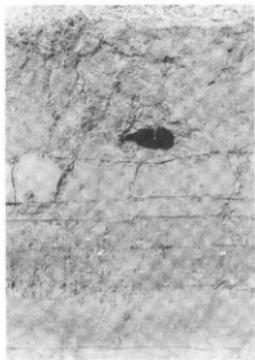
※緯度・経度は墨界測地系



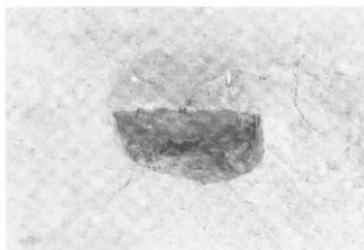
調査区遠景(北から)



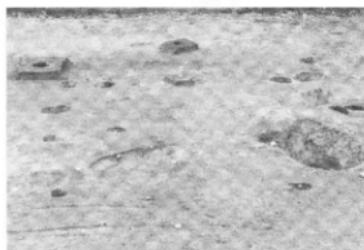
1号掘立柱建物跡 完掘



基本層序(VIE北東部)



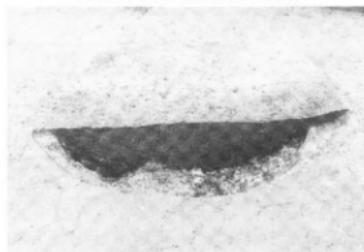
PP 5 断面



柱穴状土坑群(VIE南西付近)



3号土坑 完掘

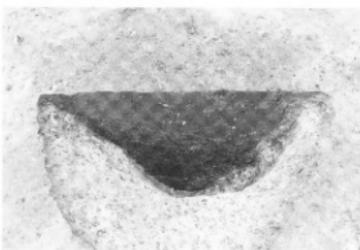


3号土坑 断面

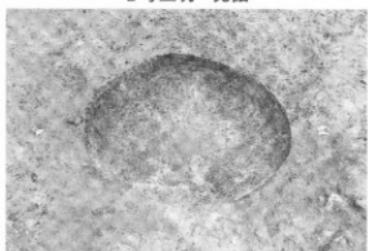
写真図版1 新平遺跡調査区遠景・基本層序・検出遺構(1)



2号土坑 完掘



2号土坑 断面



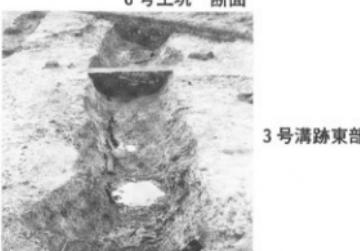
6号土坑 完掘



6号土坑 断面



3号溝跡西部(左)・4号溝跡(右)



3号溝跡東部

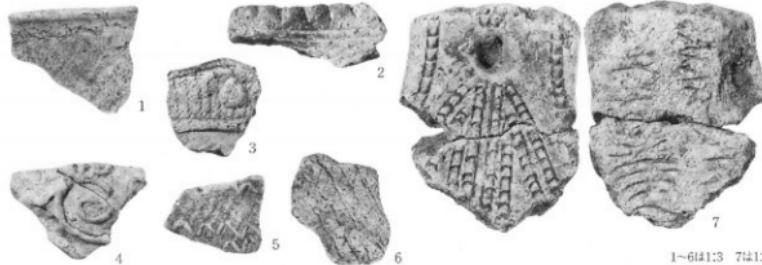


3号溝跡西部 断面



AI~II区(飛び地) 完掘

写真図版2 新平遺跡検出構造(2)



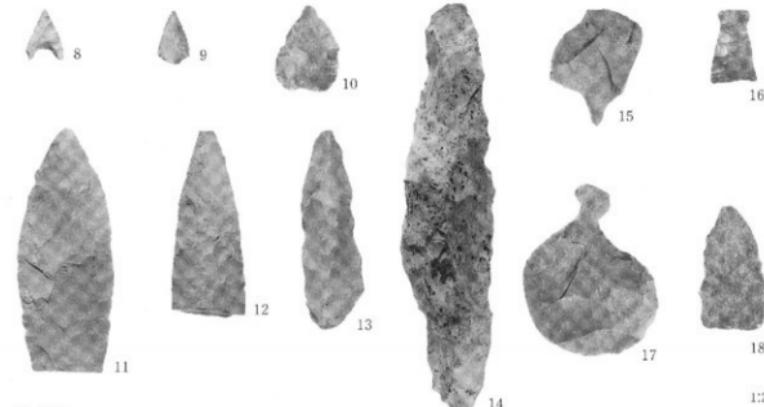
1~6: 61:3 7: 1:2

<撲文土器>

No.	出土地点・層位	保存部位	文様の特徴等
1	VE 6 b I層	口縁部	口唇下に幾何模様刷毛（R）、以下L R（輪）
2	VI F 4 b II層	口縫部	口縫部に網目刷毛、以下手執竹管状工具による押引模様
3	VI F 3 e II層底	口縫部	肥厚、その上にL Rを主体側面刷毛、円形輪付
4	VI F 3 e II層	口縫部	口唇前面に中央に網目、以下向巻波陰彫
5	VE 6 b I層	L R（縦）	單面斜面刷毛第5彫
6	3号土坑 地下手平	側部	單面斜面刷毛第5彫

<土製品>

No.	出土地点・層位	種類	保存部位	重量 (g)	文様の特徴等
7	VI F 10 b I層	土鍋	腹部	155.9	表面；背孔、半載竹管状工具による押引模様 裏面；半載竹管状工具による波線

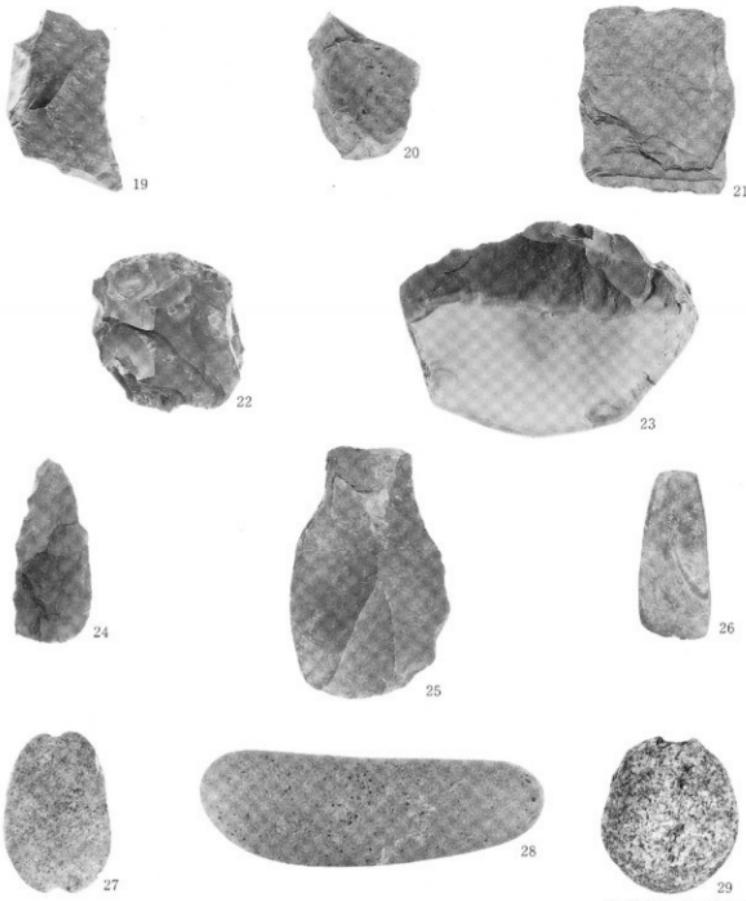


1:2

<石器>

No.	出土地点・層位	器種	計測値 () は次項			石材(地)	備考	
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			
8	VI F 7 a II層	石劍	2.11	1.53	0.37	0.74	頁岩(奥羽山脈)	単刃
9	VI F 4 e II層	石劍	(2.20)	1.31	0.40	1.05	頁岩(奥羽山脈)	右茎
10	VI E 5 g II層	石劍	3.56	2.61	1.05	8.61	頁岩(奥羽山脈)	大形、右側あるいは右角の可能性
11	VI F 4 c I層	尖頭器	(10.18)	3.99	(1.32)	(54.98)	頁岩(奥羽山脈)	薄く、裏茎細かい 1/3次削
12	VI F 10 b I層	尖頭器	(7.80)	(5.09)	1.34	(29.96)	頁岩(奥羽山脈)	薄く、裏茎細かい 1/2次削
13	3号土坑 地下手平	尖頭器	8.25	2.49	1.89	(38.14)	頁岩(奥羽山脈)	薄く、三棱状
14	VI E 8 b 五輪	尖頭器	16.72	3.88	3.00	164.58	頁岩(奥羽山脈)	薄く、三棱状
15	VI E 4 b I層底下部	石錐	4.79	3.84	0.88	13.11	頁岩(奥羽山脈)	済形
16	4号溝跡 地下手	石錐	3.02	1.90	0.58	3.06	赤色頁岩(奥羽山脈)	済形
17	VI E 4 b I層底下部	石錐	7.20	5.70	1.41	51.06	赤色頁岩(奥羽山脈)	円形 手握る刀形
18	表床	石錐	5.11	2.90	0.82	15.41	赤色頁岩(奥羽山脈)	

写真図版 3 新平遺跡出土遺物 (1)

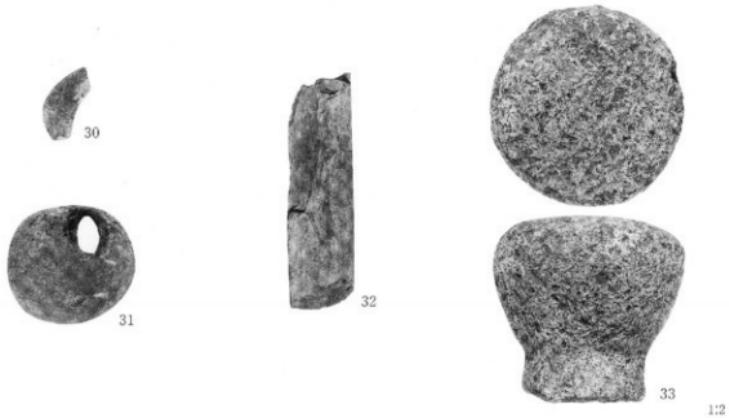


19~23 411.2 24~29 411.3

<石器>

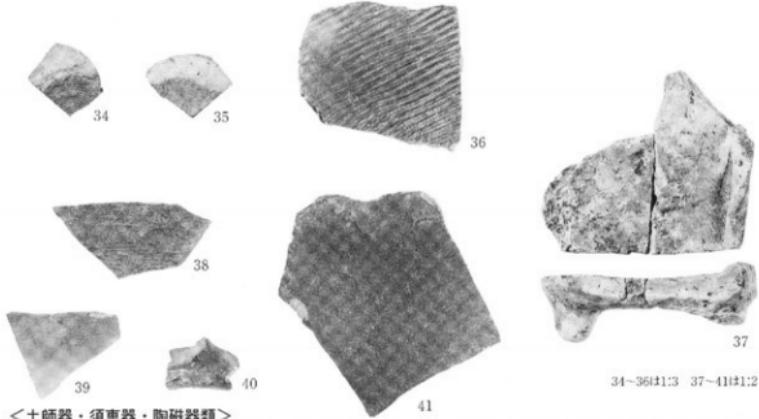
No.	出土地点・層位	器種	測定値()は欠損			石材(産地)	備考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
19	ⅣF.7.1 1層	スクレイパー(刃)	7.73	4.36	1.73	66.37	頁岩(奥羽山脈)	1側厚・片面磨擦
20	ⅣF.8.b 1層	スクレイパー(刃)	(6.12)	(4.79)	1.87	(62.72)	頁岩(奥羽山脈)	1/2欠損
21	ⅣE.3.b 1層	標示石器?	7.63	6.56	1.21	91.89	頁岩(奥羽山脈)	大型のスクレイパーの可動性
22	ⅣE.3.i 1層(最下段)	石核	6.78	6.21	4.10	205.43	頁岩(奥羽山脈)	
23	ⅣE.6.b 1層	石核	9.06	12.51	4.43	981.54	頁岩(奥羽山脈)	
24	表模	打削石斧	11.22	4.82	2.53	136.29	頁岩(奥羽山脈)	
25	表模	打削石斧	(15.29)	9.89	2.07	(361.39)	頁岩(奥羽山脈)	
26	ⅣF.7.c 1層	磨製石斧	10.39	4.49	2.38	196.49	砂岩(奥羽山脈)	左彎
27	ⅣE.3.t 1層	石錐	9.68	6.39	2.52	216.72	海灰岩(奥羽山脈)	
28	7号1塊 地上	特殊磨石	21.25	7.04	4.58	1113.92	頁岩(奥羽山脈)	無加工
29	ⅣE.3.f 1層	凹石	(9.20)	8.14	4.29	(468.44)	花崗岩(奥羽山脈)	表面に凹面

写真図版4 新平遺跡 出土遺物(2)



<石製品>

No.	出土地点・層位	器種	計測値()は欠損				石材(産地)	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
30	4号遺跡 残土	块状耳飾	(3.29)	(1.57)	0.52	(4.42)	頁岩(鳴羽山脈)	1/2欠損
31	V D 3 g I層	有孔石製品	5.31	5.01	5.92	143.68	安山岩(鳴羽山脈)	
32	鍵 F 2 h II層	石剣	(9.69)	2.72	1.18	(47.64)	軽板岩(北上山脈)	夷邊欠損
33	4号遺跡 残土	石棒	(11.50)	12.63	11.77	(1949.85)	ダイライト(鳴羽山脈)	先端部のみ残存



<土器類・須恵器・陶磁器類>

No.	出土地点・層位	種別	器種	測定			備考
				外側	内面	底面	
34	鍵 F 10 c II層	环	須惠器	ロクロナデ	ロクロナデ	系切り	
35	4号遺跡 残土	环	須惠器	ロクロナデ	ロクロナデ	系切り	
36	3号遺跡 残土	人型	須惠器	タタキメ	タタキメ	—	原色
37	鍵 F 2 g I層	環	須惠器	—	—	—	欠損激しい
38	鍵 F 3 c I透観子段	瓦型?	須惠器	—	—	—	黒龍90号瓶式
39	鍵 F 2 h II層	豆	白陶	—	—	—	白鶴四耳尊 三系
40	鍵 F 6 i I層	網	青磁	—	—	—	龍泉窑青白瓷 「頬」
41	4号遺跡 残土	串	煮海系?	—	—	—	青瓷?時期不明

写真図版5 新平遺跡出土遺物(3)

(40) すぎのどうあとろい 杉の堂・跡呂井遺跡

所 在 地 水沢市神明町2丁目26-2ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所
事 業 名 国道4号水沢東バイパス建設事業
発掘調査期間 平成15年4月10日～6月16日
調査対象面積 5,745m²
発掘調査面積 5,062m² (未了分683m²)
遺跡番号・路号 NE27-0100・SD-03
NE17-2087・AR I-03
調査担当者 丸山直美・窓岩伸吾
協 力 機 関 水沢市教育委員会



1. 調査に至る経過

「杉の堂遺跡」「跡呂井遺跡」は、水沢東バイパス改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。一般国道4号は、東京都中央区を起点として青森県青森市に至る延長約858kmのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

水沢東バイパスは、水沢市真城と同市佐倉河の間約9.6kmの区間で計画されており、水沢市内の国道4号の交通混雑解消と交通安全の確保、沿道環境の改善を図ると共に、地域経済の発展の根幹となる道路として、昭和60年度に事業着手し、昭和62年度に用地着手、平成4年度に工事着手し終点側から約3.6kmについて暫定2車線の供用を行っている。この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が昭和62年度に分布調査を実施し、「杉の堂遺跡」「跡呂井遺跡」も確認されている。2遺跡については平成14年度に試掘調査を実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所（現岩手河川国道事務所）に対し、事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。これにより、岩手県教育委員会は平成15年度事業について平成15年1月14日付け「教生第1457号」により、財団法人岩手県文化振興事業団に、平成15年3月6日付け「教生第1630号」により、岩手工事事務所長へ通知した。これを受けた財団法人岩手県文化振興事業団は平成15年4月1日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、4月1日から「杉の堂遺跡」「跡呂井遺跡」の発掘調査に着手した。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

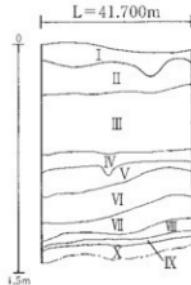
2. 遺跡の立地

杉の堂・跡呂井遺跡はJR東北本線水沢駅の東方約1.6kmの地点に位置し、胆沢扇状地の北東部扇端に形成された段丘の北向き緩辺部に立地する。遺跡の標高は42～43mで、東側を南流する北上川との比高は11mほどである。

3. 遺跡の基本層序

表土除去の結果、近・現代の造成事業の影響で広範囲にわたって削ぎされ、殆ど旧地形を止めない状況であった。調査区A・B・C・D・E区では表土直下でV層となり、II～IV層はD区の北側斜面部のみ認められた。調査区の基本層序は以下の通りである。

I層	10Y R3/2	黒褐色シルト粘性中・しまり弱表土 生活廃棄物等多量に含む
II層	10Y R8/3	浅黄橙砂層宅地基礎搅乱
III層	10Y R3/1	黒褐色シルト 粘性中・しまりやや強
IV層	10Y R2/1	黒色シルト 粘性中・しまりやや強
V層	10Y R6/4	にぶい黄橙シルト 粘性やや弱・しまり強
VI層	10Y R4/2	灰黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり強
VII層	10Y R6/6	明黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり強
VIII層	10Y R4/3	にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり強
IX層	10Y R5/3	にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり強
X層	10Y R4/1	褐紅砂質シルト 粘性弱・しまりやや強
XI層	10Y R4/1	褐基盤漂層



第1図 基本層序

4. 調査の概要と検出遺構

当センターによる調査は昨年に続く2次調査で、今回は市道を挟んで南側地域が対象となった。なおB区（跡呂井地区）は、昭和64年に水沢市教育委員会が発掘調査を行った跡呂井遺跡第1次調査区の北側にある。検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、区画溝1条、土坑3基、溝跡17条、柱穴状ピット59基で、検出面はすべて搅乱除去後のV層面である。

＜S B01・02掘立柱建物跡＞ B区西側で2棟を検出した。両者は建物の軸方向をほぼ同じくして隣接しておりS B01の南辺—S B02の北辺間はおよそ2mを測る。いずれも桁行3間×梁間3間の建物跡で、S B01は桁行6.87m(22.7尺)、梁間5.72m(18.9尺)の方形プラン、S B02は桁行7.22m(23.8尺)、梁間6.17m(20.4尺)の長方形プランを呈する。これら柱穴の残存部深さはそれぞれ4~26cm、10~50cmと浅く、木本ド屋などの付属施設が伴っていた可能性もある。このうちS B02の全ての柱穴埋土を対象にフローテーションを行ったところ、P P 1~11より炭化種子24点(イネ3、オオムギ9、コムギ12)が得られた。内、6点を試料としてAMSによる年代測定を行ったところ、 1070 ± 40 BP(未補正)の年代が得られている。柱穴埋土からは上層器・須恵器繊片が少量出土するほか明確な共伴遺物はないが、測定結果から平安時代後半に属する可能性が高いと推測される。

＜S X01区画溝＞ B区西側で不整な隅丸方形に巡る区画溝状の遺構1条を検出した。規模は長軸で15.55m、残存する短軸で12m、幅56~90cm、深さ32~42cmを測る。区画溝の内部にはS B02が主軸を同一にして位置する。両者はきわめて近接した時期に存在した可能性が高いと考えられ、溝が建物と外側とを区画するような役割を持っていたものと推察される。埋土には土器・須恵器片が少量混入するが繊片のため年代は不明である。土層観察用ベルト1~5を対象にフローテーションを行ったところ、上層断面観察ベルト2、5の上層で炭化種子4点(イネ3、コムギ1)が得られた。

＜S K01~03土坑＞ B・C区から3基を検出した。規模は長径1.1~2.24m、短径0.8~1.09m、深さ18~58cmの範疇に収まる。平面形は円形・楕円形を基調とし、埋土は黒褐色土主体で構成される。出土遺物はな

く、時期など詳細は不明である。

＜S D01～17溝跡＞ A・D区を除く調査区全域から17条が検出された。いずれも浅く、埋土は単層で構成されるものが多い。特筆されるのはS D01溝跡で、全长22m、上幅62～77cm、深さ9～15cmを測り、さらに両端は調査区域外へと延びている。底面東側には径10cmほどの工具痕が2個1対で確認された。溝西側埋土中位からは土師器坏片（9）が出土している。出土地点からみて明確な共伴遺物としては扱えないが、本遺構の年代は最も遅って平安時代に位置づけられる可能性がある。

＜柱穴状ピット＞ A・B・C区から合計59基を検出した。規模は15～25cm、深さ18～35cmといずれも小規模で浅く、単層で構成されるものが多い。局所的に小規模なまとまりを持って散在するような傾向を示すが、建物を構成するような形跡は確認できなかった。ただし、現地が削平されている状況を考慮すると、このほか痕跡を止めない柱穴も相当数存在するものと推測される。出土遺物はなく時期、性格などの詳細については不明である。

5. 出土遺物

小コンテナ2箱分の遺物が出土している。内訳は土師器片8点、須恵器片6点、羽口片1点、磨製石斧片1点、炭化種子28点（イネ6、オオムギ9、コムギ13）である。5・7・8はS X01区画溝から出土している。5は土師器の長胴壺片で、外面ケズリ・内面ナデ調整される。7は須恵器大甕片で、外面平行タタキ・内面ナデ調整される。8は羽口片で、先端部が一部溶解し黒褐色を呈する。9はS D01溝跡から出土した土師器坏片で、外面共にロクロナデ調整、底部は回転糸切りである。12はS D06溝跡から出土した須恵器大甕片で、外面平行タタキ・内面同心円状アテグ痕が施されている。

6.まとめ

杉の堂地区（C・D・E・F区）に関しては試掘・表土除去した段階で確認できた遺構・遺物は殆どなく、時期不明の溝・土坑をいくらく検出したのみであった。表土直下は黄褐色の地山が露出する状態で遺構外の遺物はいはずも表土・擾乱中から出土している。遺構は土坑2基、溝跡11条、柱穴状ピット39基を確認したのみで、前回調査時のような豊穴住居跡群は検出されなかった。これは調査区周辺の地形などから推測して昭和20年代に行われたという土地改良政策による影響が大きいとは考えにくく、調査区が段丘の縁を外れていることなどから、立地を反映したものと考えられる。

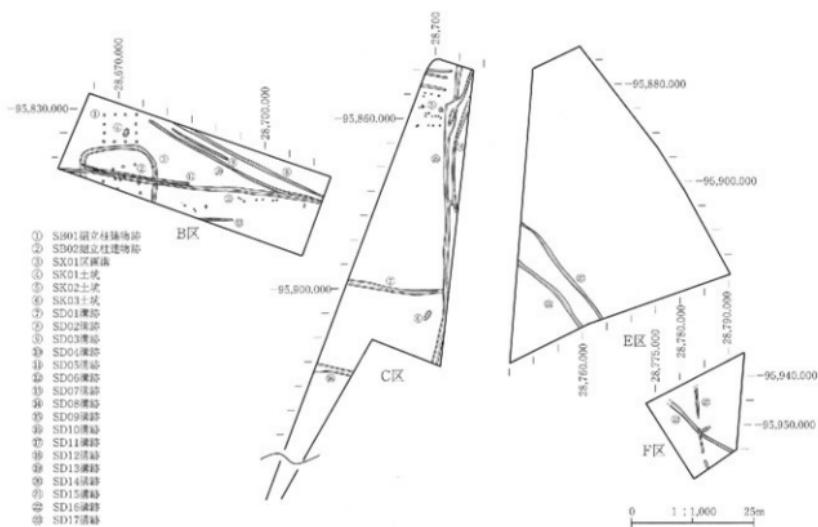
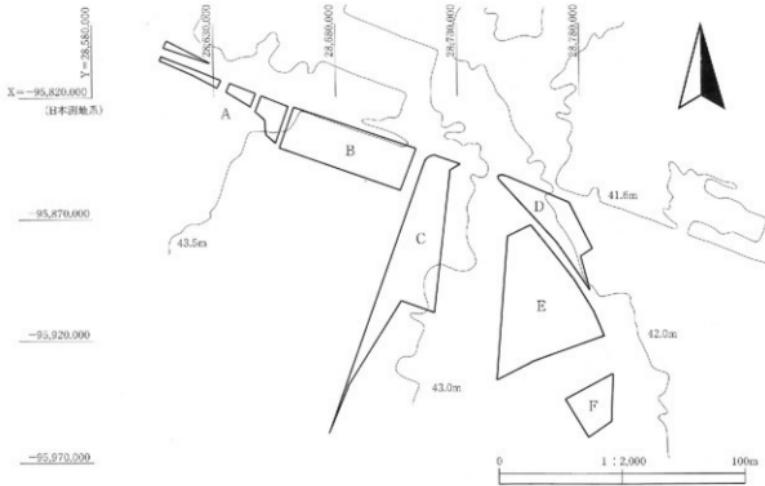
いっぽう跡呂井地区（A・B区）からは、掘立柱建物跡2棟と区画溝1条、土坑1基、溝跡6条、柱穴状ピット20基が検出された。S B02掘立柱建物跡はS X01区画溝の内部に位置することから、周溝を伴っていたと考えられる。また、S B01とは規模・軸方向をほぼ同一にして互いに隣接しており、時期差を持つものか、同時存在か双方の可能性が考えられる。建物の性格については推測の域を出ないが炭化種子が出土していることから倉庫か、あるいは北側120mに現存する神明社の存在から宗教的な施設との関わりなどが想定される。当地域に関しては遺構の検出状況から判断して分布がさらに西側に広がることが予想される。

なお、杉の堂・跡呂井遺跡に關わる報告は、これをもって全てとする。

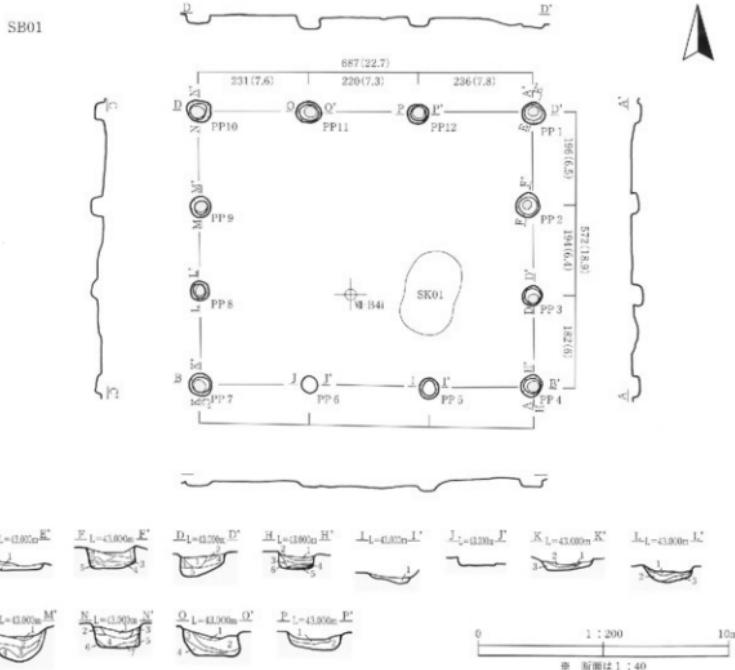
炭化種子出土一覧

No.	遺構名	出土場所	種別	部位	AMS試料	No.	遺構名	出土場所	部位	種別	AMS試料	
1	S B02	P P 1埋土	ムギ	表面	●	6	S B02	アドラ埋土	●	オオムギ3、コムギ1	表土(炭化)	●
2	S B02	P P 3埋土	オオムギ1、コムギ1	表面	●	7	S B02	P P 10埋土	イネ1	表土(炭化)		
3	S B02	P P 4埋土	コムギ1	表面	●	8	S B02	P P 11埋土	イネ1、オオムギ2	表土(炭化)		
4	S B02	P P 5埋土	コムギ5	表面	●	9	S X01	ベキナ21層	イネ1、コムギ1	表土(炭化)		
5	S B02	P P 5埋土	コムギ4	表面	●	10	S X01	ベキナ5上層	イネ2	表土(炭化)		

* ●印で示した試料の年代測定・種実同定は、(表)古需研究室に業務を委託している。それ以外の試料の種実同定は、(株)古代の森研究会の吉川純子氏のご厚意による指導の下、丸山が行った。



第2図 杉の堂・跡呂井遺跡 遺構配置図



SB01棟2柱跡構造

PP1:

1. 10YR 3/4 黒褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 5/6 黄褐色シルト粒15%混
2. 10YR 4/5 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強

PP2:

1. 10YR 3/4 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり中 10YR 5/6 黄褐色シルト粒15%混
2. 7.5YR 3/4 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり中 7.5YR 4/5 黑褐色シルト粒15%混
3. 7.5YR 4/5 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり中 7.5YR 4/2 黑褐色シルト粒15%混
4. 7.5YR 2/3 黑褐色シルト 粘性中・しまり中 7.5YR 4/6 黄褐色シルト粒15%混
5. 10YR 2/1 黑褐色シルト 粘性中・しまり中

PP3:

1. 10YR 2/2 黑褐色シルト 粘性中・しまり弱 10YR 4/6 黄褐色シルト粒 5%混
2. 10YR 4/6 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 2/2 黑褐色シルト粒50%混
3. 10YR 4/6 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 7/7 黄褐色シルト粒50%混
4. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 5/8 黄褐色シルト粒10%
5. 10YR 5/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 2/3 黑褐色シルト粒5%混

PP4:

1. 10YR 4/6 黑褐色シルト 粘性中・しまり弱 10YR 2/3 黑褐色シルト粒70%混
2. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 4/6 黄褐色シルト粒70%混
3. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 4/6 黄褐色シルト粒50%混
4. 10YR 5/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 2/3 黑褐色シルト粒10%混
5. 10YR 5/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 2/3 黑褐色シルト粒5%混
6. 10YR 2/1 黑褐色シルト 粘性中・しまり中 10YR 2/1 黑褐色シルト粒5%混

PP5:

1. 10YR 3/4 黑褐色シルト 粘性中・しまりやや弱
2. 10YR 3/4 黑褐色シルト 粘性・しまりやや強 10YR 4/6 黄褐色シルト粒3%混
3. 10YR 5/6 黄褐色シルト 粘性・しまりやや強 10YR 4/5 黄褐色シルト粒3%混
4. 10YR 5/8 黄褐色シルト 粘性中・しまりやや弱 10YR 4/6 黄褐色シルト粒3%混

PP6:

1. 7.5YR 3/1 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 5/6 黄褐色シルト粒7%混
2. 7.5YR 4/6 黄褐色シルト 粘性中・しまりやや弱 7.5YR 3/2 黑褐色シルト粒1%混
3. 10YR 4/6 黄褐色シルト 粘性中・しまりやや弱

PP7:

1. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黄褐色シルト粒1%混
2. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黄褐色シルト粒50%混
3. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黄褐色シルト粒40%混
4. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性中・しまりやや強 10YR 3/3 黄褐色シルト粒50%混
5. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性中・しまりやや強 10YR 2/1 黑褐色シルト粒1%混

PP8:

1. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黄褐色シルト粒1%混
2. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黄褐色シルト粒50%混
3. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 3/3 黄褐色シルト粒50%混
4. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性中・しまりやや強 10YR 3/3 黄褐色シルト粒1%混

PP9:

1. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黄褐色シルト粒1%混
2. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黄褐色シルト粒50%混
3. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 3/3 黄褐色シルト粒50%混
4. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性中・しまりやや強 10YR 3/3 黄褐色シルト粒1%混

PP10:

1. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 5/6 黄褐色シルト粒20%混
2. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 7/7 黄褐色シルト粒20%混
3. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 2/3 黄褐色シルト粒20%混
4. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 3/4 黄褐色シルト粒2%混

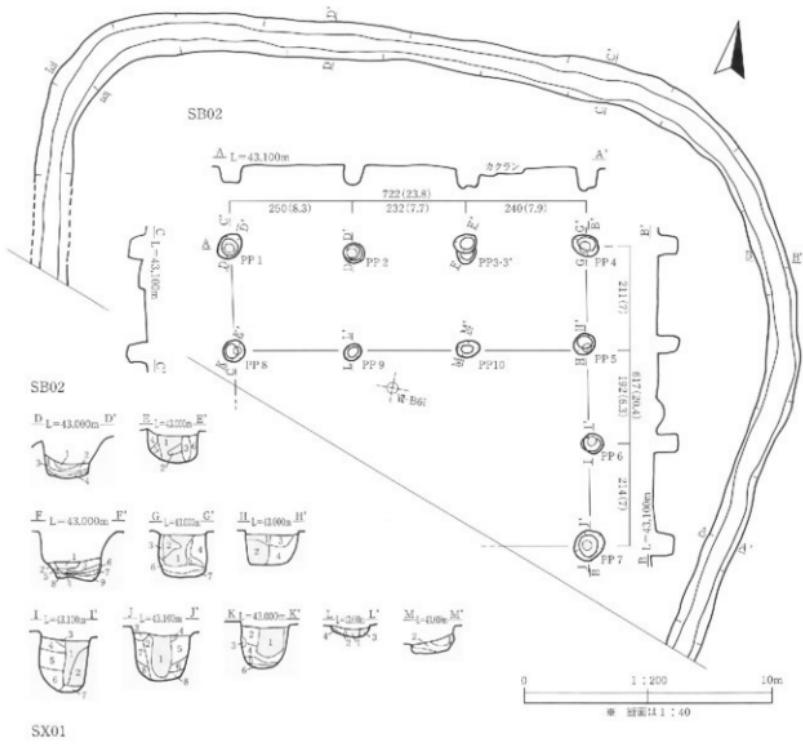
PP11:

1. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 5/6 黄褐色シルト粒20%混
2. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 7/7 黄褐色シルト粒20%混
3. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 2/3 黄褐色シルト粒20%混
4. 10YR 6/8 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 3/4 黄褐色シルト粒2%混

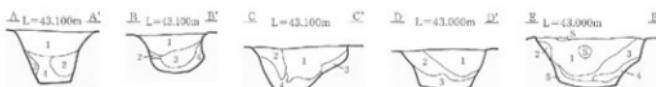
PP12:

1. 7.5YR 4/2 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 7.5YR 4/4 黄褐色シルト粒20%混
2. 10YR 4/6 黄褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 7.5YR 4/2 黑褐色シルト粒1%混

第3図 杉の堂・跡呂井遺跡 検出遺構



SX01



SB02层之応接部

PP1

1. 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黒褐色シルト粒1%
2. 10YR 6/8 明褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 2/2 黒褐色シルト粒2%
3. 10YR 6/8 明褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 3/2 黑褐色シルト粒50%
4. 10YR 6/8 明褐色シルト 粘性やや強・しまりやや弱 10YR 3/2 黑褐色シルト粒15%

PP2

1. 10YR 3/4 黑褐色シルト 粘性・しまり良・10YR 6/8 黑褐色シルト粒1%
2. 10YR 6/8 明褐色シルト 粘性やや強・しまりやや強 10YR 2/3 黑褐色シルト粒1%
3. 10YR 3/4 黑褐色シルト 粘性・しまり良・10YR 6/8 黑褐色シルト粒15%
4. 10YR 3/4 黑褐色シルト 粘性・しまり良・10YR 6/8 黑褐色シルト粒15%
5. 10YR 3/4 黑褐色シルト 粘性・しまり良・10YR 6/8 黑褐色シルト粒3%
6. 10YR 6/8 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 3/3 黑褐色シルト粒3%

PP3

1. 10YR 2/2 黑褐色シルト 粘性・しまり良やや弱 10YR 5/2 黑褐色シルト粒3%
2. 10YR 2/2 黑褐色シルト 粘性・しまり良やや弱 10YR 5/2 黑褐色シルト粒3%
3. 10YR 2/2 黑褐色シルト 粘性・しまり良やや弱 10YR 5/2 黑褐色シルト粒3%
4. 10YR 5/6 黑褐色シルト 粘性・しまり良やや弱 7.2YR 5/6 明褐色シルト粒3%
5. 10YR 5/6 黑褐色シルト 粘性・しまり良やや弱 10YR 2/3 黑褐色シルト粒25%
6. 10YR 5/6 黑褐色シルト 粘性・しまり良やや弱 10YR 2/3 黑褐色シルト粒30%
7. 10YR 5/6 黑褐色シルト 粘性・しまり良やや弱 10YR 2/3 黑褐色シルト粒20%
8. 10YR 5/6 黑褐色シルト 粘性・しまり良やや弱 10YR 2/3 黑褐色シルト粒15%
9. 10YR 5/6 黑褐色シルト 粘性・しまり良やや弱 10YR 2/3 黑褐色シルト粒10%

1. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 6/8 黑褐色シルト粒1%
2. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 6/8 黑褐色シルト粒3%
3. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 6/8 黑褐色シルト粒20%
4. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 6/8 黑褐色シルト粒2%
5. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 6/8 黑褐色シルト粒10%
6. 10YR 6/8 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 2/2 黑褐色シルト粒25%
7. 10YR 6/8 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 2/3 黑褐色シルト粒50%

PP4

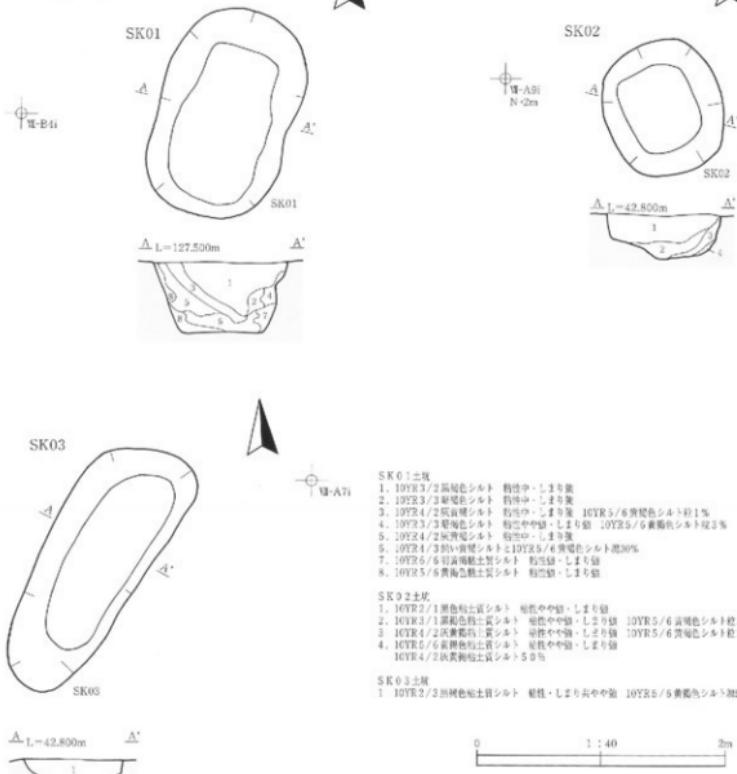
1. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 6/8 黑褐色シルト粒1%
2. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 6/8 黑褐色シルト粒5%
3. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 6/8 黑褐色シルト粒7%
4. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR 6/8 黑褐色シルト粒40%

PP5

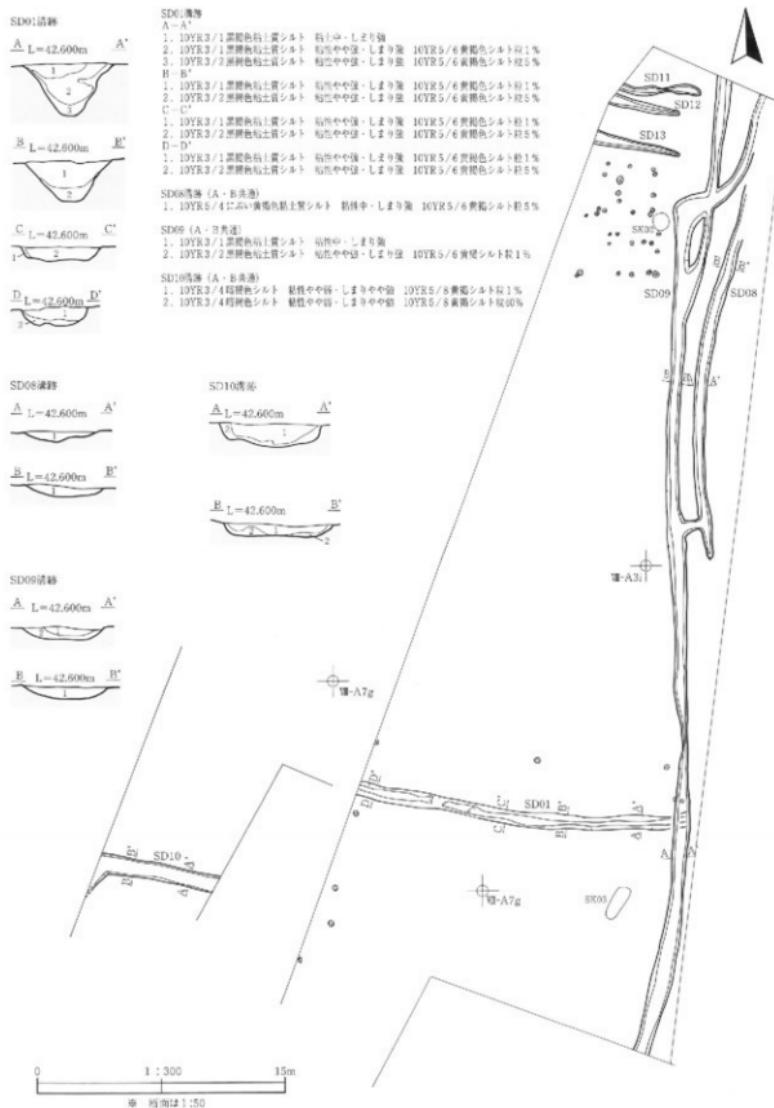
1. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黑褐色シルト粒1%
2. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黑褐色シルト粒1%
3. 10YR 2/3 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 6/8 黑褐色シルト粒12%
4. 10YR 6/8 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 2/3 黑褐色シルト粒50%
5. 10YR 6/8 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 1/1 黑褐色シルト粒1%
6. 10YR 6/8 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 1/1 黑褐色シルト粒40%
7. 10YR 6/8 黑褐色シルト 粘性やや弱・しまりやや強 10YR 2/3 黑褐色シルト粒10%

第4図 杉の堂・跡呂井遺跡 検出遺跡

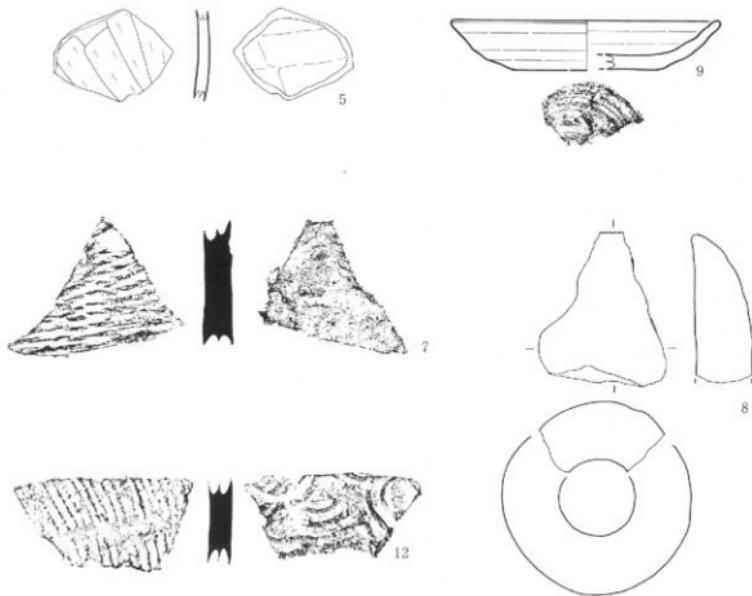
- PP7
- IGYR3/4 黄褐色シルト 硬塑性・しまりやや強 IGYR5/6 明黄色シルト軟1%
 - IGYR5/6 黄褐色シルト 硬塑性・しまりやや強 IGYR5/6 明黄色シルト軟3%
 - IGYR3/4 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 黄褐色シルト軟3%
 - IGYR5/6 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 黄褐色シルト軟3%
 - IGYR6/8 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 黄褐色シルト軟40%
 - IGYR5/8 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 黄褐色シルト軟10%
 - IGYR6/8 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 黄褐色シルト軟15%
 - IGYR3/4 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 黄褐色シルト軟20%
- PP9
- IGYR3/4 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 明黄色シルト軟2%
 - IGYR5/6 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 明黄色シルト軟20%
 - IGYR3/4 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 明黄色シルト軟20%
 - IGYR6/8 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 明黄色シルト軟25%
 - IGYR3/2 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 黄褐色シルト軟25%
 - IGYR6/8 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 黄褐色シルト軟25%
- PP16
- IGYR3/4 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 明黄色シルト軟1%
 - IGYR5/6 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 明黄色シルト軟3%
 - IGYR3/4 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 明黄色シルト軟5%
 - IGYR6/8 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 黄褐色シルト軟5%
- PP24
- IGYR3/4 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR6/8 明黄色シルト30%
 - IGYR5/6 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強
 - IGYR3/4 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強
 - IGYR6/8 黄褐色シルト 硬塑性やや弱・しまりやや強 IGYR5/6 黄褐色シルト軟1%



第5図 杉の堂・跡呂井遺跡 検出遺構



第6図 杉の堂・跡呂井遺跡 検出遺構



(S=1:2)

出土遺物観察表

<土器>

No.	出土地点	種類	形態	残存率	特徴	考収
1	S B01 横穴式建物跡 P.P.2	須恵器	栗垂目	10%以下	外：平行タタキ 内：ナデ	
2	S B01 横穴式建物跡 P.P.3	土師器	長脚壺	10%以下	内外共にロクロナデ	
3	S B02 横穴式建物跡 P.P.6	土師器	不明	10%以下	器底が汚らしい	
4	S X01 区画溝	土師器	壺?	10%以下	外：平行、内面：ミガキ	内面黒色処理
5	S X01 区画溝	土師器	具脚壺	10%以下	外：ハゲメ 内：ナデ	内面糊付着
6	S X01 区画溝	須恵器	人面	10%以下	外：平行タタキ 内：平行アテグ?	
7	S X01 区画溝	須恵器	大甕	10%以下	外：平行タタキ 内：ナデ	
9	S D01 游跡	土師器	壺	20%	内外共にロクロナデ 瓶：深幅イトカリ	
10	S D01 游跡	土師器	小甕	10%以下	器底が汚らしい	
11	S D06 游跡	須恵器	壺	10%以下	内外共にロクロナデ	
12	S D06 游跡	須恵器	大甕	10%以下	外：平行タタキ 内：同心円アテグ	
13	S D09 游跡	須恵器	栗垂壺	10%以下	内外共にロクロナデ	外面自然社
14	S D09 游跡	土師器	壺?	10%以下	内外共にロクロナデ?	

<土製品>

No.	出土地点	種類	形態	残存率	重量	特徴	備考
8	S X01周辺	羽口			60.11	先端部一部赤褐、黒褐色を呈する	

<石器>

No.	出土地点	種類	形態	残存率	重量	特徴	備考
15	S D09周辺	磨製石斧	S.S	3.5	32.05	奥羽山脈 デイサイト	河原欠損

第7図 杉の堂・跡呂井遺跡 出土遺物



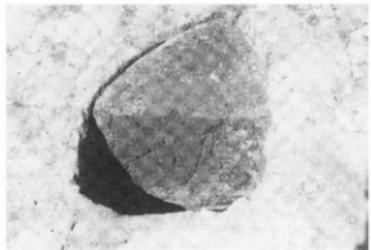
SB01全景(南から)



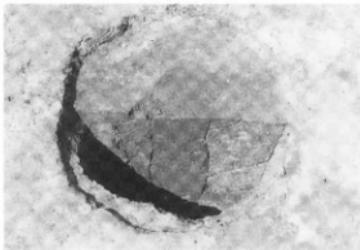
SB01断面(N-N')



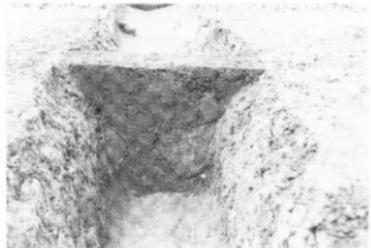
SB02完掘(G-G')



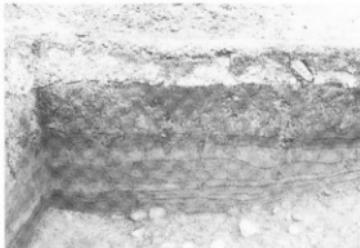
SB02断面(G-G')



SB02断面(J-J')

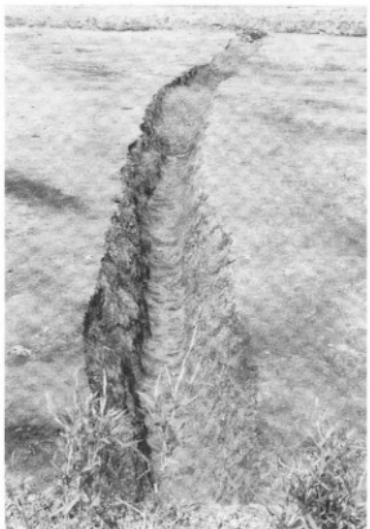


SX01断面(N-N')

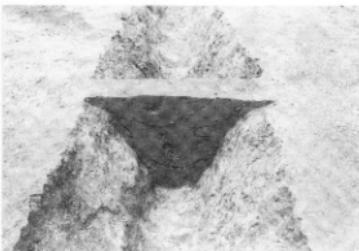


D区土層断面

写真図版 1 杉の堂・跡呂井遺跡 検出遺構



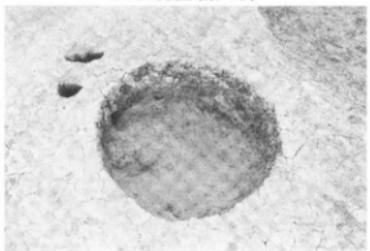
SD01完掘(東から)



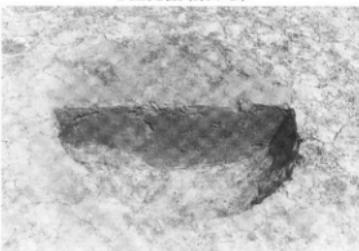
SD01断面(A-A')



B区完掘(東から)



SK05完掘(南から)



SK05断面(南から)

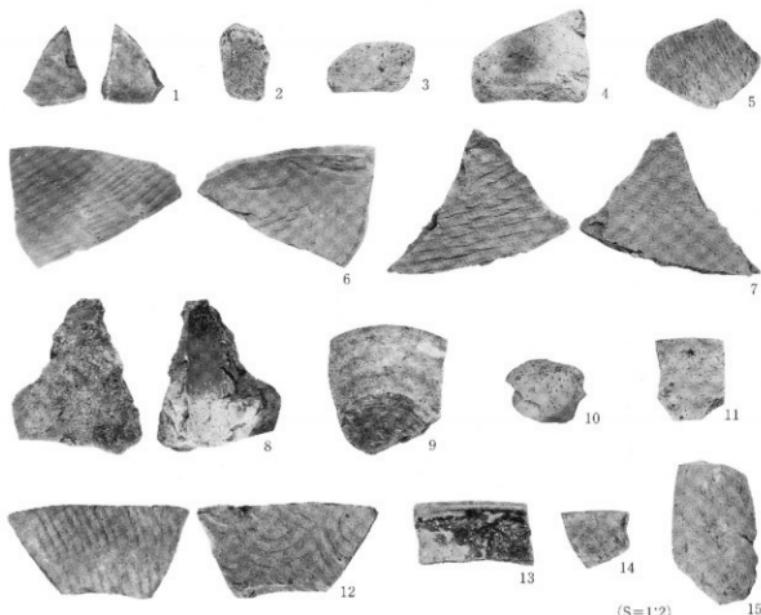


E区全景(北西から)



D区全景(南東から)

写真図版2 杉の堂・跡呂井遺跡 検出遺構



写真図版3 杉の堂・跡呂井遺跡 出土遺物

(S=1:2)

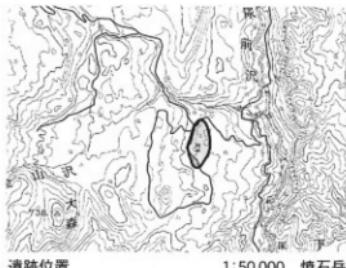
報告書抄録

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
書名	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
シリーズ名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ番号	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
著者名	第455集							
編著者名	丸山直美・窪岩伸吾							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185	TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
杉の堂・ 跡呂井遺跡	岩手県水沢市 神明町2丁目 26-2-1丁目 106	市町村 03204	N E27 -0100 N E17 -2087	39度 07分 48秒	141度 09分 41秒	2003.04.10 ~ 2003.06.16	5,745m ²	「水沢東バイ バス建設事業」 に伴う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
杉の堂・ 跡呂井遺跡	集落跡	平安	獨立柱建物跡2棟 区画溝1条	土器 3基 溝跡 17条 柱穴状ピット59基	土師器・須恵器 土製品・石器			
		近世以降 (不明)						

*緯度・経度は墨界測地系

(41) 蜂谷遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町若柳字蜂谷8ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局
 胆沢ダム工事事務所
 事 業 名 胆沢ダム建設事業
 発掘調査期間 平成15年6月16日～8月8日
 調査対象面積 20,000m²
 発掘調査面積 16,700m²
 遺跡番号・略号 N E21-0274・H Y-03
 調査担当者 宮岩伸吾・丸山直美
 協 力 機 関 胆沢町教育委員会



1. 調査に至る経緯

国土交通省は胆沢ダム建設事業の一環として、ダム堤体材料を運搬するための「ロック材運搬路」、材料採取に伴って発生する不要な土砂を廃棄するための「建設発生土受け入れ地」の建設を胆沢郡胆沢町若柳字蜂谷地内に計画している。一方、当該地は縄文時代の「蜂谷遺跡」の存在が知られており、散布地の範囲が岩手県遺跡台帳にも示されている。

胆沢ダム建設の事業主体である同省胆沢ダム工事事務所は平成14年9月、岩手県生涯学習文化課に対し「蜂谷遺跡の試掘・発掘調査」を平成15年度中に実施したい旨を伝えた。これに対し同課は、「試掘と発掘を一括して埋蔵文化財センターに委託するのであれば、遺構の分布密度にもよるが、発掘調査を15年に完了することも可能」と回答した。そこで同事務所は、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに対し、蜂谷遺跡の試掘・発掘調査を委託することとした。
 (国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所)

2. 遺跡の立地

蜂谷遺跡は東流する胆沢川と南流する尻前渓谷の合流点を南東に見下す標高480～490mの山間部に位置し、調査区はその尾根部、谷部、平坦部に跨っている。

3. 遺跡の基本層序

I 層	10Y R3/1 黒褐色シルト 粘性中 しまり弱い 植物根多量 (表土) 層厚12～20cm
II 層	10Y R4/6 褐色砂質シルトと粘土質シルトの混合土 (盛土) 層厚10～120cm < D区中央部のみ堆積 >
III 層	10Y R8/1 灰白粘土質シルト 炭化物ブロック 2% <谷部のみ堆積> 7.5Y R5/8 褐鉄鉱ブロック 5% 粘性やや強 しまり中 (旧表土) 層厚10cm
IV 層	10Y R8/1 灰白粘土質シルトと7.5Y R5/8明褐色 ブロック の混合土 粘性やや強 しまり中 崩壊性堆積層 層厚不明



第1図 基本土層柱状図

4. 調査の概要

調査区は北東から南西に延びる13,800m²と北西側の追加分2,900m²の合わせて16,700m²を対象とした。試掘は調査区をA B C Dの4つの区画とし、A～C区はその3割に当たる4,200m²をトレンチ掘削した(T1からT87)。また、追加D区はプレハブや林道などの敷地内であるという制約上その1.7割に当たる528m²を試掘調査している(T88からT108)。試掘調査合計面積は4,728m²である。

＜出土遺物＞ 調査の結果、C区T66から土器片9点・石器類9点(石錐・四石・台石各1点、剥片6点)が出土した。土器片は器面の摩耗が著しく時期不明である。石器No10は、長軸の一端部に側縁から両面調整が施されており、尖端部が磨滅して石錐として使用していた可能性がある。また、近世以降の磁器片がT45・T49・T51・T66の表土面からそれぞれ1点ずつ確認された。

5.まとめ

試掘調査の結果、T66で遺物散布区を1箇所確認した。当初、堅穴住居等の遺構となることが予想されたが、遺物散布箇所に上層観察用のベルトを設定し精査を行った結果、床面となるような硬化面、炉跡、焼土跡は確認できなかった。

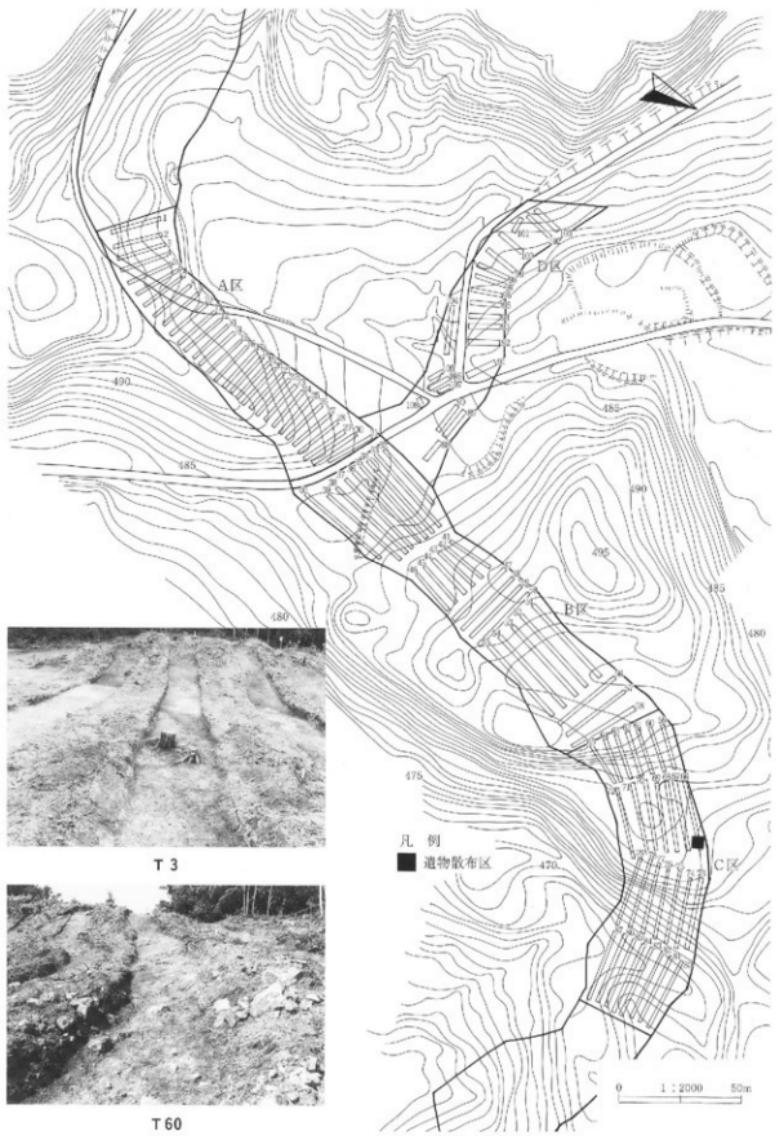
一方土坑が、B区T37・T38・T39・T42・T45・T47・T49から計14基、同様にD区のT94・T97から計5基の合計19基確認された。これらは全て径60~90cm内外に収まり20cm前後の円形を呈するなど規格性が強く、埋土に地山の褐色ブロックと炭化物を含むことも共通している。内、T45から近世の磁器片が1点出土した。地元に詳しい方の話によれば、調査区周辺は昭和19年頃に折かれた畠地および宅地で、当時は数件の家があり、昭和45年頃まで農業(燒烟を含む)・製炭業などを営んでいたとのことである。調査区で発見された土坑についてはこれをもって用途や時期決定の手がかりとはできないが、古い遺物が確認されないこと、当時の住民の何らかの生産活動の痕跡である可能性が高いことから、調査の対象から除外した。

なお、蜂谷遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

ふりがな	いわでけんmaiぞうぶんかざいはっくつちょうさりやくほう						
書名	岩手県蔵文化財発掘調査暗報						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第455集						
編著者名	窓井伸吾・丸山直美						
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日	西暦2004年3月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
蜂谷遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町若柳字 蜂谷8	03383 NE21 -0274	39度 08分 00秒	140度 54分 12.7秒	2003.06.16 ～ 2003.08.08	16,700m ²	「胆沢ダム建設事業」に伴う 緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
蜂谷遺跡	散布地		近代の土坑19基	土器9点 石器9点			

*緯度・経度は世界地図系



第2図 蜂谷遺跡 トレーンチ配置図



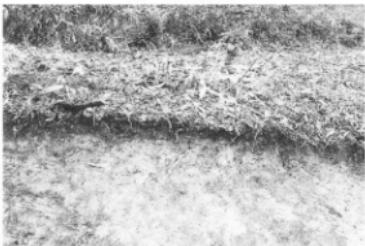
A区検出作業風景



B・C区近景



A区T1



A区T1断面



B区T55



B区T55深掘断面

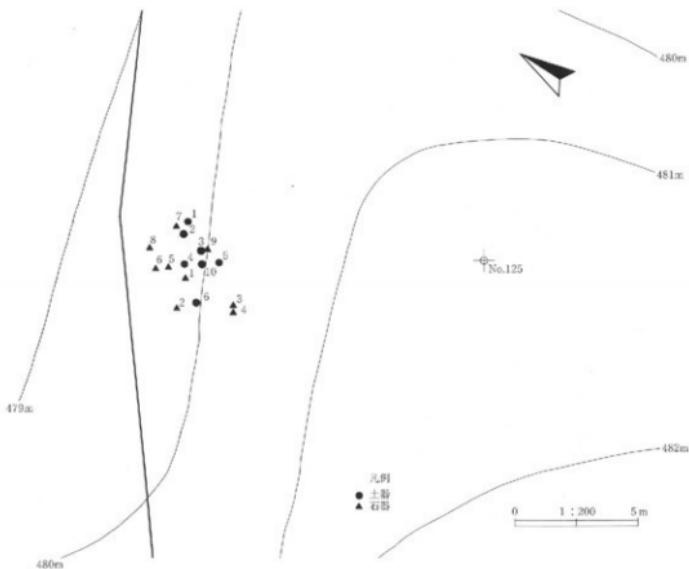


C区T66



D区T105

写真図版 1 蜂谷遺跡 試掘状況写真



散布区断面

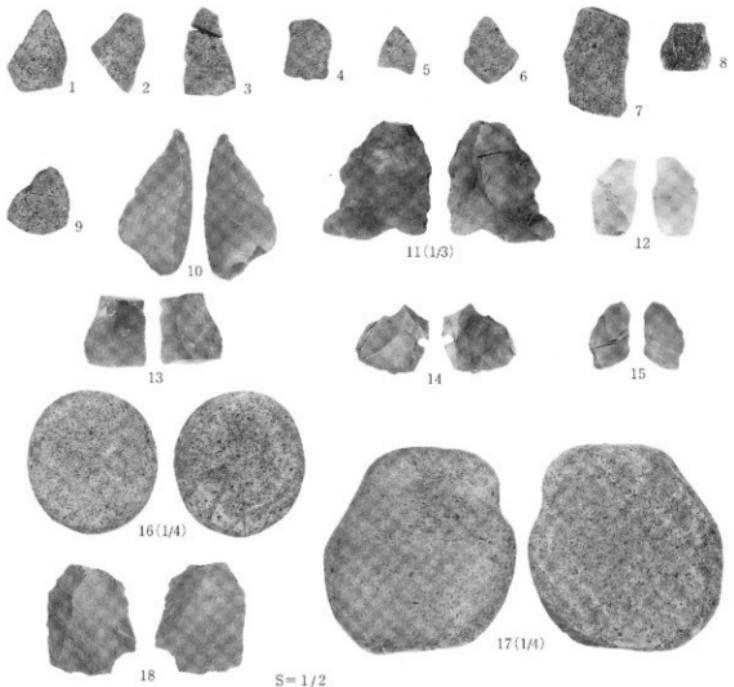


出土状況①(南から)



出土状況②(東から)

第3図・写真図版2 蜂谷遺跡試掘C区遺物散布区



遺物觀察表

<土器>

No.	出土地位	層位	器種	部位	原体	特徵	時期	等級
1	T66	I層	深鉢	側部	不明	器面磨耗	時期不明	1/2
2	T66	I層	深鉢	側部	不明	器面磨耗	時期不明	1/2
3	T66	I層	深鉢	側部	不明	器面磨耗	時期不明	1/2
4	T66	I層	深鉢	側部	不明	器面磨耗	時期不明	1/2
5	T66	I層	深鉢	側部	不明	器面磨耗	時期不明	1/2
6	T66	I層	深鉢	側部	不明	內面炭化物付着	時期不明	1/2
7	T66	I層	深鉢	口縁部	不明	器面磨耗	時期不明	1/2
8	T66	I層	深鉢	側部	不明	外側炭化物付着	時期不明	1/2
9	T66	I層	深鉢	側部	不明	燒成不良	時期不明	1/2

<石器>

No.	出土地位	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徵	等級
10	T66	I層	石錐	6.1	2.9	1.1	16.09	頁岩(美濃山脈)	長錐-端部凹絞；側面圓整	1/2
11	T66	I層	剝片	8.7	6.6	1.6	51.90	頁岩(美濃山脈)		1/2
12	T66	I層	剝片	3.4	1.9	0.3	1.70	頁岩(美濃山脈)		1/2
13	T66	I層	剝片	2.9	2.6	0.7	5.60	頁岩(美濃山脈)		1/2
14	T66	I層	剝片	3.2	2.7	0.7	3.69	頁岩(美濃山脈)		1/2
15	T66	I層	剝片	2.9	2.7	0.4	1.17	頁岩(美濃山脈)		1/2
16	T66	I層	四石	11.8	10.7	3.8	263.21	安山岩(美濃山脈)		1/2
17	T66	I層	石石	18.6	15.4	4.6	2399.69	安山岩(美濃山脈)		1/2
18	T66	I層	剝片	4.8	3.6	0.8	9.07	頁岩(美濃山脈)		1/2

写真図版3 蜂谷遺跡出土遺物

(42~49) 一の台遺跡ほか7遺跡

委託者 農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所

事業名 国営いさわ南部農地整備事業

発掘調査期間 平成15年10月20日～11月29日

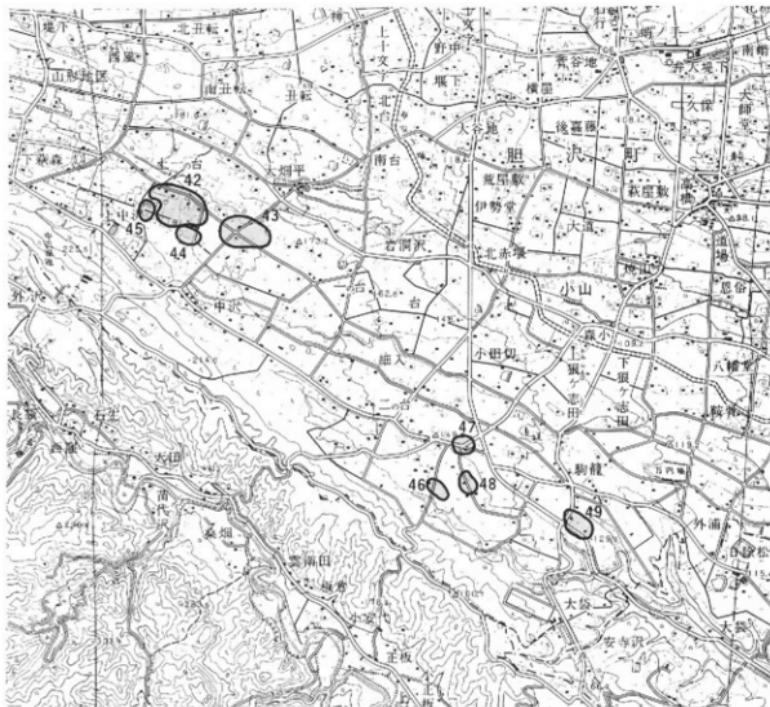
調査対象面積 192,221m²

試掘面積 8,180m²

遺跡番号・略号 NE34-1021 NE34-1058 NE34-1063 NE33-1339 NE45-1033
NE44-0370 NE44-1312 NE44-1228

調査担当者 吉田 充・野中貞盛・星 幸文・鈴木裕明・新妻伸也・藤原大輔

協力機関 胆沢町教育委員会



一の台遺跡ほか10遺跡の試掘調査に至る経過

国営いさわ南部農地整備事業実施地区は、岩手県の南西部に位置し、胆沢川から北上川にかけての扇状地の右辺部にあり、標高110～210mの段丘地形を呈している。この地形のなかに位置する「上中沢Ⅰ遺跡」ほか29遺跡は、「国営いさわ南部農地整備事業」の施行に伴って、その事業地区内に存することから試掘調査を実施することとなったものである。

この地区の農業は、水田を主体とした経営により発展してきたものの、所有耕地が分散し区画形状は未整備もしくは昭和30年代に整備された10a区画がほとんどで、かんがい用水不足に加え用排水路も未整備などから農業の近代化が困難なまま生産性の低い農業経営を余儀なくされている。

このため、農用地の効率的利用と労働生産性の高い農業経営の展開が可能な生産基盤を形成するため、国営かんがい排水事業により基幹的な用排水施設を整備し、本事業では既耕地を再編整備する区画整理875haと地目変換による農地造成8haの地域を一体的に施工し、併せて担い手への農地利用の集積による経営規模の拡大と経営の合理化を図るとともに、土地利用の整序化を通じ農業の振興を基幹として本地域の活性化に資することを目的に、現在事業を進めている。

この地区的埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が平成8年度に分布調査を実施し、「上中沢Ⅰ遺跡」ほか29遺跡が確認されている。その結果に基づいて岩手県教育委員会は東北農政局胆沢猿ヶ石上地改良建設事業所に対し事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は東北農政局胆沢猿ヶ石上地改良建設事業所いさわ南部農地整備事業所と協議を行ない、試掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることにした。

これにより、岩手県教育委員会は平成15年度事業について、平成15年1月14日付け教文第1457号により財團法人岩手県文化振興事業団へ通知した。

これを受けて財團法人岩手県文化振興事業団は、「上中沢Ⅰ遺跡」ほか29遺跡の内平成15年度施工地区内に存する「一の台遺跡」「一の台遺跡Ⅱ」「一の台遺跡Ⅲ」「一の台遺跡Ⅳ」「台Ⅰ遺跡」「NE34-2200遺跡」「二の沢遺跡」「鶴供養遺跡」「三の台長根遺跡」「浪人遺跡」「屋敷遺跡」の11遺跡について、同年9月30日付けをもって東北農政局いさわ南部農地整備事業所と委託契約を締結したが、諸般の事情により「台Ⅰ遺跡」「NE34-2200遺跡」「浪人遺跡」を除外し、残る8遺跡について同年10月20日から試掘調査事業に着手した。

(農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所)

(42) 一ノ台遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町小山字上大畑平276-4
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 いさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成15年10月23日～11月27日
 調査対象面積 46,079m²
 試 挖 面 積 1,604m²
 遺跡番号・略号 NE34-1021
 調査担当者 吉田 充・野中真盛・新妻伸也
 藤原大輔
 協 力 機 関 胆沢町教育委員会



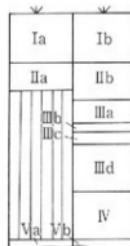
1. 遺跡の立地

一の台遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約11kmに位置する。胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は190m前後である。現況は水田、牧草地である。

2. 地形と土層

昭和34年9月からの「農地機械公団」による造成事業により旧地形が整備され、現地形による土地利用が始まっている。本遺跡の中央付近は地山までの表土が厚く、表土下部には西から東側にかけて旧表土上の谷地土壤が埋積されていることから、中央付近は全体的に盛土されていると推測される。なお、谷地であった部分には十和田a降下火山灰が堆積する場所がある。模式層序は次の通りである。

I a層	10Y R3/2 黒褐色漂白粘土と10Y R5/6黄褐色の粘土の混合土（2%）ややしまる 層厚20cm <水田表土>	I b層	
I b層	7.5Y R3/2 黑褐色粘土と5Y 9H褐色粘土（3%）の混合土 しまる 層厚20cm <牧草地>	II a層	
II a層	10Y R2/3 黑褐色粘土と10Y R4/6褐色粘土（7%）の混合土 ややしまる 層厚10cm <盛土 a>	II b層	
II b層	7.5Y R2/2褐色シルト しまる 層厚10cm <II表土 a>	III a層	
III a層	5Y R1.7/1黑色シルト しまる 層厚3cm <十和田 a 火山灰>	III b層	
III b層	10Y R6/4C灰褐色火山灰 層厚3cm <II表土 b>	III c層	
III c層	7.5Y R2/1黑色粘土 しまる 層厚5cm <II表土 b>	III d層	
III d層	10Y R2/3黑褐色シルト質粘土 しまる 層厚20cm <II表土 c>	V a層	
V 層	10Y R3/4暗褐色粘土 しまる 層厚20cm <II表土 d>	V a層	
V a層	10Y R4/6褐色粘土 堅くしまる <地山 a>	V b層	
V b層	10Y R5/3C灰褐色粘土 ややしまる <地山 b>	V b層	



模式土層柱状図

3. 調査結果

＜検出遺構・出土遺物＞ T8、T12、T14 トレンチから陥し穴状遺構を合計7基検出した。T8で検出された遺構は直径75～95cm円形状を呈する。4～5m間隔で曲線的に配列し、西側にそれる。平面形の一部しか検出できないものが多い。遺物は出土していない。検出規模は次表の通りである。

トレンチ名	種類	規模 (長軸×短軸)	トレンチ名	種類	規模 (長軸×短軸)	トレンチ名	種類	規模 (長軸×短軸)
T08	陥し穴状A	75×65	T08	陥し穴状D	95×95	T14	陥し穴状	220×75
T08	陥し穴状B	80×75	T08	陥し穴状E	80×65以上			
T08	陥し穴状C	94×90	T12	陥し穴状	50以上×60			



一の台遺跡トレンチ位置図

報告書抄録

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはつくつちょうさりやくほう				
書名	岩手県埋文化財発掘調査略報				
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋文化財調査報告書				
シリーズ番号	第455号				
著者名	吉田 宏				
収集場所	財団法人岩手県文化振興事業団埋文化財センター				
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下黒田11-185 TEL (019) 638-9001・9002				
発行年月日	西暦2004年3月25日				
ふりがな 所収遺跡名	いわてけんまいぞうぶんかざいはつくつちょうさりやくほう 一の台遺跡				
ふりがな 所在地	いわてけんまいぞうぶんかざいはつくつちょうさりやくほう 岩手県田沢郡大館町小山字上大 3383番地				
コード	03383				
北緯	39度 05分 45秒				
東経	141度 01分 05秒				
調査期間	2003.10.23 ～ 2003.11.27				
調査面積	1,604m ²				
調査原因	国営いさわ南部 農地整備事業に 伴う緊急発掘調査				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	等記事項
一の台遺跡	敷石地	縄文時代	陥し穴状遺構		

北緯度、経度は世界測地系

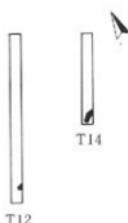
4.まとめ

現道路レベルを旧地形面と考えると最大約1m掘り下げられ、黒沢尻火山灰上部層が地山として検出される。

東側民家の頃から縄文時代中期の土器片が出土していることから、これらの遺構は同時期の可能性があるが、調査結果からは遺跡の性格を特定できない。なお、本遺跡に関する報告はこれをもって全てとする。



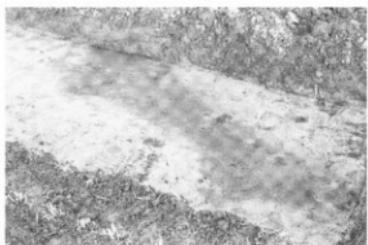
一の台遺跡検出遺構(1:800)



T 8 遺構検出状況(南から)



T 8 陥し穴状遺構(南から)



T12 陥し穴状遺構(西から)



T 7 土層断面(東から)

一の台遺跡試掘状況写真

いち　だい　に
(43) 一の台Ⅱ遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町小山字上一の台203
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 いさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発 挖 調査 期 間 平成15年10月31日～11月12日
 調査 対象面積 4,480m²
 試 堀 面 積 380m²
 遺跡番号・略号 NE 34-1058
 調査 担 当 者 吉田 光・野中真盛・新妻伸也
 藤原大輔
 協 力 機 関 胆沢町教育委員会



1. 遺跡の立地

一の台Ⅱ遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約10kmに位置する。胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は約185mである。現況は水田である。

2. 地形と土層

昭和34年9月からの「農地機械公団」による造成事業により旧地形が整備され、現地形による土地利用が始まっている。遺跡南側に埋土が厚く、下部に谷地状の堆積物が厚く溜まっている。現地形と照らし合わせて考えると、遺跡南側に沢状の地形が北西南東方向に走っていたと考えられる。土層は地山上に旧表土層、盛土、水田表土の順に堆積し、旧地形標高が低いところほど厚く溜まっている。本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I 層 10Y R3/3 暗褐色シルトと10Y R6/6明黄褐色粘土(20%)の混合土 ややしまる 層厚15cm <水田表土>
- II 層 10Y R4/3にぶい黄褐色シルトに10Y R6/6明黄褐色粘土(3%)が塊状に混入 しまる 層厚10~80cm <盛土>
- III 層 10Y R2/3 黒褐色シルト～3/2黒褐色粘土質シルト しまる 層厚10~100cm <旧表土>
- IV 層 10Y R6/6明黄褐色粘土 粘性強 しまる <地山>

3. 調査結果

<検出遺構・出土遺物> 遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。

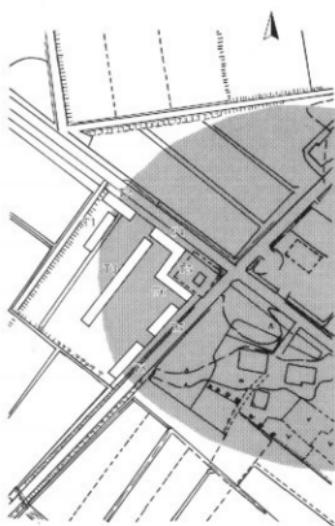
4.まとめ

T 1～T 7には構造改善時のブルドーザーキャタピラ痕や耕運機のタイヤ痕が地山に残る部分がある。T 3、T 7～8両側半分は埋土が厚く下部に自然堆積土が残る。水田造成時に北側の表土を削りながら南側に盛土して、現水田を造成したと推測される。その時点では埋蔵文化財は消失している可能性はあるが、本調査



基本土層柱状図

では遺構・遺物は確認できなかった。なお、本遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



一の台Ⅱ遺跡トレンチ位置図（1：2,500）



T8 平面(南から)



T8 土層断面(北から)
一の台Ⅱ遺跡試掘状況写真

報告書抄録

ふりがな 書名	いわてけんmaiぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
編著者名	吉田 光							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因		
いわてけんmaiぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう 一の台Ⅱ遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 上一の台203	03383	N E34 -1058	39度 05分 30秒	141度 01分 30秒	2003.10.31 ～ 2003.11.12	380m ²	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
一の台Ⅱ遺跡	散布地	縄文時代						

※緯度・経度は世界測地系

いち　だいさん
(44) 一の台Ⅲ遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町小山字上中沢91
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 いさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成15年11月14日～11月27日
 調査対象面積 20,782m²
 試 堀 面 積 575m²
 遺跡番号・略号 N E34-1063
 調査担当者 野中真盛・吉田 充・新妻伸也
 協 力 機 関 胆沢町教育委員会



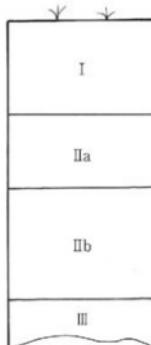
1. 遺跡の立地

一の台Ⅲ遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約10.6kmに位置する。胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は184～185mである。現況は水田である。

2. 地形と土層

昭和34年9月からの「農地機械公団」による造成事業により旧地形が整備され、現地形による土地利用が始まっている。本遺跡の現水田標高は一の台遺跡南端水田標高より約1.6m低く造成されている。遺跡東側は生活用道路より最大2m下に水田がある。土層は地山上に盛土、水田表土の順に堆積し、旧地形標高が低いところほど厚く溜まっている。本遺跡の基本層序は次の通りである。

I 層	10Y R4/2	灰黄褐色粘土	ややしまる	層厚13cm	<水田表土>
II a 層	7.5Y R2/1	黒色シルト質粘土	ややしまる	層厚10cm	<盛土1>
II b 層	10Y R3/2	黒褐色シルトと6/8明黄褐色粘土の混合土	しまる	層厚約15cm	<盛土2>
III 層	10Y R6/8	明黄褐色粘土	しまる	<地山>	



3. 調査結果

<検出遺構・出土遺物> T 2 で陥し穴状遺構1基、T 4 b で土坑状遺構1基を検出した。いずれも平面形の一部しか検出できなかった（下表参照）。

遺物は出土しなかった。

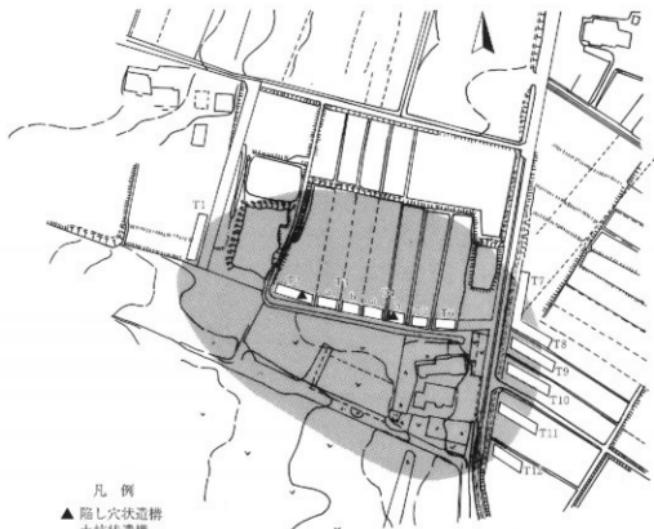
トレンチ名	種類	概要（長さ×幅）
T 2	陥し穴状	140以上×70
T 4 b	土坑状	80以上×50

4.まとめ

西側の池底は旧沢地形をさらに掘り下げて造られている。その西側T 1では厚く盛土をされていることから、東西方向に沢地形が埋没していると推測される。遺跡東側は生活用道路が旧地表面と推測され、現水田面は最大2m削平を受けていると考えられる。遺跡台帳上は散布地で縄文土器が出土していることから今回

検出された遺構は同時期とみられるが、水田造成時に埋蔵文化財が消失している可能性が大きく、本調査では遺跡の性格を明らかにするまでには至らなかった。

なお、本遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

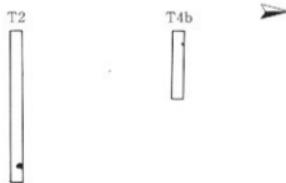


一の台Ⅲ遺跡トレンチ位置図 (1 : 3,000)

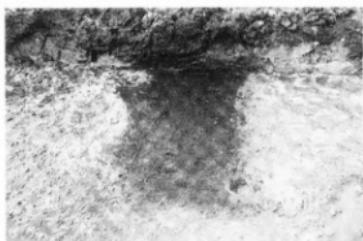
報告書抄録

ふりがな 書名	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
編著者名	野中貞盛・吉田 充							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 度	調査期間	調査面積	調査原因	
いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう 一の台Ⅲ遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 上中沢91	03383	NE 34 -1063	39度 05分 38秒	141度 01分 17秒	2003.11.14 ~ 2003.11.27	575m ²	国営いさわ南 部農地整備事 業に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
一の台Ⅲ遺跡	散布地	縄文時代	陥し穴状遺構 土坑状遺構					

※緯度・経度は墨界測地系



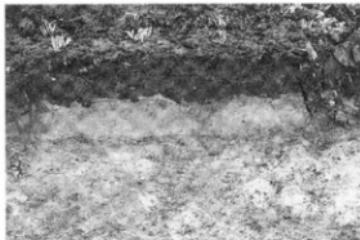
一の台Ⅲ遺跡検出遺構 (1:800)



T2 陥し穴状遺構(南から)



T4b 土坑状遺構(南から)



T3 土層断面(南から)

一の台Ⅲ遺跡試掘状況写真

(45) いわ だいよん
一の台IV遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町小山字上一の台116-1
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 いさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成15年10月20日～11月6日
 調査対象面積 22,227m²
 試 挖 面 積 979m²
 遺跡番号・略号 N E 33-1339
 調査担当者 吉田 充・野中真盛
 協 力 機 関 胆沢町教育委員会



1. 遺跡の立地

一の台IV遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約11kmに位置する。胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は約190mである。現況は水田、牧草地である。

2. 模式層序

本遺跡の模式層序は次の通りである。

I a層 10Y R3/2 黒褐色砂質粘土と7.5Y R5/6明褐色粘土 (7%)

の混合土 しまる 層厚20~30cm <牧草地擾乱土>

I b層 7.5Y R3/2黒褐色砂質粘土 酸化鉄染込み しまる

層厚10~15cm <水田表土>

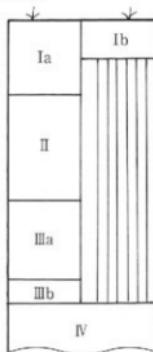
II層 7.5Y R2/2黒褐色シルト質粘土と4/3褐色粘土の混合土

しまる 層厚15~43cm <盛土>

III a層 7.5Y R2/1黒色粘土 堅くしまる 層厚10~32cm <旧表土a>

III b層 7.5Y R3/2黒褐色シルト質粘土 しまる 層厚10cm <旧表土b>

IV層 7.5Y R6/6橙色粘土 堅くしまる <地山>



3. 調査結果

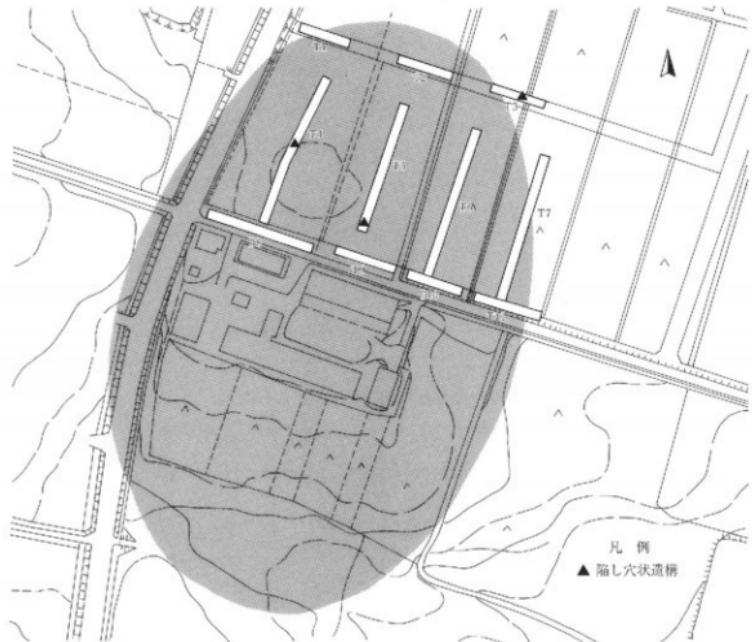
<検出遺構・出土遺物> T 3～T 5 トレンチから陥し穴状遺構を合計3基検出した。いずれも平面形の一部しか検出できなかった。遺物はT 6 水田表土から無文の土器片2点が出土した。検出規模は次表の通りである。

トレンチ名	種類	規模 (長軸×短軸) cm	トレンチ名	種類	規模 (長軸×短軸) cm
T 3	陥し穴状	170cm以上×45cm以上	T 5	陥し穴状	200cm以上×100cm以上
T 4	陥し穴状	130cm以上×75cm以上			

4.まとめ

T 4、T 5北縁は緩やかに低くなり、T 1では地山まで約1mと深い。現地形の北側はやや緩く傾斜しながら溜池へとつながる。これらのことから地形変更前は小規模な谷状地形が北側にあり、部分的に谷地となっ

ていた可能性がある。遺構は谷状地形とは反対側の高い部分にある。昭和30年代の農地整備に伴う搅乱とその後の小さな搅乱を考えあわせても遺物が2点しか出土していないことは、遺跡の生活の中心ではない可能性が大きい。なお、本遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

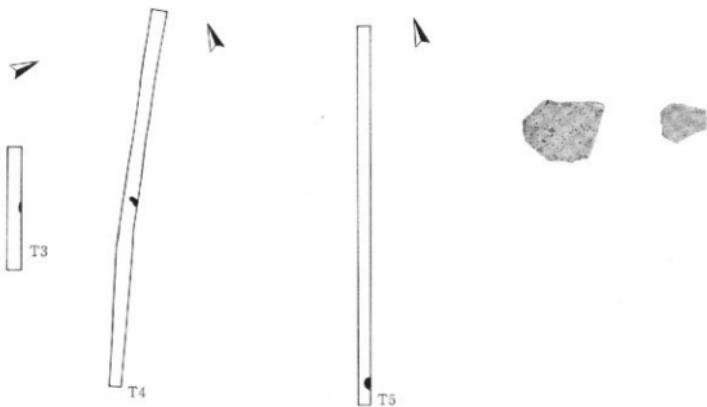


一の台IV遺跡トレンチ位置図 (1 : 2,000)

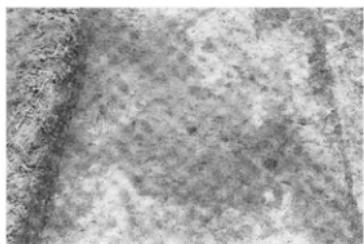
報告書抄録

ふりがな	いわけけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりゅくほう				
書名	岩手県立文化財発掘調査報告				
シリーズ名	岩手県文化振興事業団理成文化財調査報告書				
シリーズ番号	第456集				
著者名	吉田 克				
種類	財団法人岩手県文化振興事業団理成文化センター				
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下原町11-185 TEL (019) 638-9001・9002				
発行年月日	西暦2004年3月25日				
ふりがな 所収遺跡名	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりゅくほう 一の台遺跡				
ふりがな 所在地	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりゅくほう 岩手県立文化財発掘 沢町小山字一の台16-1				
コード 市町村	03363				
遺跡番号	N E 33 -1339				
北緯	39度				
東経	141度				
	05分				
	45秒				
調査期間	2003.10.20 ~ 2003.11.06				
調査面積	979m ²				
調査原因	同上				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
一の台IV遺跡	散布地	縄文時代	陥し穴状遺構	土器2片	

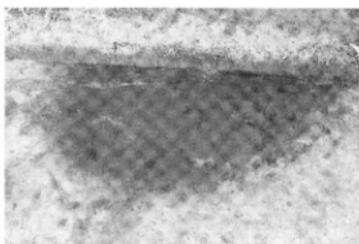
座標度、経度は世界測地系



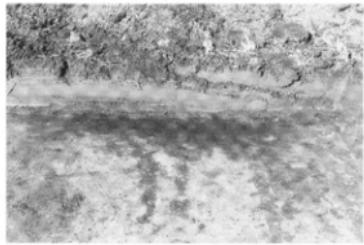
一の台IV遺跡検出遺構 (1 : 800)・出土遺物 (S = 1/3)



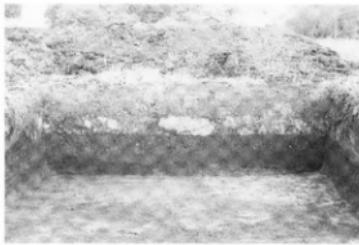
T 4 陥し穴状遺構(北から)



T 5 陥し穴状遺構(西から)



T 3 陥し穴状遺構(南から)



T 4 土層断面(南から)

一の台IV遺跡試掘状況写真

(46) やしき 屋敷遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町小山字屋敷31-1
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 いさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成15年11月18日～11月29日
 調査対象面積 29,323m²
 試 挖 面 積 1,602m²
 遺跡番号・略号 N E 44-1228
 調査担当者 吉田 充・野中真盛・新妻伸也
 星 幸文・鈴木裕明・藤原大輔
 協 力 機 関 胆沢町教育委員会



1. 遺跡の立地

屋敷遺跡は、JR東北本線前沢駅の約7.2km北西に位置する。胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は143～149mである。現況は水田、畑および荒地である。

2. 地形と土層

昭和34年9月からの「農地機械公团」による造成事業により旧地形が整備され、現地形による土地利用が始まっている。遺跡は西側から東側に向けて緩く傾斜し、北西南東方向にのびる凹地形（沢跡）に繋がる。南側の墓石周辺は旧地形をかろうじて残している。水田は東側に向かって最大10段の階段状に配置され、斜面上側を削り、その削土を下側に盛り1枚の水田を作っている。したがって、1枚の水田東側は旧地形の保存状態が良好である。本遺跡の模式層序は次の通りである。

I a層	10Y R4/6褐色粘土 ややしまる 層厚10~22cm <水田表土>
I b層	10Y R3/3褐色粘土+10Y R4/6褐色粘土+褐色土層混入 (厚さcm 1%) ややしまる 層厚 20cm <淀疊土>
II 層	10Y R6/6褐色粘土層と7.5Y R3/2黒褐色シルト (径数cm塊、10%) の混合土 垂くしまる 層厚10~100cm <盛土>
III a層	7.5Y R2/2黒褐色シルト質粘土 しまる 層厚7~85cm <田表土1>
III b層	7.5Y R4/3褐色粘土疊化鉄の微込み しまる 層厚10~50cm <田表土2>
III c層	7.5Y R3/2黒褐色粘土 しまる 層厚20cm <田表土3>
IV 層	10Y R5/6黄褐色粘土 垂くしまる <堆山>

3. 調査結果

T 2・4・8・11 b・16・30 d～f から陥し穴状遺構を合計10基検出し
 た(遺構規模を第1表に示す)。平面形の一部しか検出できないものが多い
 が、円形や梢円形状を呈すると推測される。地形との関わりで分布を見る
 と、凹地形との段丘状縁辺(T 2・4、T 30 d～f)、墓所があるため旧地
 形を残す部分(T 16)で検出される。このことから過去の水田造成工事の状況(盛土が厚い部分、削削量が



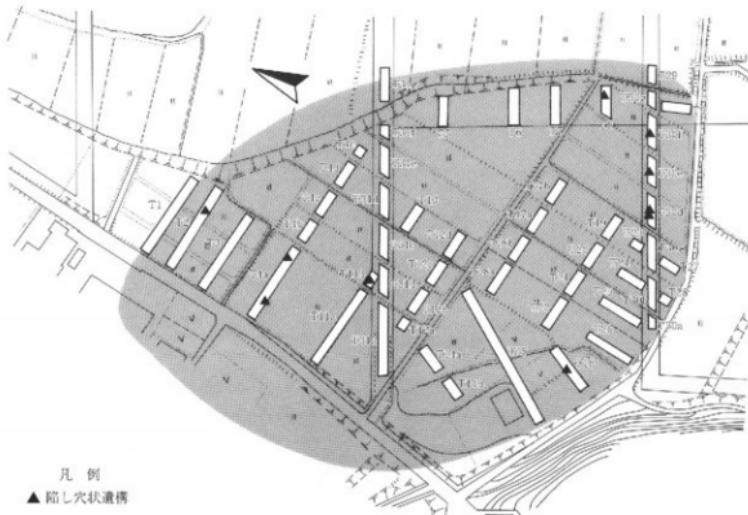
模式土層柱状図

少ない部分）により、さらに遺構を検出できる可能性がある。遺物は剝片1点が出土した。

4.まとめ

水田造成工事により旧表土がほとんど削除されているため、本来的な遺構分布と遺物出土状況は不明であるが、段丘崖付近に遺構状の灘りが分布する傾向がある。遺跡台帳上は縄文時代の散布地となっているが、今回の調査では遺跡の性格ははっきりしなかった。

なお、本遺跡に關わる報告はこれをもって全てとする。

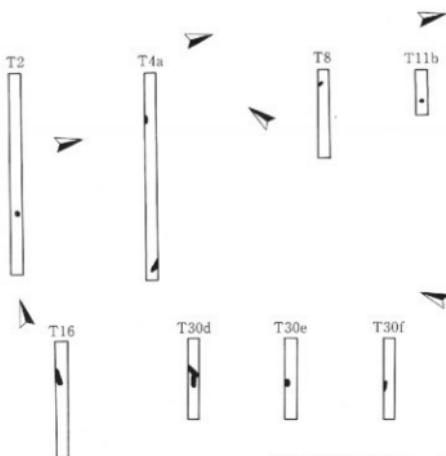


屋敷遺跡トレンチ位置図（1：2,000）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	いわけけんmaiざうぶんかさいはつくつちょうきりやくほう						
吉名	岩手県彌文化財発掘調査報告						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団彌文化財調査報告書						
シリーズ番号	第455集						
著者名	吉田充						
編集機関	財团法人岩手県文化振興事業団彌文化財センター						
所在地	〒020-0653 岩手県盛岡市下飯田町11-185 TEL (019) 638-9001-9002						
発行年月日	西暦2004年3月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
多賀城遺跡	岩手県胆沢郡 多賀城小山字壁坂 31-1	N E 44 -1228	39度 04分 10秒	141度 03分 00秒	2003.11.10 ~ 2003.11.20	1,602m ²	国営いわさわ南浦 農地整備事業に 伴う緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	主な遺物	特記事項		
屋敷遺跡	散居地	縄文時代	端窓穴状遺構	剥片1点			

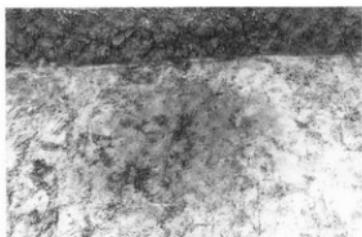
緯度・経度は世界測地系



(単位: cm)		
トレンチ名	種類	規模(長軸×短軸)
T02	陷し穴状	80×80
T04	箱L穴状A	80以上×45
T06	箱L穴状B	160以上×40
T08	陷し穴状	100以上×40
T11b	箱L穴状	60×60
T16	箱L穴状	12以上×70
T30d	箱L穴状A	215以上×85
T30d	陷し穴状B	190×65
T30e	陷し穴状	100以上×90
T30f	陷し穴状	120以上×90

第1表 造構状規模表

屋敷遺跡検出造構 (1:800)



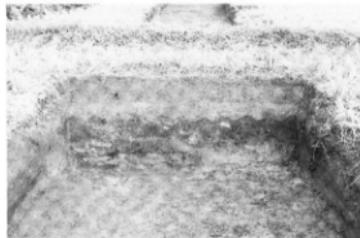
T2 陷し穴状造構(南から)



T30d 陷し穴状造構(南から)



T30f 陷し穴状造構(南東から)



T20 土層断面(南から)

屋敷遺跡試掘状況写真

(47) つるくよう 鶴供養遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町小山字屋敷11-2他
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 いさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成15年11月5日～11月20日
 調査対象面積 7,060m²
 試 挖 面 積 252m²
 遺跡番号・路号 N E44-0370
 調査担当者 吉田 充・野中真盛・新妻伸也
 藤原大輔
 協 力 機 関 胆沢町教育委員会



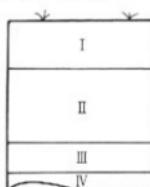
1. 遺跡の立地

鶴供養遺跡は、JR東北本線前沢駅の北西約7.2kmに位置する。胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は145～147mである。現況は水田である。

2. 地形と土層

昭和34年9月からの「農地機械公團」による造成事業により旧地形が整備され、現地形による土地利用が始まっている。遺跡東端には用水路が北東～西南方向に流れ、この用水路に沿った水田は西側の水田より約1m低い。この部分は扇状地末端に流れる白鳥川そぞく小川が流れていたような小谷状地形を呈している。土壌は地山上に旧表土、盛土、水田表土の順に堆積している。本遺跡の基本層序は次の通りである。

I a層	7.5Y R4/4褐色シルト質粘土と10Y R7/6明黄褐色粘土(3%)の混合土 しまる 層厚20cm <水田表土>
II層	7.5Y R2/2黒褐色シルトと10Y R6/6明黄褐色粘土・7.5Y R4/3褐色砂質粘土・10Y R2/3黒褐色砂質シルトが塊状に混入 しまる 層厚30cm <盛土>
III層	7.5Y R3/4暗褐色砂質粘土 酸化鉄染込み しまる 層厚12cm <旧表土>
IV層	7.5Y R4/4暗褐色砂質粘土 堅くしまる <地山>



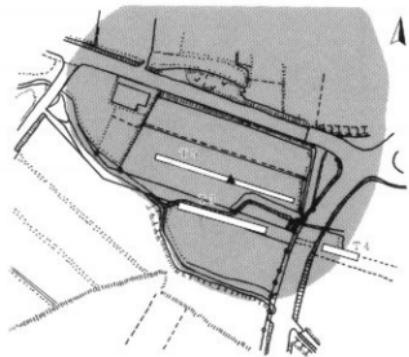
3. 調査結果

<検出遺構・出土遺物> T5で陥し穴状遺構を1基検出した。平面形の一部しか検出できなかったが、長辯円形状で長軸は1m以上ある。遺物は出土しなかった。

4.まとめ

本遺跡の北側は昨年度の試掘で遺構・遺物ともに検出されていないが、今年度調査分では一段高い水田地帯で陥し穴状遺構を1基検出した。遺構上部は構造改善に伴う擾乱を受けて、剥失している。全トレンチの底面には構造改善時のブルドーザーキャタピラ痕や耕運機のタイヤ痕が残る部分があり、とくに地形的に高

い部分は大規模に擾乱を受けていると見られる。したがって、調査時点ではほとんどの埋蔵文化財は削剥を受けている可能性が大きい。なお、本遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

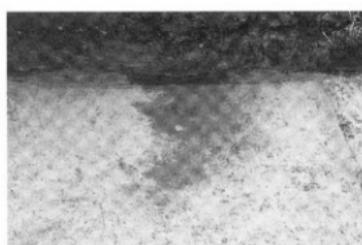


鶴供養遺跡トレンチ位置図(1:2500)

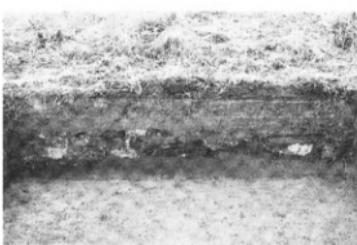
凡例
▲ 陥し穴状遺構



鶴供養遺跡検出遺構(1:1000)



T 5 陥し穴状遺構(南から)



T 5 土層断面(西から)

鶴供養遺跡試掘状況写真

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	いわてけんmaiぞうぶんかざいはつくつちょうさりやくほう 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第455集						
調査者名	吉田 充						
調査機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下條町11-185 TEL (019) 638-9001・9002						
発行年月日	西暦2004年3月25日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
鶴供養遺跡	岩手県柳沢郡 宮古市小泊字塙原 11-2	N E44 -0370	39度 04分 30秒	141度 03分 10秒	2003.11.05 ～ 2003.11.20	252m ²	国営いさわ南部森 地整備事業に伴う 緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	備記事項		
鶴供養遺跡	散布地	縄文時代	陥し穴状遺構				

※緯度・経度は世界測地系

(48) 二の台長根遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町小山字二の台長根100-4
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 いさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成15年11月6日～11月20日
 調査対象面積 28,012m²
 試 挖 面 積 1,148m²
 遺跡番号・略号 NE 44-1312
 調査担当者 吉田 光・野中真盛・新妻伸也
 鈴木裕明・藤原大輔
 協 力 機 関 胆沢町教育委員会



1. 遺跡の立地

二の沢遺跡は、JR東北本線前沢駅の約6km北西に位置する。胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は125～130mである。現況は水田、畑および荒地である。

2. 地形と土層

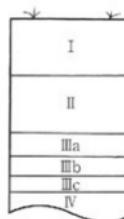
昭和30年代の構造改善事業により旧地形が整備され、現地形による土地利用が始まっている。遺跡中央を道路が南北方向に走り、ここを頂点として東西に緩やかに傾斜する。遺跡東端は白鳥川支流および沢状地形を呈する。さらに西端は沢状地形を挟んで屋敷遺跡と接する。全体的に表土は削剥を受け、黒沢尻火山灰上部層の黄褐色粘土が水田地山として確認されるが、地形の傾斜方向に直交する畦畔部分の盛土下には旧表土が残っている。また、東端付近地山には構造改善前に利用していたとみられる幅30cmの水路跡が2条検出された。土層は地山上に旧表土、改良土、水田表土（または畑表土、荒地表土）の順に堆積している。本遺跡の基本層序は次の通りである。

- | | |
|---------|---|
| I 層 | 7.5Y R 4/3 黄褐色土に10Y R 6/6褐色粘土斑状混入（平均径数mm,10%）極くしまる
厚さ25cm <水田表土> |
| II 層 | 7.5Y R 4/3 黄褐色土に6/6褐色粘土斑状混入（縫隙大径5～6cm,20%） しまる
厚さ25cm <盛土> |
| III a 層 | 10Y R 2/2黒褐色シルト質粘土 含水比やや高い しまる 厚さ14cm <旧表土1> |
| III b 層 | 10Y R 3/4褐色粘土と7.5Y R 4/6褐色粘土の混合土 しまる 厚さ13cm <旧表土2> |
| III c 層 | 7.5Y R 4/3褐色粘土地山（块状3%） 混入 しまる 厚さ10cm <旧表土3> |
| 3. ■ 層 | 10Y R 5/6黒褐色粘土 極くしまる <地山> |

T 17から住居状遺構1棟、T 2・6・8・16・17から陥し穴状遺構5基、
 T 8・12・19から柱穴状遺構3基を検出した。柱穴状遺構を除いて平面形の一部のみ検出された（構造規模を第1表に示す）。遺構の検出状況から考えると、道路を挟んで南側でやや密度の高い分布が推定される。遺物は出土していない。

4.まとめ

道路面を旧地形面とすると、現水田面まで最大約0.8mで、水田表土が約20cmであることから、最大約1m

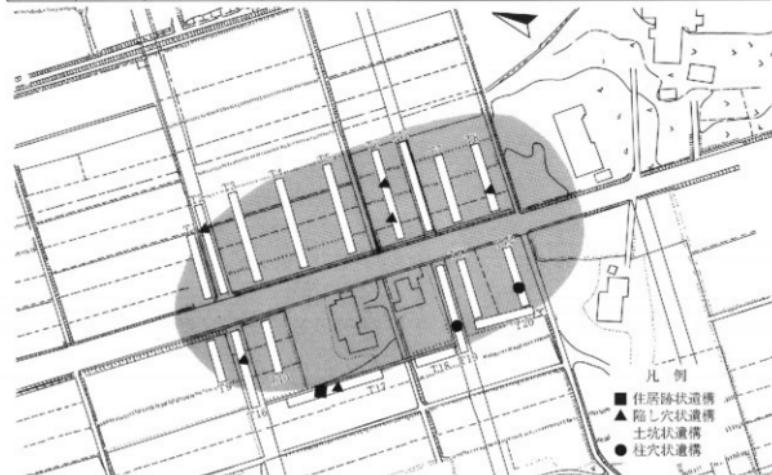


基本土層柱状図

の削剥を受けている。遺跡東側では地山上に造成時のブルドーザーのキャタピラ痕が残る。遺構の保存状態は良くないが、他遺跡に比して遺構検出密度は高い。今回調査ができなかつ西側荒地のT13・14は旧地形面を残し、地元の人が遺物を表探ししたことから遺構を検出できる可能性がある。遺跡台帳上は散布地となっているが、西側は集落跡等遺構密度の高い遺跡であった可能性はある。なお、本遺跡に関する報告はこれをもって全てとする。

第1表 遺構状況模表

トレンチ名	種類	規模 (長幅×延幅) cm	トレンチ名	種類	規模 (長幅×延幅) cm	トレンチ名	種類	規模 (長幅×延幅) cm
T02	陥し穴状	55以上×36以上	T08	柱穴状	53×33	T14	陥し穴状	83以上×50
T06	陥し穴状	120以上×60	T12	柱穴状	37×37	T17	住居跡状	133以上×30以上
T08	陥し穴状	110以上×55	T16	陥し穴状	180以上×80	T19	柱穴状	45×45

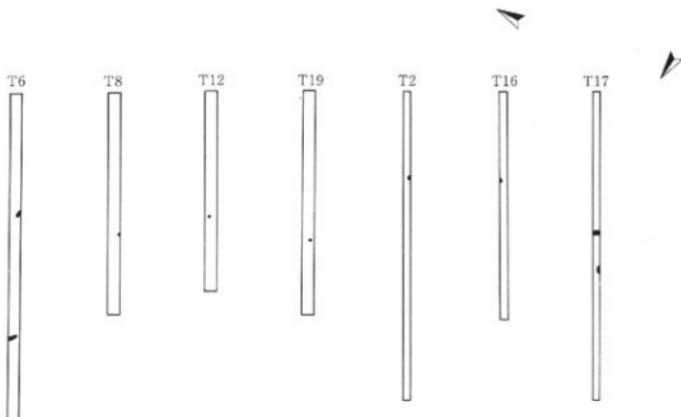


二の台長根遺跡トレンチ位置図 (1 : 2,500)

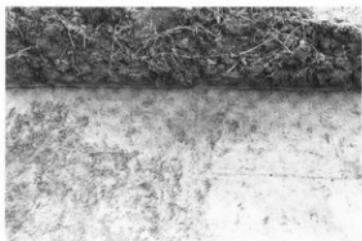
報告書抄録

ふりがな 書名	いわてけんまいぢうぶんかざいはくちょうさりやくほう 岩手県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
編著者名	吉田 充							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0852 岩手県盛岡市下飯田11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	測量期間	調査面積	調査原因	
二の台長根 遺跡	岩手県奥州市水沢 沢町小山字二の 台長根100-4	03383	N E 44 -1312	39度 04分 10秒	141度 03分 20秒	2003.11.06 ~ 2003.11.20	1,148㎡	国営いさわ南部農 地整備事業に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
二の台長根 遺跡	散布地	縄文時代	住居跡状遺構 陥し穴状遺構 柱穴状遺構					

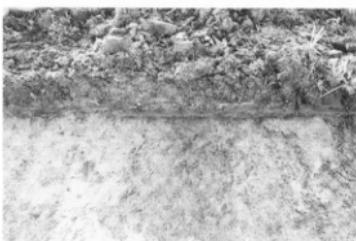
※緯度・経度は世界測地系



二の台長根遺跡検出遺構 (1 : 800)



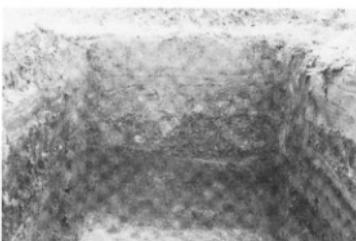
T17 住居跡状遺構 (北から)



T17 陥し穴状遺構 (西から)



T12 柱穴状遺構 (南から)



T 2 土層断面 (南西から)

二の台長根遺跡試掘状況写真

(49) いわさわ二の沢遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町小山字新田322
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 いわさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営いわさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成15年11月18日～11月29日
 調査対象面積 34,258m²
 試 振 面 積 1,640m²
 遺跡番号・略号 N E45-1033
 調査担当者 吉田 充・野中真盛・星 幸文
 鈴木裕明
 協 力 機 関 胆沢町教育委員会



1. 遺跡の立地

二の沢遺跡は、JR東北本線前沢駅の約6km北西に位置する。胆沢扇状地の北西～南東方向に広がる上野原段丘上に立地する。調査区の標高は125～130mである。現況は水田、畑および荒地である。

2. 地形と土層

昭和34年9月からの「農地機械公團」による造成事業により旧地形が整備され、現地形による土地利用が始まっている。遺跡南側は農免道路が東西方向に走り、ここを頂点として南北側に緩やかに傾斜し、北端では白鳥川支流と約10mの段丘崖で接する。土層は地山上に旧表土、盛土、水田表土（または畑表土、荒地表土）の順に堆積している。本遺跡の模式層序は次の通りである。

I a 1層	10Y R4/3にかい黄褐色粘土 しまる 層厚10~30cm <水田表土 a >
I a 2層	10Y R 2/2黒褐色シルトと10Y R7/2黄褐色粘土の混合土 しまる 層厚7~26cm <水田表土 b >
I b 1層	7.5Y R3/2暗褐色シルト質粘土 しまる 層厚15~20cm <畑表土 a >
I b 2層	7.5Y R3/2暗褐色シルトと10Y R4/6褐色粘土(5%)の混合土 壊くしまる 層厚8~30cm <畑表土 b >
I c 層	10Y R3/4暗褐色粘土 しまる 層厚13~24cm <荒地表土>
II 層	10Y R5/6褐色粘土 壊くしまる 層厚5~33cm <疊土 a >
III 層	7.5Y R3/2暗褐色シルト質粘土と2.5Y 7/4浅黄色粘土(40%)の混合土 壊くしまる 疊厚10~15cm <疊土 b >
IV 層	10R 1/7赤黒シルト質粘土 しまる 畠厚7~50cm <田表土>
V 層	10Y R8/3赤黃褐色粘土 壊くしまる 畠厚7~16cm <疊移層>
V 層	10Y R5/6褐色粘土 壊くしまる <地山>

3. 調査結果

T34～38、42～44、25付近ではT36を中心にして下部に旧表土の谷地状堆積物があり池状の地形が推定された。埋土厚は最大2mである。T 5、6、10、11、21、27、28、49から北端は約1m埋土厚を持ち、道路の傾斜に平行した旧地形が推定される。後者トレンチ付近の水田下では旧表土の保存状態が良好である。検出遺構は、T 6、10、21、27、28、49から陥し穴状遺構6基、T 16、25、33 c、38から土坑状遺構6基、柱穴状遺構1基が検出された。平面形の一部

Ia1	Ib1	Ic
Ia2	Ib2	
IIa		
IIb		
III		
IV		
V		

模式土層柱状図

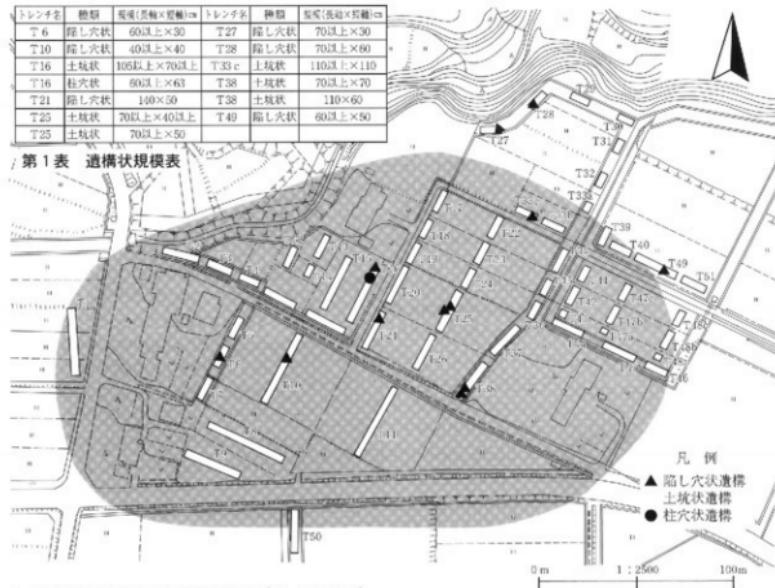
しか検出できないものが多い。T25、38の土坑状遺構は重複していると判断された。検出規模は第1表の通りである。出土遺物は、T 8の表土最下部層から縄文時代中期頃の土器片が1点出土した。

4.まとめ

検出された13基の遺構は遺跡北辺の段丘崖に沿って分布しているように見えるが、地形改変に伴う削剥が大きい部分もあり言及はできない。農免道路周辺の畠地は削剥が小規模であること、遺物が少量出土していることを考えるとさらに遺構が検出される可能性はある。遺跡台帳では散布地であり、今回の調査でも遺跡の性格をはっきりとは推定できなかった。なお、本遺跡に關わる報告は、これをもって全てとする。

トレンチ名	地盤	範囲(長軸×短軸)cm	トレンチ名	地盤	範囲(長軸×短軸)cm
T 6	陥し穴状	60以上×30	T 27	陥し穴状	70以上×30
T 10	陥し穴状	40以上×40	T 28	陥し穴状	70以上×60
T 16	土坑状	105以上×70以上	T 33 c	土坑状	110以上×110
T 16	柱穴状	60以上×60	T 38	土坑状	70以上×70
T 21	陥し穴状	140×50	T 38	土坑状	110×60
T 25	土坑状	70以上×40以上	T 49	陥し穴状	60以上×50
T 25	土坑状	70以上×50			

第1表 遺構状況表

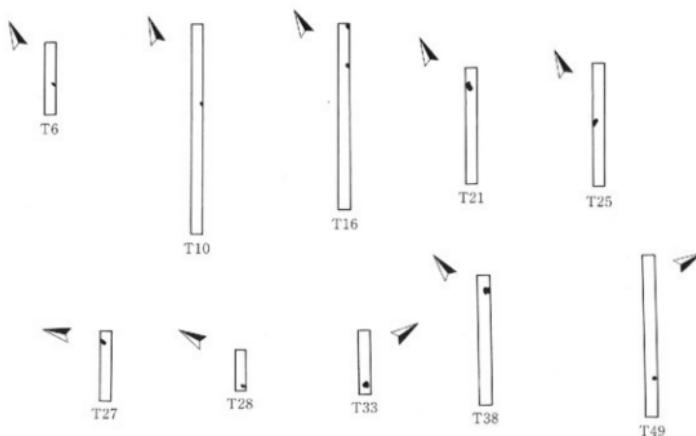


二の沢遺跡トレンチ位置図 (1:2,500)

報告書抄録

ふりがな	いわけけんまいぜうさんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	羽手輪遺跡文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	羽子輪文化振興事業実施文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
著者	吉田 実							
発行者	財團法人羽手輪文化振興事業団理文化財センター							
所在地	〒020-0653 品川区葉山南下飯田11-185 TEL. (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 道路番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
二の沢遺跡	羽手輪前原遺跡 沢町小山字新田 322	03383	N E44 -1033	39度 04分 00秒	141度 04分 00秒	2003.11.18 ~ 2003.11.29	1,640m ²	国営いさわ南部農 地整備事務に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	地別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
二の沢遺跡	散布地	縄文時代	陥し穴状遺構 上坑状遺構 柱穴状遺構	施文土器 1片				

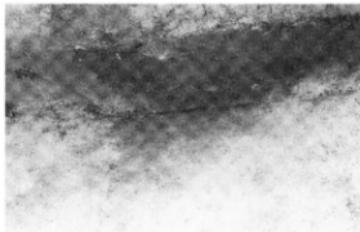
※緯度・経度は世界測地系



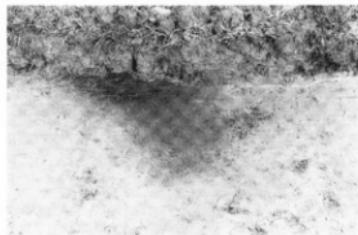
二の沢遺跡検出遺構 (1 : 800)



出土遺物 (S= 1 / 3)



T10 陥し穴状遺構(西から)



T49 陥し穴状遺構(南から)



T37 土層断面(東から)

二の沢遺跡試掘状況写真

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長 木村 昇

副所長 平野 充苗

(管理課)

課長 長 薩 沢 正 吾
課長補佐 山 岸 直 美
主査 中 鳴 賢 一
主事 猿 橋 幸 子

嘱託 高 橋 照 雄
タ 湯 沢 邦 子
タ 沼 田 テル子
タ 伊 藤 滋 子

(調査第一課)

課長 佐々木 勝
課長補佐 佐々木 清 文
文化財専門員 金 子 照 彦
文化財調査員 吉 田 充
タ 亀 大二郎
タ 野 中 真 盛
タ 新 妻 伸 也
タ 阿 部 勝 则
タ 杉 沢 昭 太郎
タ 西 澤 正 晴
タ 村 木 敬

文化財調査員 北 村 忠 昭
タ 八 木 山 浩
タ 丸 田 原 弘 征
タ 北 島 原 弘 造
タ 期限付調査員 坂 部 恵 駿
タ 小 林 原 弘 輔
タ 藤 原 大 彦
タ 太 田 代 一
タ 小 針 大 志
タ 新 井 田 えり子

(調査第二課)

課長 三 浦 謙 一
課長補佐 中 川 重 義
タ 高 橋 義 介
文化財専門員 小 山 内 透
タ 金 子 佐 知 子
タ 清 田 宏 登
文化財調査員 赤 石 登 澄
タ 阿 部 澄 博
タ 水 上 澄 明
タ 阿 部 澄 淳
タ 早 坂 则 德
タ 小 松 則 德
タ 阿 部 幸 行
タ 悅 岩 岩 伸
タ 亀 泽 盛 行
タ 飯 坂 重 明
タ 鈴 木 熟 純
タ 林 熟 明
タ 阿 部 孝 明
タ 羽 柴 直 人

文化財調査員 星 佐 雅 一
タ 星 溜 幸 文
タ 本 丸 多 邦
タ 榎 木 山 直
タ 木 田 美 和
タ 須 原 宽 拓
タ 中 村 普 拓
タ 村 又 淳
タ 村 田 上 拓
(村 上 麻 紀 子
タ 斎 藤 和 敦
タ 吉 田 里 拓
タ 江 藤 宽 拓
タ 立 花 智 宽
タ 駒 木 野 寛 拓
タ 石 城 高 人

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第455集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成15年度)

印刷 平成16年3月19日

発行 平成16年3月25日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019)638-9001

FAX (019)638-8563

印刷 小松総合印刷株式会社

〒 020-0827 岩手県盛岡市鉢屋町15-4

電話 (019)624-1374

FAX (019)623-6719

